

袖ヶ浦市荒久（2）遺跡

－主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書2－

平成10年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

そで が うら あら く
袖ヶ浦市荒久(2)遺跡

—主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書2—

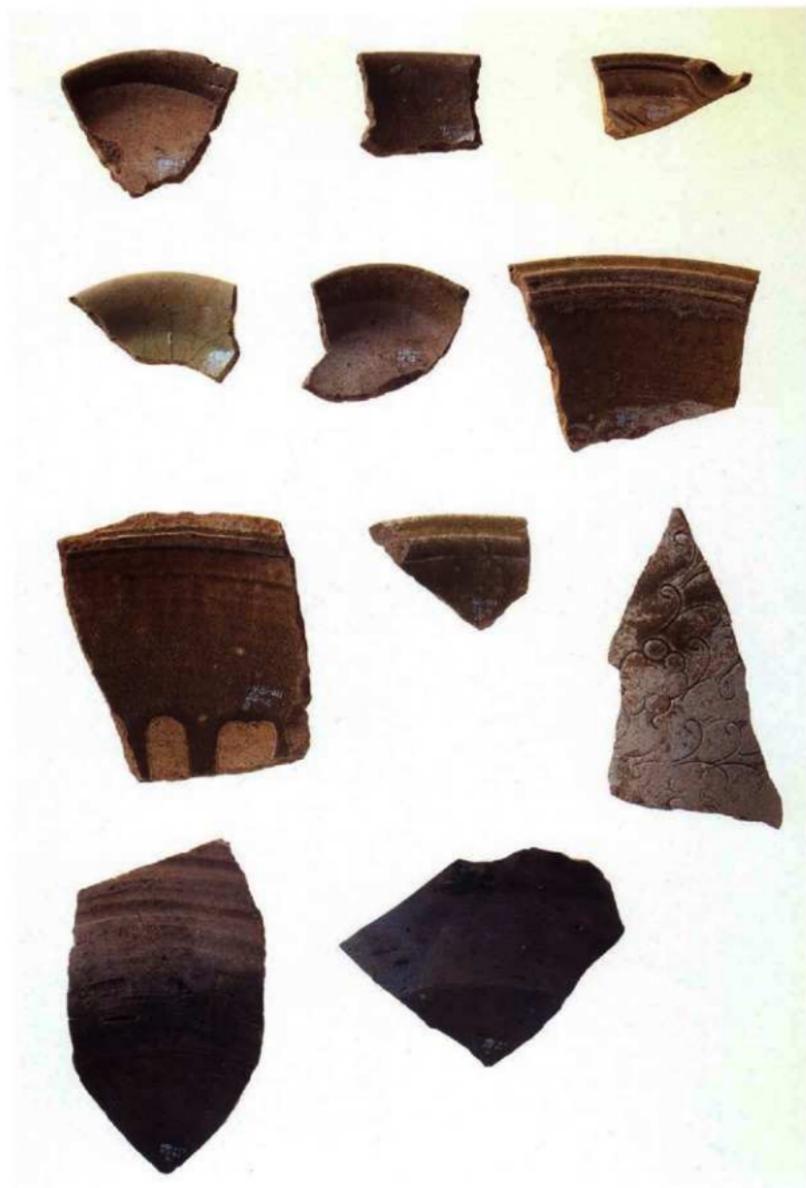




貿易陶磁



SK-013 出土遺物



江戸製品

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第323集として、千葉県の主要地方道千葉鴨川線道路改良事業に伴って実施した袖ヶ浦市荒久（2）遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、地下式土坑や土墳墓が発見され、陶磁器や銭貨が出土するなど、この地域の中世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が、学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中 村 好 成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道千葉鴨川線県単道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県袖ヶ浦市高谷1,346ほかに所在する荒久(2)遺跡の発掘調査を収録したものである。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、調査室長小林清隆が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部君津幹線道路建設事務所、袖ヶ浦市教育委員会、小野正敏、柴田龍司、笹生衛の諸機関並びに諸氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図 姉崎
 - 第3図 袖ヶ浦市役所発行 1/2,500地形図 No.38を改図縮小転載
 - 第4図 袖ヶ浦市役所発行 1/2,500地形図 No.38を改図転載
 - 第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図 上総横田
- 8 図版1に使用した周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 第2章第1節から第3節の挿図に使用した記号の用例は、次のとおりである。
 - 土器類 □銭貨 △石製品 ◎玉類

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	調査の概要	4
第3節	周辺の環境	9
1	地理的環境	9
2	周辺遺跡	9
第2章	検出した遺構と出土遺物	13
第1節	中世の遺構と遺物	13
1	概要	13
2	掘立柱建物跡	13
3	地下式土坑	23
4	土坑	50
5	掘鉢状遺構・井戸状遺構	92
6	溝状遺構	104
7	遺構に伴わない遺物	108
第2節	古代の遺構と遺物	109
第3節	古墳時代の遺構と遺物	112
第4節	弥生時代の遺構と遺物	118
第5節	縄文時代の遺構と遺物	125
第6節	旧石器時代	129
1	基準層序	129
2	石器集集中地点と出土遺物	129
3	石器集集中部外出土の遺物	131
第3章	まとめ	135
第1節	中世の遺構について	135
第2節	中世の遺物について	140
第3節	結語	144
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置(1:50,000)	1	第36図	SK-117と出土遺物	39
第2図	遺跡の周辺地形(1:5,000)	3	第37図	SK-122と出土遺物	40
第3図	調査区と周辺地形(1:2,500)	5	第38図	SK-088	40
第4図	遺構分布図①	6	第39図	SK-089	41
第5図	遺構分布図②	7	第40図	SK-090	42
第6図	遺構分布図③	8	第41図	SK-135と出土遺物	43
第7図	周辺の遺跡分布(1:25,000)	10	第42図	SK-143	44
第8図	中世の主要遺構分布	12	第43図	SK-240と出土遺物	45
第9図	中世の掘立柱建物跡配置	14	第44図	SK-158と出土遺物	46
第10図	SB-001・003	15	第45図	SK-231	47
第11図	SB-005	15	第46図	SK-231遺物出土状況	47
第12図	SB-006	16	第47図	SK-231出土遺物	48
第13図	SB-007と出土遺物	17	第48図	SK-175と出土遺物	49
第14図	SB-008	17	第49図	北調査区土坑①	50
第15図	2・3区の掘立柱建物跡とピット群	18	第50図	北調査区土坑②	51
第16図	SB-009	19	第51図	土坑分布図の位置関係	52
第17図	3・4区の掘立柱建物跡とピット群	20	第52図	土坑分布図①	53
第18図	SB-010と出土遺物	21	第53図	P-268と出土遺物	54
第19図	SB-011	22	第54図	かわらけ内の遺物(復元)	54
第20図	地下式土坑の分布状況	23	第55図	SK-271	55
第21図	SK-068と出土遺物	24	第56図	土坑分布図②	56
第22図	SK-070aと出土遺物	25	第57図	SK-017・018	57
第23図	SK-031と出土遺物	26	第58図	P-091と周辺の土坑	58
第24図	SK-013	27	第59図	SK-086と出土遺物	59
第25図	SK-013出土遺物	28	第60図	土坑分布図③	60
第26図	SK-012	29	第61図	SK-016と出土遺物	60
第27図	SK-012出土遺物	30	第62図	SK-015A・015B	61
第28図	SK-071と出土遺物	31	第63図	SK-092	62
第29図	SK-097	32	第64図	SK-093・094と出土遺物	62
第30図	SK-041と出土遺物	33	第65図	土坑分布図④	63
第31図	SK-043	34	第66図	土坑分布図⑤	64
第32図	SK-043出土遺物	35	第67図	土坑分布図⑥	65
第33図	SK-061と出土遺物	36	第68図	SK-006A・006B	66
第34図	SK-056・058と出土遺物	37	第69図	SK-009	67
第35図	SK-113	38	第70図	SK-010	67

第71図	SK-002と周辺の土坑	68	第107図	SE-008と出土遺物	102
第72図	SK-004・008と出土遺物	69	第108図	井戸状遺構	103
第73図	4E・5E区の小ピット群と出土銭貨	70	第109図	北調査区の溝状遺構断面図	104
第74図	SK-109と出土遺物	71	第110図	溝状遺構分布図	105
第75図	SK-103と出土遺物	71	第111図	南調査区の溝状遺構断面図	106
第76図	SK-096・102出土遺物	71	第112図	溝状遺構出土遺物	106
第77図	土坑分布図⑦	72	第113図	遺構外出土遺物	107
第78図	土坑分布図⑧	73	第114図	SK-297	109
第79図	SK-098と周辺の土坑	74	第115図	SK-297出土遺物	110
第80図	SK-098	74	第116図	SB-004	111
第81図	SK-099	75	第117図	SX-001	112
第82図	SK-055と周辺の土坑	76	第118図	SK-181と出土遺物	113
第83図	SK-055と出土遺物・ 052出土遺物	76	第119図	SK-229	114
第84図	SK-044・045・(046)	77	第120図	SK-201と出土遺物	115
第85図	SK-062と出土遺物	78	第121図	SX-001周溝内出土遺物	116
第86図	土坑分布図⑨	79	第122図	遺構外出土遺物	116
第87図	土坑分布図⑩	80	第123図	方形周溝基分布図	117
第88図	土坑分布図⑪	81	第124図	SC-001	118
第89図	6D区の小ピット群と出土遺物	82	第125図	SC-002	118
第90図	6D区の土坑出土遺物	84	第126図	SC-003	119
第91図	土坑分布図⑫	85	第127図	SC-004	120
第92図	SK-147と出土遺物	86	第128図	SC-005	121
第93図	SK-241と出土遺物	86	第129図	SC-006	122
第94図	SK-191出土遺物	87	第130図	SC-007	122
第95図	土坑分布図⑬	88	第131図	SC-008	123
第96図	土坑分布図⑭	89	第132図	SC-009	123
第97図	土坑分布図⑮	90	第133図	SC-010	124
第98図	土坑分布図⑯	91	第134図	弥生時代の遺物	124
第99図	SE-001	92	第135図	縄文時代の陥穴分布図	125
第100図	SE-002と出土遺物	93	第136図	縄文時代の土坑・陥穴	127
第101図	SE-003と出土遺物	94	第137図	縄文時代の遺物	128
第102図	SE-004と出土遺物	96	第138図	基準層序	129
第103図	SE-005	97	第139図	旧石器時代調査区	130
第104図	SE-005と出土遺物	98	第140図	石器出土分布図	131
第105図	SE-006と出土遺物	100	第141図	石器実測図(1)	132
第106図	SE-007と出土遺物	101	第142図	石器実測図(2)	133
			第143図	地下式土坑の分類(半田1979から)	136

表 目 次

第1表	石器集中地点石器組成表	134	第4表	地下式土坑一覧	137
第2表	石器観察表	134	第5表	出土銭貨一覧	143
第3表	中世の掘立柱建物跡一覧	137			

図版目次

巻頭図版1 貿易陶磁 SK-013出土遺物

巻頭図版2 瀬戸製品

図版1 荒久(2)遺跡と周辺の地形

図版2 調査前の遺跡近景(南調査区)

遺跡全景

平成3年度調査区全景

図版3 SB-003全景

2F・2G区の柱穴群

SB-010とSE-001

図版4 SK-068と周辺の遺構

SK-068土層断面

SK-068遺物出土状況

図版5 SK-031全景

SK-013全景

SK-013遺物出土状況

図版6 SK-071全景

SK-097竪坑

SK-097全景

図版7 SK-041全景

SK-043全景

SK-061全景

図版8 SK-058全景

SK-056全景

SK-113全景

図版9 SK-117全景

SK-117全景

SK-088全景

図版10 SK-090竪坑

SK-090全景

SK-135竪坑

図版11 SK-135土層断面

SK-135全景

SK-135全景

図版12 SK-143竪坑検出状況

SK-143全景

SK-143全景

図版13 SK-240全景

SK-240地下室土坑

SK-240土層断面

図版14 SK-158全景

SK-158遺物出土状況

SK-231全景

図版15 SK-231遺物出土状況

SK-175全景

SK-280全景

図版16 SK-279全景

SK-275全景

SK-276全景

図版17 SK-287全景

P-268全景

SK-271全景

図版18 SK-017・018全景

- SK-016 全景
SK-015 全景
図版19 SK-092 全景
SK-093 全景
SK-075・076・077 全景
図版20 SK-006 全景
SK-009 全景
SK-009
図版21 SK-014 全景
SK-001 全景
SK-002A・B・C 全景
図版22 SK-039A・B 全景
SK-007・008 全景
SK-004 全景
図版23 SK-003・004・007
・008 全景
SK-098 全景
SK-099 全景
図版24 SK-019・020 全景
SK-044 人骨出土状況
SK-241 人骨出土状況
図版25 SK-167 全景
SE-001と周辺遺構
SE-001 全景
図版26 SE-002 全景
SE-007・008 全景
SE-007 土層断面
図版27 SK-274 全景
北調査区の調査状況
SD-029
図版28 北調査区の溝状遺構SD-041
ピット群と溝状遺構SD-001・002
南調査区溝状遺構SD-021・022
・023
図版29 古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡
SK-297 全景
SB-004 全景
図版30 SX-001 周溝
SK-181 全景
SK-181 土層断面
図版31 SK-181 刀子出土状況
SK-201 全景
SK-201 玉類出土状況
図版32 方形周溝基検出状況
SC-001 土層断面
SC-002 埋葬施設
図版33 SC-002 土層断面
SC-004 土層断面
SC-005 土層断面
図版34 SC-006 埋葬施設
SC-006 土層断面
SC-007 土層断面
図版35 SK-188 全景
SK-180 全景
SK-180 土層断面
図版36 旧石器時代遺物出土状況(1)
旧石器時代遺物出土状況(2)
土層断面
図版37 出土土器(1)
図版38 出土土器(2)
図版39 出土土器(3)
図版40 出土土器(4)
図版41 出土土器(5) SE-005 出土土器
図版42 出土土器(6) 瀬戸製品(皿・壺類)
図版43 出土土器(7) 瀬戸・常滑製品(播鉢・鉢・
壺・壺)
図版44 磁石・石製品
図版45 銭貨(1)
図版46 銭貨(2)
図版47 銭貨(3) SX-001 埋葬施設出土遺物
図版48 縄文時代の遺物
図版49 旧石器時代の遺物(1)
図版50 旧石器時代の遺物(2)

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

千葉県は、館山自動車道、東京湾横断道路(アクアライン)等の建設に伴う、周辺交通網の整備のため、接続道路の一つである、主要地方道千葉鴨川線の道路改良事業を計画した。千葉鴨川線は館山自動車道から外房方面への主要な幹線道路となり、交通量の増加が見込まれることから、それに応じた改良工事が必要となった。この道路建設工事に当たって、千葉県土木部道路建設課は、千葉県教育委員会に対し、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を提出した。これに対して千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県土木部との協議が重ねられ、その結果、発掘による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。

調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県との委託契約を締結し、平成3年10月1日から用地買収の終了した地区の発掘を開始した。その後、発掘調査は平成4年度と平成5年度にかけて断続的に実施し、現地における調査を平成6年3月31日に終了した。

整理作業は、発掘調査が終了した翌年の平成6年度から開始した。遺物の水洗・注記から始まり、図面整理、遺物の復元、実測、挿図・図版作成等の作業を進め、平成8年度に原稿執筆を行って、今年度の報告書の刊行に至った。

なお、各年度の実施期間、担当者、作業の内容は次頁のとおりである。



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

各年度の作業期間、組織、担当、作業内容

○平成3年度(発掘調査)

期 間 平成3年10月1日～平成4年3月31日
調査部長 天野 努、部長補佐 佐久間 豊、班長 深澤克友
担 当 主任技師 加藤正信、技師 糸原 清
作業内容 上層本調査 2,040㎡、下層確認調査 84㎡/2,040㎡

○平成4年度(発掘調査)

期 間 平成4年4月1日～平成4年8月31日
調査部長 天野 努、部長補佐 深澤克友、班長 鈴木定明
担 当 主任技師 加藤正信
作業内容 上層本調査 2,400㎡

○平成5年度(発掘調査)

期 間 平成5年12月1日～平成6年3月31日
調査研究部長 高木博彦、市原調査事務所長 石田廣美
担 当 主任技師 福田 誠
作業内容 上層本調査 3,400㎡、下層本調査 200㎡

○平成6年度(整理)

期 間 平成6年12月1日～平成7年3月31日
調査研究部長 西山太郎、市原調査事務所長 石田廣美
担 当 分室長 加藤正信
作業内容 出土遺物の水洗・注記、図面・写真整理の一部

○平成7年度(整理)

期 間 平成7年4月1日～平成7年6月30日
調査研究部長 西山太郎、市原調査事務所長 森 尚登
担 当 技師 城田義友
作業内容 図面・写真整理、遺物実測の一部

○平成8年度(整理)

期 間 平成8年5月1日～平成9年3月31日
調査部長 西山太郎、南部調査事務所長 高田 博
担 当 室長 小林清隆、技師 吉野健一
作業内容 遺物実測、挿図・図版作成、原稿執筆



第2図 遺跡の周辺地形 (1:5,000)

第2節 調査の概要

前節で簡単に触れたように、今回の発掘調査は3年度にわたって実施した。その年度毎の調査区については、第3図に示したとおり、やや不規則な分割になっている。これは調査工程上の都合によるものであるが、調査区の区割りにについても、主要地方道千葉鴨川線の北側と南側で異なるため、初めにこのことについて、若干の説明を加えておきたい。

初年度の調査対象区は、主要地方道千葉鴨川線の南西側であった。その調査区全体に公共座標に基づいて20m×20mの方眼を組んだ。これを大グリッドにすることにし、北から南に1・2・3・・・10、西から東にA・B・C・・・Hの記号を付け、さらに大グリッドの中を、2m×2mの小グリッド100個に分割し、北西隅から00・01・・・と付けていき、南東隅を99とした。その大グリッドと小グリッドを組み合わせることで、小地区名が表示できるようにした。

平成5年度に調査を実施した、主要地方道千葉鴨川線から北に含まれる調査区についても、南側の調査区と同じ方眼をかおせることにしたが、その大グリッド名については新たに設定した。その呼称は調査区の北から南に0・1・II・・・VIIIと付け、西から東にa・b・c・dの記号を用いた。小グリッドの分割の方法は変更していない。

主要地方道千葉鴨川線を挟む調査区では、北側と南側の両者の地区名が一部重複するが、道路から北側を北調査区と呼んでI a・II b・・・の地区名を用い、道路の南側は南調査区としてI A・1 B・・・の地区名を使用することにした。煩雑ではあるが、このことについて御了承頂きたい。

3年度にわたる調査では、旧石器時代から中世にかけての遺構や遺物が発見され、時代的に複合する遺跡の一端が明らかになった。以下、その成果について時代を遡りつつ、簡単に述べておくことにしたい。

初めに調査結果の中で、最も新しい段階に位置付けられる中世の状況について、その概要を示してみたい。まず、この時代で特筆されることは、遺構分布の粗密はあるものの、ほぼ全域から遺構や遺物が検出された点である。したがって、今回の発掘で注目できる成果は、この時期ということになろう。遺構の種類としては、掘立柱建物跡、地下式土坑、方形・円形土坑、小ピット、井戸状遺構、槽鉢状遺構、溝状遺構が挙げられ、これらの遺構が多様な状況で分布している。遺物は陶磁器や土師質の土器を初め、石製品等があり、また土壌墓からは人骨が検出されている。

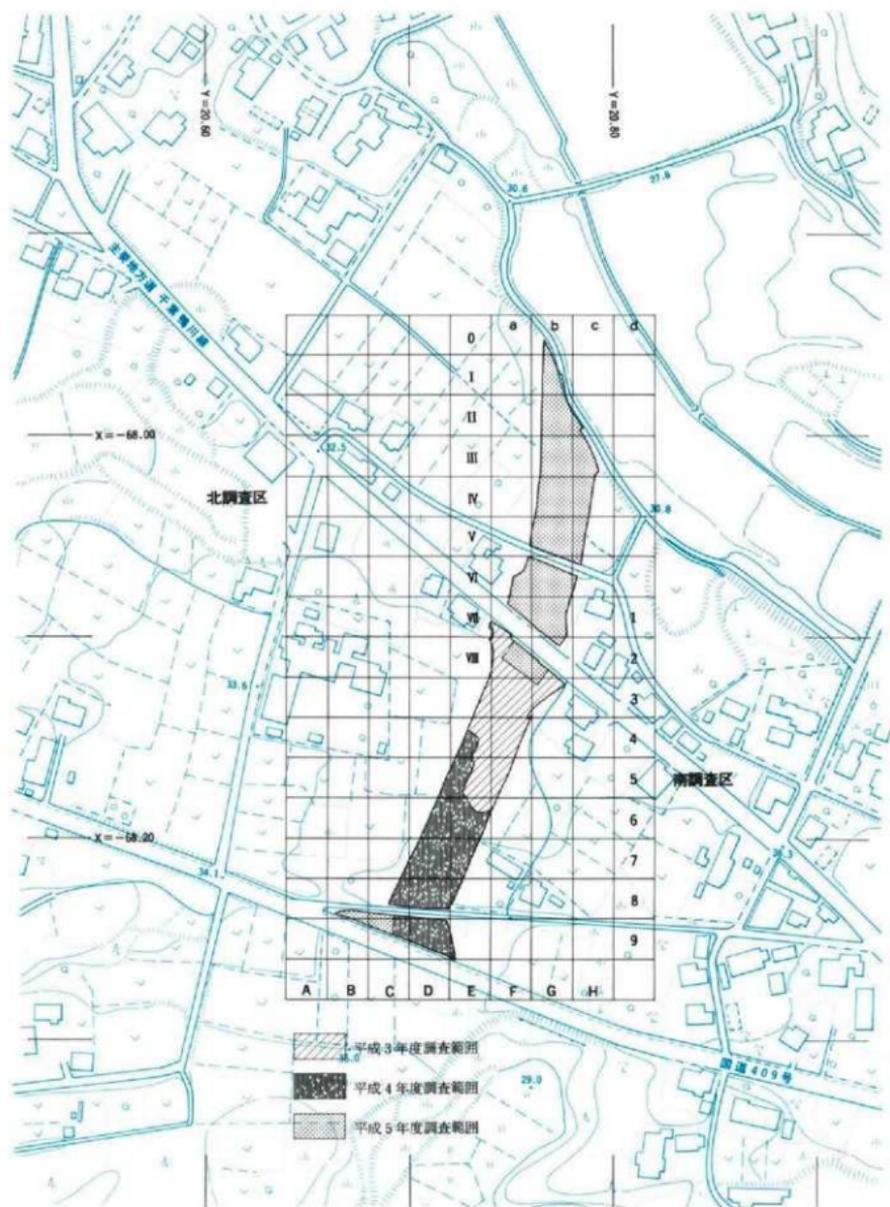
次に確認できる時代は平安時代で、北調査区において竪穴住居跡1軒と、掘立柱建物跡1棟が比較的接近して検出された。

古墳時代に属する遺構は、盛土を失った古墳の周溝と、その古墳に伴う埋葬施設3か所である。遺物は埋葬施設から玉類や刀子が出土している。

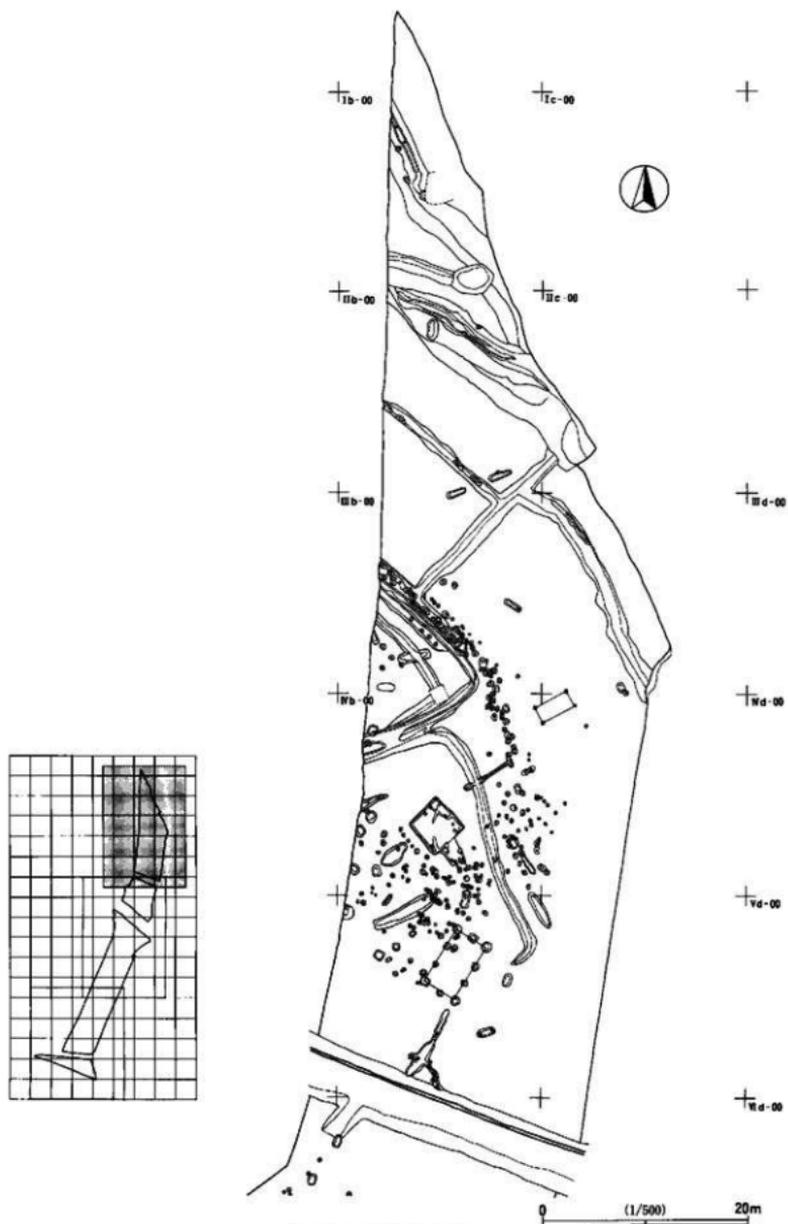
弥生時代では、方形周溝基が南調査区の南端地区に集中して10基検出された。この10基は、いずれも溝の四隅が切れる形態である。

縄文時代は、遺構と遺物をわずかながら検出した。遺構は土坑1基といわゆる陥穴4基を発掘した。遺構に伴う状況での遺物の出土は認められないが、早期の条痕文系土器と後期の土器が出土している。また、少量ではあるが、石斧等の石器類も出土した。

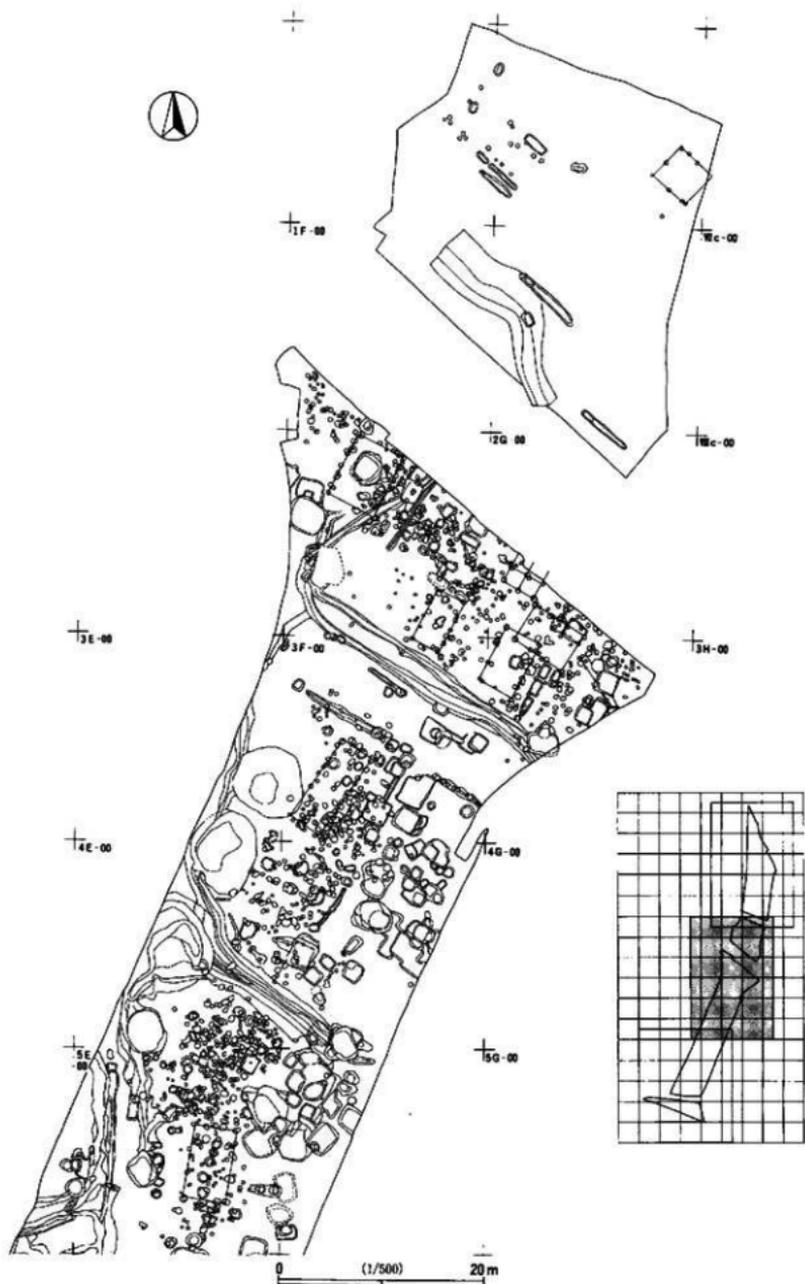
上層の調査後に実施した旧石器時代の調査で、北調査区において石器の出土が確認された。出土層位は立川ロームのIII層からIV層にかけてであり、200㎡の本調査を行った結果、石器集中地点1か所の存在が明らかになった。



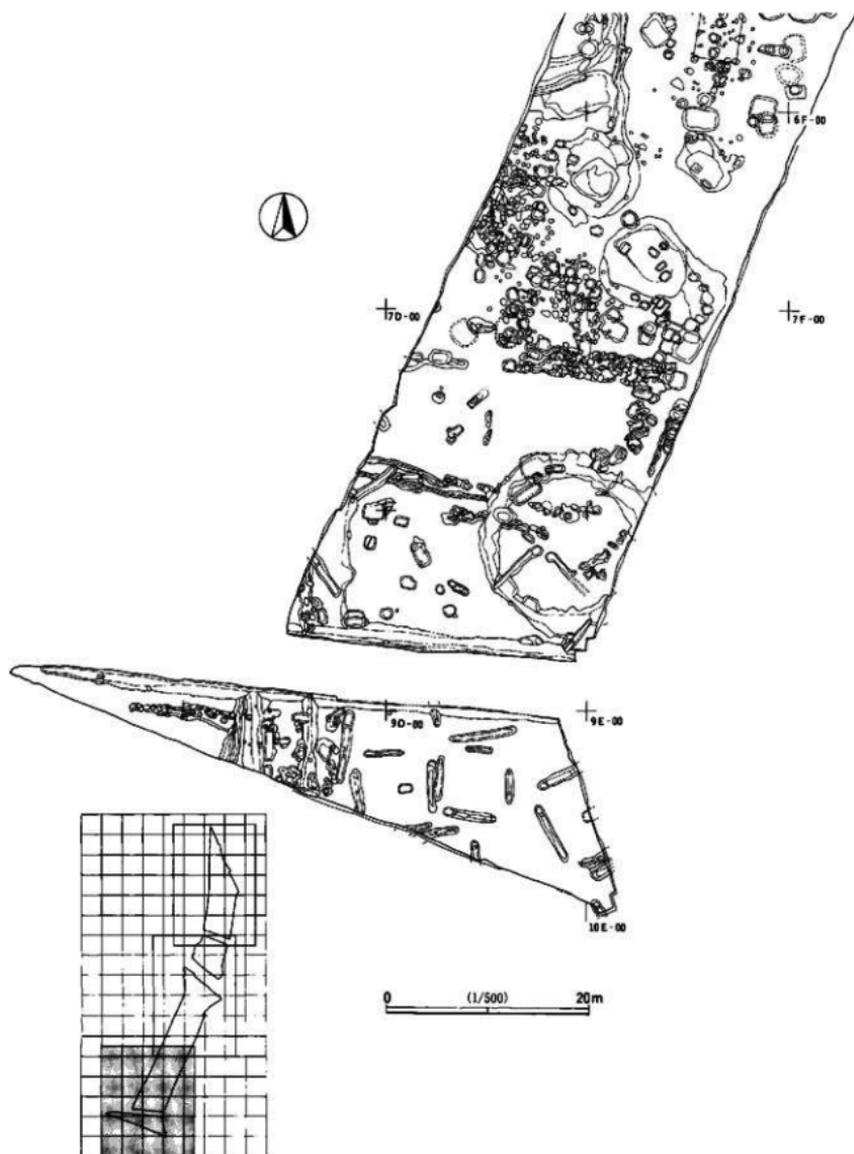
第3図 調査区と周辺地形 (1:2,500)



第4図 遺構分布図①



第5図 遺構分布図②



第6図 遺構分布図③

各時代の遺構や遺物については、次章でその詳細に触れるが、現場の遺構調査では、遺構に番号を付けているので、このことについても多少の補足しておきたい。遺構番号は、基本的には遺構の種類を優先して付けており、時代は考慮していない。遺構番号は、種類毎に001から始まる一連の番号を付けたが、その種別は、番号の先頭に記号を付けることによって分別できるようにした。その先頭記号は、SBが掘立柱建物跡、SKが地下式土坑を初めとする土坑全体であり、Pが柱穴状の小ピット、SEが掘鉢状遺構、SDが溝状遺構、SXが古墳、SCが方形周溝墓をそれぞれ示している。

なお、調査概要については、すでに速報的に紹介しているところでもあるが¹⁾、一部にとどまるため、全体の状況は本書を優先としたい。

第3節 周辺環境

1 地理的環境

荒久遺跡は、袖ヶ浦市高谷に所在する。袖ヶ浦市は房総半島の中央部西側の東京湾岸に位置する。市の北から東にかけては市原市と接し、西側と南側は木更津市に続く。市域の木更津市側には、房総丘陵の清澄山系に源を発する小櫃川が流れている。この小櫃川は、房総丘陵を複雑に刻んで南から北に流れ、袖ヶ浦市横田付近から西に向きを変化させ、木更津市の金田海岸で東京湾へと注いでいる。流域全域にわたり蛇行を繰り返して、またいくつもの支流の合流が見られ、中流域から下流域には肥沃な沖積平野が形成されており、整備された水田が広がっている。

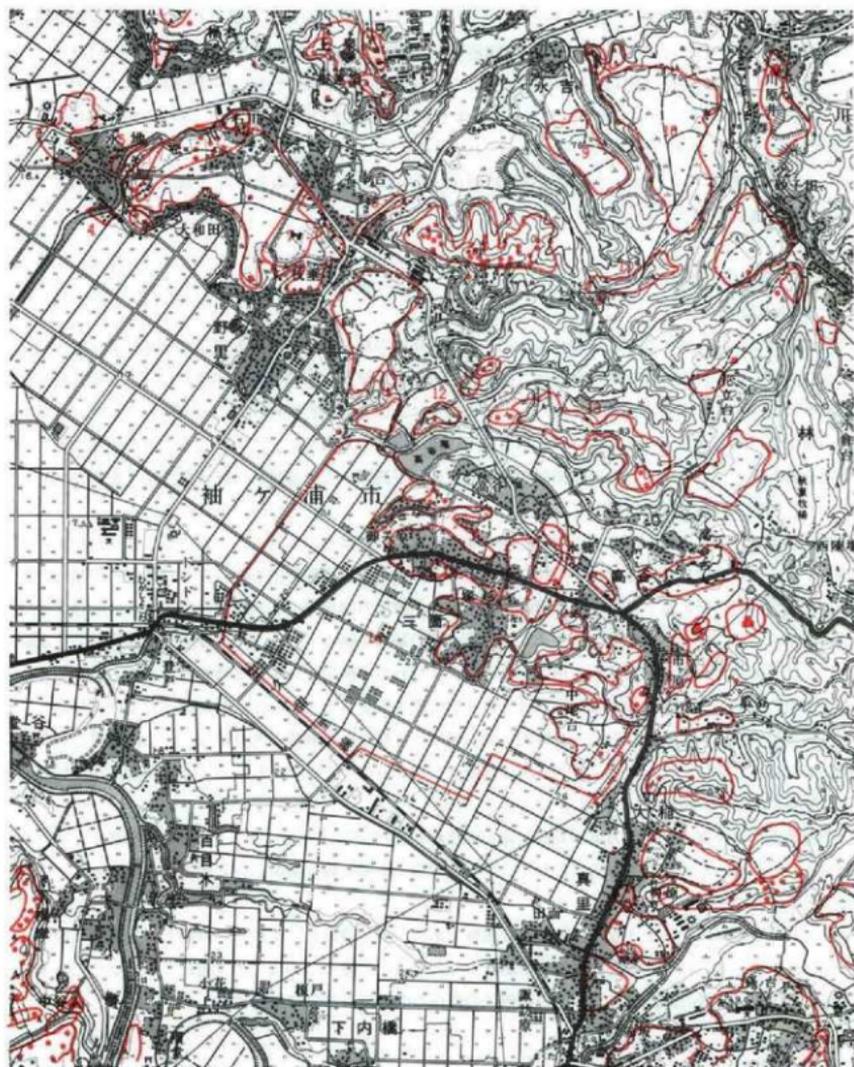
袖ヶ浦市高谷は、小櫃川が北から西へと向きを変える、いわばそのコーナーに面する右岸の台地上に展開している。この付近の台地は、小規模な谷によって浸食され、複雑な地形が作りだされ、沖積地に張り出す舌状部が各所に見られる。荒久遺跡の南側は、小櫃川方向を向く谷が北東に浸入し、北側は高谷堰から延びる谷が、東から南東側に入り込んで、舌状部の基部を狭めている。その狭まった部分に荒久遺跡は広がり、遺跡内の標高は32m～37mで北から南、すなわち小櫃川に向かって傾斜している。小櫃川右岸の沖積地の標高が23m前後なので、比高は9m～14m前後を測ることになる。遺跡周辺は多少の傾斜と、わずかな起伏が認められるものの、全体的には平坦で、下総台地の風景と大差はない。この地域の南や南東側からは、次第に起伏が大きくなり、房総丘陵へと連なっていくので、ちょうど下総台地と房総丘陵の変換地域に立地する遺跡ということができよう。

調査地点は、現在の主要地方道千葉鴨川線と国道409号が交差する地点から、約350m西に寄った地点が南端になり、そこから北北東方向に延びて、主要地方道千葉鴨川線を横断し、北端は高谷堰から入ってきた谷の手前までになる。

荒久(2)遺跡は以上のような環境に広がる遺跡である。今回遺跡名に荒久(2)遺跡と、遺跡名の後に2を付けたのは、すでに荒久遺跡の別地点を調査しており、その際そこを荒久(1)遺跡としたからである。なお、荒久(1)遺跡の調査区は、今回の調査区の南西方向の延長部分に所在する²⁾。

2 周辺遺跡

前節で述べたように、荒久(2)遺跡は、旧石器時代から中世にわたる遺跡であることが明らかになった。また、前項で述べた小櫃川の流域の沖積地や、その沖積地に面する台地上の、至る所に遺跡が所在することも広く知られている。それらの遺跡を時代を追って概観し、周辺の歴史環境を考える材料としたい。



1. 荒久(2) 2. 荒久 3. 打越岳 4. 永地 5. 上泉(注15) 6. 上泉(注5) 7. 文船
 8. 寒沢 9. 遠寺原 10. 西寺原 11. 上用堀 12. 清水井 13. 下向山 14. 三箇

第7図 周辺の遺跡分布 (1 : 25,000)

旧石器時代の資料は、県北部に比較するとその蓄積に大きな開きがあるように思われる。良好な遺跡としては、当センターが実施した文脇遺跡⁹⁾を第一に挙げることができる。ここでは立川ローム層の第2黒色帯下部で4か所の石器集中地点が発見され、台形様石器、石錐、石斧、礫器、叩き石等が出土している。また、清水井遺跡¹⁰⁾ではⅢ層～Ⅴ層において石器が出土し、上泉遺跡¹¹⁾でも剥片が出土している。

縄文時代は、各時期の遺跡が所在し、特に早期の報告例が多い。その中では打越岱遺跡⁶⁾の資料がまともであり、燃糸文、沈線文、条痕文系の土器と、燃糸文期の竪穴住居跡1軒等が検出されている。他の縄文時代の遺跡としては、寒沢遺跡⁷⁾、清水井遺跡、下向山遺跡⁸⁾、文脇遺跡⁹⁾が代表例に挙げられる。

弥生時代は、後期の集落遺跡の調査が目目される。文脇遺跡⁹⁾では、362軒もの竪穴住居跡が発掘されたほか、清水井遺跡、下向山遺跡、打越岱遺跡で竪穴住居跡や方形周溝墓が検出されている。また、沖積地に広がる三箇遺跡¹²⁾でも弥生土器の散布が認められる。一方、この地域の中期の資料は、後期に比して断片的であり、文脇遺跡⁹⁾等でもわずかに認められるにすぎない。

古墳時代の遺跡は、弥生時代に集落が営まれたり方形周溝墓が造られた遺跡で、それに継続するように竪穴住居や古墳の造営が行われ、上泉遺跡、下向山遺跡、寒沢遺跡、文脇遺跡では前期の集落が存在する。中期・後期古墳の調査では愛宕古墳群の成果が目目される。

奈良・平安時代の遺跡は、弥生時代から古墳時代の遺跡と比べて減少傾向にある。しかし、永吉台遺跡群¹³⁾の調査では、西寺原地区、遠寺原地区合わせて184軒の竪穴住居跡や25棟の掘立柱建物跡が検出されるなど、規模の大きな集落も存在し、文脇遺跡、寒沢遺跡、清水井遺跡にも集落の形成が見られる。

中世の調査は近年小櫃川下流域で盛んに行われ、自然堤防上に所在する芝野遺跡¹⁴⁾、左岸に占地する笹子城跡¹⁵⁾、また、右岸の台地上に所在する山谷遺跡¹⁶⁾の概要が紹介されている。報告されている遺跡では、青磁碗や銭貨が出土した永地遺跡¹⁵⁾、台地整形や土坑が検出された文脇遺跡、陶磁器類の出土が確認されている三箇遺跡が知られているが、いずれの遺跡も大規模に展開する遺跡の一部である。したがって、小櫃川流域の中世遺跡の研究は緒についたばかりの段階であり、今後に期待するところが大きいといえる。

注1 加藤正信 笹生 衛 1993 「荒久遺跡の概要」『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター

2 (財)千葉県文化財センター 1989 「国道410号線①荒久遺跡」『千葉県文化財センター年報No14』

3 加藤正信 大谷弘幸 1995 「袖ヶ浦市文脇遺跡」(財)千葉県文化財センター

4 大崎紀子 1993 「清水井遺跡」(財)君津都市文化財センター

5 加藤正信 西柳 隆 1993 「袖ヶ浦市上泉遺跡」(財)千葉県文化財センター

6 野山行雄ほか 1989 「打越岱遺跡」(財)君津都市文化財センター

7 稲葉理恵 1996 「寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡」(財)君津都市文化財センター

8 黒沢 聡 1994 「下向山遺跡」(財)君津都市文化財センター

9 山本哲也 1992 「文脇遺跡」(財)君津都市文化財センター

10 光江 章 1991 「三箇遺跡Ⅰ」(財)君津都市文化財センター

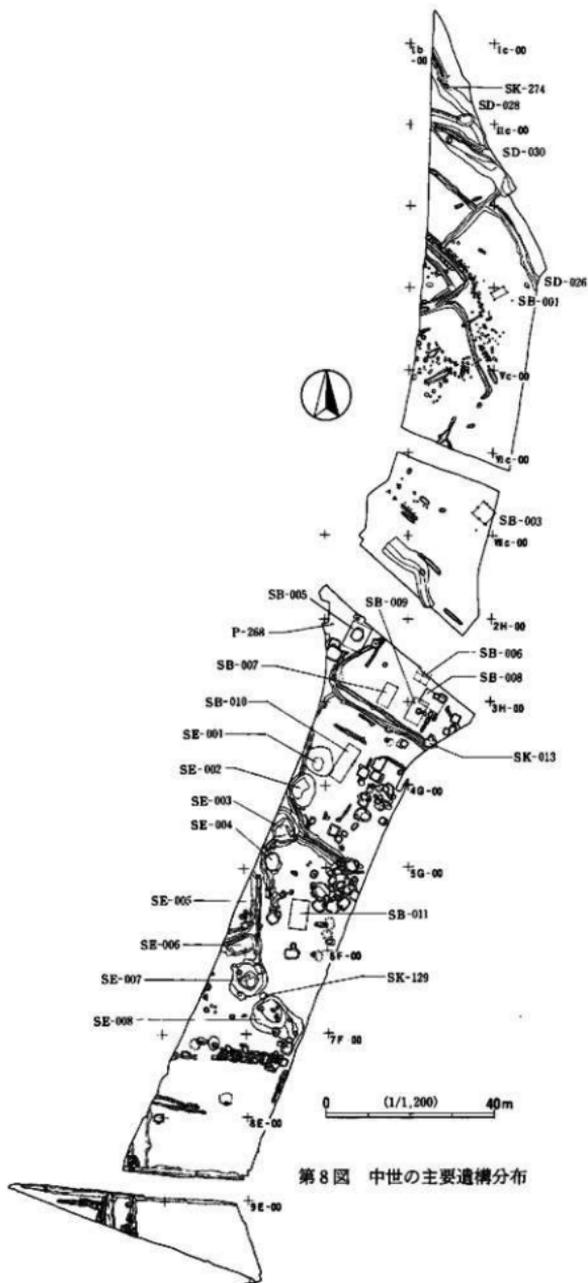
11 豊巻幸正 笹生 衛 1986 「永吉台遺跡群」(財)君津都市文化財センター

12 笹生 衛 神野 信 1993 「芝野遺跡の概要」『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター

13 柴田龍司 1993 「笹子城跡の概要」『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター

14 柴田龍司 1994 「鎌倉街道と市」『研究連絡誌』第41号 (財)千葉県文化財センター

15 加藤正信 1991 「袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡」(財)千葉県文化財センター



第 8 図 中世の主要遺構分布

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 中世の遺構と遺物

1 概要

荒久(2)遺跡の調査成果の中で、中世が最も注目できる時期とっていただろう。特に、南調査区では数多くの遺構と遺物が検出され、資料的に乏しかった本地域に、中世の新たな考古学的資料を提供することができるものと思われる。

中世に比定できる遺構には、掘立柱建物跡9棟、地下式土坑24基、掘鉢状遺構8基、井戸状遺構2基のほか、500か所を越す小土坑、何条もの溝状遺構が存在する。また、遺構に比較すると全体量は少ないものの、出土遺物には、青磁、白磁の貿易陶磁器を初め、瀬戸、常滑、備前の各生産地からもたらされた陶器類、かわらけを初めとする在産土師質土器、銭貨、砥石が認められる。また、地下式土坑や土坑から人骨片や歯が検出されたが、その保存状態は極めて不良であった。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の棟数は全体で9棟である。北調査区では、調査時に4棟の掘立柱建物跡の存在を想定した。その内の1棟であるSB-004は、平安時代に比定できるものであり、SB-002については柱の配置状況から検討し、掘立柱建物跡と考えるには難があると判断した。したがって、北調査区の中世の掘立柱建物跡は2棟ということで記述を進めたい。一方、南調査区の掘立柱建物跡は、先の概要報告ではその数を5棟と表示した¹⁾。しかし、その報告の中で「掘立柱建物跡は流動的で、今後の整理作業の際の検討によってその棟数、規模等が変わる可能性が高い」と断っているように、現場においては建物を構成する柱穴を明確に把握できなかった部分がある。このことは、柱穴と同様な形態の小ピットが、集中して多数検出されたことが原因である。したがって、整理作業段階での、図面に基づいた柱穴配置の再検討を行うことになり、その結果7棟の掘立柱建物跡を想定することができた。ほかにも建物が存在していた可能性は高いが、一応検討によって想定した掘立柱建物跡について記述したい。なお、南調査区の掘立柱建物跡の遺構番号は、整理段階で新たに付した番号であり、現地で作成した図面には柱穴個々に遺構番号が付いている。

SB-001 (遺構：第10図)

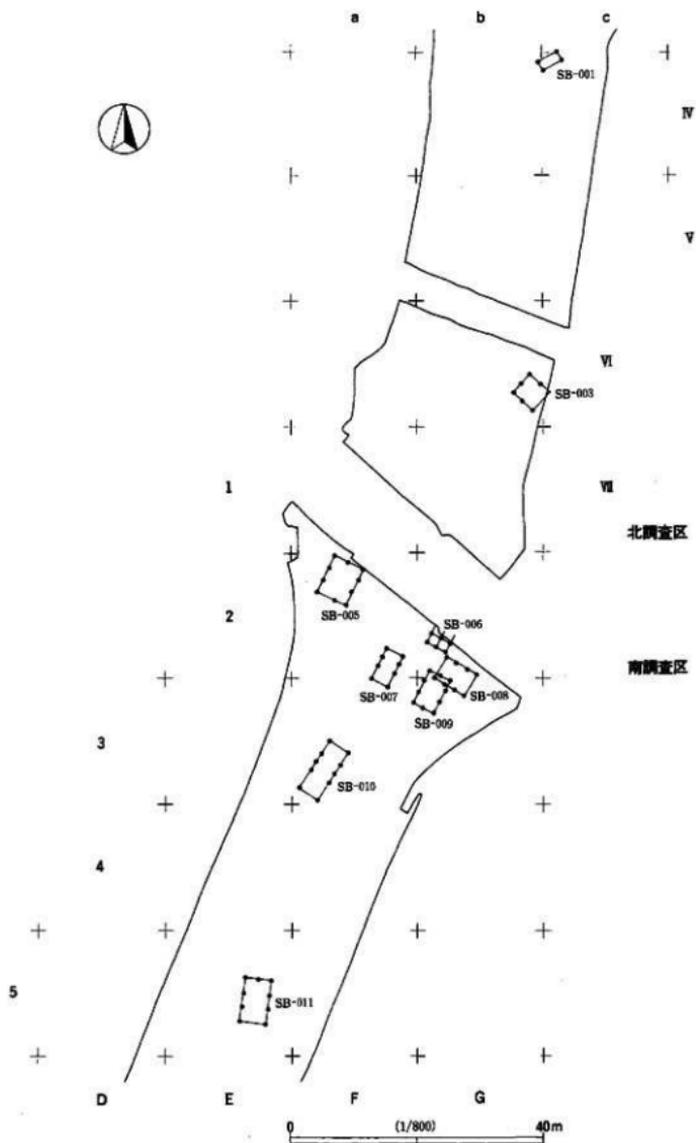
北調査区のIVc区を主に位置する。桁行1間(3.45m)×梁行1間(1.60m)の規模の建物である。各柱穴の直径は20cm～30cmで、検出面からの深さは10cm～20cmと浅い。

柱穴から実測可能な遺物は出土していない。

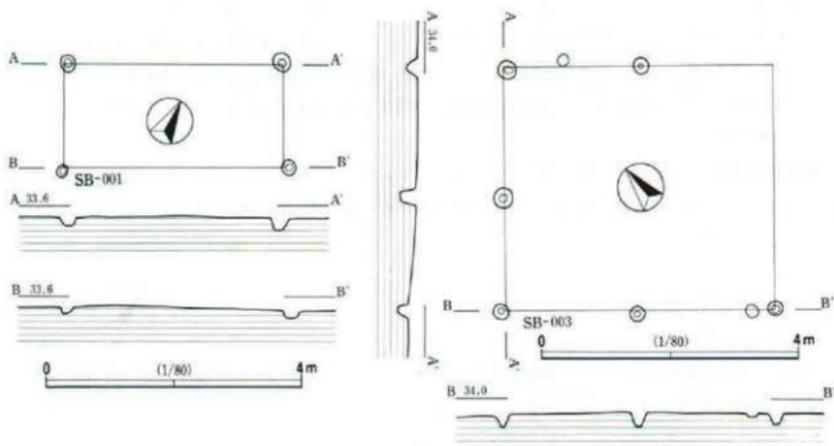
SB-003 (遺構：第10図 図版3)

北調査区のVIb区に位置している。一部が調査区外に含まれるが、桁行2間(4.20m)×梁行2間(3.80m)の建物であると考えられる。柱穴の直径は20cm～30cmで、深さは20cm～25cmである。

実測可能な遺物は出土していない。



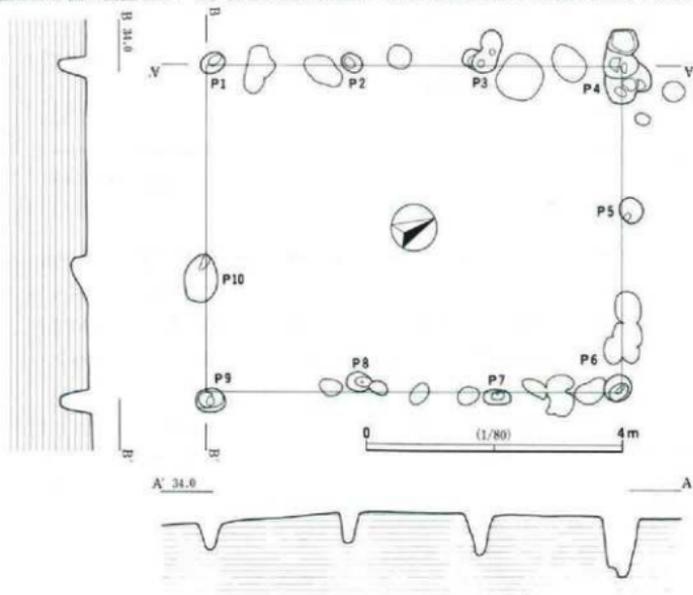
第9図 中世の掘立柱建物跡配置



第10図 SB-001・003

SB-005 (遺構：第11図)

南調査区の2F区に位置している。桁行3間(6.50m)×梁行2間(5.00m)の側柱の建物を想定した。そ



第11図 SB-005

それぞれの柱筋にはほかにも小土坑が乗っているが、それについては、平面図中に上端の平面形を示しておいた。本建物と重複する掘立柱建物跡は認められないが、中央部に地下式土坑であるSK-068が存在する。この地下式土坑からは、梵字を記した土師質土器や、底部に小孔が穿たれた瀬戸香炉が出土している。ちょうど建物の中心に位置することから、本遺構との関連も考えられるが、それ以上の明確な根拠がないので、想像の域は脱し得ない。

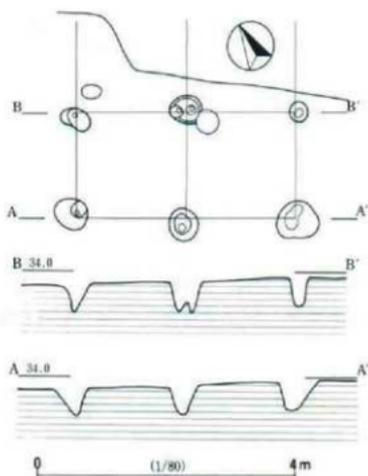
柱間間隔は桁行で2.0m~2.4mと不特定で、梁行についても、北側で2.3m+2.7m、南側が3.0m+2.0mとなっている。柱穴の直径は30cm~80cmで、検出面からの深さは25cm~90cmである。

実測可能な遺物は出土していない。

SB-006 (遺構：第12図)

南調査区の2G区に位置している。梁行2間(3.4m)で、桁行が3間の建物を想定した。梁行の2間は調査区域内に存在するが、桁側については、1間分を検出したにとどまり、もう2間については調査区の外に含まれるものと考えられる。桁行3間を想定した根拠は、周辺の建物がすべて3間の桁行であることによるものである。また、総柱建物になる可能性も高い。梁行の柱間間隔は、東側、西側とも1.6mとなっており、梁行は1.7mの等間隔になっている。柱穴の直径は30cm~60cmで、基本的に円形の平面形である。検出面からの深さは40cm~50cmを測り、比較的一定した状況をみせている。

実測可能な遺物は出土していない。

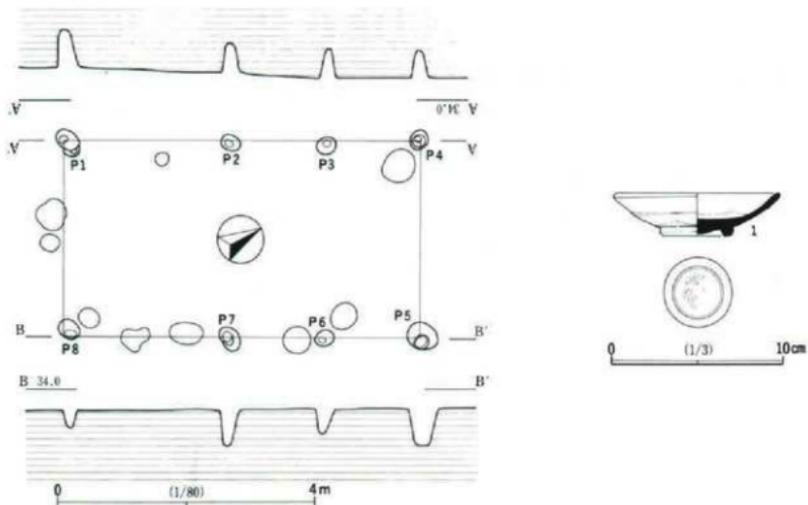


第12図 SB-006

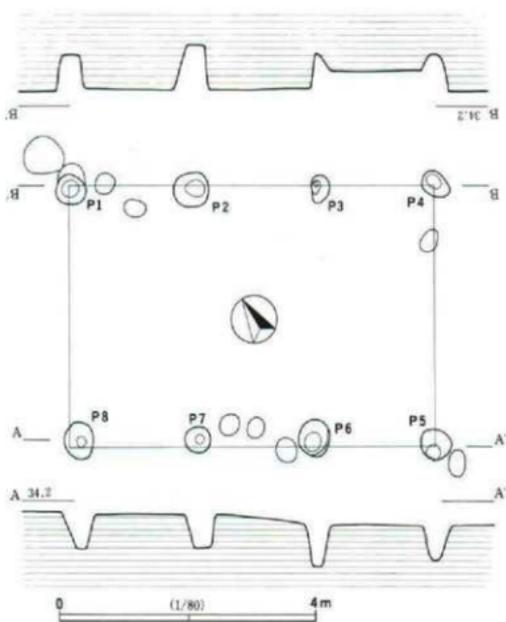
SB-007 (遺構：第13図)

主に2F区に位置している。桁行3間(5.6m)×梁行1間(3.0m)の建物を想定した。南側の梁行柱筋に乗る小ピット1か所が存在することから、梁行2間の可能性もあるが、北側には全く認められないので1間と判断した。桁行の柱間間隔は、いずれも南から2.6m・1.5m・1.5mであり、p1-p2間とp7-p8間の1間が、ほかより開いている点の特徴になる。柱穴の平面形は円形で、直径は25cm~50cmである。検出面からの深さは、30cm~60cmである。

建物のコーナーに位置するp5から白磁皿が出土している。この柱穴は直径が60cmになるもので、8か所の柱穴中最も規模が大きい。白磁皿は2分の1が遺存する。復元値で口径9.6cm、器高2.5cm、底径4.0cmになる。外面体部下位はヘラ削りが加えられ、内外面の上半部に灰白色の釉が施されている。また、外面底部、高台の内側に朱が認められる。この朱は一見すると文字を記したようだが、文字としての識別は困難で、底部に広く付着させたものの一部と考えられる。



第13図 SB-007と出土遺物



第14図 SB-008

SB-008 (遺構：第14図)

2G・3G区に位置している。桁行3間(5.7m)×梁行1間(4m)の建物を想定した。桁行の柱間間隔は、p1-p2・p7-p8が2.0m、他はそれぞれ1.85m間隔である。柱穴の直径は30cm～55cm、検出面からの深さはいずれも50cm以上を測る。建物の桁行方向は北西-南東を向いており、この方向は、2区及び3区に所在する他の建物とは異なった方向となっている(第9図)。また、SK-017・018の土坑とp3・p4が重複し、掘立柱建物跡であるSB-010とも一部で切り合い関係を持ち、さらにSB-006とも近接する。ほかに周辺には多数の小ピットが検出されていて、想定した建物の内側にも存在する。しかし、それらの遺構との時間的前後関係は明確にとらえられなかった。

実測可能な遺物は出土していない。



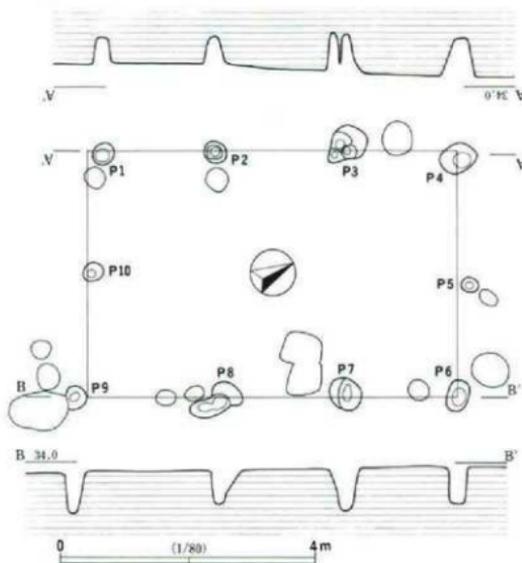
第15図 2・3区の掘立柱建物跡とピット群

SB-009 (遺構：第16図)

主に3G区に位置し、一部が2G区にかかっている。桁行3間(5.80m)×梁行2間(3.80m)の建物を想定した。必ずしもすべての柱穴の柱筋が通る訳ではないが、それぞれの配置から考えて、この想定が妥当なものと判断した。桁行の方向は北東-南西で、SB-005・006・007とほぼ同様な向きである。また、建物の北側でSB-008と重複する部分があり、この2棟の建物が同時に存在していないことがわかる。ほかにも土坑との重複部も存在するが、その時間的な前後関係は不明である。

柱穴は円形の平面形を残すものが6か所、楕円形がp4・p6・p8の3か所存在し、p3は3個の小ピットが集まった形態を呈する。検出面からの深さは、45cm～65cmである。桁行の柱間隔は、東側、西側とも中央部が2.1mを測り、その両脇の柱間より開いている。梁行のp4-p5は2.05m、p5-p6は1.75m、南側のp9-p10・p10-p11はそれぞれ1.9mである。

本建物を構成する柱穴から、実測可能な遺物は出土していない。



第16図 SB-009

SB-010 (遺構：第18図 図版3 遺物：第18図 図版37)

3F区に位置している。次ページの第17図に示したように、3F区及び4F区には多数のピットが検出されている。特に、図の中でスクリーントーンを入れた鉤の手状の溝状遺構と、調査区域の西側の播鉢状遺構との間には多く存在する。そこに展開するピットの性格を、それぞれ明らかにすることは困難であるが、建物の柱穴と考えられるものもあり、検討の結果1棟の建物を想定することができた。

想定した建物の規模は桁行5間(9.00m)×梁行1間(3.60m)である。ただ、東側には庇が存在した可能性もある。また、p1-p3間に(p2)が存在しないことや、p10-p12間のp11が明確でないことから、3間×1

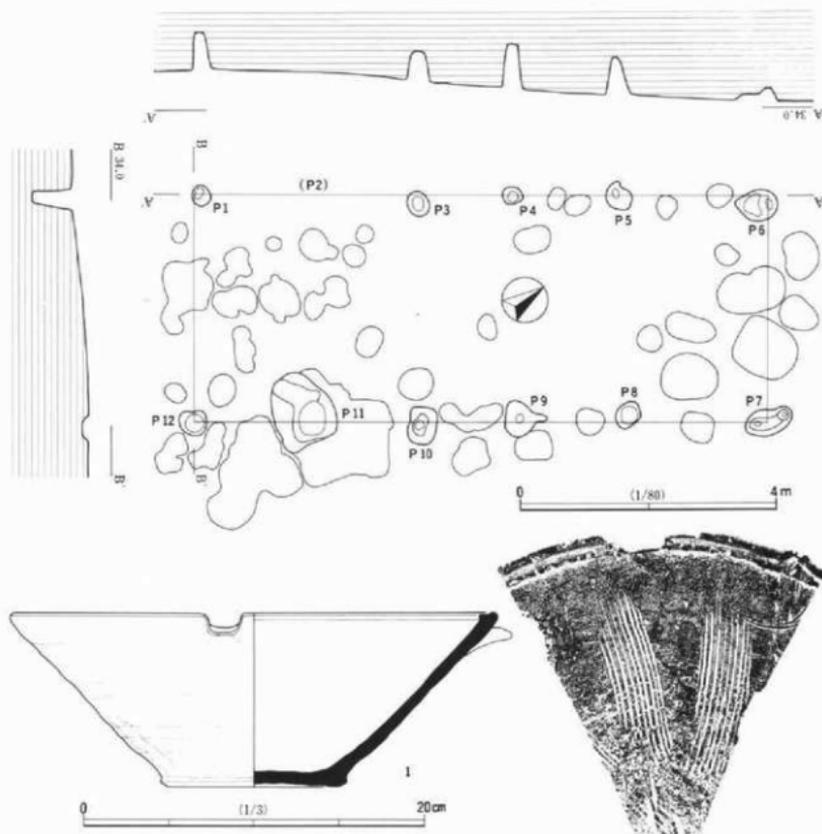
間の建物も想定できるが、一応5間×1間とした。ここでの建物間の重複は存在せず、掘鉢状遺構であるSE-002と一部重複が認められ、位置的には建物内部に存在し、焼土を伴う土坑であるP-229は、p7・p8に近接している。

柱間間隔は以下のとおりである。p1-p3:3.6m、p3-p4:1.5m、p4-p5:1.5m、p5-p6:2.4m、p7-p8:2.2m、p8-p9:1.7m、p9-p10:1.5m、p10-p11:1.8m、p11-p12:1.8m。検出面からの深さは10cm~70cmと一定していない。

p8とp9の間に位置するP-309から掘鉢が出土している。全体の4分の1が遺存する。復元値で口径28.5cm、器高10.4cm、底径11.0cmである。底部から体部にかけては直線的に開き、口縁部の内側に稜が巡



第17図 3・4区の掘立柱建物跡とピット群



第18図 SB-010と出土遺物

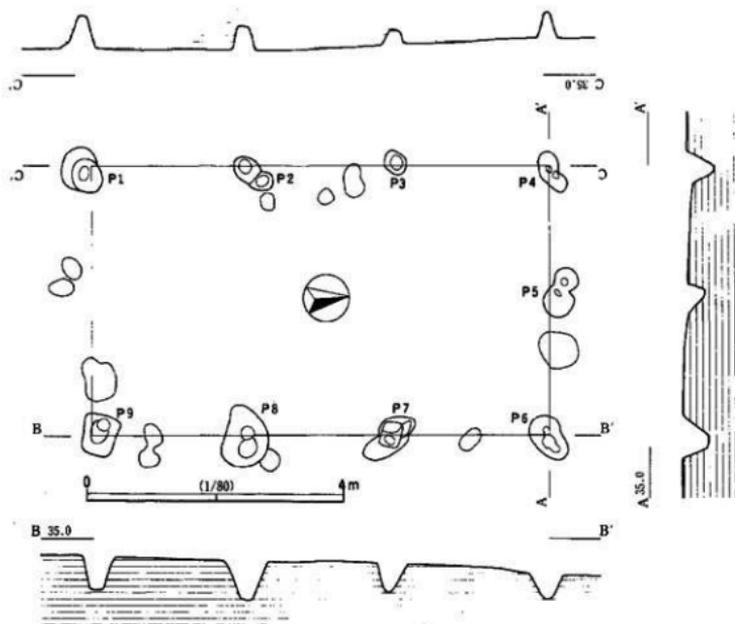
る。外面はなでを施して調整するが、接合痕跡がわずかに認められる。胎土にスコリアを含み、色調は灰色で、質感は須恵器のようである。

SB-011 (遺構：第19図)

今回の調査で想定した掘立柱建物の中では、最も南側である5E区に位置する(第9図参照)。周辺には柱穴状の小ピットが多数検出されたため、現地では建物の想定が困難となり、整理段階の検討で想定した。想定した建物の規模は、桁行3間(7.2m)×梁行2間(4.2m)である。桁行方向の柱間間隔は、東側、西側とも2.4mの等間隔である。梁行は北側で2.1mと2.1mになっているが、南側では柱穴が明確でない。柱穴の平面形は円形や楕円形を基本として個々に異なり、その大きさも不定である。また、検出面からの深さ

は、20cm~60cmである。

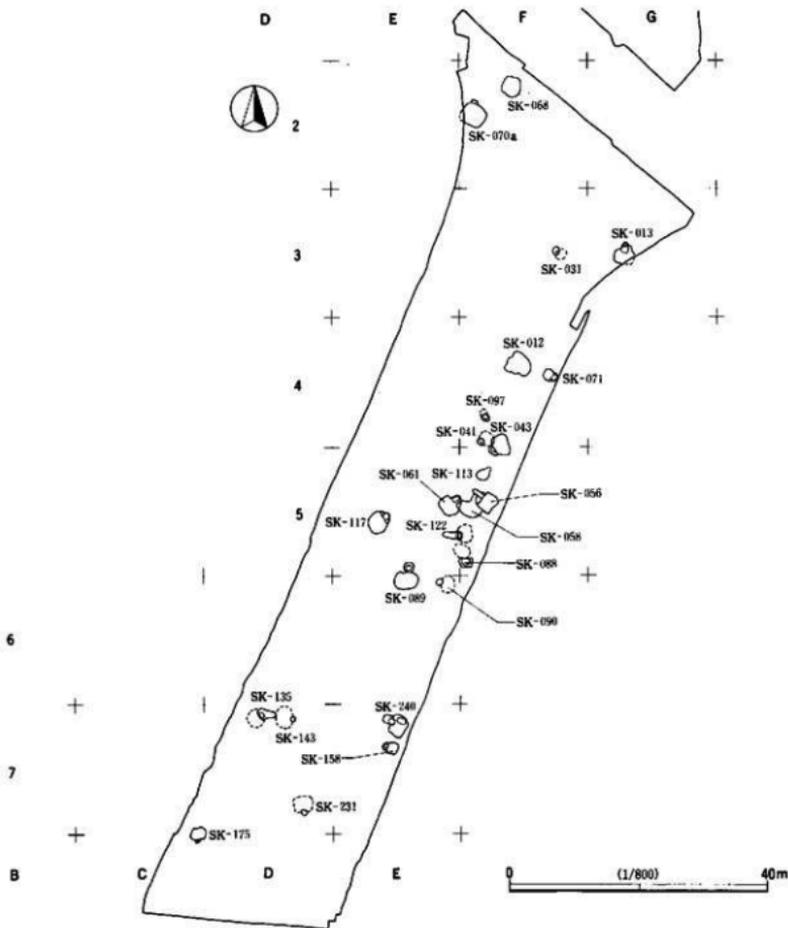
本建物の柱穴からは実測可能な遺物は出土しなかった。



第19図 SB-011

3 地下式土坑

堅坑をある深さまで掘り下げ、そこから横に掘削を進めて地下室をつくる、いわゆる地下式土坑は24基存在し、分布は南調査区の2区から8区の間に限られている(第20図)。本遺構は構造上の特徴から、保存状態が良好であれば、検出時に明らかになるのは堅坑の開口部である。その時点では、やや深めの土坑を想定し調査を開始することになり、調査が進捗して地下室の存在が明らかになって、初めて地下式土坑であることが判明する。そのような場合、地下室内の精査は、埋土の除去方法と調査上の安全確保、という面から様々な制約が伴うことになる。今回の調査では、地下室の天井部の遺存が確認できた段階で、安全面を優先して天井部を除去することとし、その後に地下室内を精査するという方法を採用した。



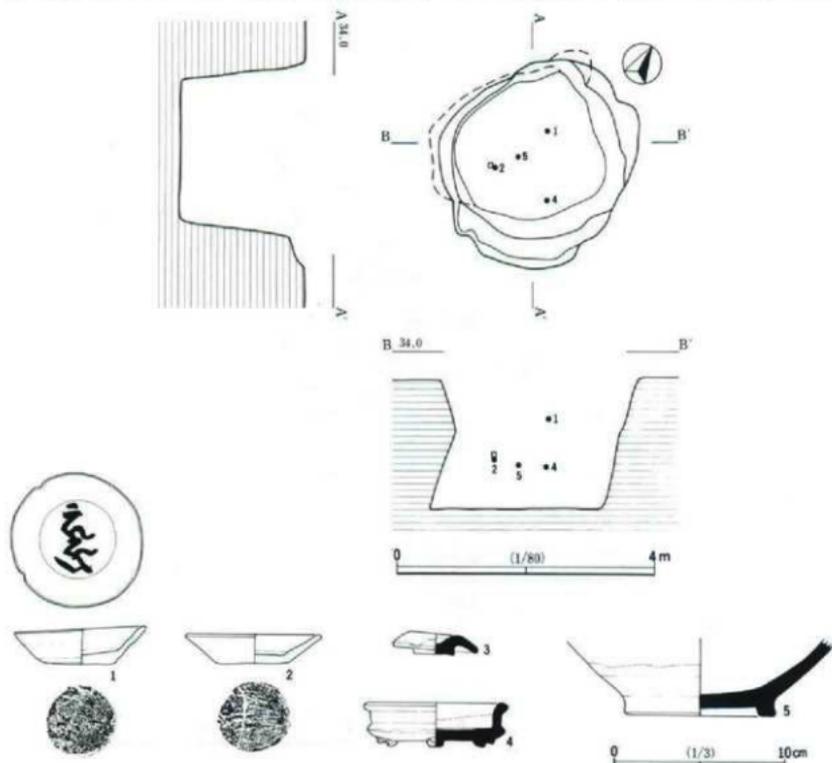
第20図 地下式土坑の分布状況

SK-068 (遺構：第21図 図版4 遺物：第21図 図版37)

南調査区の2F-13・14・23・24に所在する。調査工程の都合から、2年度に分かれて調査を実施した遺構である。掘立柱建物跡である(SB-005)の内側に位置し、周辺にはほかにも性格が明確にならない小ピットが存在している。調査前に天井部が地下室内に崩落していたため、竪坑の開口部の形状は不明である。その竪坑の位置は、地下室の中心部から見て南東側で、明瞭な段を設けずに地下室に下降する。地下室の床面は平坦に構築され、その規模は北東-南西で2.2m、北西-南東が2.1mになり、平面形は不整隅丸方形を呈する。検出面から地下室の床面までは1.95mである。また、地下室から天井部までの高さは確定できないが、中央部で1.5m内外であったと推測される。

遺物は地下室床面からは出土していない。第21図に挙げた遺物はすべて、天井崩落後に地下室に入ったものである。天井の崩落は、ローム塊の状態で一気に起こったと推測され、大きく開口した地下室部は、方形の土坑状を呈したと思われる。そして、そこに土器類を置いたと推測される。

1は完形で出土した土師質土器である。口径7.6cm、器高2.2cm、底径4.0cmで焼きが甘い。内面底部に墨書で梵字が記されている。2も完形の土師質土器で、口径7.7cm、器高1.8cm、底径4.1cmである。なお、こ



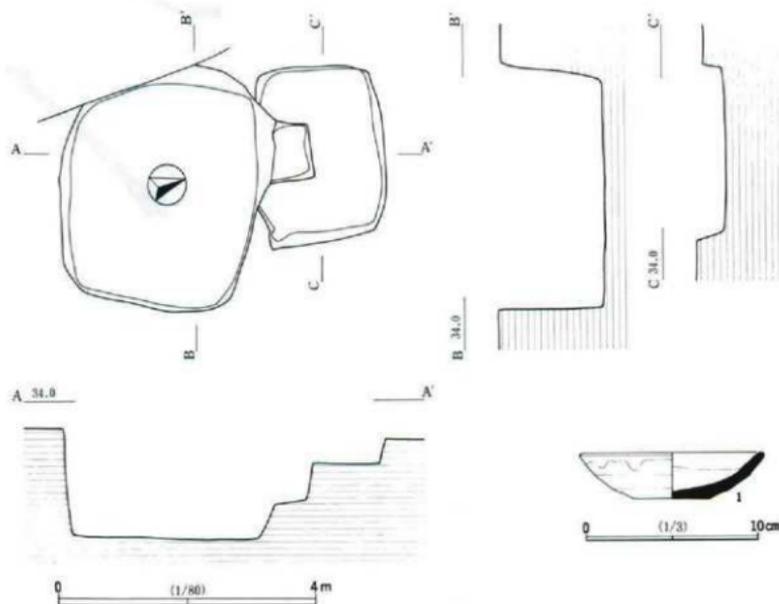
第21図 SK-068と出土遺物

の内面底部には、密着した状態で鉄が残されていた。しかし、その保存状態が極めて悪く、図示することが不可能となってしまった。1の土師質土器に記された梵字の存在から考慮すると、1と2の土師質土器、それとの中の銭貨は一体であり、1は2の蓋であったことが推測される。後節で説明するP-268の例も、その可能性を裏付ける材料になるだろう。そして、何らかの祭祀行為が行われたことを示唆するものと考えられる。3は合子か小壺の蓋である。完形を保ち、外径は5.0cm、器高1.3cm、底径2.4cmになる。外面天井部は窪んでおり、つまみをつけていない。外面に暗緑色の釉が施され、底部は回転糸切り無調整である。4は底部に三足か四足がつく袴腰形香炉である。内外面の体部に灰釉が施される。5は鉢である。外面体部の下位に回転ヘラ削りが行われ、内面全体と外面のヘラ削りから上位に灰釉が施される。3～5はいずれも瀬戸製品と考えられる。

SK-070a (遺構：第22図 遺物：第22図 図版42)

2F-30・31・40・41に所在する。SK-068の南西側に当たり、西側の一部は調査区外に含まれる。本地下式土坑は、調査の段階ですでに天井部が崩落しており、土坑状のプランを呈していた。当初同一遺構の一部という可能性もあったSK-070bは、竪坑部と重複する別の土坑であることが判明した。時間的な前後関係は、070a→070bである。

北側につくられた竪坑の開口部は、一辺85cm内外の規模で方形を呈し、地下室から50cm上にステップを設けている。竪坑と地下室の位置関係から推測すると、開口部の真上から、段の平坦部は見えたであろうが、地下室の床面を覗くことは難しかったはずである。地下室の床面は平坦に設定され、3.35m×2.85m



第22図 SK-070aと出土遺物

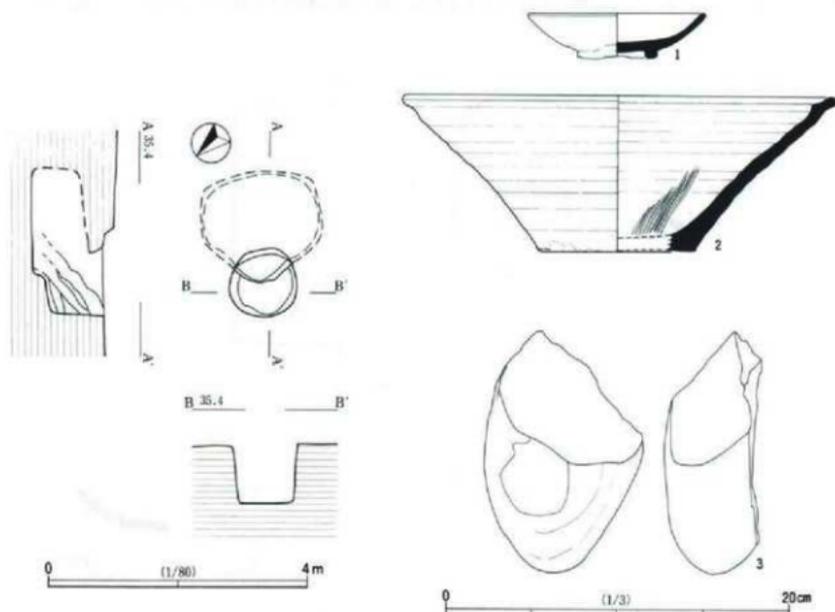
の規模を有し、隅丸方形につくられている。床面から天井部へはやや外方へ開くように立ち上がるが、天井部の形態は知る事ができない。

床面から全体を復元できる遺物は出土していないが、常滑の片口鉢の破片が1点出土している。口縁部内外面の端部は、それぞれ内側と外方に張り出していて、注口は幅3cmを平らに外側に折ってつくられている。内面の上端部から2cmまで濡られた状況が観察できる。第22図1は地下室の覆土中から出土した瀬戸縁軸小皿である。破片資料であり、口径を復元すると10.8cmになる。全体に器厚が厚く、口縁部に緑灰色の釉が施される。

SK-031 (遺構：第23図 図版5 遺物：第23図 図版37・43)

3F-46・47に所在する。方形の土坑と重複するが、時間的な前後関係は判然としない。竪坑の開口部は北西側に設けられ、径1mの円形を呈する。開口部の真上から、地下室の床面を覗き込むことは可能な状況で、床面から20cm上には竪坑の段が存在する。地下室は隅丸のホームベース形につくられ、ホーム側に当たる位置に竪坑が存在する。竪坑を降りてからの奥行きは1.60m、最大幅は1.75mで、平坦に設定された床面から天井部までの高さは85cmである。天井部は崩落を免れて保存されていたが、地下室内は竪坑から流れ込んだ状態の黒褐色土によって、完全に埋め尽くされている。

遺物は地下室の覆土中からわずかに出土している。第23図1は白磁皿である。破片資料であり、口径は復元値で10.4cmになる。釉は濁った乳白色を呈し、二次的な火熱を被ったような部分が観察される。外面



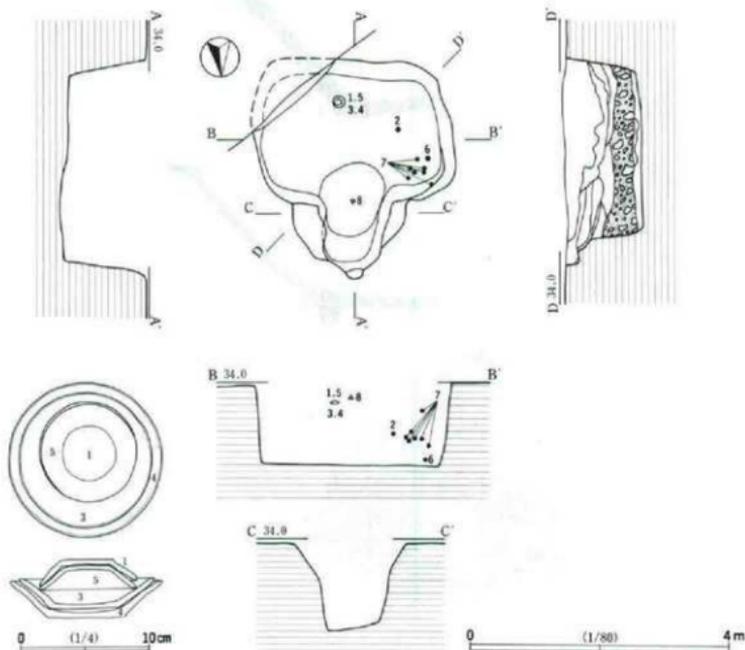
第23図 SK-031と出土遺物

の底面には軸は施されておらず、高台の裏に挟りを入れている。2の瀬戸錆軸摺鉢は体部が直線的に外傾し、口唇部からやや下がった内側に弱い突起が巡る。3は磨痕が観察される礫で、火熱を受けた可能性がある。

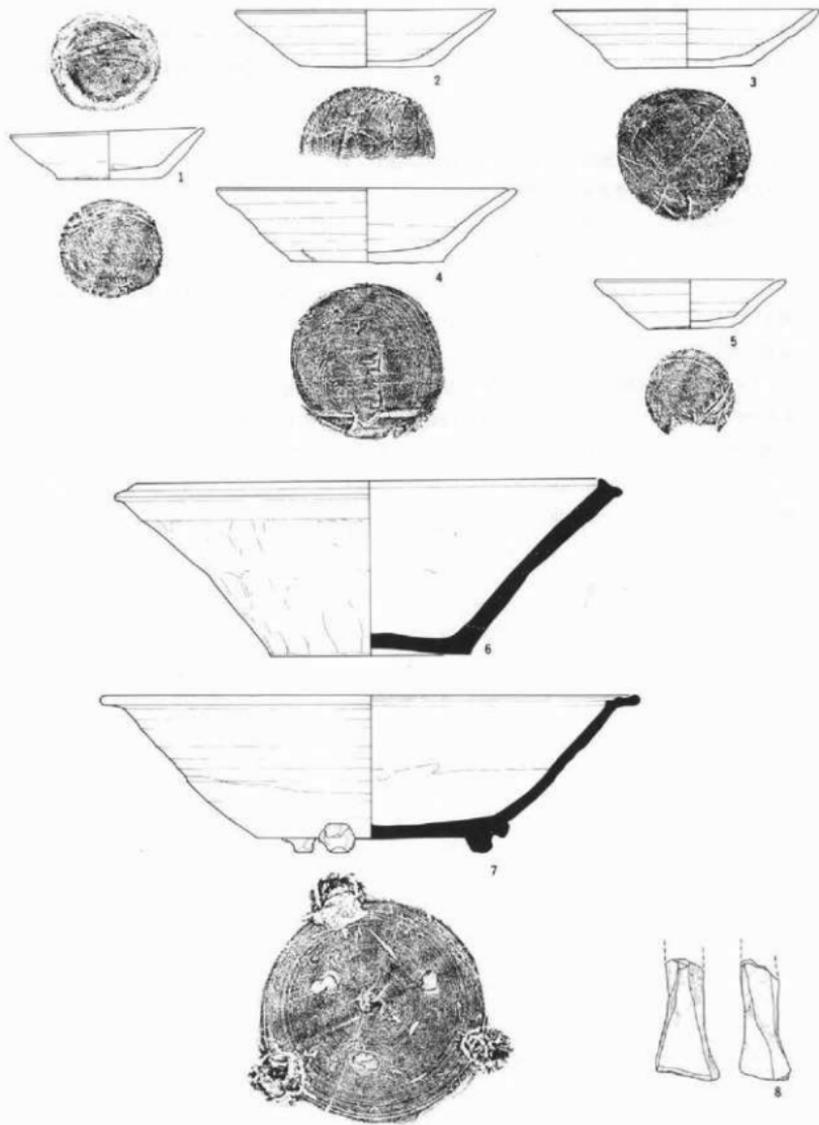
SK-013 (遺構：第24図 図版5 遺物：第25図 図版37・44)

3G-42・52に所在し、地下室の一部が調査区外に含まれる。天井部が遺存していなかったため、検出面のプランは柄鏡状であった。竪坑は北側に張り出す形で設けられ、開口部は方形を呈していたものと思われる。竪坑は無段で地下室につながり、地下室寄りにわずかな窪みが認められる。検出面から竪坑の底面までは1.3mである。地下室は、東西方向2.75m×南北方向1.8mの規模で、隅丸長方形につくられる。床面は竪坑直下の窪む部分を除けば平坦に設定されている。壁はわずかに傾斜して60cm立ち上がり、そこから天井部に移行したと考えられる。

床面上に15cmの厚さに堆積する土の上に、大きな塊状の堆積土が一気に乗ったような状態で地下室を覆う(第24図土層断面図中のスクリーントーンの部分が該当する)。床面上の堆積が薄いことから考えると、この土の塊の堆積は、地下室の使用停止後、間もなくして起こったと推測される。そして遺物の多くが、地下室の床面からやや浮いた位置で出土した点に注意しておきたい。特に第25図の土師質土器1・3・4・5は、模式図に示したように、2枚重ね(4の上に3)の身に、2枚の蓋(5の上に1)をかけた合子状の、



第24図 SK-013

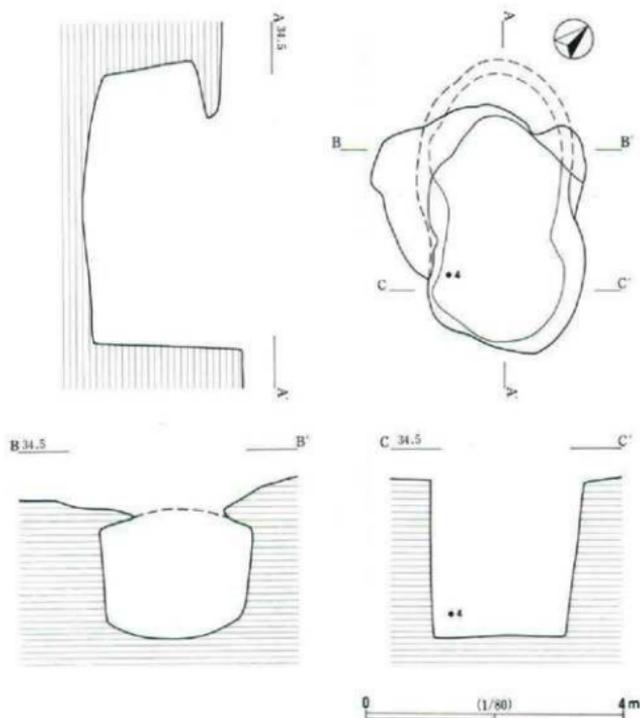


0 (1/3) 20cm

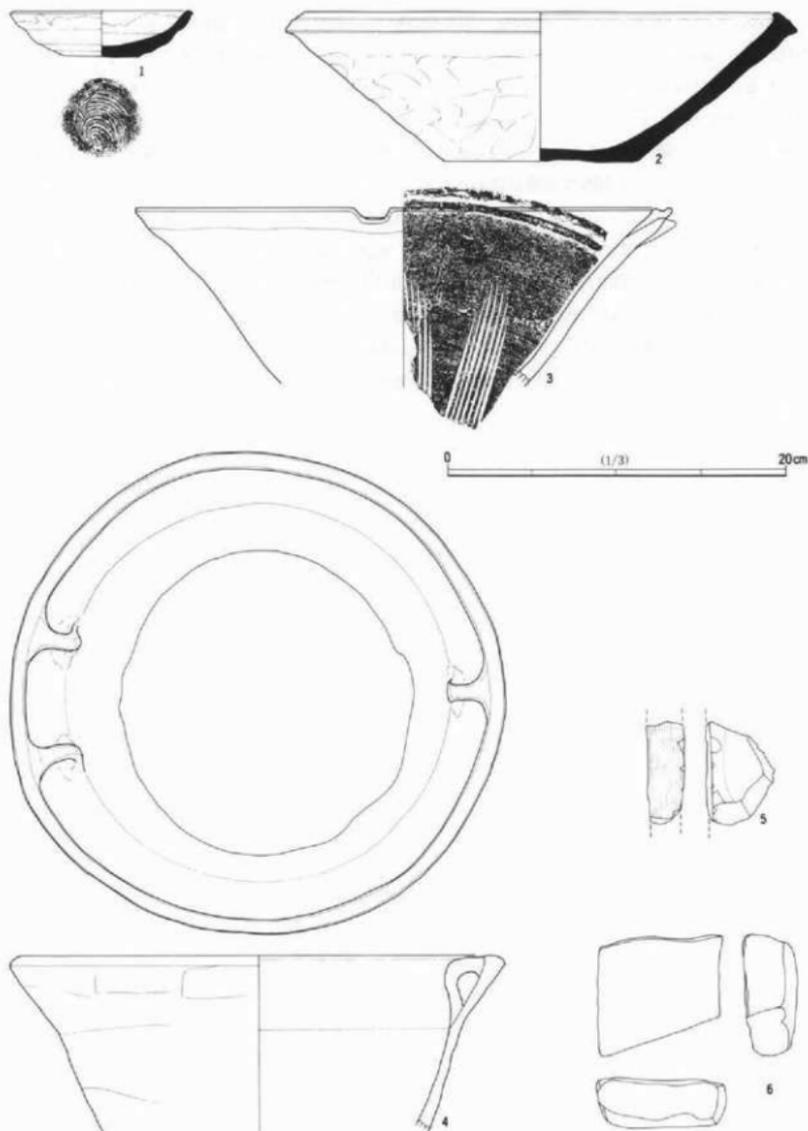
第25圖 SK-013出土遺物

そのままの状態出土している。埋納の目的が存在していたことがうかがわれる状況である。

第25図1～5の底部は、いずれも回転糸切り無調整で、体部はロクロで調整される。1は口径11.5cm、器高2.9cm、底径6.1cmである。完形を保っているが、焼成前あるいは焼成中に生じたと思われる割れが認められる。2は底部の器厚が薄く、体部は直線的に外傾する。3分の1が遺存し、復元口径15.6cm、器高3.5cm、底径7.8cmになる。3は完形である。口径15.9cm、器高3.6cm、底径8.0cm。内底面には横方向に指で施されたなでが認められる。4は5点の中で最も大型である。完形を保ち口径17.9cm、器高4.5cm、底径9.0cmになる。内面に3と同様な調整が認められる。5はほぼ完形で、口径11.4cm、器高3.0cm、底径5.1cmである。6は常滑の鉢で、3分の1の遺存である。体部は反り気味に外傾し、口縁部の端部は、内側と外側に張り出している。復元口径27.8cm、器高10.5cm、底径12.0cm。胎土に石英粒が多く認められ、外面は赤茶色の光沢を放つ。内面は口縁部の直下まで、使用による磨痕が観察できる。7の瀬戸灰軸三足盤は、復元口径28.4cm、器高9.4cm、底径13.4cmになる。底部から体部の下半はヘラ削りが施され、体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反して内側の2か所に小突起をつける。内面の底部は軸をハケ塗りしてあり、体部上半から口縁部にかけては全体に黄緑色の釉が施されている。8は砥石である。欠損品であるが、各面が使用されたことがわかる。



第26図 SK-012



第27图 SK-012出土遺物

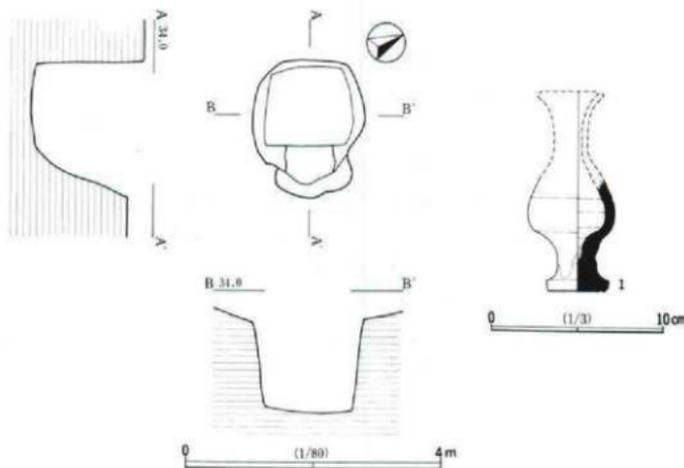
SK-012 (遺構：第26図 遺物：第27図 図版37・38・43・44)

周辺に多数の土坑が存在する4F-23・24・33・34に位置する。調査段階ですでに地下室の天井部が崩落していたので、検出時には土坑状を呈していた。南東側に竪坑、北西側に地下室を設ける。竪坑の開口部は、遺存部から復元すると、径1.95mの不整形形であったと考えられ、途中に段を設けずに地下室の床面に達している。検出面から底面までは2.4mの深さがあるので、昇降には梯子などが必要であったと考えられる。地下室の奥行は2.2m前後と推測され、幅は2.0mになる。床面は中央部が周囲よりも低く、奥壁側では1.5m立ち上がって天井部につながっていく。

遺物は床面から浮いた位置で出土している。第27図1の瀬戸緑釉小皿は完形を保って出土している。底部は回転糸切り無調整で、体部は全体に丸味を帯びる。口縁部に灰白色の釉が施され、ほかは乳灰白色を示す。口径10.8cm、器高2.8cm、底径4.2cm。2は常滑の片口鉢と考えられるが、遺存部分には注口は残存していない。底部の器厚は薄く、体部は直線的に外傾し、口縁部にかけてわずかず肥厚する。口縁端部は内面と外方に張り出して小突起状を呈する。体部外面にはナデが施され、口縁部に横方向のナデ痕が残る。内面は口縁部の直下まで使用による磨跡が認められる。復元口径28cm、器高9.2cm、底径12cmである。3は在地産と考えられる土師質の揃鉢である。破片資料で口径は31.6cmに復元できる。4は在地産土師質のいわゆる内耳土器である。底部は欠損して不明であるが、現存部の器高は10cmを超えているので、土鍋の部類に含まれるものと考えられる。内耳は2個一對と1個単独が対峙して付き、口唇部は肥厚する。口径は28cmである。5・6は砥石の欠損品である。

SK-071 (遺構：第28図 図版6 遺物：第28図 図版38)

SK-012の南東に当たる4F-46・47に位置する。天井部がすでに崩落していたため、土坑状の検出状況を示していた。調査の進捗により竪坑が南東側で、地下室が北西側に設けられることが判明した。竪



第28図 SK-071と出土遺物

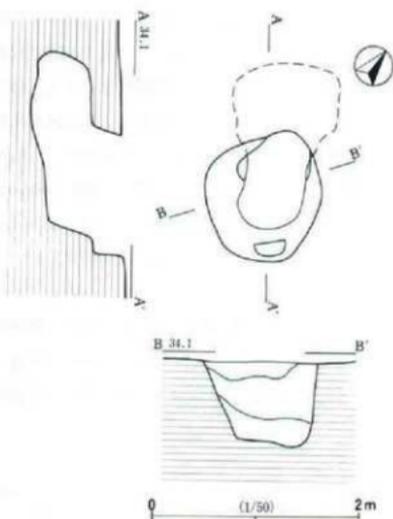
坑は地下室からわずかに張り出して設けられ、上位に微弱な段を設けるが、斜行して地下室の床面に達する。検出面から地下室の床面までは1.5mである。地下室は1.35m×1.2mの規模で、床面の中央部が周辺部よりも低く窪む。各方向の壁は、わずかに傾斜して立ち上がり天井部に移行する。天井部の詳細は不明である。土層断面の観察から、天井部の崩落は、地下室内への土砂の堆積がほとんど見られない段階であったことがわかる。

地下室の床面から遺物は出土していない。図示した遺物は検出面直下で検出したものである。第28図1は頸部から口縁部を失っている瀬戸鉄釉花瓶である。底部は回転糸切り無調整で、径は3.3cmである。鉄釉は胴部全体に施され、黒の中に茶が混ざる色調を呈して光沢を放つ。

SK-097 (遺構：第29図 図版6)

4F-71で検出した小型の地下式土坑である。竪坑を南東側に設け、地下室を北西側に置いている。竪坑の開口部は、現状では1.25m×1.15mの楕円形である。天井部が遺存しているものの、地下室側の天井部の一部が崩落したことも考えられるので、本来は円形であった可能性が高い。竪坑は地下室から全く張り出す形で設定され、途中に1段小規模な平場をつくり、そこから傾斜して地下室に下降する。地下室は奥行き0.65m×1.05mの規模で、平面形は主軸方向が短辺になる長方形である。竪坑中央の直下から地下室の床面へは、傾斜しながら移行して中央部が低くなる。奥壁からは内傾して天井部につづき、床面の低くなった部分から天井部までは65cmである。全体として、竪坑に比較して地下室を小規模につくっていることが特徴になる。

実測可能な遺物は出土していない。

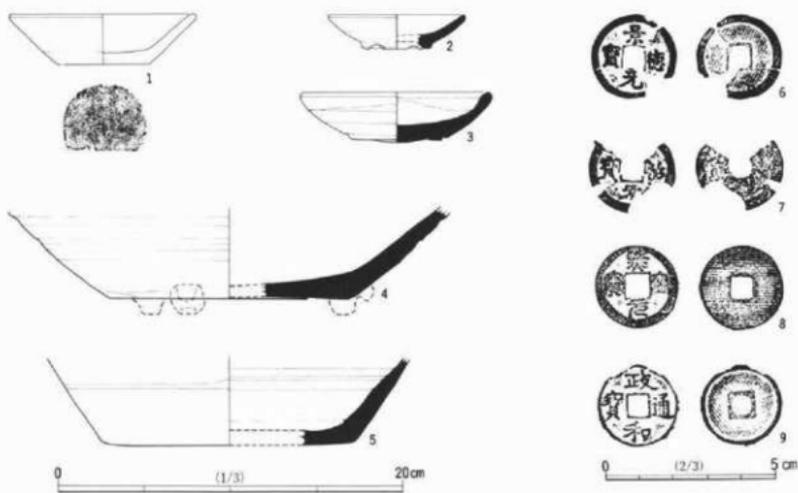
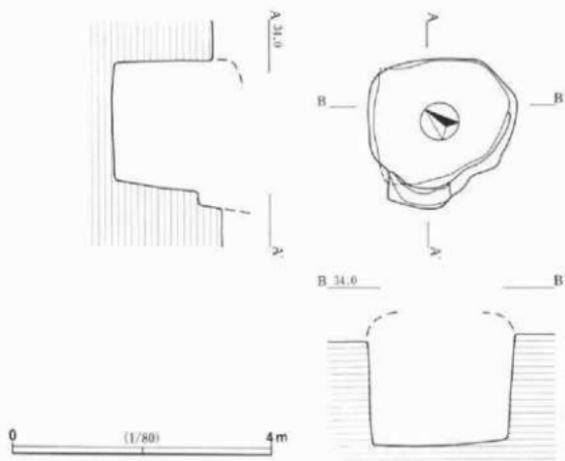


第29図 SK-097

SK-041 (遺構：第30図 図版7 遺物：第30図 図版38・45)

4F-81-91に位置する。竪坑の開口部は溝状遺構と重複し、東側に地下式土坑SK-043が接近して検出されている。天井部が保存されていたので、当初は開口部のみが明らかになった。調査途中で天井部の遺存が確認できたので、安全を考慮して天井部を除去し、その後地下室内の調査を進めた。開口部は円形を呈し、真上からみると地下室と大部分が重複し、一部が南西側に張り出している。竪坑は南西側の途中に幅20cmの平場を1段設け、そこから急傾斜で地下室の床面まで下降する。検出面から地下室の床面までは2.45mである。地下室は北西側で直線的であるが、ほかは曲面を呈し、1.8m×2.1mの規模を有し、全体では半円形の平面形を呈する。床面は平坦で、各面の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面から1.55mの高さから天井部に移行していく。

遺物は地下室内から出土しているが、いずれも流れ込んだ土の中からである。1の土師質土器は一部が遺存するにすぎない。底部は回転糸切り無調整で体部は直線的に外傾する。復元口径10.8cm、器高2.9cm、



第30図 SK-041と出土遺物

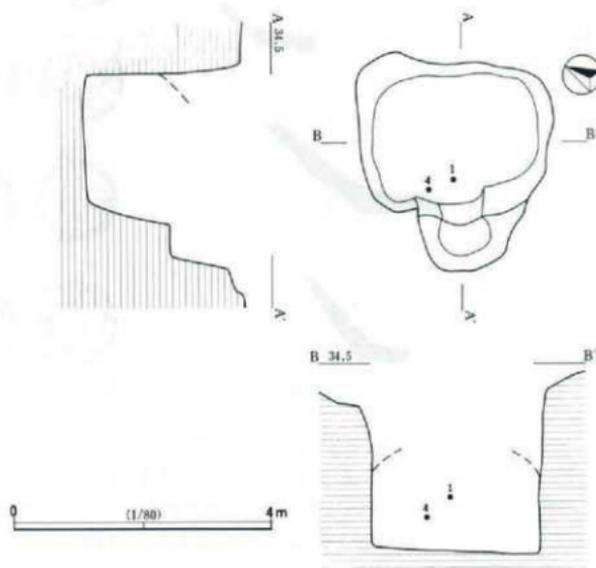
底径5.4cmである。2は小皿の破片を復元した。内外面全体に光沢のある灰色の釉が施される。復元口径は8.0cm、器高2.0cm、底径4.0cmである。3は瀬戸緑釉小皿で4分の3が遺存する。体部は内彎気味に開き、外面の中位から底部にかけて回転ヘラ削りが施され、高台も削り出しによって作出される。口縁部に暗灰緑色の釉が施され、地は暗灰色になっている。口径11.0cm、器高2.9cm、高台径5.3cmである。4は瀬戸折縁深皿の体部である。体部下位に回転ヘラ削りが施され、底径は復元値で14cm内外になる。三足が付され

ていたと考えられるが、遺存はしていない。また、内外面に釉が施された部分は確認できない。5は瀬戸祖母懷茶壺と考えられ、その胴部下位から底部にかけての破片である。復元底径は15.2cm。外面の下位には回転ヘラ削りに加えられ、そこから上位に光沢をもつ黒灰色の釉が施されている。胎土に1mm～3mmの黒色の粒が含まれ、焼成は良好で、内面は灰色を呈する。

錢貨は4点出土している。6は「景德元寶」である。一部欠損し、全体にやや脆くなっている。7は欠損部が多いが「景祐元寶」である。8は「熙寧元寶」で、保存状態は良好である。9は外縁部の一部に欠損が認められる「政通和寶」である。

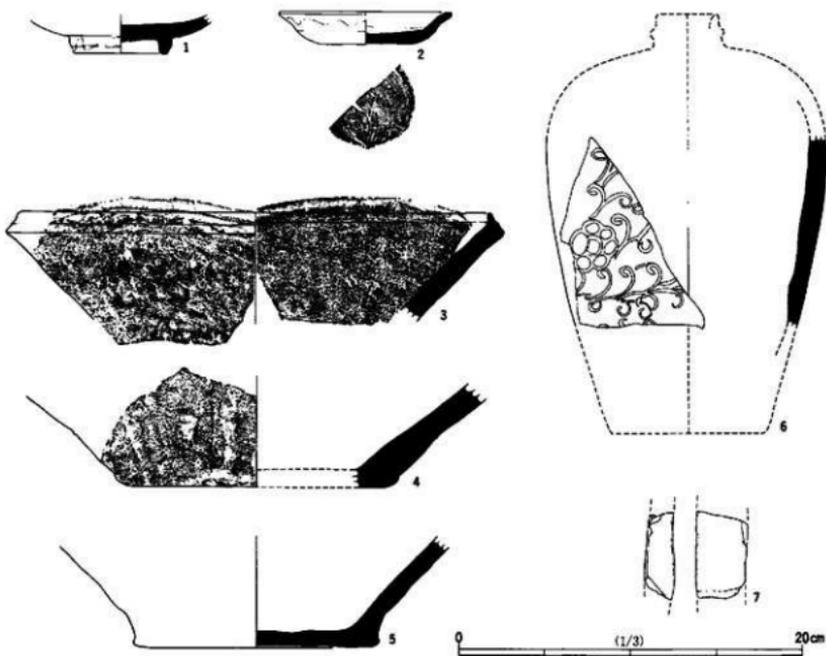
SK-043 (遺構：第31図 図版7 遺物：第32図 図版38・42・43・44)

SK-041の東側、4F-92・93、5F-02に位置する。検出時点すでに天井部は崩落していた。竪坑が南西に設けられ、地下室を北東側に置いている。竪坑の開口部は径1.3m内外の円形と考えられ、地下室から張り出した位置につくられる。竪坑は途中で幅45cmの平場を1段設定し、そこから1.3m下降して地下室の床面に達する。検出面からの深さは2.75mである。地下室は主軸方向が1.9m、その直交方向に2.6mの規模で、形態は隅丸長方形を呈する。床面は平坦に構築され、壁は竪坑部を除きほぼ垂直に立ち上がる。天井部へは床面から1.20m上から移行し、中央部に向かって高さを増していったと推測される。土層断面の所見に基づくと、地下室内の覆土は、まず床面上に厚さ10cmの水平堆積があり、その上に竪坑から流れ込んだ状況で70cm～80cmの土砂が堆積する。そしてその後天井構築材が一気に崩落し、再び土砂が流れ込んで地下室内部が埋まったことが観察できる。



第31図 SK-043

遺物は床面からは出土していない。図示した遺物は、天井崩落前に地下室内に堆積した覆土中から出土したものである。1は青磁碗の底部である。断面の色調は暗灰色で、内面と外面の高台中位までオリーブ色の釉が施される。高台径は5.4cmである。2は瀬戸緑釉小皿である。回転糸切り無調整の平らな底部は、底径5.4cmで、体部は開きながら立ち上がる。内外面の体部上位から口縁部にかけて、緑灰色の釉が施されている。口径は10.2cm、器高は1.9cmである。3～5は常滑の鉢類である。3の口径は28cm内外と推定され、口縁部は内側に折られている。内面は磨られたような状態を呈する。6は瀬戸印花文瓶子である。梅瓶胴部の破片と考えられ、遺存部全体に印花文が認められ、その上に緑がかった釉が施されているが、釉の保存状態は不良である。7は砥石の欠損品で、2面に使用の痕跡が観察できる。



第32図 SK-043出土遺物

SK-061 (遺構：第33図 図版7 遺物：第33図 図版45)

5E-48・49に位置し、SK-058、SK-062が近接する。検出時に天井部は崩落して遺存していない。竪坑が北東側に設けられ、地下室は南西に配置される。竪坑は地下室から張り出す位置に設定され、開口部は径1.1m内外の円形につくられる。竪坑の北東に張り出し部分がある。これと本遺構との直接的関連は薄いと考えられるが、竪坑の一部という可能性も否定できないので、平面図には含めて示している。一応そこを除外すると、円形の開口部から段を設けずに、真っ直ぐに地下室に降下したと考えられる。検出面からの深さは1.7mである。地下室は主軸方向に1.9m、その直交方向に最大で2.75mの規模を有し、

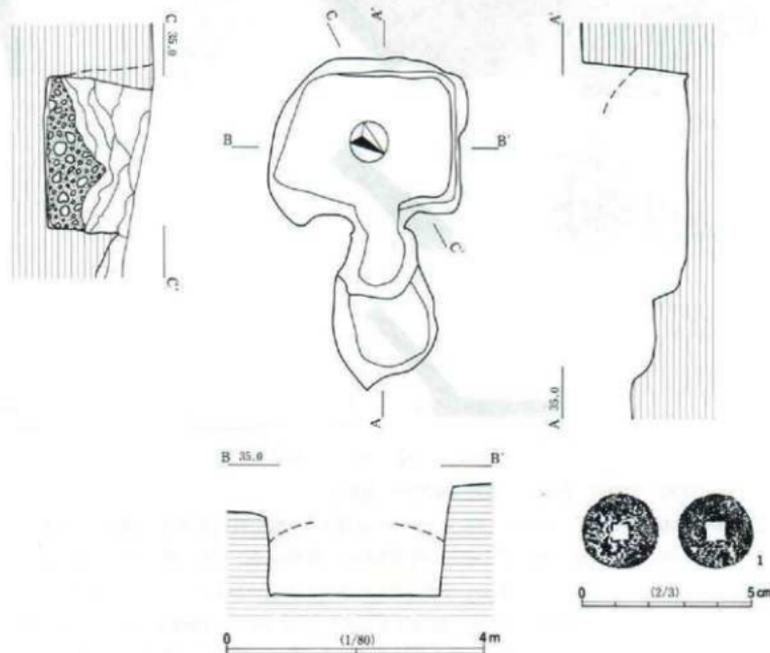
平面形は長方形につくられる。床面は平坦に構築され、北側から西側にかけて壁の直下に幅の狭い溝が存在する。壁は垂直に床面から75cm立ち上がり天井部に変換する。天井部の地下室内への崩落は、使用停止後間もなくして起こったことが、床面上の堆積土がわずかなことから推定される。

第33図1は銭貨である。一応完形を保っているが、表面の保存状態が不良であり、銭種の特定は不可能である。

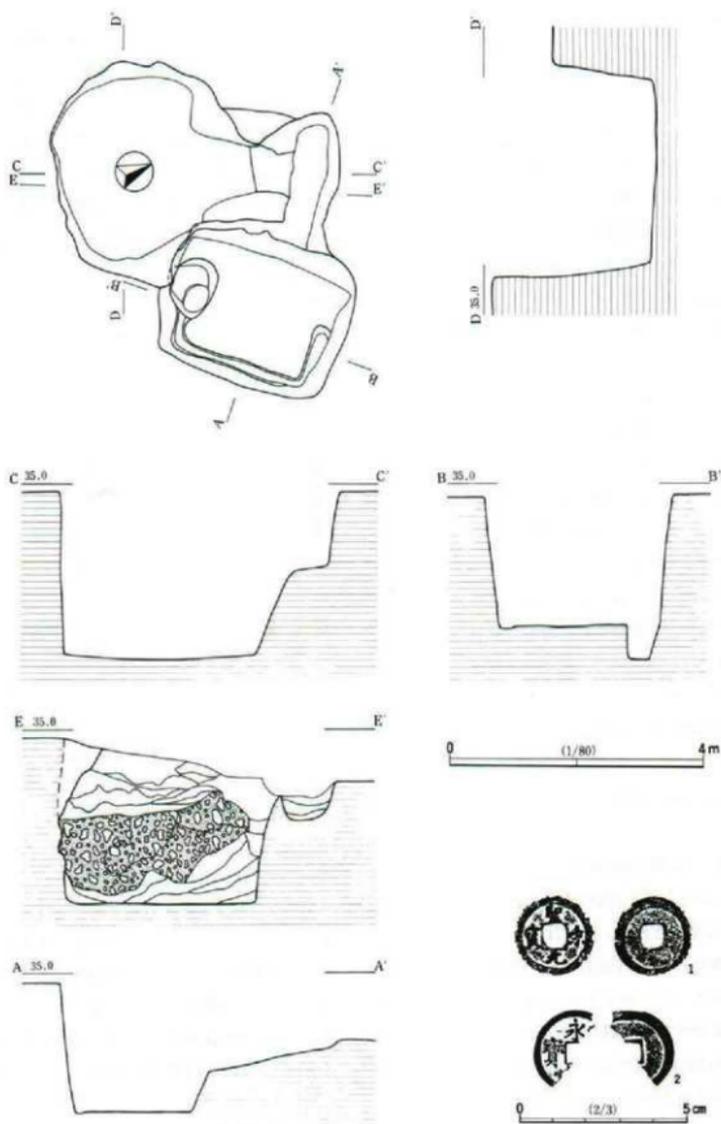
SK-058 (遺構：第34図 図版8)

5E-48・49に位置する。地下式土坑SK-056と重複し、本跡の構築が先行する。天井部がすでに崩落していたため、地下室が南側で竪坑が北側に設けられることを、検出段階で確認し得た。竪坑の一部はSK-056の竪坑の構築で不明になっているが、地下室から裏り出した位置につくられていることは明らかである。地下室へは、途中で幅55cmの平場が1段設けられ、そこから傾斜しながら床面へ降下する。検出面から床面までは2.55mである。地下室の平面形は不整楕円形であり、長径2.8m、短径2.2mの規模を有する。床面は平坦に設定されている。壁は垂直に立ち上がり、奥壁側では1.3mの上方から天井部に移行したと考えられる。床面の上には竪坑からの流れ込み土が認められ、その上に天井構築材が塊状に崩落している。

図示可能な遺物は出土しなかった。



第33図 SK-061と出土遺物



第34図 SK-056・058と出土遺物

SK-056 (遺構：第34図 図版8 遺物：図版45)

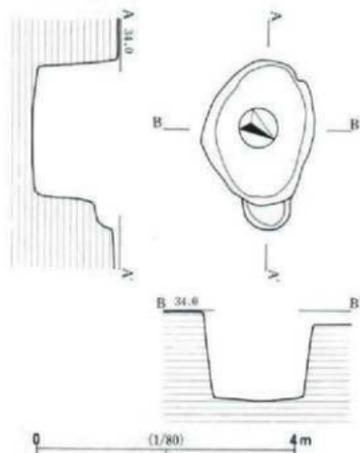
5F-41・42に位置し、地下式土坑SK-058と重複する。先に述べたように、本跡が後の構築である。天井部はすでに崩落し、大型の土坑状で検出された。竪坑を北西側に設け、地下室が南東側に配置されている。竪坑は地下室から2m張り出し、北西側から地下室に向かって緩やかに傾斜する。一応開口部から見るとこの面が、1段の平場としての機能を有していたと考えられる。平場の端部から地下室までは70cm下降して連する。地下室は主軸方向に1.8m、その直交方向に2.6mの規模で、平面形は長方形につくられる。床面は平坦に構築され、壁はわずかに傾斜しながら立ち上がる。また、奥壁から両側壁の間間までの壁下に溝が走り、南西側に小土坑が存在する。この土坑は竪坑側から奥壁を見て右側に設けられ、95cm×70cmの楕円形で深さ55cmに掘られている。壁から天井部への移行部は明確にならない。

遺物は覆土中の銭2点が提示できるにとどまる。1は「聖宋元寶」で完形を保っている。2は2分の1を欠損する「永樂通寶」である。

SK-113 (遺構：第35図 図版8)

数多くの土坑が存在する5F-11・21に位置し、天井部はすでに崩落していた。竪坑は地下室の北東側に設けられ、地下室は南西方向に位置する。開口部の詳細は明らかでないが、円形の平面形であった可能性が高い。地下室への途中には1か所の段がつくられ、検出面から床面までの深さは1.25mである。地下室の形態は楕円形で、規模は長径2.0m、短径1.4mである。床面の状態は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、天井への移行部については不明である。地下室内部は自然堆積の土と天井崩落土によって完全に埋まっている。

図示可能な遺物は出土していない。



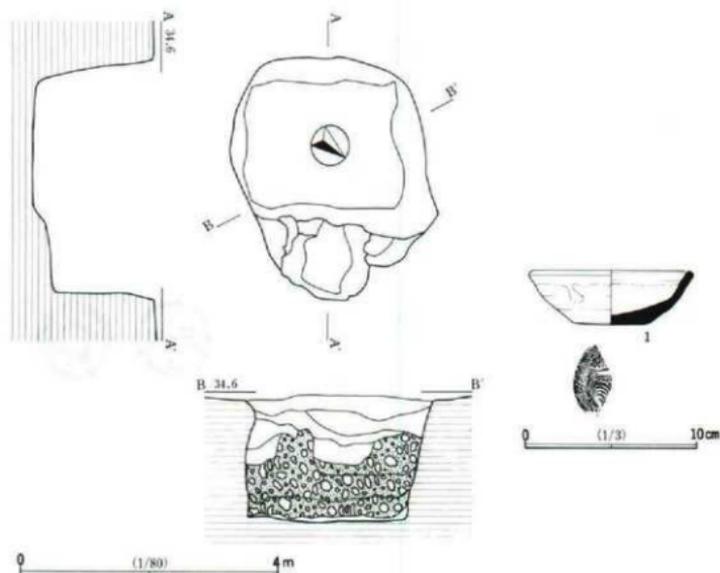
第35図 SK-113

SK-117 (遺構：第36図 図版9 遺物：第36図 図版38)

5F-52・53・63で溝状遺構の端部に検出した。天井部は崩落している。北東側に竪坑を設け、地下室が南西側に配置される。竪坑は地下室から張り出し、開口部を方形につくっている。地下室の床面までの間、検出面から1.6m下位に1段の平場を設けているが、その平場は床面からわずかに30cm上であるにすぎない。したがって、検出面から床面までの深さは1.9mになる。地下室の規模は、主軸方向に1.95mその直交方向に2.5mで、平面形は長方形に整えられる。床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、天井部への移行部は不明である。地下室内の堆積土は、床面の上に白色粘土を含む暗褐色土が堆積し、その上に天井構築材が崩落している。状況から考えれば、地下室の使用停止後間もなくして、天井部が落下したと思われる。

図示可能な遺物は、覆土中から出土した瀬戸縁軸小皿の破片1点のみである。3分の1の遺存から復元し、口径9.1cm、器高3.1cm、底径4.4cmになる。底部は回転糸切り無調整の平底で、体部は内彎気味に立ち

上がる。口縁部の内外面に灰緑色の釉が施される。



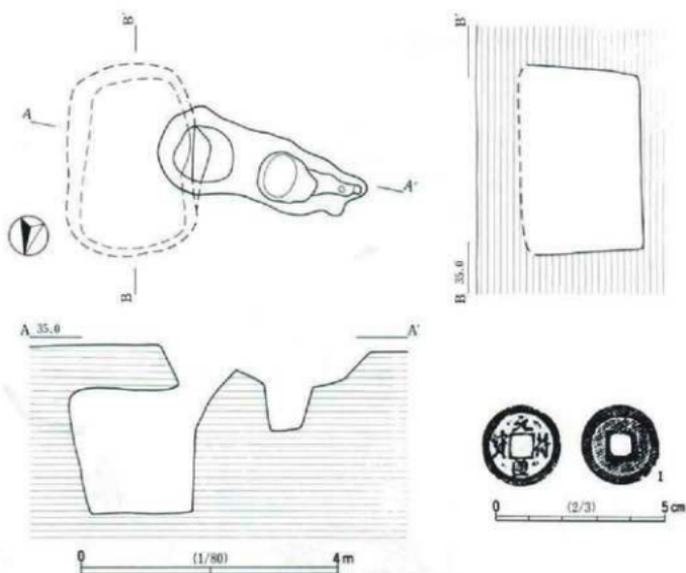
第36図 SK-117と出土遺物

SK-1 2 2 (遺構：第37図 遺物：第37図 図版45)

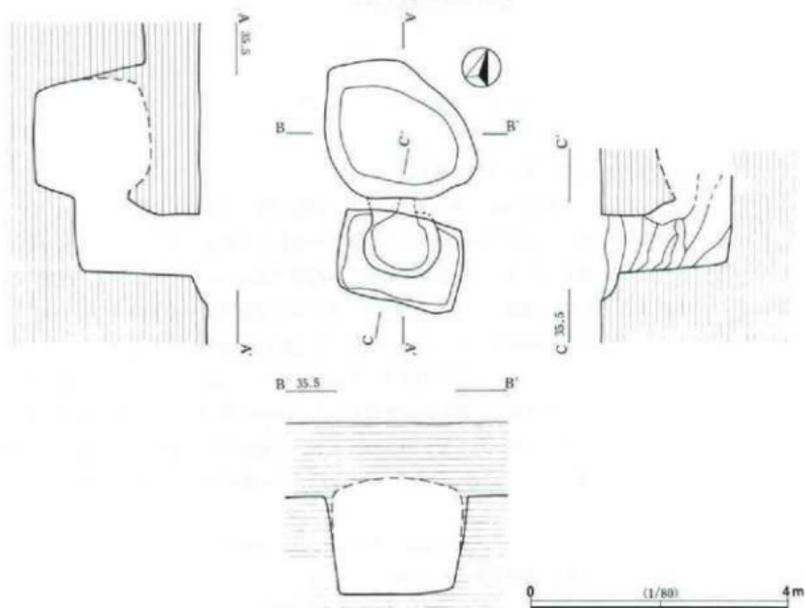
5 E-61・5 F-60に位置し、北側にSK-0 5 8・0 6 1、南側にSK-0 8 8が存在する。検出時点では天井部が残っていたので、竪坑のみが明らかになった。調査が進行して地下式土坑であることが判明した段階で、残存していた天井部を取り払った。竪坑は地下室の西側に設けられている。竪坑の西側に並列してSK-1 2 1が存在し、開口部と連結した状況を呈する。第37図の平面図はその状況を含めて図示しているが、地下室土坑との直接的な関連は薄いように思われる。開口部は1.3mの円形を呈していたと考えられ、坑道の狭まる部分で径80cmになる。そこを通過すると直接地下室につながり、途中傾斜が変化するだけで、特に段を設けてはいない。検出面から地下室の床面までは、2.6mの深さである。地下室は、南北が長辺となる隅丸長方形につくられる。規模は2.6m×1.6mである。床面は平坦に構築され、壁はやや外傾して立ち上がり、床面から1.7m上から天井部に移行していく。天井部の断面形は、蒲鉾状であったと推測されるが、詳細は明らかでない。

地下室内は竪坑から流れ込んだ土によって、床面から1.25mの上まで埋まっている。それ以上の土の流入がなかったため、天井部との間に空間が残されていた。

地下室からは、陶器の破片が1片出土したにすぎない。図示した銭貨は土坑SK-1 2 1から出土したものである。やや脆くなった状態を示すが、「元符通寶」の銭文は比較的明瞭である。



第37図 SK-122と出土遺物



第38図 SK-088

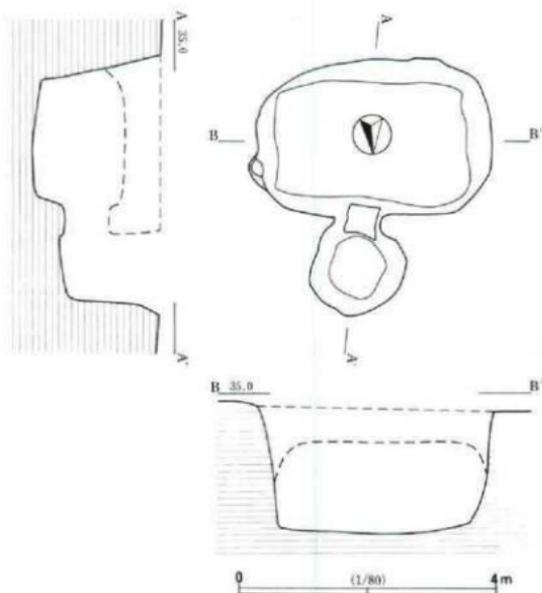
SK-088 (遺構：第38図 図版9)

5 F-80・90に位置し、北側に地下式土坑SK-122が存在する。天井部が保存されていたので、検出面で明らかになったのは竪坑の開口部である。竪坑と地下室の配置関係は、竪坑が南側で地下室が北側に張り出して構築される。竪坑の開口部は2.0m×1.3mの長方形の平面形で、わずかに掘り下げ、そして直径1.2mの円筒状の坑道に変化する。竪坑を検出面から2.0m下降すると平場が設けられ、さらに63cm下に地下室の床面が設定されている。したがって、竪坑から地下室までの途中に、1か所の段をもつ形態になる。地下室の平面形は不整の楕円形を示し、その規模は長径2.1m×短径1.3mである。床面は、周辺部から中央部に向かってわずかに低くなるものの、全体に平坦に構築されている。各壁はやや外傾して立ち上がり天井部へつながっていく。天井部の高さは床面中央で1.8m前後である。地下室の床面は、開口部から流れ込んだ土砂によって覆われている。しかし、地下室全体が埋まる前に、竪坑部が流入土で閉塞されたため、天井部との間は空洞のまま保存されていた。

本遺構からは実測可能な遺物は出土していない。

SK-089 (遺構：第39図)

5 E-95・6 E-04・05・06に位置し、地下室の天井部はすでに崩落していた。竪坑が地下室の北側に張り出してつくられる。竪坑の開口部は、径1.4m内外の円形で、検出面から1.5m下降すると底面になる。地下室と竪坑の間は、竪坑底面よりもわずかに高く削りだして入口を構築し、竪坑からさらに一段低い位



第39図 SK-089

置に地下室の床面を設定している。地下室は長方形の平面形で、東西方向に3m、南北方向に1.8mの規模を有する。床面は中央部が窪み観が認められ、壁は外方に開きながら立ち上がる。床面から1m立ち上がった壁の途中に、オーバーハング気味になる部分があり、そこを天井への移行部と仮定すると、床面から天井の高さは1.5m前後であったと推定される。

地下室の埋まった時期は、天井部であったと考えられるローム塊が、床面に接して厚く堆積していることから考えて、使用中か使用停止後あまり時間を経過しない段階であったと推測される。その後、周辺から流れ込んだ土砂によって、完全に埋まっていったとみられる。

本遺構からは実測可能な遺物は出土していない。

SK-090 (遺構：第40図 図版10)

SK-089の東側である6E-08・09に位置する。地下室の保存状態が良好であったため、検出時に明らかになったのは、竪坑の開口部のみである。調査の進捗にしたがい、竪坑を地下室の西側に設けている、地下式土坑であることが判明した。竪坑の開口部は0.9m×1.0mの円形に近い形態で、坑道については、0.6m×0.7mの隅丸方形を呈する。検出面から1.7m下降すると竪坑の底面に至り、そこから東側に掘り進めて地下室がつけられる。地下室の床面は、竪坑の底面から1.1m下位に設定されているので、開口部から1段の平場を経由して進入することになる。地下室の規模は2.1m×1.6mで、平面形は長方形を呈する。場所によって床面は、竪坑から奥壁に向かってわずかに高くなるが、全体的に平坦に構築されている。また、壁の下には



第40図 SK-090

溝が巡っている。この溝については、壁を支える構造物が存在していた可能性を示すものといえる。壁はわずかに外傾しながら立ち上がり、奥壁では床面から1.3mの高さから天井部へ移行している。天井部の高さは、床面中央部で1.9m前後になる。天井部が保存されていたので、地下室内の土砂については、ほとんど遺構外から流れ込んだと考えられ、土層断面の観察からも、竪坑から流れ込んだ状況が認められる。しかし、地下室内全体が埋まることはなく、天井部との間に空洞が存在していた。

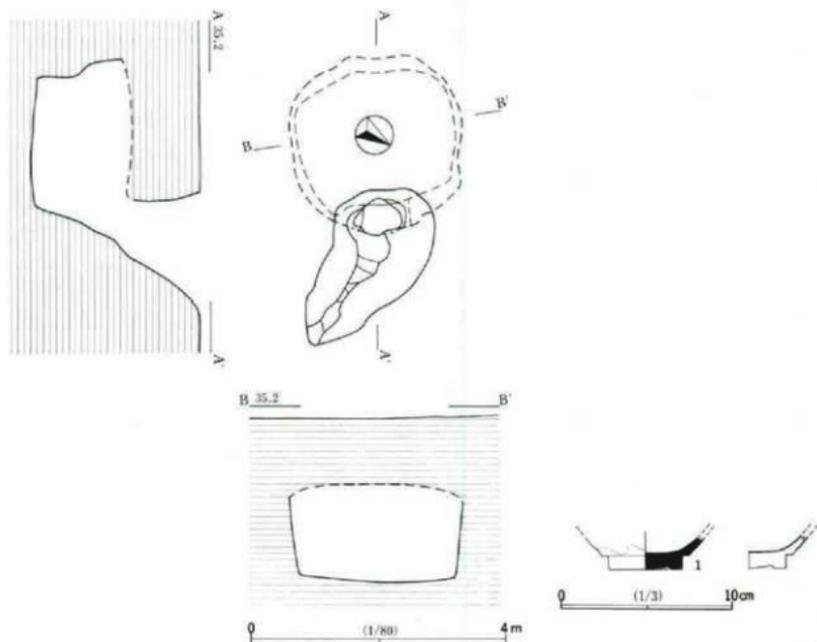
本遺構は保存状態が良好であったが、実測可能な遺物は出土していない。

SK-135 (遺構：第41図 図版10・11 遺物：第41図 図版38)

7D-04に位置する。他の遺構とは重複が見られないが、東側にSK-143が隣接する。地下室の保存状態が良好であったため、検出面では竪坑の開開口部のみが明らかになった。その竪坑は地下室の東側に位置し、開口部は2.9m×1.7mの不整な楕円形を呈する。地下室へは、東側から西側に向かって下降し、傾斜は急である。その途中に3か所の段を設けているが、いずれも傾斜が緩やかになる程度の足掛け状の施設である。地下室の床面は、検出面から2.55m下位の位置に、2.5m×2.1mの隅丸長方形の平面形につくられている。床面は壁際よりも中央部がやや低くなるものの、全体的に平坦といえるだろう。壁は、短軸と平行する2方向が少し傾斜しながら立ち上がり、奥壁は直ぐに立ち上がって、途中に段を設けて天井部に移行していく。天井部は中央部で床面から最も高くなったと考えられ、1.55m前後の高さを有していたものと推測される。

地下室内は、竪坑から流れ込んだ土砂によって完全に埋まりきっており、竪坑も同様に流れ込んだ土によって開口部まで塞がれていた。地下室に流れ込んだ土砂は、ロームブロックやローム粒が主体で、床面から60cm上位の位置では、小ロームブロックを少量含む黒色土が堆積しており、その中から人骨と考えられる骨片が出土している。

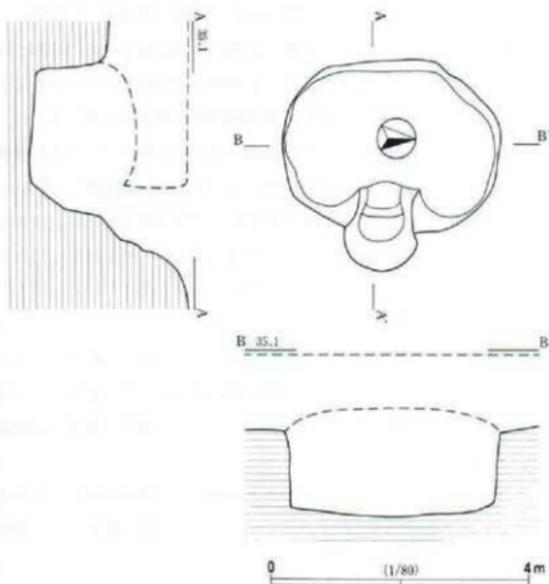
本遺構からは陶器の破片、土師質土器細片、土師器の細片が少量出土したにすぎない。1は瀬戸天目茶碗の底部である。高台は削り出してつくられ、内面と外面体部に鉄釉が施される。



第41図 SK-135と出土遺物

SK-143 (遺構：第42図 図版12)

7D-05・06・15・16に位置する。天井部が残されていたので、当初は竪坑の開口部が明らかになったにすぎないが、精査の進捗により地下式土坑であることが判明した。その後は天井部を除去して地下室内の精査を実施した。竪坑は地下室の東側に、やや張り出した形で設けられている。開口部は1.1m×1.4mの楕円形を呈し、竪坑の東側に検出面と地下室の床面間に、2か所の小規模な段を設けている。検出面から床面までの深さは2.45mになる。地下室の床面は3.2m×2.0mの楕円形であるが、竪坑の傾斜側が地下室側に入り込んでいる。竪坑直下の床面が、奥壁寄りと比較して低くなるものの、床全体は平坦といえるだろう。壁は、床



第42図 SK-143

面から垂直に近い角度で立ち上がり、1.1mの高さから天井部に移行していく。天井は中央部で、床面から1.65m前後の高さを有していたと考えられる。地下室は竪坑から流れ込んだ土によって完全に埋まっている。その中にブロック状の堆積が認められるので、天井部の一部崩落があったことがうかがえる。

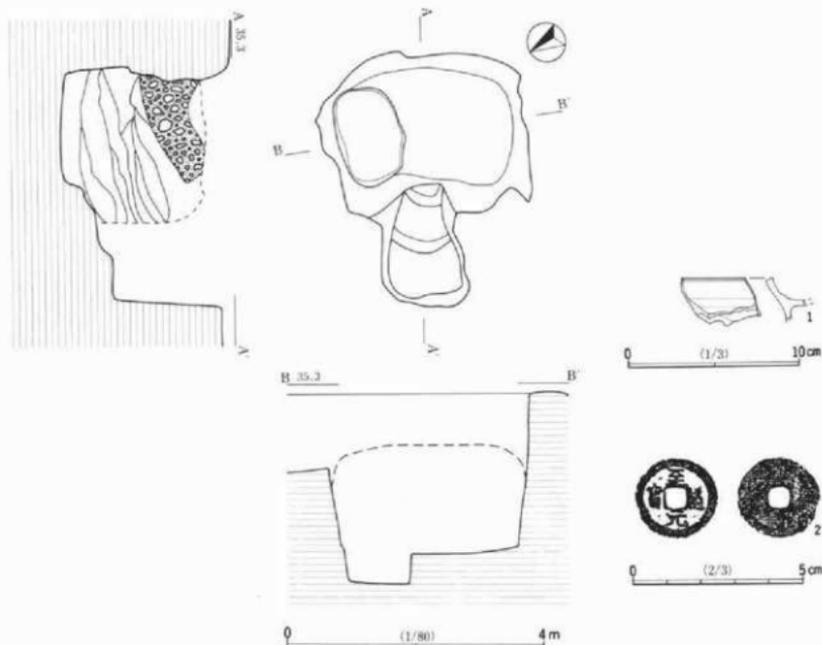
実測可能な遺物の出土はない。

SK-240 (遺構：第43図 図版13 遺物：第43図 図版45)

7E-03・04・13・14に位置する。天井部が崩落していたため、検出時の平面形は柄鏡状である。柄に相当する部分が竪坑部であり、鏡に当たる側が地下室なので、西側に竪坑を張り出す形態の地下式土坑である。開口部は方形を呈していた可能性もあるが、具体的には復元できない。竪坑は地下室から独立して構築されており、地下室の床面までに3か所の段がある。1段目は検出面から1.65m下降した位置に、やや広い平場を設定し、そこから60cm下方の地下室との間に、2か所の小規模な段が存在する。地下室は2.8m×1.7mの規模の略丸長方形である。床面の中央部が周辺部に比べわずかに低くなる傾向が認められる。その点については、他の地下式土坑と隔たりはないが、地下室北側にさらに土坑を設けていることが特徴として挙げられる。土坑は1.6m×1.0mの楕円形の平面形で、床面から50cmの深さがある。壁はやや外傾して立ち上がり、床面から1.1mの高さで天井部へ移行する。

地下室は竪坑から流れ込んで堆積した土や、崩落した天井部等で埋まっている。天井部は、流れ込みの土がかなり堆積したその上に一気に落下した状況がうかがわれる。

出土遺物は陶器片4点、土師質土器片7点、礫2点であり、流れ込んだ土の中から検出されている。1は土師質の銚釜の口縁部破片である。胎土が緻密で、焼成も良好である。2は初鋳年が995年の「至道元寶」である。銭文は明瞭であるが、裏面はかなり磨耗した状況を示している。



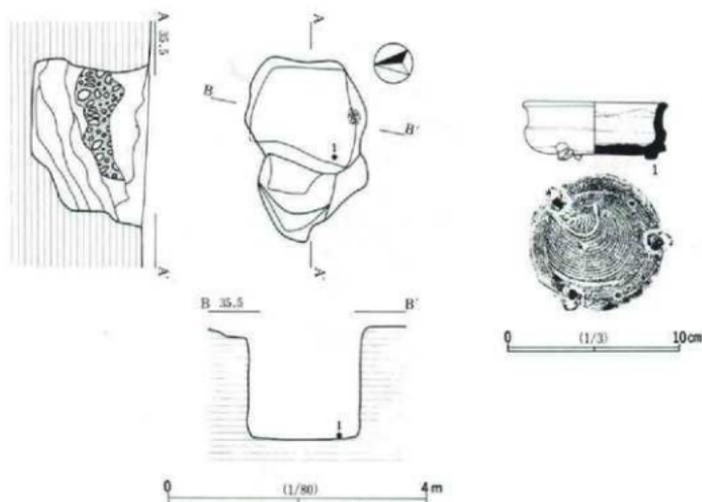
第43図 SK-240と出土遺物

SK-158 (遺構：第44図 図版14 遺物：第44図 図版38)

溝状遺構か欄列と考えられる小土坑列の東端の、7E-33・34に位置する。天井部がすでに地下室部に崩落していたため、竪坑と地下室一体の検出であった。竪坑は小土坑列側の西側に設けられ、地下室が東側に配置される。開口部は方形と考えられるが、天井部が崩落しているので、詳細は明らかでない。竪坑から地下室に至る間には2か所の段が存在する。1段目は検出面から50cm下位で、2段目はそこから55cm下がった位置に設けられている。2か所とも地下室側に傾斜し、平坦な状態ではない。地下室は検出面から1.8mの深さに床面が設定される。平面形は方形を呈し、その規模は1.65m×1.35mで、全体に平坦である。壁は、ほぼ垂直な状態で立ち上がる。天井部の状況については不明である。地下室内は竪坑とから流れ込んだ土、その後崩落した天井部、さらに流れ込んだ土で完全に埋まっている。

遺物としては、土師質土器片、陶器片、縄文時代石斧、礫、骨片などが出土している。第44図の平面図の中で、地下室の南側にスクリーンで示した部分は、人骨片と歯が検出された範囲であり、レベルは、ほぼ床面の直上である。図示した第44図1の土器は、瀬戸鉄軸香炉である。回転糸切り後、ヘラ削り

を施した平坦な底部には三足が付き、胴部は小さく膨らみをもち、口縁部がわずかに外反する。鉄軸は胴部外面全面と、内面の口縁部に施される。なお、底部には焼成後に開けた小孔が存在する。



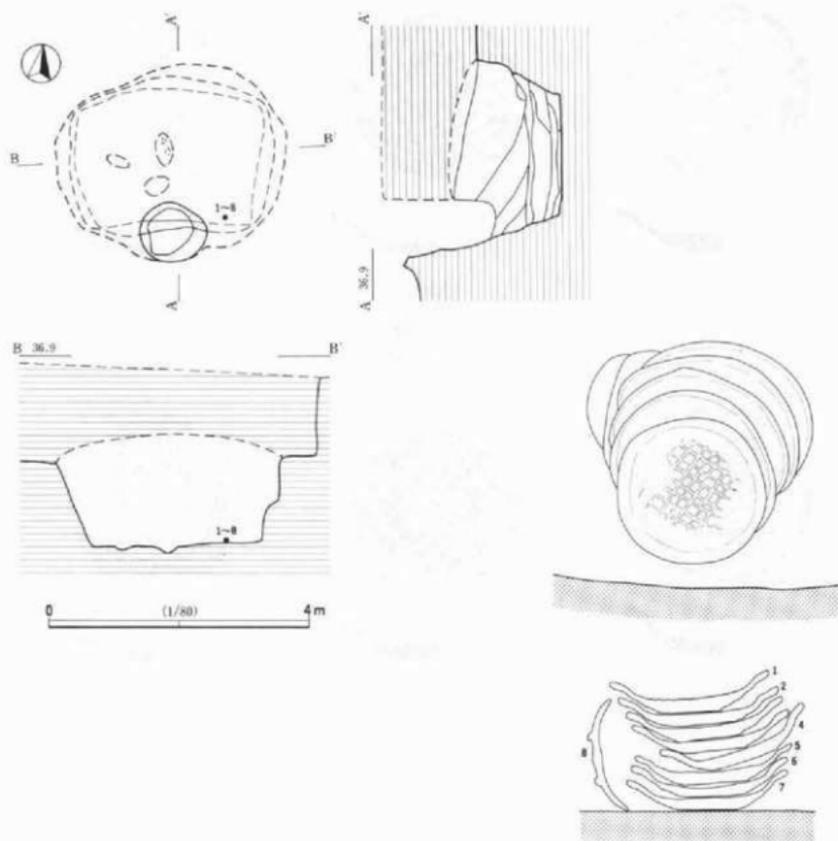
第44図 SK-158と出土遺物

SK-231 (遺構：第45図 図版14・15 遺物：第45図 図版38・39・44)

8C-09に位置する。他の中世の遺構とは重複していないが、古墳の周溝(SX-001)内に開口部を設けている。天井部が保存されていたので、当初は竪坑が検出されたにすぎない。調査の進行により地下式土坑であることが判明し、その後天井部を除去して地下室の調査を実施した。竪坑の開口部は直径90cmの円形を呈し、地下室の南側に設けられている。竪坑の南壁には、わずかに張り出す引っ掛かりが3か所につくものの、地下室の床面まで急傾斜で下降する。地下室の床面は、2.85m×2.10mの規模の長方形である。床面は、検出面から深さ2.65mの位置に設定され、中央部に3か所の小ビットが認められる以外、平坦な状態を示している。壁はやや外傾して立ち上がり、1.3mの高さから天井部へ移行する。天井部の中央で1.7mの高さがあったと考えられ、断面の形態は蒲葺状となっている。

地下室の土の堆積状態は、大きく2分される。土層断面に基づけば、床面から上位50cmまでの堆積状態は、床面に水平に堆積しており、それ以上は竪坑から流れ込んだ土が堆積した、という状況が観察できる。床面上に堆積している土は、小ルームブロックや山砂を含む黒褐色や暗褐色の層である。

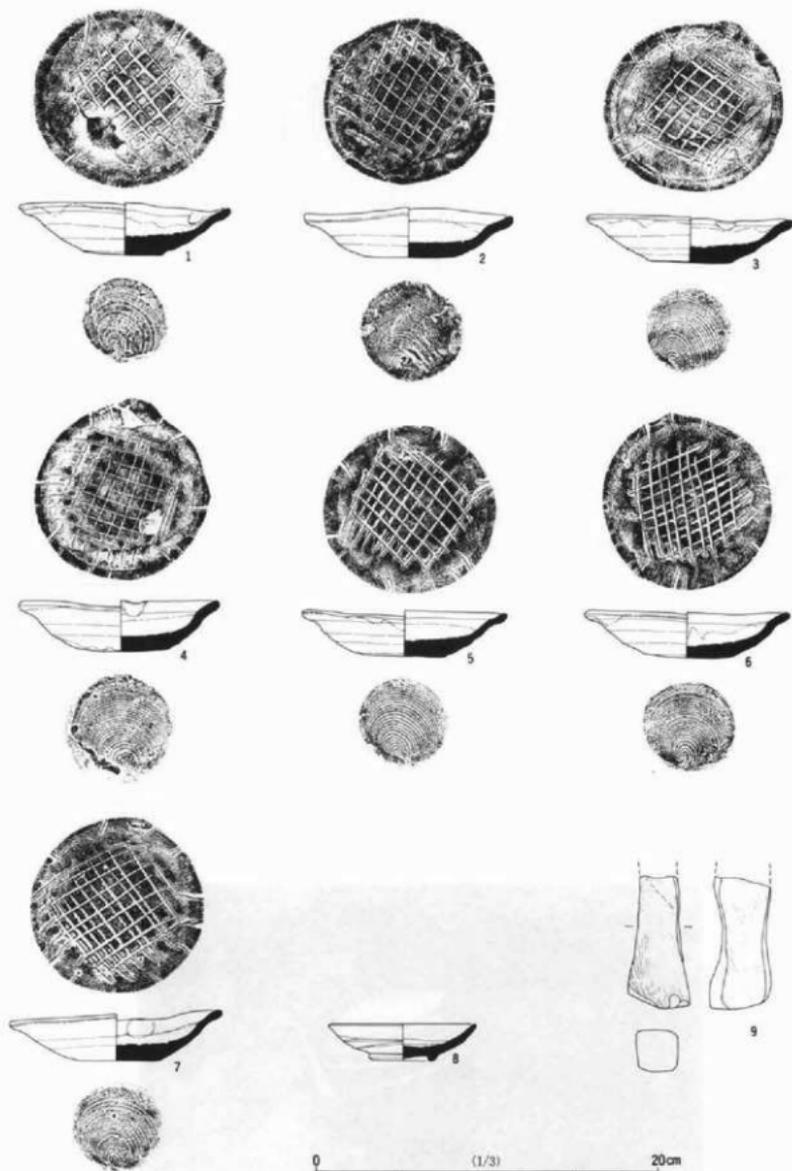
遺物は覆土中から須恵器、土師質土器、陶器のそれぞれ破片と、砥石、礫が出土している。注目されるのは、保存状態が極めて不良ではあるが、床面に散在して検出された人骨片・歯と、床面上にまとまって出土した9点の皿である。人骨は状態が悪いため、部位等の詳細は明らかにならない。皿類は、竪坑直下からやや東側で南壁に接する位置に、8枚の瀬戸灰釉皿が積み重ねられ、そのすぐ西側に白磁皿が立てられた状態で出土している。



第45图 SK-231



第46图 SK-231 1 遺物出土状況



第47图 SK-231出土遺物

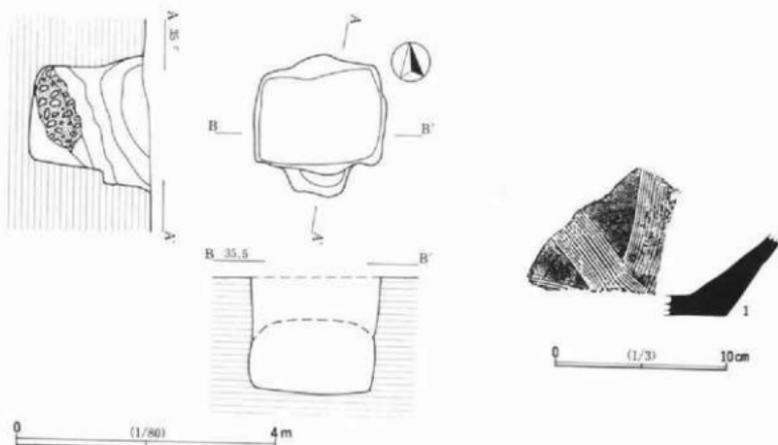
第47図に示したものは、積み重ねた状態で出土した御皿8枚の内7点と、白磁皿1点、それと覆土中から出土した砥石1点である。1～7の瀬戸灰釉御皿は、いずれも底部が糸切り無調整の平底で、体部の下に丸味をもち、口縁部は外方に開いている。釉は内外面の口縁部に施される。内面底部にはヘラによって格子の刻みが加えられ、おろし目がつくられている。おろし目の数は一律でなく、刻みの深さも一定していない。また、口縁部の内面には、注口を意識したと思われる指頭の押さえが、それぞれ1か所ずつ認められる。大きさは以下のとおりである。1は口径12.1cm、器高3.1cm、底径4.6cm。2は口径12.2cm、器高2.9cm、底径5.0cm。3は口径12.0cm、器高2.8cm、底径5.0cm。4は口径11.5cm、器高2.9cm、底径5.5cm。5は口径12.0cm、器高2.6cm、底径5.0cm。6は口径11.7cm、器高5.2cm、底径5.2cm。7は口径12.1cm、器高2.7cm、底径4.8cm。8の白磁皿は口径が8.8cm、器高2.2cm、高台径3.7cmである。9は使用面が4面すべてに認められる砥石の欠損品である。

SK-175 (遺構：第48図 図版15 遺物：第43図)

7C-99に位置し、地下式土坑では、調査区中最も南側に検出されている。天井部が崩落していたため、方形土坑状の検出状況を呈していた。地下室からわずかに南に張り出す部分が存在し、そこが竪坑の一部になる。開口部の状況は不明である。竪坑の検出面から地下室床面までの間には、1か所の段が存在する。地下室の床面は1.9m×1.4mの規模で、長方形の平面形につくられる。壁は垂直に立ち上がり、床面から80cm上がったから天井部に移行する。

地下室は竪坑から流れ込んだ土と、天井部の崩落によって完全に埋まっている。最初に竪坑からの流入土の堆積があり、その後天井部が落下し、その上にさらに堆積が重なっている。

遺物は図示した瀬戸襦鉢の破片が1点出土したのみである。



第48図 SK-175と出土遺物

4 土 坑

荒久(2)遺跡の調査で検出した土坑の総数は500基を越す。その中には墓墳としての性格を有する遺構も存在する一方で、まったく目的や用途について明らかにならないものもある。数としては後者、つまり何のために掘られた穴なのかその性格付けが現在のところ困難、といわざるを得ない土坑が圧倒的に多い。また、柱穴状の小ピットから竪穴状遺構等、規模や形態も極めて多様であるが、それらを一括して土坑として扱うことにしたい。

土坑の分布は、北調査区より南調査区において密である。特に1区から7区の間には、平面形が円形になる小ピットや、方形の竪穴状土坑が集中的に検出されている。それに対して北調査区では土坑群を形成する傾向は顕著でなく、全域に散在して検出されている。

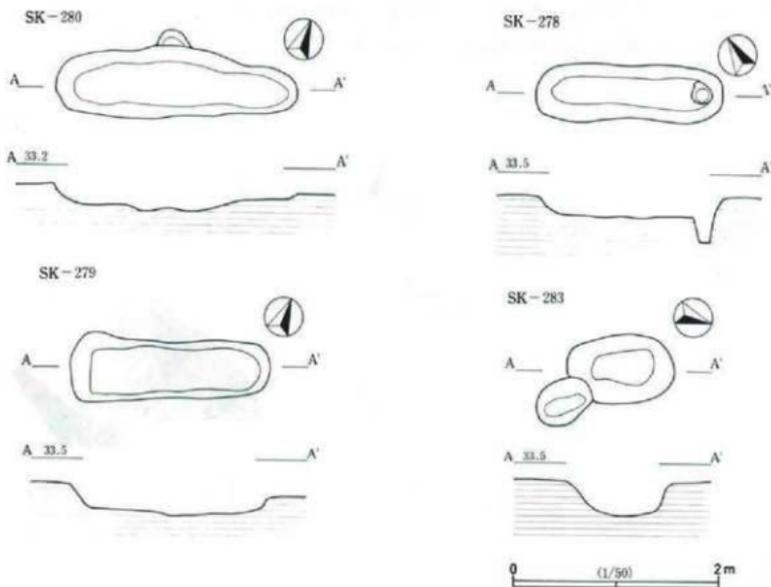
SK-280 (遺構：第49図 図版15)

北調査区のII b-97・98に位置する。溝状遺構SD-026を挟んで西側にSK-279が存在するが、周辺に小ピットは検出されていない。土坑は長楕円形の平面形を示し、長径2.35m、短径0.70mの規模になる。検出面からの深さは25cmである。底面は平坦でなく波をうった状態になっている。

本遺構からは実測可能な遺物は出土していない。

SK-279 (遺構：第49図 図版16)

北調査区のII b-95・III b-05に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸長1.95m、単軸長0.6mであ



第49図 北調査区土坑 ①

る。検出面からの深さは30cmと浅い。底面は中央でやや深いが、特に施設は設けていない。
実測可能な遺物の出土はない。

SK-278 (遺構：第49図)

北調査区のIII b-58に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径1.8m、短径0.6mである。検出面から底面までの深さは20cmである。底面はやや平坦さに欠け、南東端には底面から25cmの深さに掘られた小ピットが設けられている。

実測可能な遺物は出土していない。

SK-283 (遺構：第49図)

北調査区のIV b-48に位置し、楕円形を呈する土坑2基からなる。大型の土坑は長径1.05m、短径0.65m、深さ35cmを測り、小型の土坑は長径0.55m、短径0.4mである。

実測可能な遺物は出土していない。

SK-275 (遺構：第50図 図版16)

北調査区のV b-48に位置し、長径1.25m、短径0.8mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは浅く、15cmを測るにすぎない。底面は平坦でなだらかに立ち上がる。

実測可能な遺物は出土していない。

SK-276 (遺構：第50図 図版16)

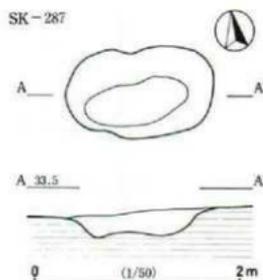
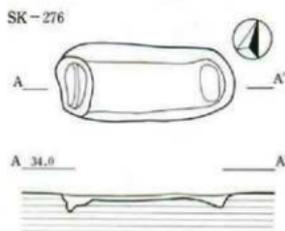
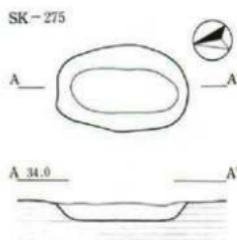
北調査区のV b-67に位置する。平面形は隅丸長方形に近い形を呈し、長軸長1.75m、短軸長0.7mを測る。中央部での深さは5cmである。ただ、底部施設として、長軸方向の両端に長軸と直交する形で、楕円形のピットが設けられているので、そこだけはやや深くなっている。この対のピットでは西側のみに底に溝が設けられている。

実測可能な遺物は出土していない。

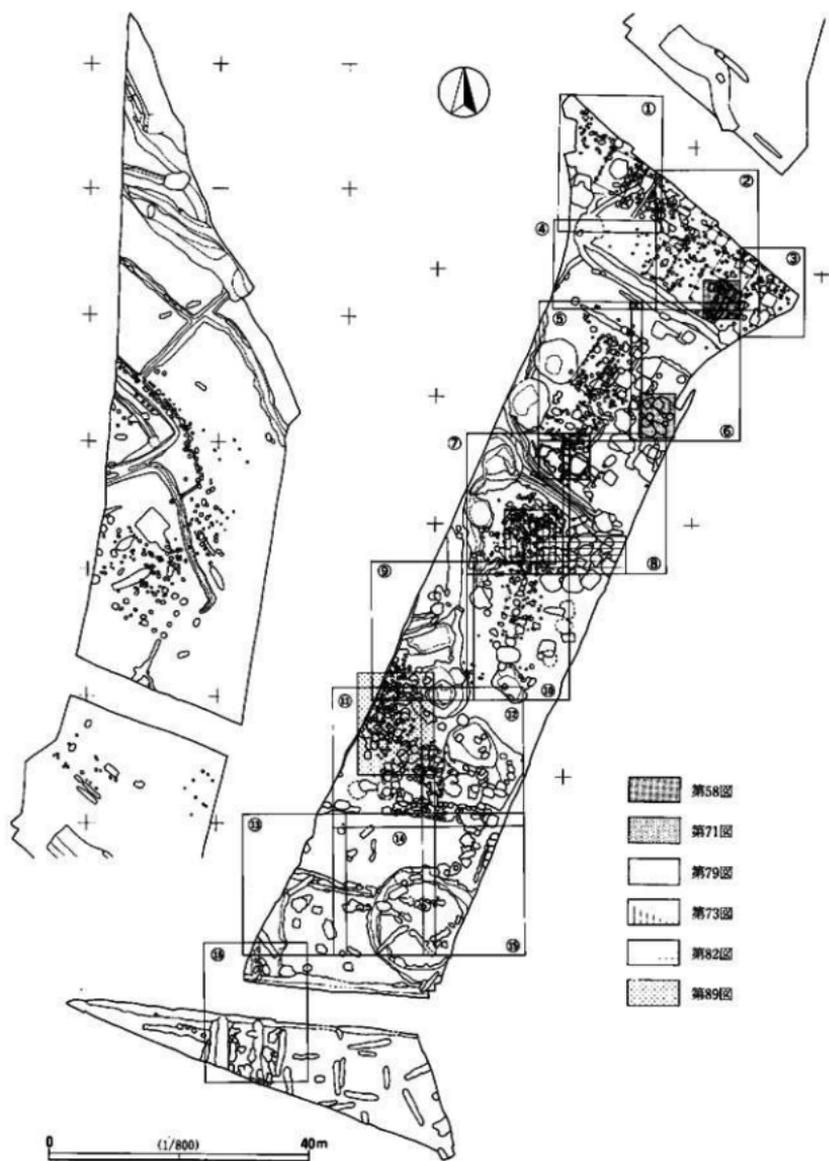
SK-277 (遺構：第50図 図版17)

北調査区のVI b-73に位置している。平面形は不整な楕円形を呈する。長径1.4m、短径0.8mである。底面は中央部が周辺より高い。周辺の深さは検出面から25cmを測る。

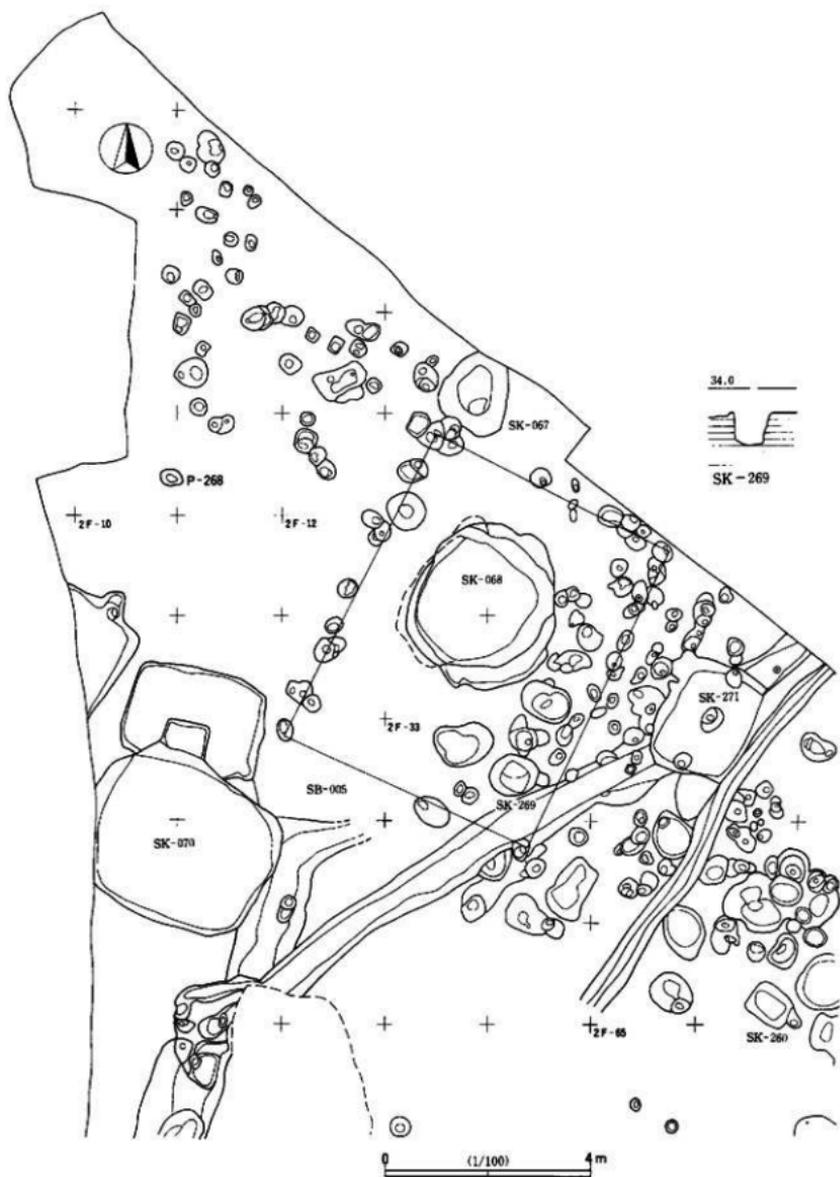
実測可能な遺物は出土していない。



第50図 北調査区土坑 ②



第51図 土坑分布図の位置関係



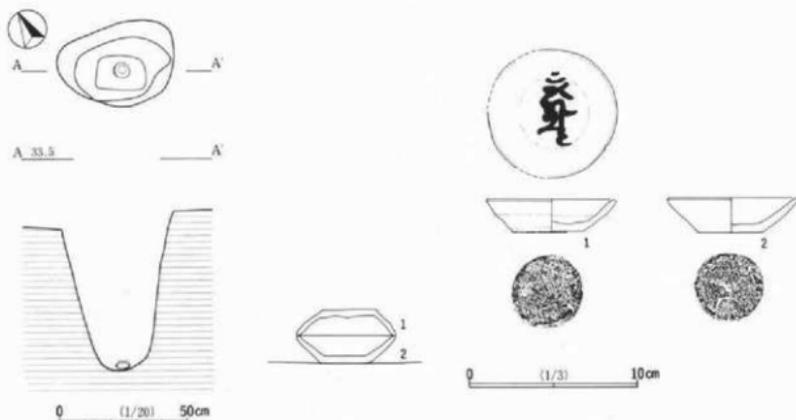
第52图 土坑分布图 ①

P-268 (遺構：第53図 図版17 遺物：第53・54図 図版39)

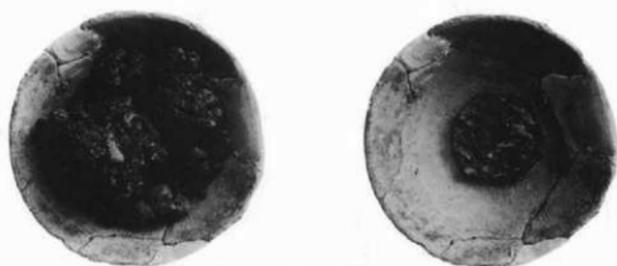
南調査区の2F-00に位置する。本土坑の北側には小ピットが多数存在し、また、東側にはSB-005が所在する。しかし、それらの遺構との重複は認められず、単独で発見された。検出面での平面形は不整な楕円形で、長径45cm、短径35cmである。深さは64cmを測り、底面は長軸長20cm、短軸長14cmの隅丸長方形を呈する。底面の断面形はUの字形になり、平坦ではない。

底面から土師質土器の小皿2点、銭貨1点、自然遺物が出土しており、その出土状況については、極めて意図的な状態といえる。小皿は合わせ口の状態で、その中から粉と見られる自然遺物(第54図左)と、銭貨1枚(第54図右)が発見された。蓋側の小皿内面底部に記された梵字から考えると、これらは地鎮を目的として埋納された可能性が高いと考えられる。

第53図1と2は土師質土器小皿で、この2点が合わせ口状態で出土した。1は口径7.9cm、器高2.0cm、底径4.3cmである。内面底部に不動明王をあらわす梵字「カーンマーン」の墨書が書かれている。2は平底か



第53図 P-268と出土遺物



第54図 かわらけ内の遺物(復元)

ら体部が直線的に外傾する。口径7.6cm、器高2.1cm、底径4.0cmである。なお、銭貨については、表面の保存状態が不良であるため、銭種等の詳細については明らかでない。

SK-067 (遺構：第52図参照)

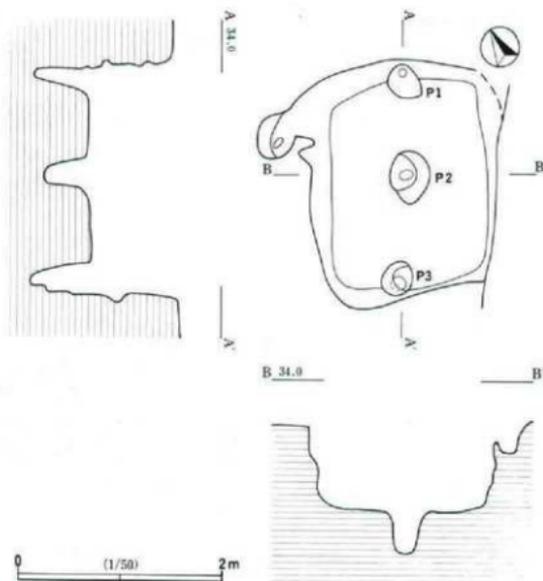
1F-93に位置し、SB-005の柱穴に近接する。長径130cm、短径120cmの不整形を呈する。検出面からの深さは12cm~44cmである。周辺に存在するピットよりもやや大型である。

遺物は出土していない。

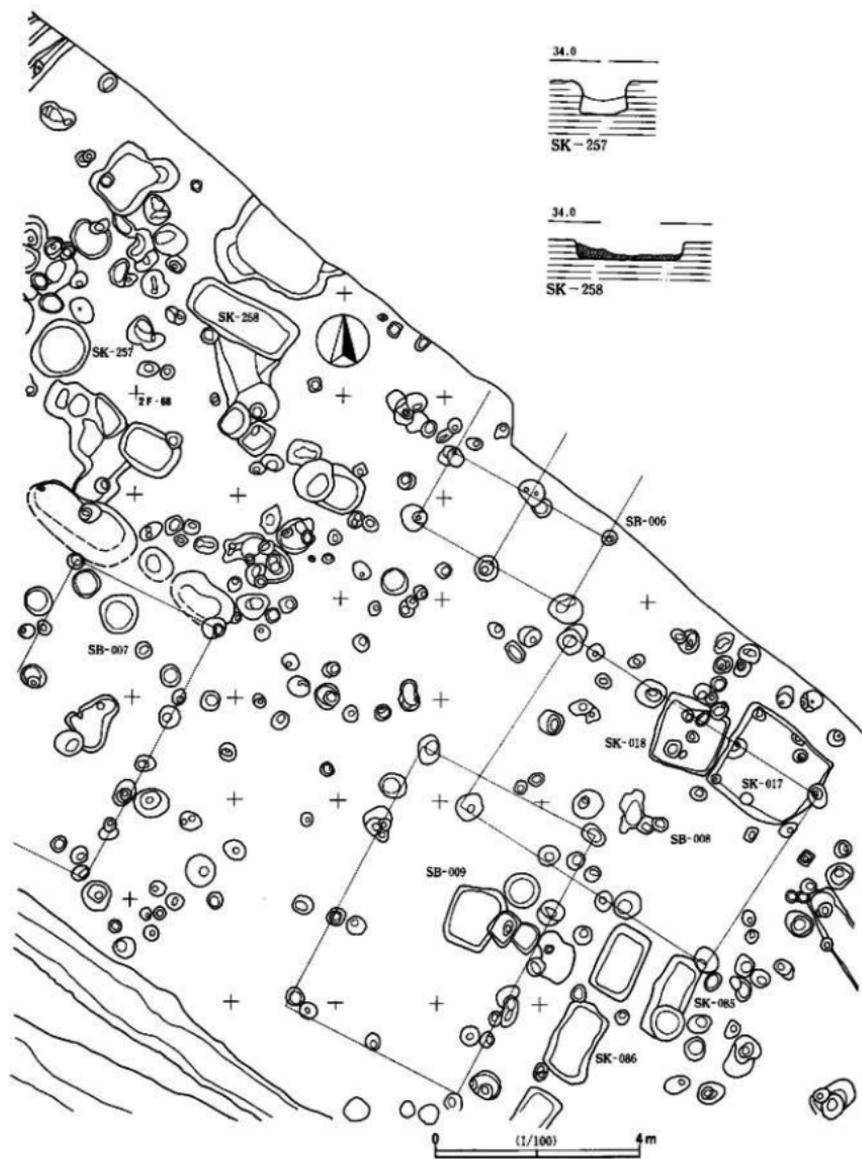
SK-271 (遺構：第55図 図版17)

2F-25・35に位置する。西側にSB-005が位置し、周辺に小ピットが多数存在する。また、溝状遺構と重複するが、遺構の保存状態は良好である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸240cm、短軸170cm、深さ85cmになる。長軸の方向はN-30°-Eで、SB-005の桁行方向とほぼ平行する。このことから掘立柱建物に関連する施設になる可能性も考えられる。底面には3か所のピットが存在する。このピットは長軸方向の軸線上に穿たれており、中央と両端部に配置されている。底面からの深さは、p1が55cm、p2が45cm、p3が60cmである。また、ピット間の間隔はそれぞれ50cmを測る。底面はほぼ平坦な状態で、壁は部分的に凹凸が生じている。

実測可能な遺物は出土していない。



第55図 SK-271



第56图 土坑分布图②

SK-269 (遺構：第52図)

2F-34に位置する。SB-005の内側に検出された土坑の中では、比較的大型で、深さもある。形態は楕円形を呈し、長径90cm、短径80cm、深さ65cmを測る。

遺物は出土していない。

SK-257 (遺構：第56図)

2F-57に位置する円形の土坑である。検出面の規模が108cm×107cm、底面は直径86cmの円形で、深さ72cmを測る。途中の直径が80cmであるため、下位が広がる袋状の断面形を呈する。

石片が1点出土したにとどまる。

SK-258 (遺構：第56図)

2F-58に位置する長方形の土坑である。長軸長215cm、短軸長95cm、深さ35cmで、底面は平坦である。底面上に白色の粘土を含む土が堆積する。

覆土中から土師質土器の破片、縄文土器、礫が出土しているが、実測可能な状態で保存されていた遺物はない。

SK-260 (遺構：第52図)

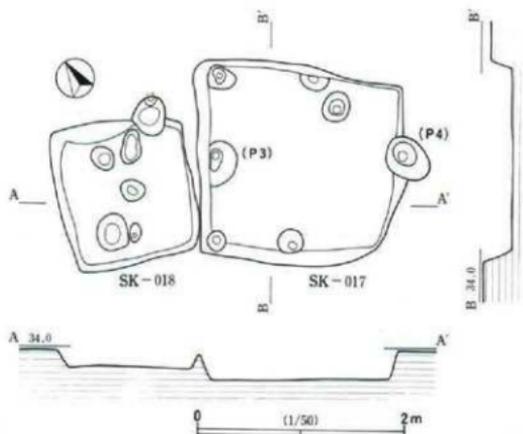
2F-56に位置する長方形の土坑である。南東側に小ピットが存在し、SK-257が北東に所在する。長軸長80cm、短軸長67cm、深さ50cmである。

遺物は土師質土器の細片が1点出土しているのみである。

SK-017 (遺構：第57図 図版18)

2G-93・94に位置する方形の土坑である。想定した掘立柱建物SB-008と重複し、北西にSK-018が近接する。また、周辺に多数の小ピットが存在する。北西-南東がやや長く200cmを測り、その直交方向が190cmになる。検出面からの深さは20cm~27cmで、底面は平坦である。本土坑には7か所に小ピットが認められる。(p3)と(p4)はSB-008の柱穴に想定したピットであり、他の5か所が本遺構に伴うピットであろう。深さは20cm~40cmである。

覆土中から陶器片等が出土しているが、細片で図示に至らない。



第57図 SK-017・018

SK-018 (遺構：第57図 図版18)

2G-93に位置する方形の土坑で、SK-017の北西に近接している。また、想定した掘立柱建物跡であるSB-008と重複し、周辺には多数のピットが存在する。土坑の規模は長辺が140cm、短辺が130cmで、検出面から底面までの深さは15cmである。底面は平坦に設定されている。また、底面の5か所に小ピットが検出されているが、本遺構に伴うものなのか断定はできない。

実測可能な遺物の出土は認められない。

P-091 (遺構：第58図 遺物：第58図 図版45)

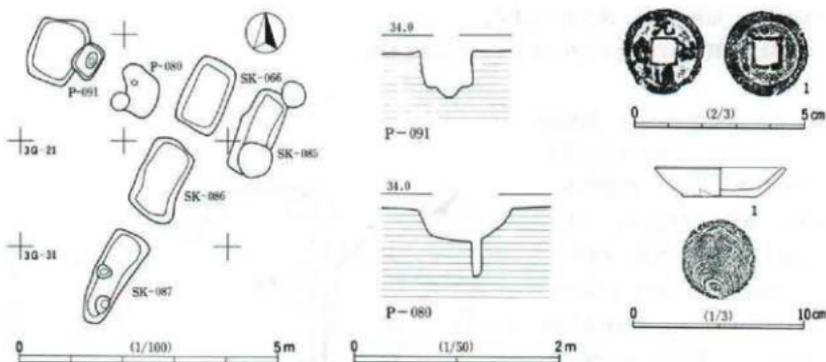
3G-11に位置する長軸長65cm、短軸長50cmの隅丸長方形を呈する小土坑である。深さは35cmで、底面に小ピットが存在する。小ピットは直径25cm、底面からの深さは10cmである。

銭貨が1点出土している。銭種は「元祐通寶」である。初鑄年は1086年である。

P-080 (遺構：第58図 遺物：第58図 図版39)

3G-12に位置する不整形の土坑である。長径105cm、短径60cmで深さは30cmである。底面に深さ30cmの小ピットが伴う。

覆土中から土師質土器が出土した。4分の3が遺存する。口径7.5cm、器高1.7cm、底径4.3cmである。回転糸切り無調整の平底から、体部は直線的に開く。胎土に砂が多く認められ、橙褐色の色調を示す。



第58図 P-091と周辺の土坑

SK-066 (遺構：第58図)

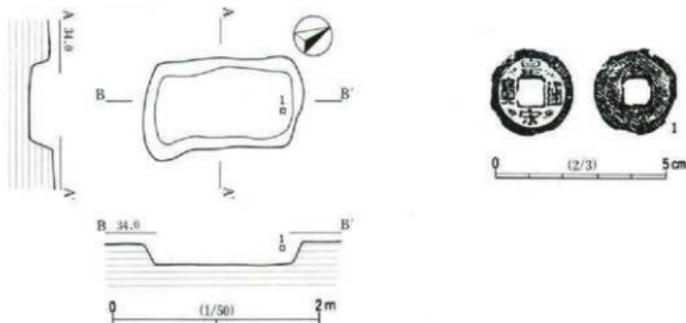
3G-12に位置する長方形の土坑である。長辺の方向はN-25°-Eで、この方向上にSK-086、SK-087という同様な土坑が並んでいる。また、南東側に並列してSK-085が存在する。形態の類似や方向の一致から、これら4基の土坑には何らかの関連があった可能性も考えられる。本土坑の規模は長軸長140cm、短軸長85cm、深さ20cmである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-086 (遺構：第59図 遺物：第59図 図版45)

3G-22に位置する長方形の土坑である。SK-066の南西側に連なる土坑の中間に位置する。形態はやや不整の長方形で、長軸長150cm、短軸長85cmになる。深さは20cmで、底面は平坦である。

検出面からわずかに掘り下げた覆土中から銭貨1点が出土した。銭種は「皇宋通寶」である。錆が進行しており、外縁部の一部が欠けている。



第59図 SK-086と出土遺物

SK-087 (遺構：第58図)

3G-31を主に位置する。SK-086の南西に連なり、その間隔は40cmである。長軸長190cm、短軸長70cmで、深さは15cmである。底面に小ピットが2か所に存在するが、本土坑に伴わない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-085 (遺構：第58図)

3G-13を主に位置し、SK-066が北西側に近接して並列する。形態は長方形を呈し、長軸長170cm、短軸長70cm、深さ25cmを測る。周辺の2か所に小ピットが重複するため、一部不明な部分もあるが、底面は平坦であったと思われる。

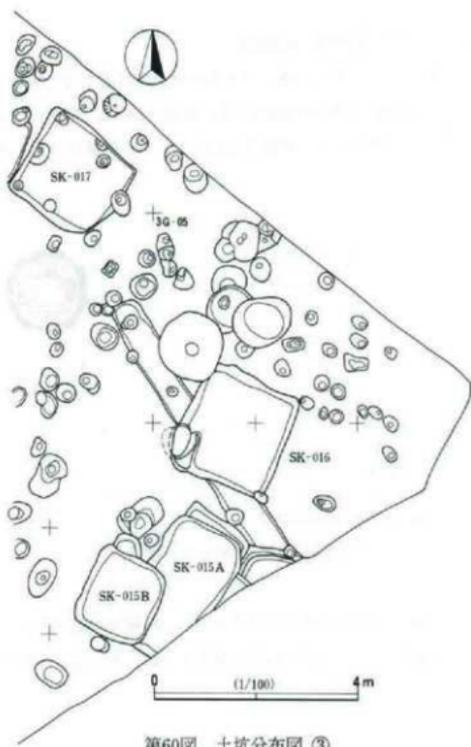
遺物は出土していない。

SK-016 (遺構：第61図 図版18 遺物：第61図 図版42)

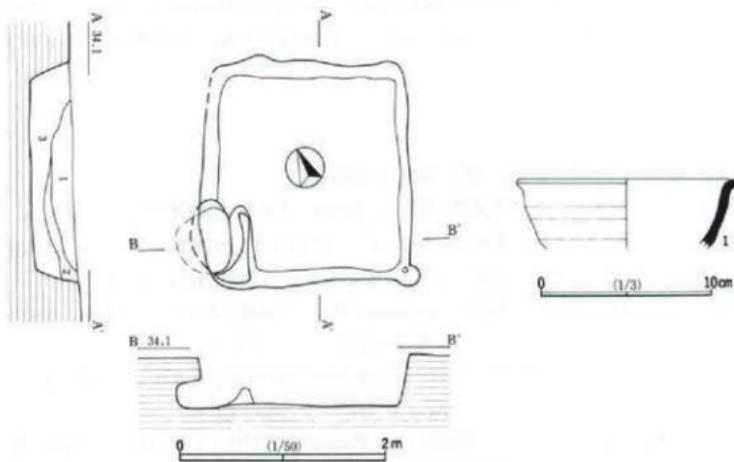
3G-15・25を主に位置する。溝状遺構と重複し、本遺構が溝を切って構築されている。また、周辺には多くのピットが検出されている。形態は正方形に近く、210cm×215cmの規模をもつ。深さは50cmで、底面は平坦に設定され、壁はわずかに傾斜している。底面にピットは認められないが、西のコーナー部に小規模な施設がつくられている。この施設は、間口65cmで壁側に30cm掘り込んだ、半円形の小横穴状のものである。入口には、閉塞に関係すると思われる土手状の高まりが存在する。

覆土は3層に分けられる。1層は黒色土で、ローム粒や粘土がわずかに含まれる。2層にはロームブロックが認められる。3層はロームブロックや粘土のブロックが多く含まれる。

覆土中から土師質土器の破片1点と、陶器片1点、青磁細片1点が出土した。図示した陶器は瀬戸灰釉小鉢で、復元口径は12.6cmである。内外面全体に暗緑色の釉が施されている。



第60図 土坑分布図 ③



第61図 SK-016と出土遺物

SK-015A (遺構：第62図 図版18)

3G-35を主に位置する。一部が調査区の外に含まれるが、形態は長方形である。また、SK-015Bと重複し、本遺構がそれを切っている。長軸長275cm、短軸長155cmの規模で、深さは45cm～50cmになる。底面は中央部が壁際よりもわずかに高いが、ほぼ平坦といえる。

覆土は4層に分けられる。黒褐色の土を主に、下層にいくにしたがいロームブロックが大きくなる。また、粘土も認められ、特に2層にブロック状で多く含まれる。

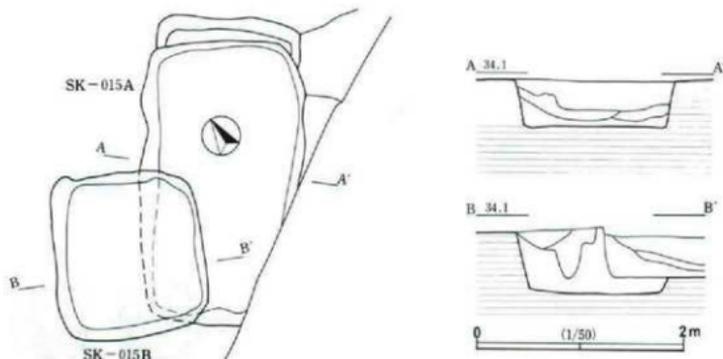
遺物は出土していない。

SK-015B (遺構：第62図 図版18)

3G-34を主に位置し、SK-015Aと重複する。長方形を呈し、長軸の方向をSK-015A、SK-016とほぼ同じくする。長軸長は160cm、短軸長は155cmである。深さは60cmで、底面は平坦に設定されている。

本土坑が埋まってから、小ピットが掘られた様子が認められるが、基本的に覆土は、直径1cm～5cmのロームブロックや粘土ブロックを主体にするものである。したがって、短期間の内に埋まったか、埋め戻されたと考えることもできよう。

土師質土器の破片が1点出土しているが、実測可能な遺存はない。

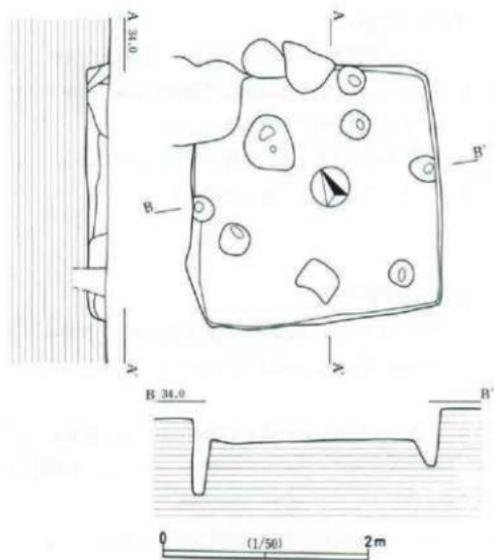


第62図 SK-015A・015B

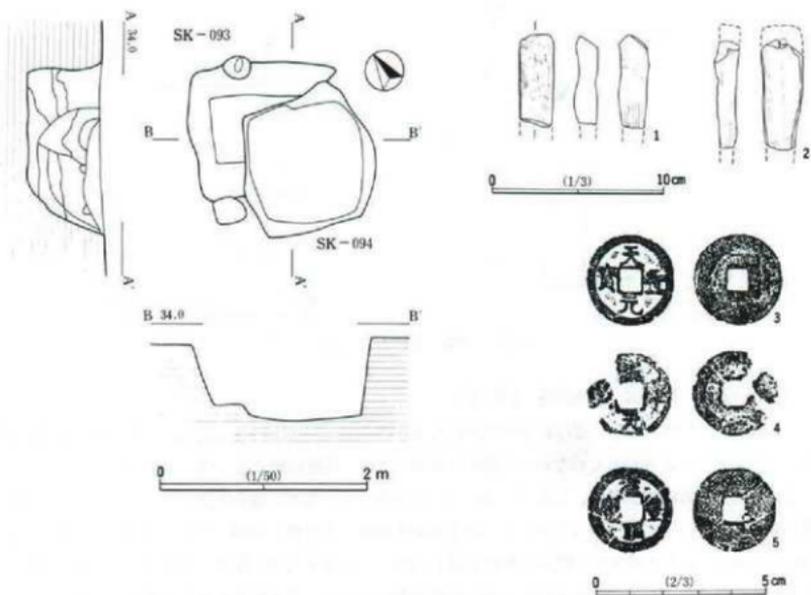
SK-092 (遺構：第63図 分布図⑤ 図版19)

3F-84を主に位置する。一辺の長さが245cmの、正方形に近い平面形をもつ土坑で、形態的には竪穴状遺構ということもできるかもしれない。本遺構の西側には掘立柱建物跡であるSB-010が存在し、その梁行方向と同様な方向性を示し、近接するSK-093・094にも同じ傾向が認められる。さらに、溝状遺構と重複するSK-075・076・077の方形の土坑が、本遺構と近似した向きを採っている。以上の状況から考えて、本跡を含めた周辺の方形土坑と、SB-011との深い関連を推測することができる。

検出面からの深さは25cmで、底面はわずかに高低が生じている。7か所にピットを検出したが、そのすべてが遺構に直接伴うものか、その点明確ではない。



第63図 SK-092



第64図 SK-093・094と出土遺物

遺物は出土していない。

SK-093 (遺構：第64図 分布図⑤ 図版19 遺物：第64図 図版44)

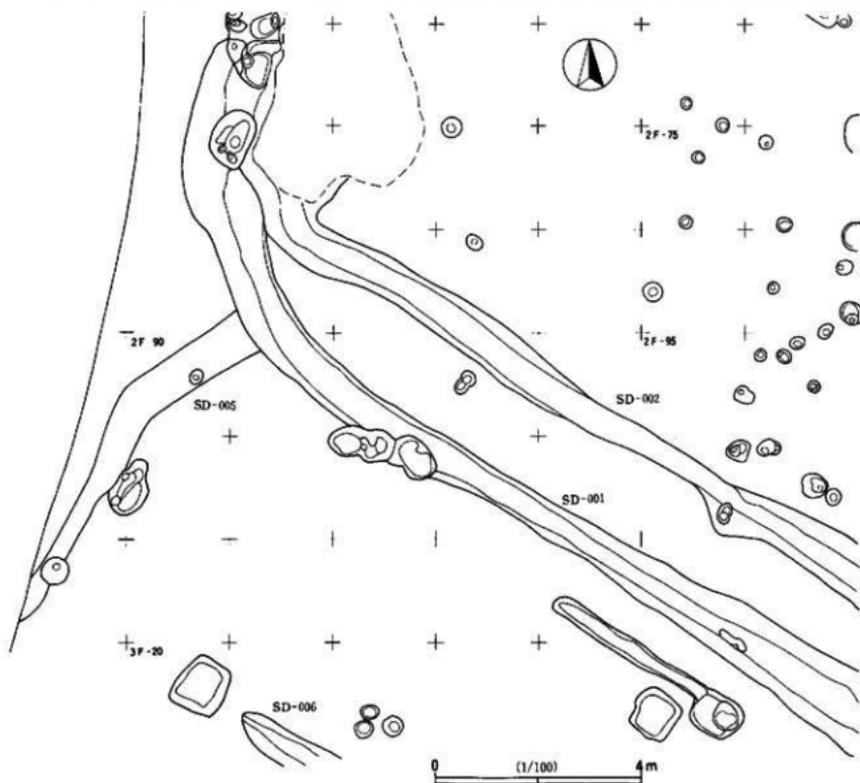
3F-94に位置する。SK-094と重複し、本土坑が時間的に先行している。形態は長軸長145cm、短軸長125cmの長方形である。深さは70cmを測る。

遺物は覆土中から土師質土器の破片1点と砥石2が出土している。図示したのは砥石2点である。2は上下が欠損しているが、上部に紐をととした孔の痕跡が認められる。

SK-094 (遺構：第64図 分布図⑤ 図版19 遺物：第64図 図版45)

3F-94に位置する。各辺にわずかに張りを見るが、形態は140cm×140cmの方形である。深さは80cmになる。

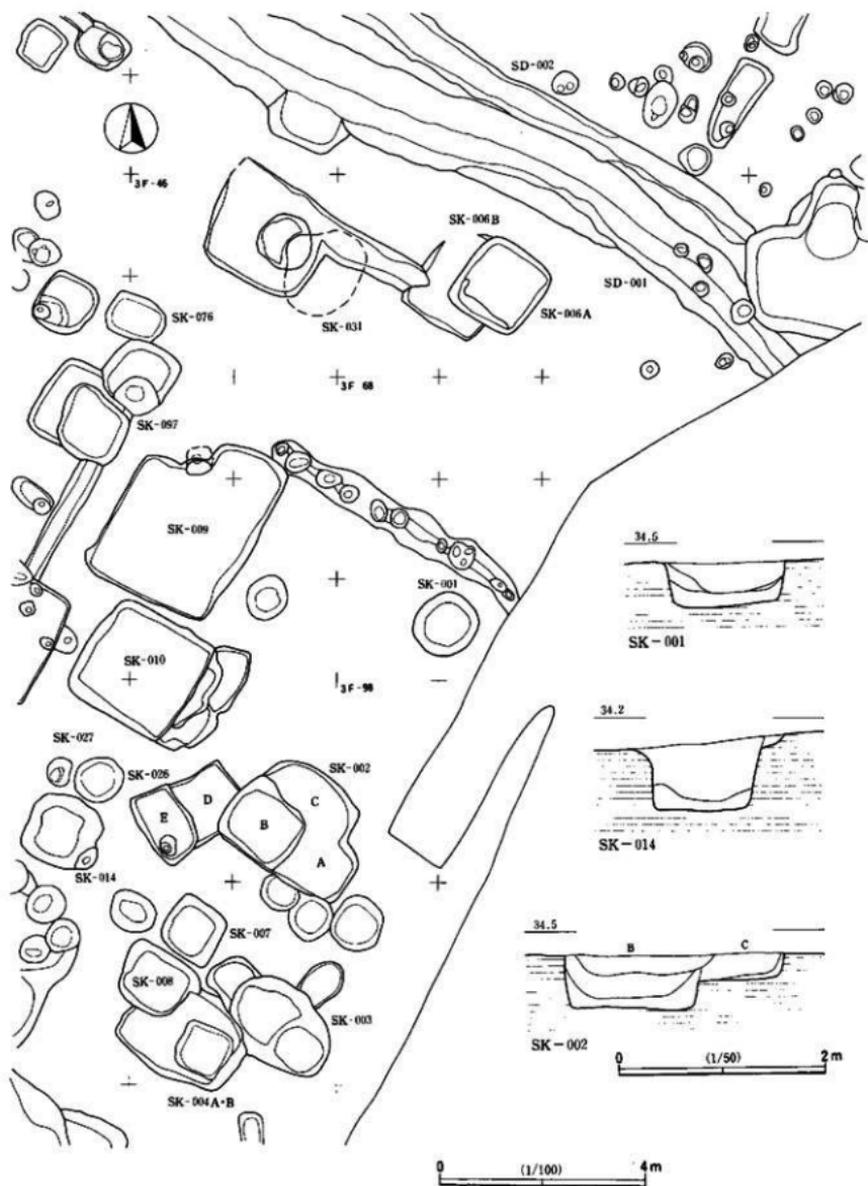
覆土中から銭貨3点が出土している。3は「天聖元寶」である。錆が進行しており、特に背面の状態が



第65図 土坑分布図④



第66图 土坑分布图 ⑤



第67图 土坑分布图 ⑥

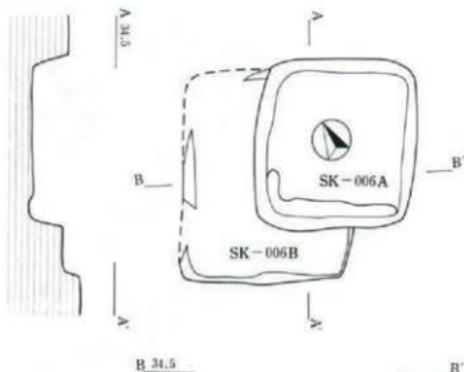
不良である。4は「黒亭元寶」と考えられるが、錆化のため保存状態が悪く4片に割れ銭種の判別が難しい。5は「元豊通寶」である。本資料も前2点と同じように錆が進んで状態が悪化している。

SK-006A(遺構：第68図 分布図⑥ 図版20)

3F-59を主に位置する方形の土坑である。006Bと重複し、本土坑がそれを切っている。長軸長162cm、短軸長162cmの方形を呈し、深さは25cmを測る。底面は平坦に設定され、南西壁の下にのみ幅15cmの溝が伴う。

覆土は2層に分けられる。上層はロームブロックを含む黒褐色土で、下層はロームブロックや炭化粒を含むしまりのある黒褐色土である。

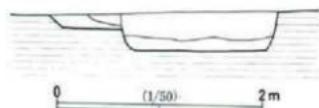
遺物は出土していない。



SK-006B(遺構：第68図 図版20)

3F-59を主に位置している。006Aに切られているので保存状態は不良である。長軸の方向は006Aと同様で205cmになる。短軸長は165cmで、深さは15cmである。

実測可能な遺物は出土していない。



第68図 SK-006A・006B

SK-009(遺構：第69図 分布図⑥ 図版20)

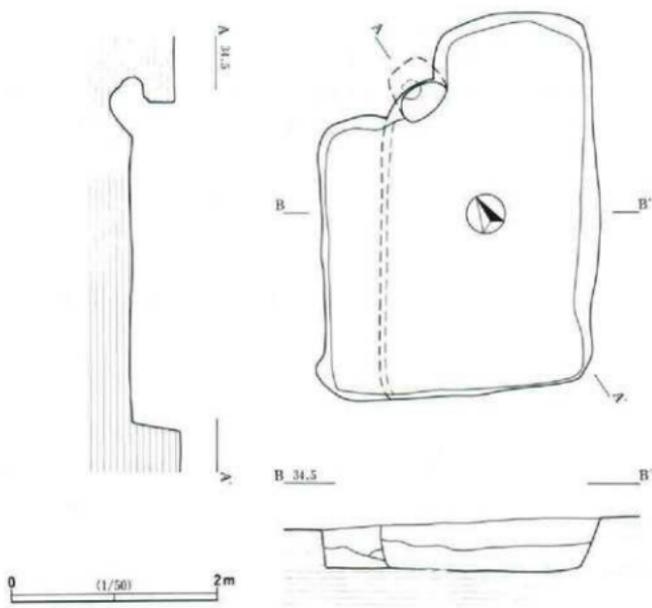
3F-76を主に位置し、南側にSK-010が近接している。南側に土層断面の観察から、2基の方形の土坑が重複していたことが判明したが、後から構築された土坑の壁の立ち上がりが重複部分では明確にとらえられなかった。推定すると新しい土坑は長軸長360cm、短軸長215cmになる。深さは50cmで、底面は平坦に設定されている。底面にピットは存在しないが、北側に小規模な地下室状の施設をつくっている。この施設はSK-016に確認されたものと、同様な機能をもっていたと考えられるが、具体的な目的は明らかにならない。

土師質土器片1点と陶器片3点が出土しているが、図示できるほどの遺存ではない。

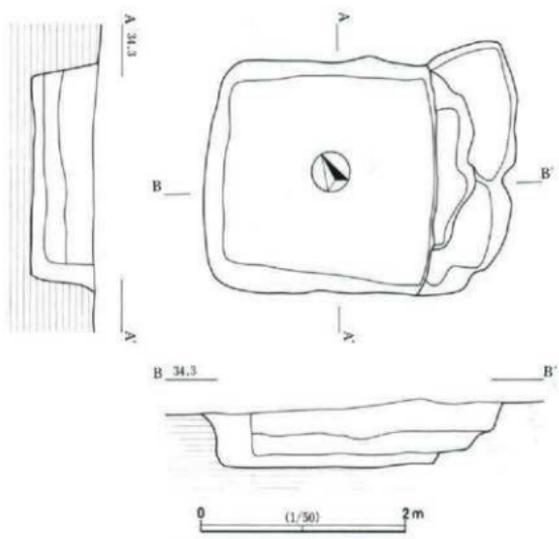
SK-010(遺構：第70図)

3F-86・96を主に位置する。同一地点で最低2回の構築が行われたと考えられる。最初につくられた土坑が60cmと最も深く掘られている。その形態は正方形に近く、220cm×230cmの規模をもつ。底面は平坦といえる。覆土は明確に分けられず、短期間に埋まったような状況を見せている。その後掘られた土坑は、壁が明確に把握できず形態等の詳細がつかめない。

土師質土器破片1点と陶器破片1点が出土しているが、図示するに至らない。



第69図 SK-009



第70図 SK-010

SK-014 (遺構：第67図 分布図⑥ 図版21)

4F-05に位置し、北側に平面形が円形であるSK-026・027の2基の土坑が存在する。形態は隅丸方形で、長軸長143cm、短軸長140cmを測る。深さは70cmで、覆土は2層に分けられる。上層はロームブロックや粘土ブロックを多く含み、炭化物が認められ、下層はその含まれ方が増加する。底面は平坦である。

遺物は土師質土器の破片1点と、陶器の破片1点が覆土中から出土しているにすぎない。

SK-001 (遺構：第67図 分布図⑥ 図版21)

3F-89を主に位置する円形の土坑である。周辺に土坑が無く、単独で存在する。規模は125cm×130cm、深さ40cmである。

遺物は出土していない。

SK-002 (遺構：第71図 分布図⑥ 図版21)

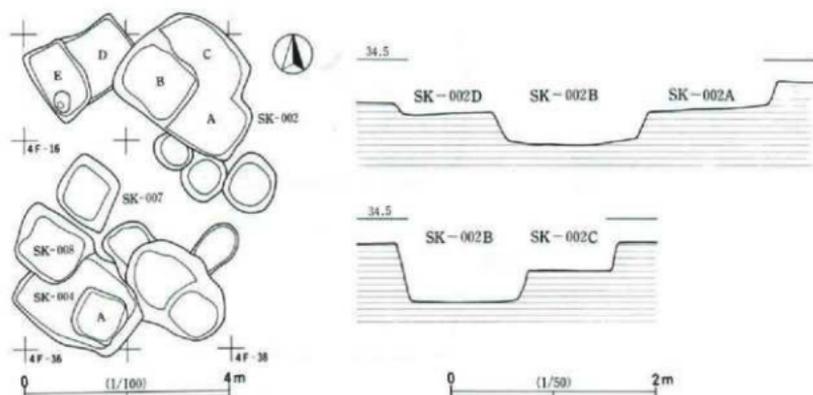
4F-06・07・08に所在する5基の方形土坑が重複する土坑群である。平面形はAとCが明確ではないが、すべて長方形を呈するものと考えられる。一連の重複する土坑の中で深さがあるBの規模は、長軸長150cm、短軸長130cm、深さ50cmである。

Bから遺物が出土しているが、土師質土器の破片1点にとどまる。

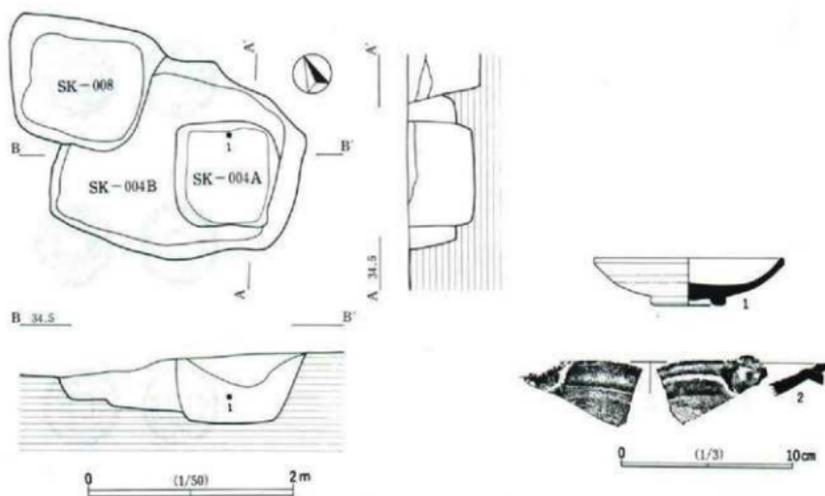
SK-039A・B (遺構：第66図 分布図⑤ 図版22)

4F-14・15・24・25に位置する。楕円形の土坑が2基連結した様な形態を示す。Aは240cm×190cm、深さ30cm、Bは315cm×(200cm)、深さ35cmである。Bの土坑の周囲の8か所に小ピットが存在する。

掘り方は比較的明瞭であるが、遺物の出土は皆無である。



第71図 SK-002と周辺の土坑



第72図 SK-004・008と出土遺物

SK-004・008 (遺構：第72図 分布図⑥ 図版22 遺物：第72図 図版40・42)

4 F-26に主に位置する方形土坑群で、3基が重複する。また、東側に不整形の土坑群が存在する。時間的な前後関係は、AとSK-008がBより新しい。Aは100cm×100cmで深さは70cmである。SK-008は140cm×120cm、深さ40cmである。Cはこの3基の中では、230cm×180cmと最も規模が大きいが、深さは30cmにとどまる。

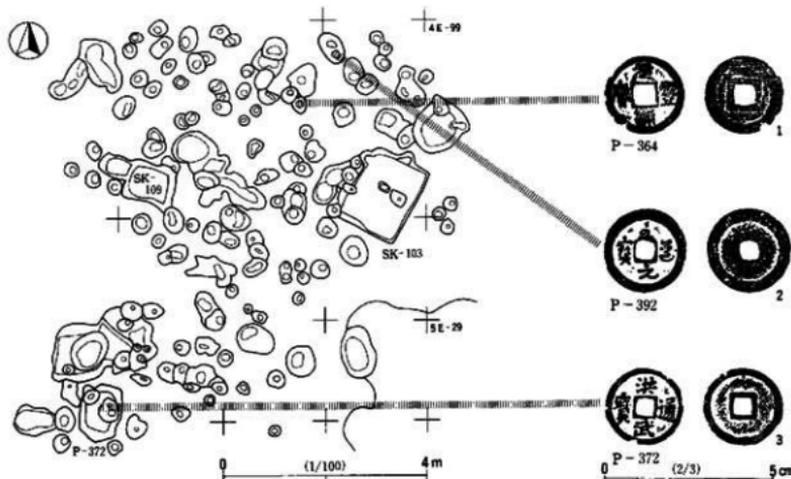
SK-004 Bから皿が出土している。1は覆土の下層から出土した白磁小皿である。体部は一部のみの遺存である。復元値で口径11.2cm、器高2.8cm、高台の底径4.5cmになる。高台の外面端部と口唇部には面取りが加えられている。体部外面の上半分から内面にかけて乳白色の釉が施されている。2は瀬戸灰軸卸皿である。口縁部は内側に折り返され、口唇部の上面に浅い窪みが生じている。また、指頭の押さえによる注口が付けられている。おろし目は残存部の少なからず詳細は不明であるが、1本1本が細いように見える。口縁部に緑色の釉が施される。

4 E・5 E区の小ピット群 (遺構：第73図 遺物：第73図 図版45)

SE-004の東側に展開するピット群は、小ピットを主体にわずかに方形の土坑が存在する。小ピットの性格として建物の柱穴等を考えたが、想定は困難で、その具体的な意味については保留せざるをえない。ただ、銭貨が出土したり、焼土を検出した土坑やピットも存在するので、それについて紹介しておきたい。

P-364は4 E-97に位置する直径30cmの円形のピットである。ここからは第73図1の銭貨が出土している。銭種は「元豊通寶」である。一部に欠損が生じ全体に磨耗した状態を呈する。

P-392は4 E-98に位置し、70cm×40cmの楕円形を呈している。2が出土した銭貨で、銭種は「至道元寶」である。錆がかなり進行し脆い状態になっている。



第73図 4E・5E区の小ピット群と出土銭貨

P-372は5E-25に位置する115cm×85cmの楕円形の土坑である。出土した銭貨は3で、銭種は「洪通武寶」である。外縁の一部に欠損が見られるが、外見上の保存状態は比較的良好である。

SK-107(第77図参照)は4E-99に位置する。平面形は100cm×90cmの楕円形を呈し、深さは10cmと浅い。西側の底面に直径20cmの範囲で焼土が集中するが、覆土に炭化物や焼土が含まれる。

SK-109(遺構：第74図 遺物：第74図 図版44)

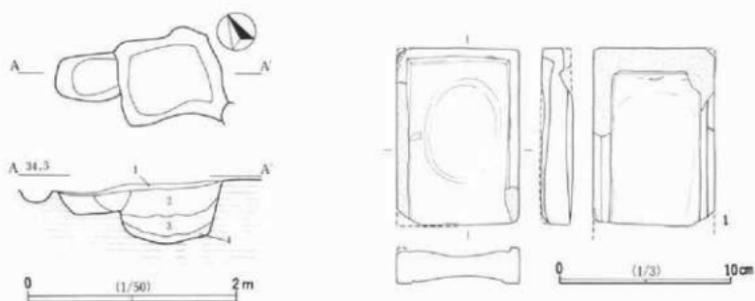
5E-06に位置する、長軸長100cm、短軸長80cmの方形を呈する土坑である。底面の中央部が最も深く、検出面から62cmを測る。覆土は4層に分けられる。1層は近接するピットも覆う黒色土である。2層～4層は暗褐色を呈し、下層にいくにしたがい、ローム粒やロームブロックの含有が増加している。

覆土中から硯が1点出土している。これ以外には土器等の遺物は1点も出土していない。この硯は粘板岩製で、硯尻の一部を欠損しているが、平面形は長方形である。側面は4面とも垂直につくられており、大きさは10.5cm×7.2cmで、厚さは縁帯を含め2.0cmである。特徴として、硯尻に縁帯が作出されていない点を挙げることができよう。

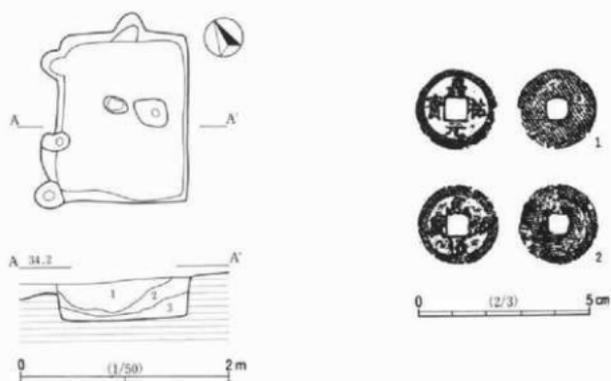
SK-103(遺構：第75図 遺物：第75図 図版45・46)

5E-08に位置する長方形の土坑である。周辺には小ピットが多数検出されており、本土坑と重複するピットも存在する。遺構の規模は、長軸長165cm、短軸長125cm、深さ40cmである。底面は全体に平坦に設定されており、壁の立ち上がりも垂直に近く、かなりしっかりした掘り方をもつ。底面に2か所ピットが検出されているが、土坑に伴うとは断定できない。

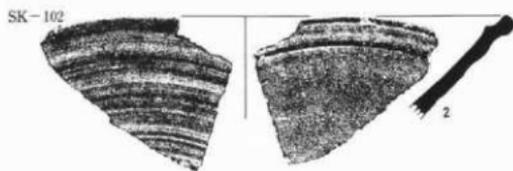
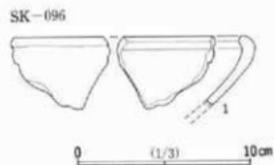
覆土は3層に分層できる。1層はローム粒やブロックを含む黒褐色土である。2層はローム粒やロームブロックを多く含む暗褐色土で、3層はその含有がさらに多くなる暗褐色土である。



第74図 SK-109と出土遺物



第75図 SK-103と出土遺物

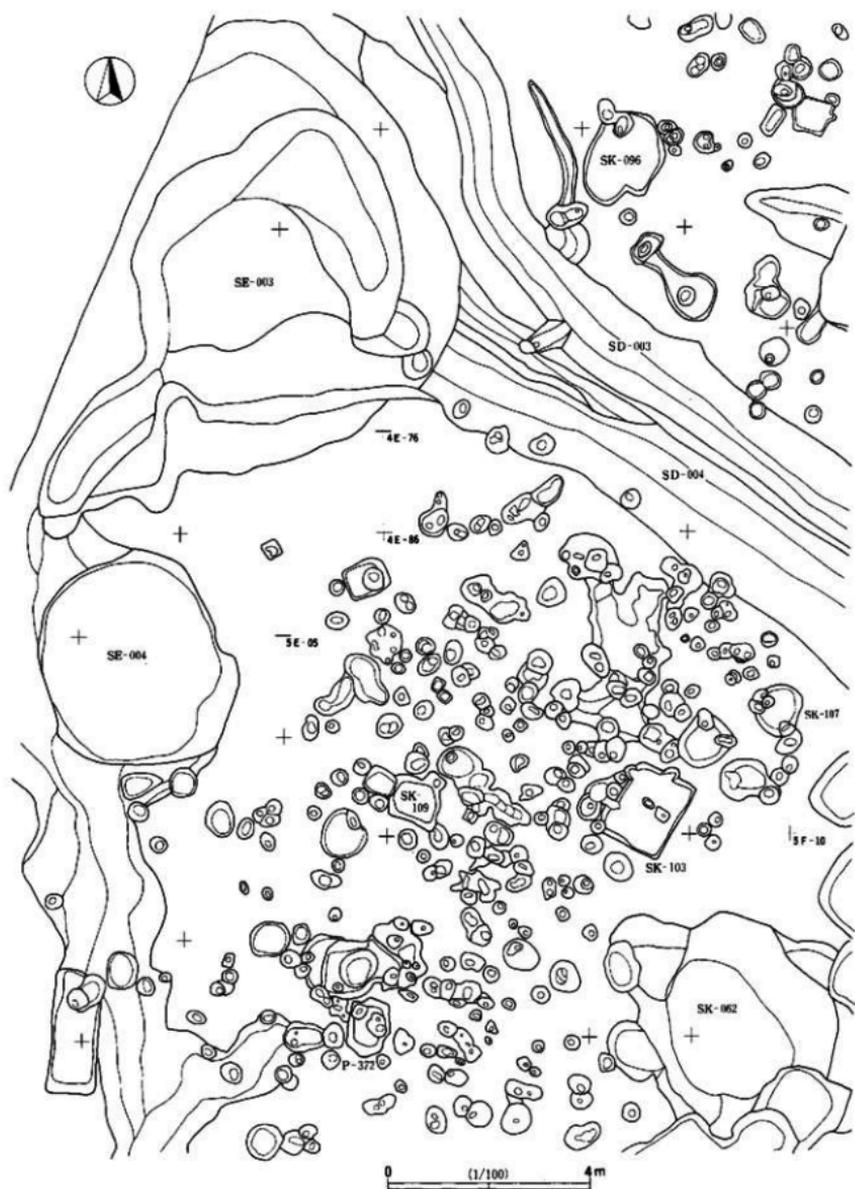


第76図 SK-096・102出土遺物

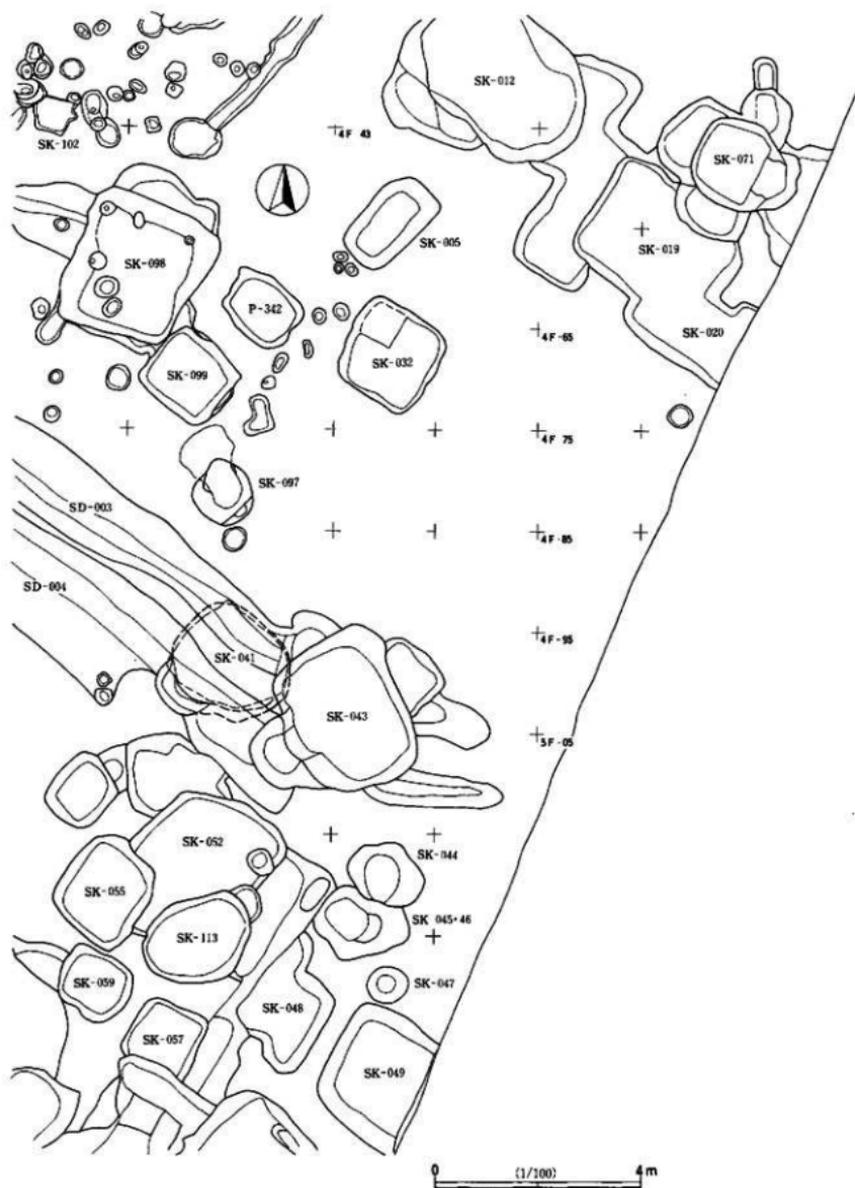
覆土中から土師質土器1点と銭貨2点が出土した。第75図1は「嘉祐元寶」である。2は銭文がつぶれて銭種の判読が難しくなっているが「元祐通寶」とみられる。

SK-096 (遺構：第79図参照 遺物：第76図左)

4E-48に主に位置する。長径200cm、短径140cmの不整楕円形を呈する土坑である。深さは15cm前後と浅く、底面に遺構に直接関係するか否か明らかでない小ピットが存在する。



第77图 土坑分布图 ①

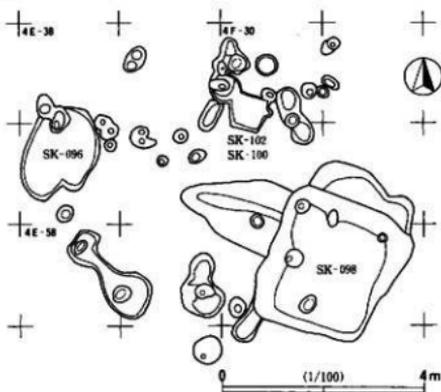


第78图 土坑分布图 ⑧

第76図左は覆土から出土した在地産の土師質鉢の口縁部の破片である。

SK-102 (遺構：第79図参照 遺物：第76図右)

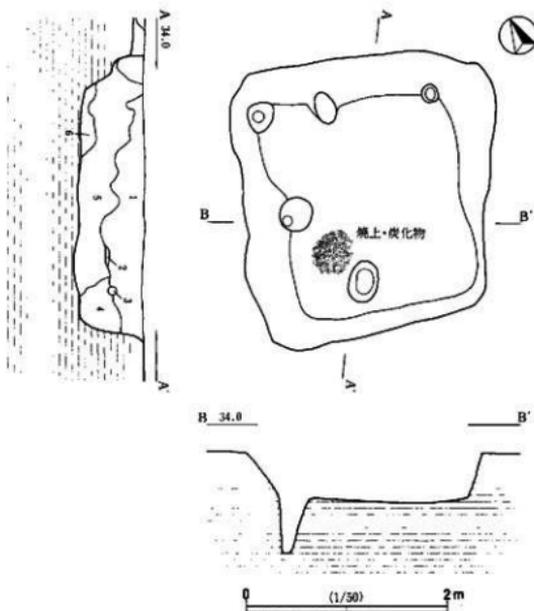
4F-30に位置する。70cm×60cmの略方形の土坑で、深さは15cmである。第76図右は播鉢の口縁部破片である。体部は直線的に開き、口縁部の内側に小突起がつくられている。全体に銹軸が施される。瀬戸産と考えられる。



SK-098 (遺構：第80図 図版23)

4F-40・41・50・51に位置する。西側でSK-100と重複し、南東側にSK-099が近接する。一見SK-100とは同一の遺構のように見えるが、それぞれ別遺構である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸長290cm、短軸長250cmを測る。検出面からの深さは65cmで、全体にかなりしっかりした掘り方をもってお

第79図 SK-098と周辺の土坑



第80図 SK-098

り、すでに説明したSK-092と同じように、竪穴状遺構と呼ぶほうが適切かもしれない。底面はわずかに高低が認められるが、全体には平坦に設定されている。壁はやや傾斜して立ち上がり、検出面に比して底面の面積が狭くなる。底面に検出された施設は、ピットが5か所と炉状施設1か所である。ピットは壁の下に4か所と、南西壁の内側に1か所、底面からの深さは10cm~40cmである。炉状の遺構は南西コーナーに近い位置で検出された。直径45cmの円形の範囲が焼土化して、その上に炭化物がのっている。火が使用された場所であったと推測される。

覆土は大きくは1・4・5・6層の4層に分層できよう。1層は暗褐色土で焼土粒を散発的に含んでいる。4層は黒色土のブロックを含む暗褐色土である。5層は褐色土でロームブロックを含んでいる。6層は明褐色土で砂が含まれる。

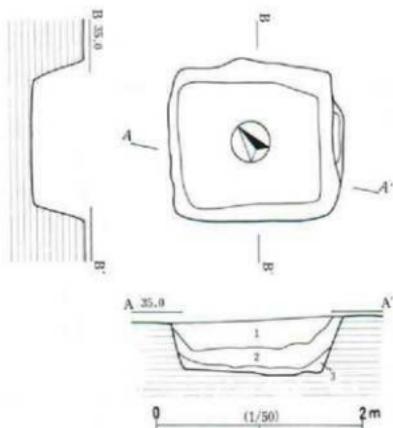
遺物は土師質土器片1点と陶器片2点、鉄釘の欠損品1点等が出土している。

SK-099 (遺構：第81図 図版23)

4F-61に位置する正方形に近い平面形の、掘り方が明瞭な土坑である。北西側にSK-098が隣接し、南東側には地下式土坑であるSK-097が存在する。また、北西側にP-342が並ぶように検出されている。土坑の規模は165cm×155cmで、深さ50cmを測る。底面はわずかに高低が認められるが、全体的に平坦に設定され、壁はやや傾斜して立ち上がる。底面にピット等は存在しない。

覆土は3層に分けられる。1層は黒色土と小ロームブロックが混ざり合った黒褐色土である。2層はロームブロックの含有が増加した黒褐色土である。3層はローム粒と粘土がわずかに含まれる黒褐色土である。

遺物は1点も出土していない。



第81図 SK-099

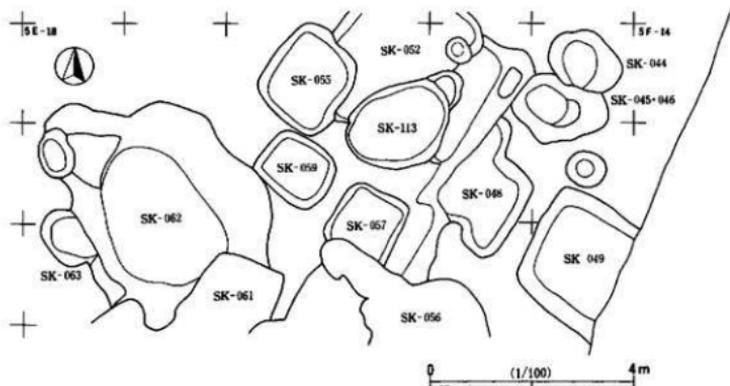
SK-019・020 (遺構：第78図右上参照 図版24)

4F-45・55・56・66に所在する土坑で、地下式土坑であるSK-071の竪坑の南側に展開する、重複する2基の長方形土坑である。時間的にはSK-019がSK-020より新しい。また、SK-071はSK-019の後に構築されている。

SK-019の長軸長は310cm、短軸長は230cm、深さは30cmである。底面はわずかに高低が認められる。覆土はロームブロックを含む黒色土である。

SK-020の東側は調査区外に含まれている。したがって、長軸長については不明である。また、他の土坑との重複も考えられる状況をみせている。短軸長は150cmで、深さは30cmになる。覆土に炭化物や粘土粒が認められる。

いずれの土坑からも遺物は出土していない。



第82図 SK-055と周辺の土坑

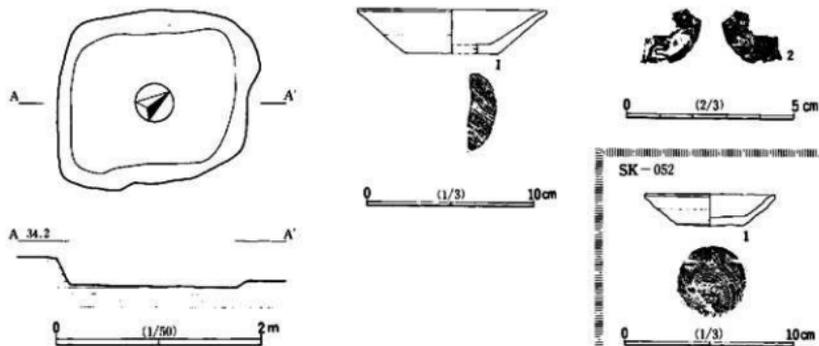
SK-055 (遺構：第83図 遺物：第83図 図版46)

5F-10・11に位置する方形の土坑である。周辺には不整形の土坑であるSK-052、地下式土坑のSK-113、方形土坑のSK-059・057が存在する。本土坑の規模は長軸長190cm、短軸長165cmでやや不整形な長方形を呈し、深さは25cmと浅い。底面は全体に平坦である。

覆土中から陶器片1点、土師質土器片6点、銭貨1点が出土している。1は体部の破片から復元して図示した。底部は回転糸切りで圧痕がつく。体部は直線的に開き復元口径11.1cmを測る。器高は2.6cm、底径は5.5cmになる。色調は橙褐色である。2は全体の4分の1が遺存する銭貨である。残存部分の文字から「熙寧元寶」と判断される。全体に非常に脆い状態になっている。

SK-052 (遺構：第82図参照 遺物：第83図 図版40)

5F-00・01・10・11に位置している。地下式土坑SK-113やSK-055に切られ、遺構のプランが



第83図 SK-055と出土遺物・052出土遺物

明確にならない。形態は長方形であった可能性が高いが、掘り込みも浅く、規模の確定はできない。

覆土中から土師質土器 2 片が出土している。図示したものは体部が 2 分の 1 遺存していた。底部は回転糸切り無調整である。復元口径 7.6cm、器高 1.9cm、底径 4.0cm になる。胎土にスコリアが認められ、色調は橙褐色を呈する。また、骨片が検出されているが、その保存状態は不良である。

SK-044・045・(046) (遺構：第84図 図版24)

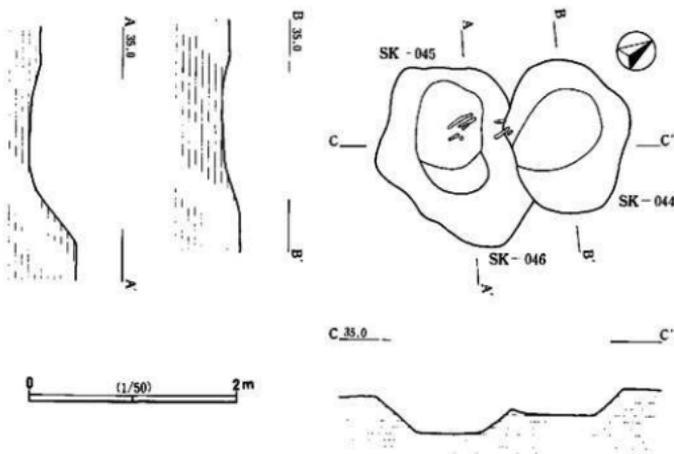
5 F-13に位置する。当初 3 基の土坑が重複しているものと考え、3 基分の遺構番号を用いた。しかし、調査の結果、045と046は同一の遺構であることが明らかになったので、ここでは045として説明を加えたい。

2 基の土坑は並んで検出され、044は長径150cm、短径115cmのやや不整な楕円形の平面形で、深さは25cmを測る。045は長軸長190cm、短軸長140cmの不整楕円形を呈し、深さは35cmになる。底面は平坦で周囲は大きく開くように立ち上がる。

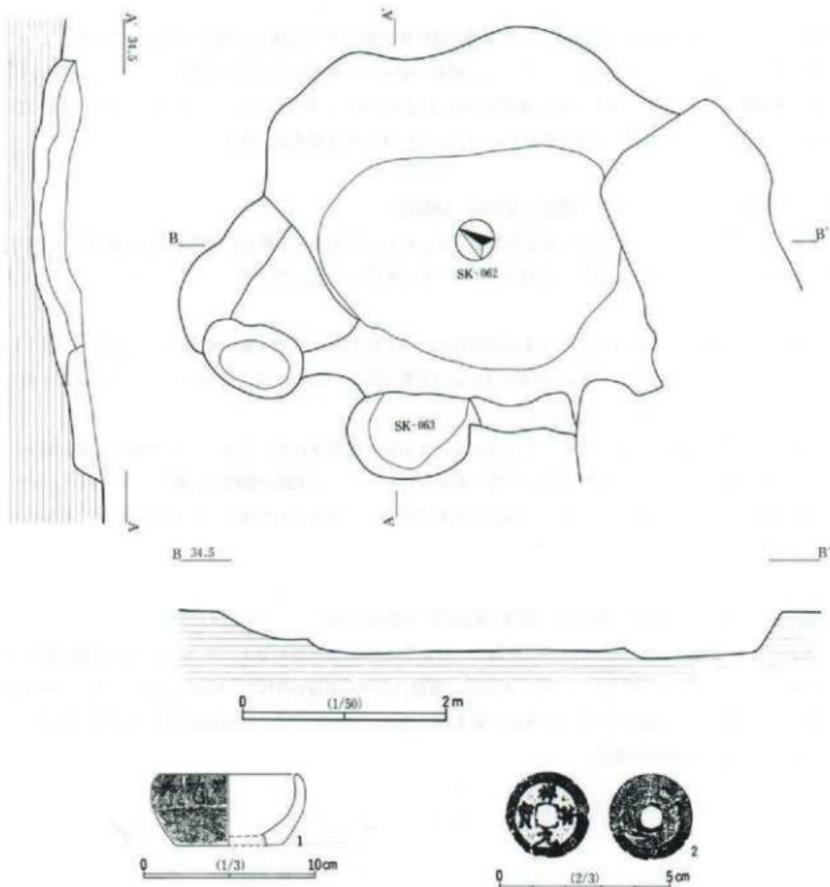
044から遺物は出土していない。045からは人骨片が検出された。しかし、その保存状態は極めて不良である。遺存していたのは四肢骨の一部と考えられるものの、詳細の把握が困難となっている。また、歯が南東側から出土していることから、頭部が南東に位置していたことが推定されるが、埋葬の具体的な状態は不明である。

SK-062・063 (遺構：第85図 遺物：第85図 図版40・46)

SK-062は5E-28・29・38・39に位置し、比較的大型で楕円形を呈する土坑である。南側に地下式土坑SK-061の竪坑が重複している。本土坑の規模は長径が400cm内外で、短径は350cmである。周囲からゆるやかに傾斜して底面に至り、中央部で最も深くなる。したがって、底面の断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは60cmを測る。



第84図 SK-044・045・(046)



第85図 SK-062と出土遺物

覆土は2層に分けられる。1層はローム粒や小ロームブロックが含まれる黒褐色土である。2層はそれらの含まれる量が多くなる暗褐色土である。

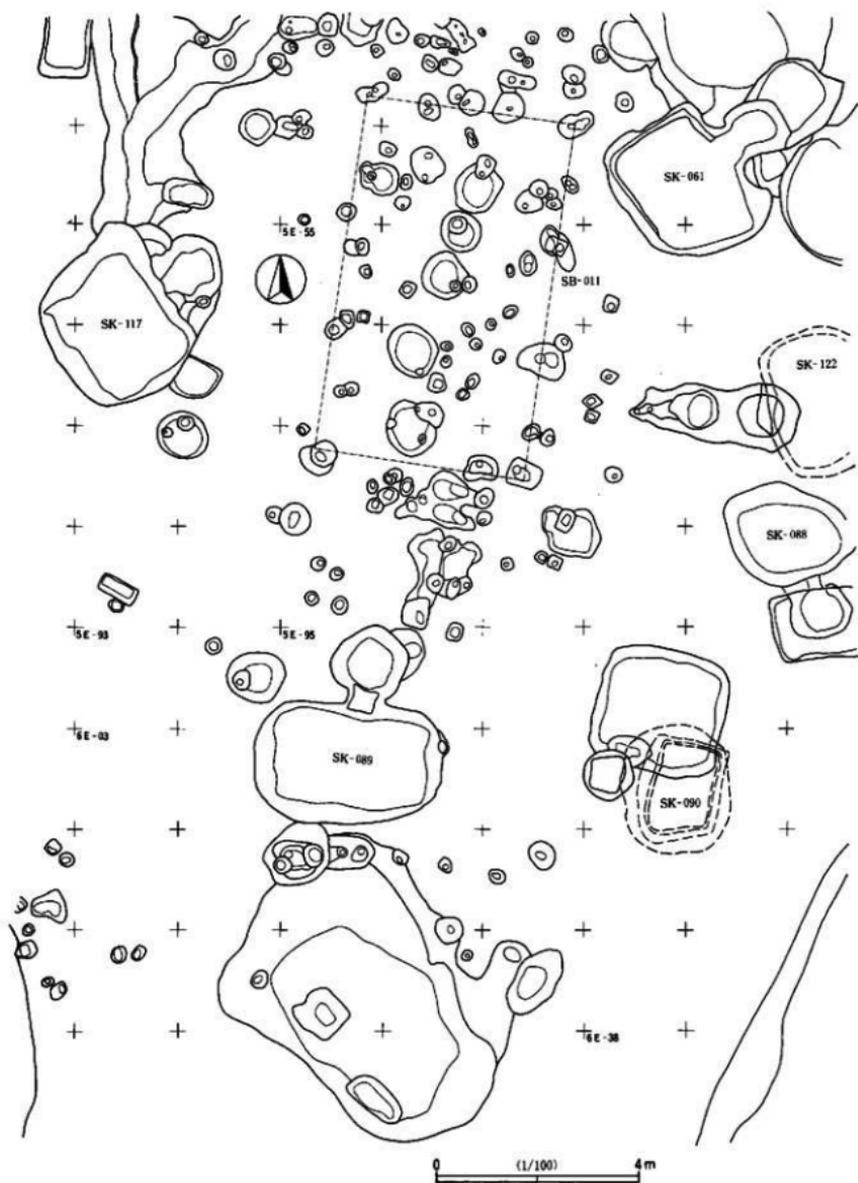
覆土中から土師質土器の破片13点(内瓦質土器1点)、陶器片2点、鉄釘片1点が出土している。1は瓦質土器の香炉で4分の1が遺存する。復元口径8.0cm、器高4.1cm、底径6.2cmになる。平底から体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部の下位に文様を回している。底部に足が付く可能性がある。色調は乳灰色を示す。

SK-063は5E-38を主に位置し、SK-062の後に掘られた土坑である。直径120cm内外の円形の土坑で、深さは25cmである。

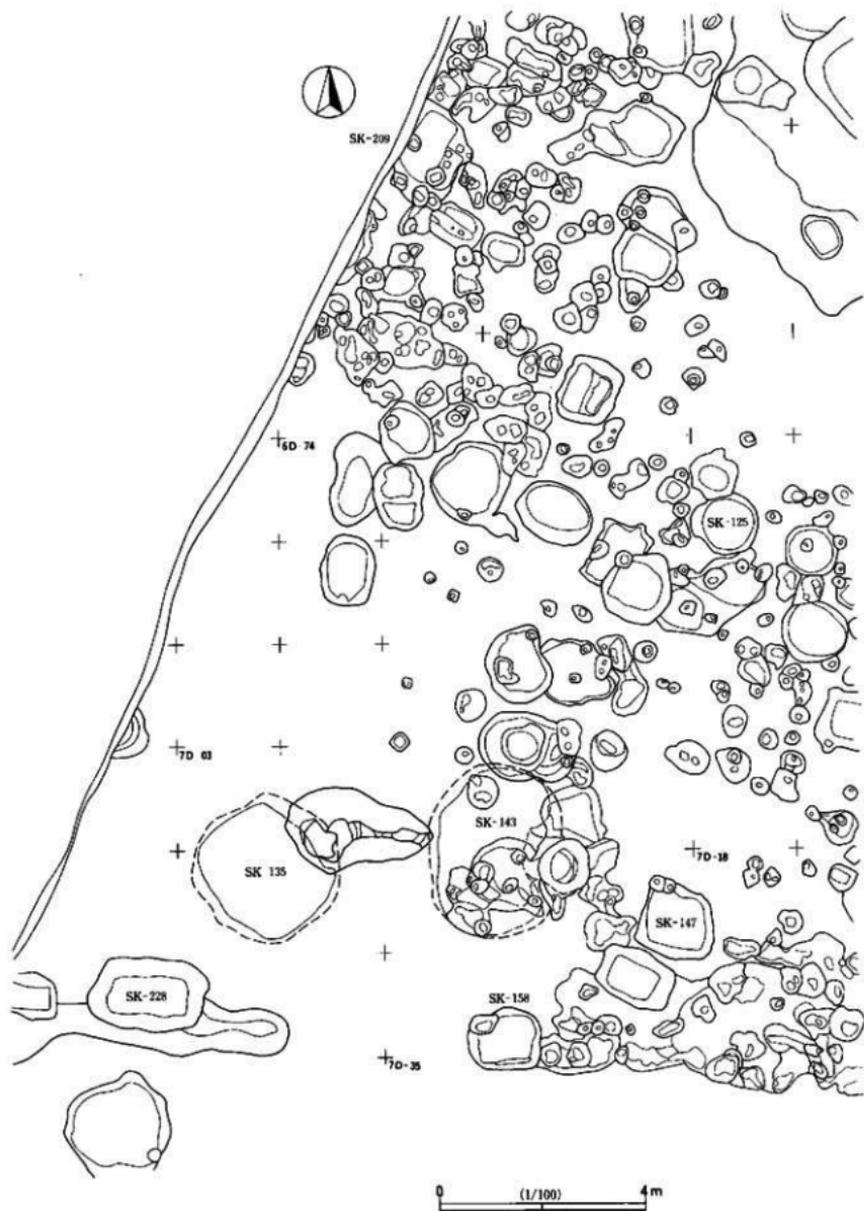
遺物は覆土中から出土した銭貨1点である。2は「祥符元寶」である。銭文は明瞭であるが、全体に脆い状態になっている。



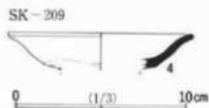
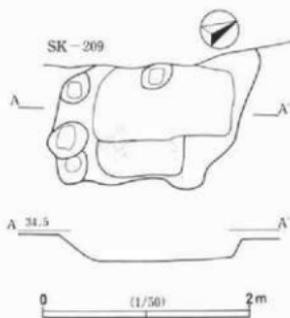
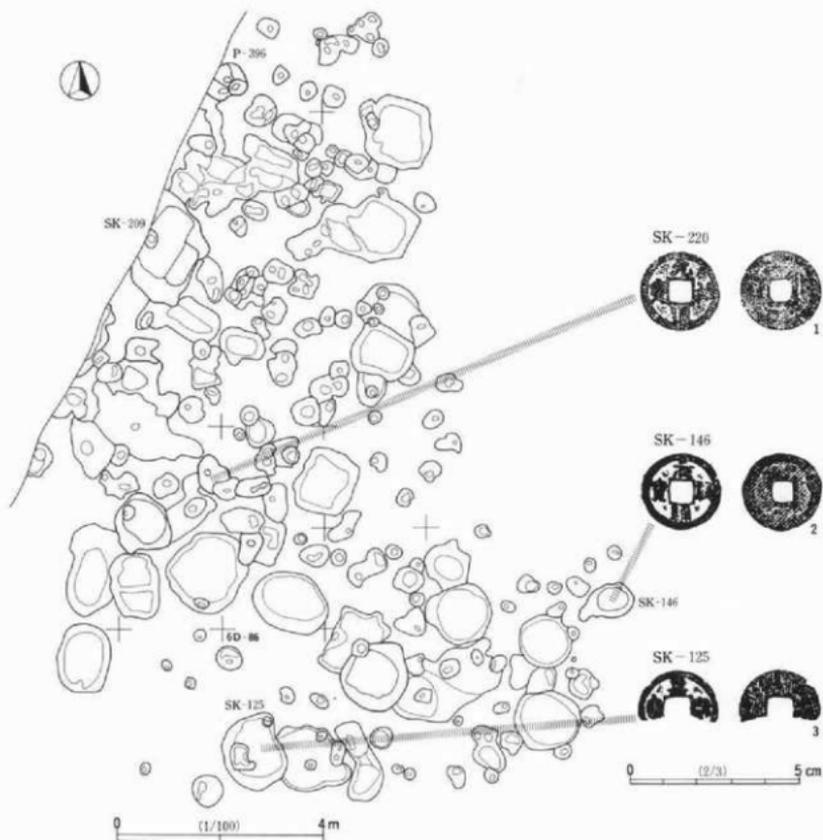
第86网 土坑分布图 ⑨



第87图 土坑分布图 ⑩



第88图 土坑分布图 ①



第89図 6D区の小ピット群と出土遺物

6 D区の小ピット群(遺構：第89図 遺物：図版40・42・44・46)

6 D区の04-94以东とSE-006・007・008の間には、多数の小ピットが検出されている。その中には直径50cm前後で、深さが30cm~50cmの柱穴状の小ピットも数多く存在するので、一応建物の想定を試みたが、柱筋が確定できるような配置はとらえられなかった。そのほかに円形の土坑や隅丸方形の土坑も存在するが、その配置に規則性は認めにくく、遺物を伴う例も少ないため、性格は判然としない。次に遺物を出土した土坑を中心に、数例について紹介しておく。

SK-209は6D-45に位置し、西側の一部が調査区外に含まれている。長軸長180cm、短軸長150cm内外の不整形な長方形になると推測される。深さは21cmと浅く、周囲の3か所に小ピットが存在する。また、東側に段状の平場も存在し、そこから焼土が検出された。

遺物は、瀬戸腰折皿の体部破片が1点出土している。復元口径10.7cm、復元現存器高2.1cmである。内面の全体と外面の体部下位に淡緑色の釉が施されている。

SK-220は6D-65に位置する不整形な土坑である。長径60cm、短径55cm、深さ50cmを測り、周囲に同様な土坑が存在する。

覆土中から銭貨1点が出土している。表面の錆化が進行して銭文が不鮮明になっているが、銭種は「元祐通寶」である。

SK-146は6D-79に位置し、長径90cm、短径65cm、深さ38cmの不整形円形を呈する。周辺に小土坑が存在するが、重複する遺構はない。

覆土中から銭貨1点が出土している。銭種は「元祐通寶」である。外型が整っておらず、銭文が潰れた状態を示す。

SK-125は6D-96に位置し、東側に別の土坑が重複する。不整形円形を呈し、長径145cm、短径120cmを測る。深さは20cmと浅く、底面に小ピットが存在する。

覆土中から銭貨1点が出土している。約2分の1の遺存であるが、銭種は「嘉祐通寶」である。状態が悪化しており、脆い状態を呈する。

SK-211は6D-55に位置する。周辺は数基の土坑が連なった状況が展開し、その中の1基に当たる。形態は不整形で長軸長47cm、短軸長45cm、深さ30cmを測る。

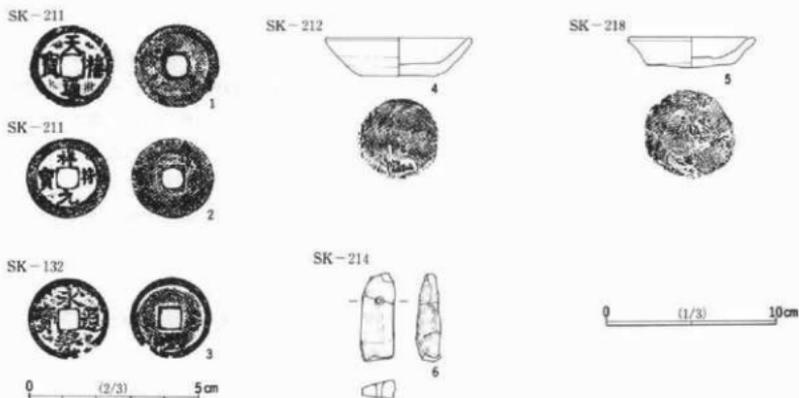
覆土中から銭貨2点が出土している。第90図1は「天禧通寶」である。外縁部の所々に欠損が見られる。2は「祥符元寶」である。銭文の鮮明さに比して背面は、外帯及び内帯とも磨滅したような状態の不鮮明になっている。初鑄年は1が1017年、2が1009年である。

SK-132は6D-54に位置している未完掘の遺構である。調査区内に検出した部分は一部であり、大部分が調査区外に含まれるものと考えられ、詳細については明らかにならない。

遺物は覆土中から土師質土器破片3点と、陶器破片1点、銭貨1点が出土している。土器類については図示不可能な細片である。第90図3の銭貨は「永樂通寶」である。銭文が潰れ始めているが、状態は良いといえよう。

SK-212はSK-211の南側に連なる6D-55に位置する。形態は不整形で、底面が略円形を呈する。

遺物は土師質土器1点が覆土中から出土している。第90図4は土師質土器で、ほぼ完形を保って出土した。回転糸切り無調整の平底から、体部は直線的に開く。口径8.8cm、器高2.3cm、底径4.4cmを測る。胎土にスコリアが認められ、焼成は普通で色調は明褐色である。



第90図 6D区の土坑出土遺物

SK-218は6D-66に位置している、長径70cm、短径35cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。周辺には同様な土坑が連なった状態で存在する。

覆土中から土師質土器1点と、硯の破片1点が出土している。第90図5の土師質土器はほぼ完形に近い状態で出土した。底部は回転糸切り無調整で中央部が張り出し、体部は直線的に短く開く。口径7.3cm、器高1.9cm、底径5.2cmである。焼成は普通で、色調は橙褐色を示す。

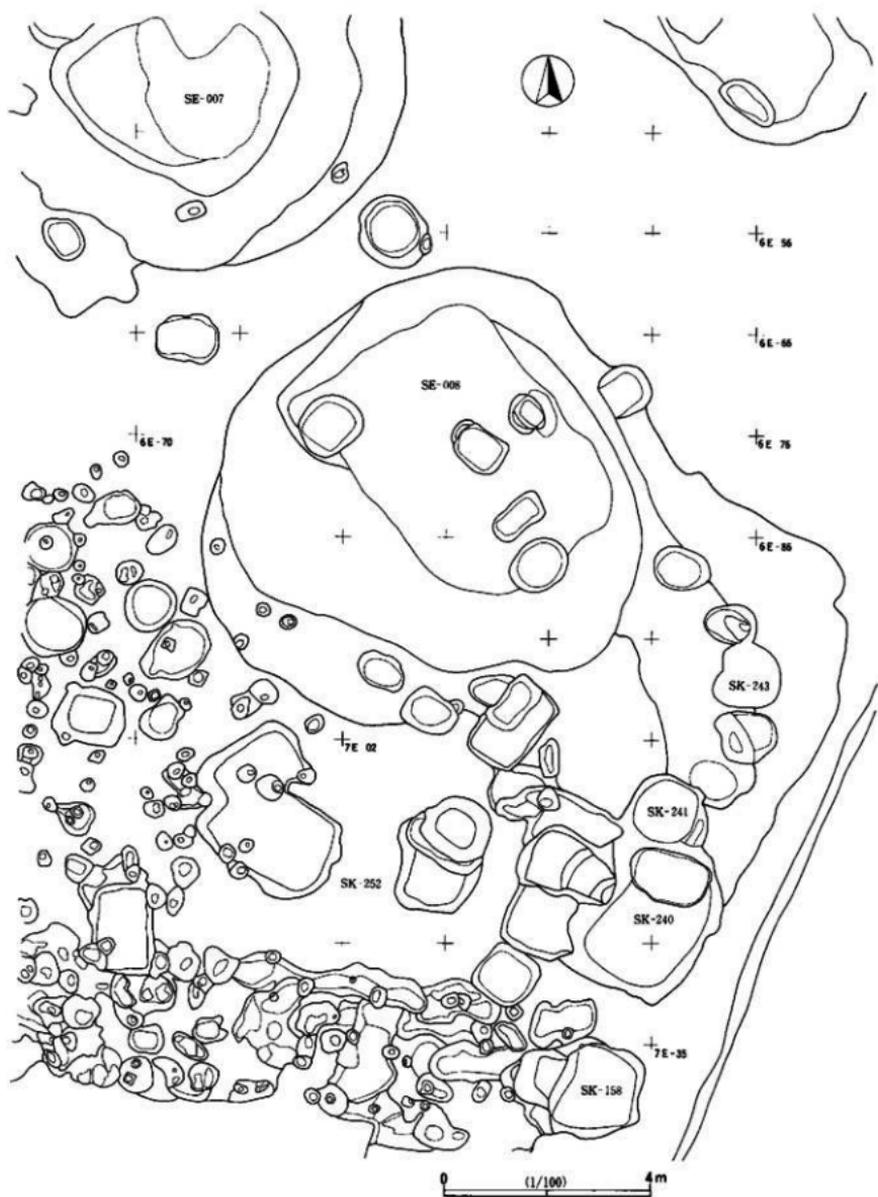
SK-214は6D-65・75に位置する楕円形の土坑である。長径120cm、短径107cmで、南側に同様な土坑が連続する。深さは20cmと浅い。

遺物は図示不可能な土師質土器細片2点と、砥石が出土している。第90図6は下げ紐をとす孔が穿たれている砥石である。長さ5.2cm、幅2.1cm、厚さ1.4cmである。

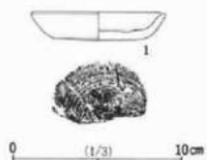
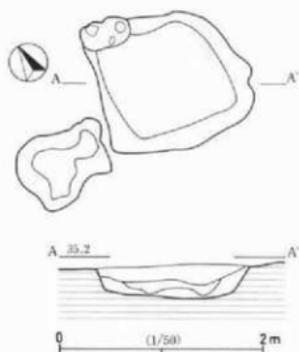
7D・7E区の土坑群(第91図)

6D区から7D・E区に分布する土坑は、連続した状況で検出されており、かなり密集した様相を示している。6D-00方向は調査区外になるが、土坑群はその方向にさらに展開する可能性が高い。一方、南東側については、それが途切れる状況が見られる。すなわち、土坑群の北東端は、SE-006～008の南西側になり、南端は7D-21～7E-24間で東西に伸びる遺構の北側とみることができる。

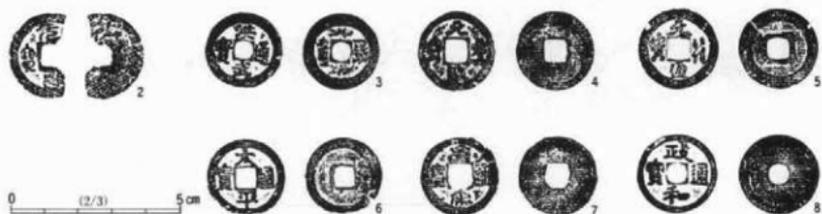
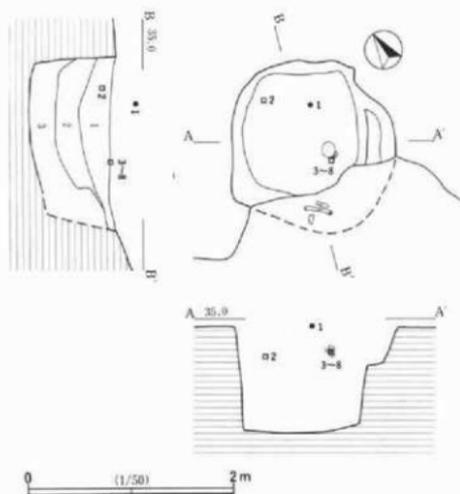
ここでこの東西に伸びる遺構について、若干ふれておくことにしたい。SK-227・228と重複する溝状遺構の東側に、一部遺構が途切れる部分があり、その東側には連続する土坑が検出されている。両者を指して東西に伸びる遺構といっているのが、東西に連続する土坑も、本来は溝状遺構に関係していたと考えることができる。そして、この溝状遺構以南に、土坑群の展開が認められないことから、遺跡全域のなかでも、何らかの境界を画する溝だった可能性が高いのである。いずれにしても、北西方向から南東方向に展開する土坑群と、東西に伸びる溝状遺構以南の土坑の分布とは、明らかに異なるものである。また、SE-008が鐘鉢状遺構の南限になっていることも、7区の30ライン以南との境であったことを示しているといえよう。



第91圖 土坑分布圖 ⑫



第92図 SK-147と出土遺物



第93図 SK-241と出土遺物

7D・7Eの土坑は6D区に所在していた土坑群の続きなので、特徴に大きな変化は認められない。その中の2基について紹介しておきたい。

SK-147 (遺構：第92図 遺物：第92図 図版40)

7D-17に位置し、両側が東西に伸びる溝状遺構と接する。形態は不整形長方形を呈し、長軸長150cm、短軸長135cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、壁はやや開きながら立ち上がる。北側のコーナーに小ピットが存在するが、遺構との関係は明らかでない。覆土は3層に分けられ、いずれの層にもロームブロックが認められる。

覆土中から土師質土器の破片が4点出土している。4点は図示不可能で、1点のみ挙げておきたい。第92図1は2分の1の遺存がある。回転糸切り無調整の安定した底部から、短く体部を立ち上げている。口径7.8cm、器高1.7cm、底径5.4cmである。胎土にわずかにスコリアが認められ、色調は橙褐色を呈する。焼成は普通である。

SK-241 (遺構：第93図 図版24 遺物：第93図 図版40)

7E-04・05に位置する。南側に地下式土坑SK-240が存在し、その天井部が崩落した後に掘られていた。形態は、長軸長150cm、短軸長130cmの長方形で、その南東側に張り出し部がつく。長方形土坑の深さは100cmで、張り出し部は35cmを測る。この張り出し部は、当初から長方形土坑に伴っていたかもしれないが、土坑が埋まってから後再度掘削し、その結果張り出し状の部分ができたとの解釈も可能である。その根拠は、3層に分けられる覆土の1層中から人骨が検出され、そのレベルが張り出し部の底面の推定レベルに接近していることによる。

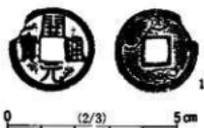
上述したように本土坑からは人骨が出土している。頭骨が中央部から発見され、下肢骨の一部が南側から出土した。どちらも保存状態が不良で、詳細は明らかでない。

ほかには土師質土器片1点と陶器破片3点、銭貨7点が出土している。第93図1は瀬戸卸皿の底部で、復元底径は7.0cmになる。内面の節目は密に加えられ、体部の上位に灰緑色の釉が施されていたことがうかがえる。2～8は銭貨で、2を除く6点はまとまった状態で出土している。この6点はいわゆる六道銭であろう。2は約半分の遺存で銭種の判別が難しいが「元祐通寶」とみられる。以下3は「洪武通寶」、4は「元豊通寶」、5は「元符通寶」、6は「太平通寶」、7は「皇宋通寶」、8は「政和通寶」である。いずれも磨減が認められるものの、保存状態は比較的良好である。なお、この六道銭は、3が一番上で、以下4・5と下位に重なり、8が最も下になって出土している。

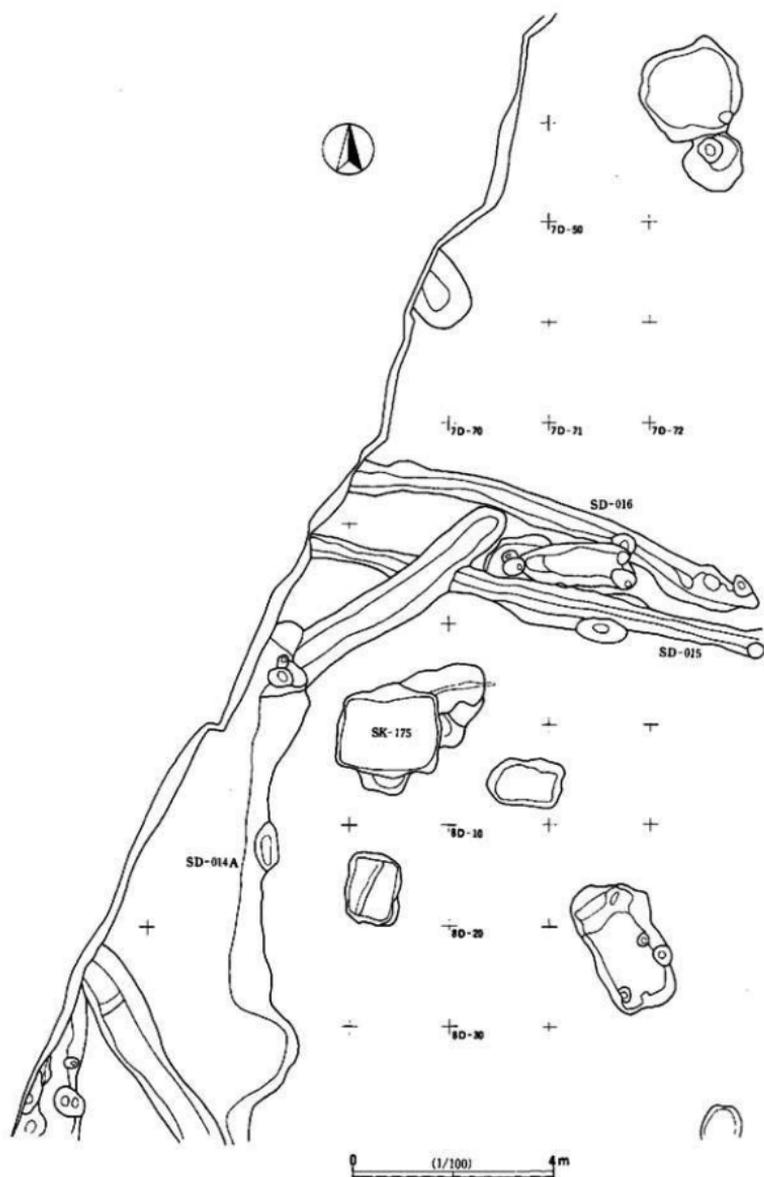
7区30台以南の土坑(第95図～第98図)

先述したように、7区20台を東西に走る溝状遺構の北側と南側では、土坑の在り方が明らかに異なる。北側の土坑は集中的な分布傾向を示し、南側では単独で散在する様相が認められる。また、遺物を伴う土坑も減少している。以下、2例について取り上げておきたい。

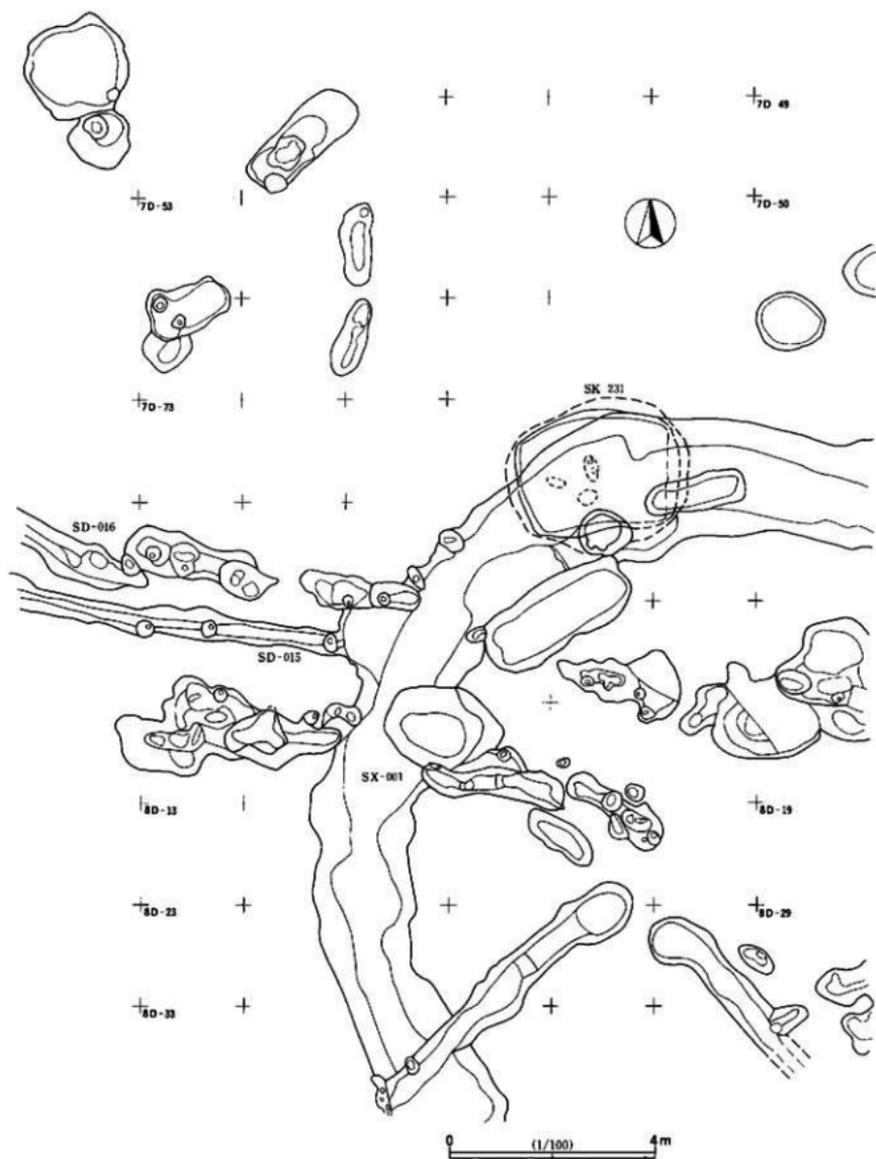
SK-191(第97図参照)は7E-42・52に位置する長軸長150cm、短軸長110cm、深さ25cmの不整形の土坑で、周囲に数基の土坑が接する。ここ



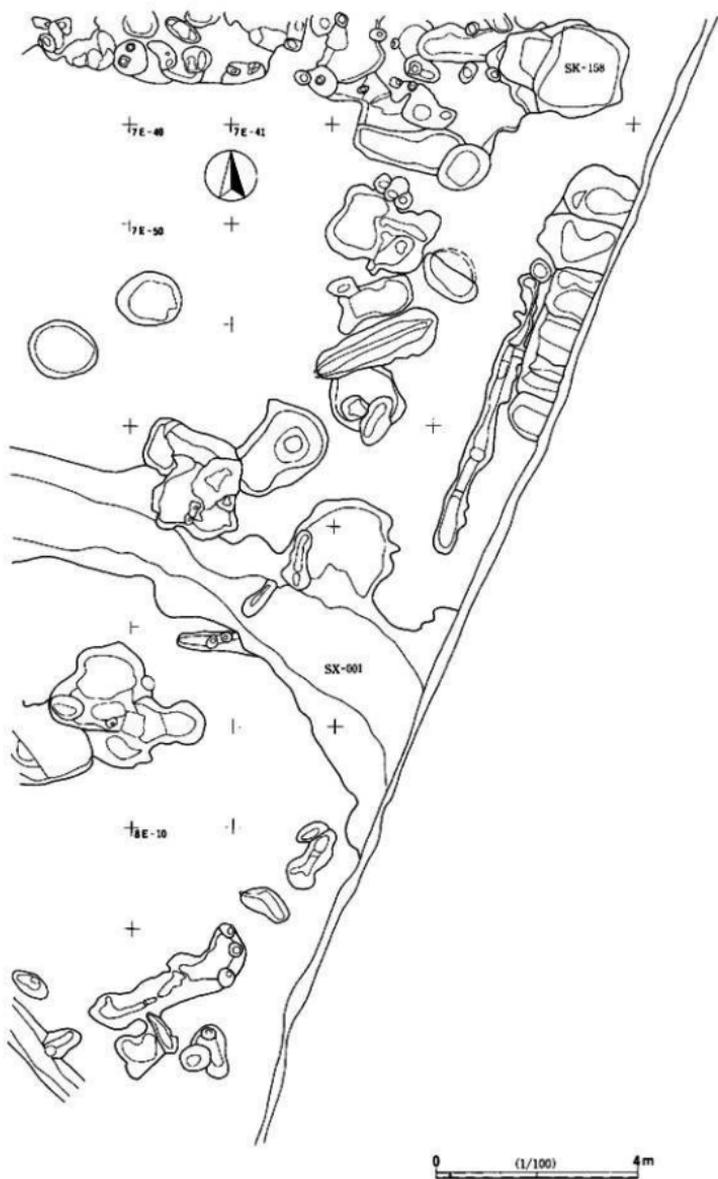
第94図 SK-191出土遺物



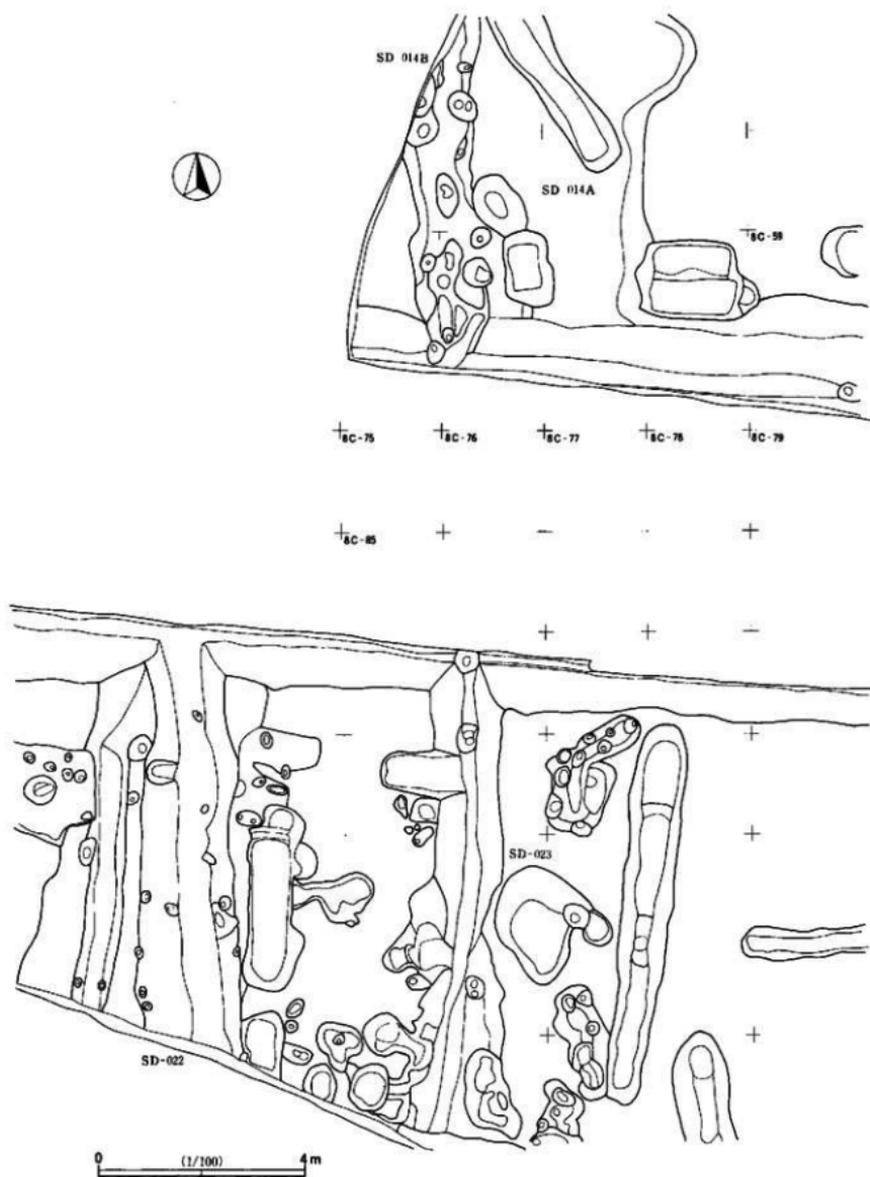
第95圖 土坑分布圖 ⑬



第96圖 土坑分布图 ⑭



第97图 土坑分布图 ⑬



第98图 土坑分布图 ⑬

から銭貨1点が出土している(第94図)。銭種は「開元通寶」である。わずかに欠損部が認められるが、保存状態は良好で、銭文も鮮明である。

SK-232(第97図参照)は7D-99・7E-90に位置する土坑で、形態は明瞭でない。ここでは検出面に近いレベルで焼土と骨片が検出された。焼土は直径30cmの範囲に認められ、その中に炭と骨片が散在していた。

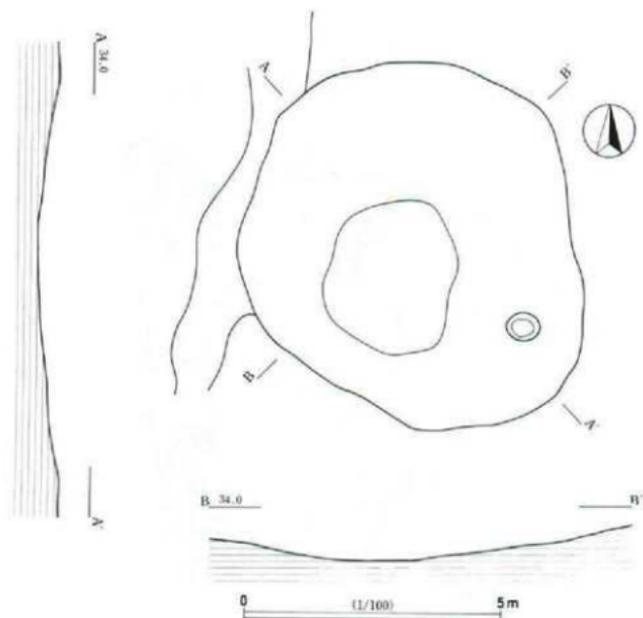
5 播鉢状遺構・井戸状遺構

土坑とした遺構より大型であるが、掘り込みの輪郭が明瞭ではなく、緩やかに傾斜して底面に至る遺構を、仮に播鉢状遺構と呼ぶことにし、8基をこの遺構として扱った。8基の中には後述の井戸状遺構に含めた方が適切な遺構も認められるが、遺構の先頭番号の混乱を避けるため、変更は行わないことにする。また、先頭記号は土坑と同様のSKを用いたが、深さを有するため井戸状遺構と呼んだ遺構が2基存在する。

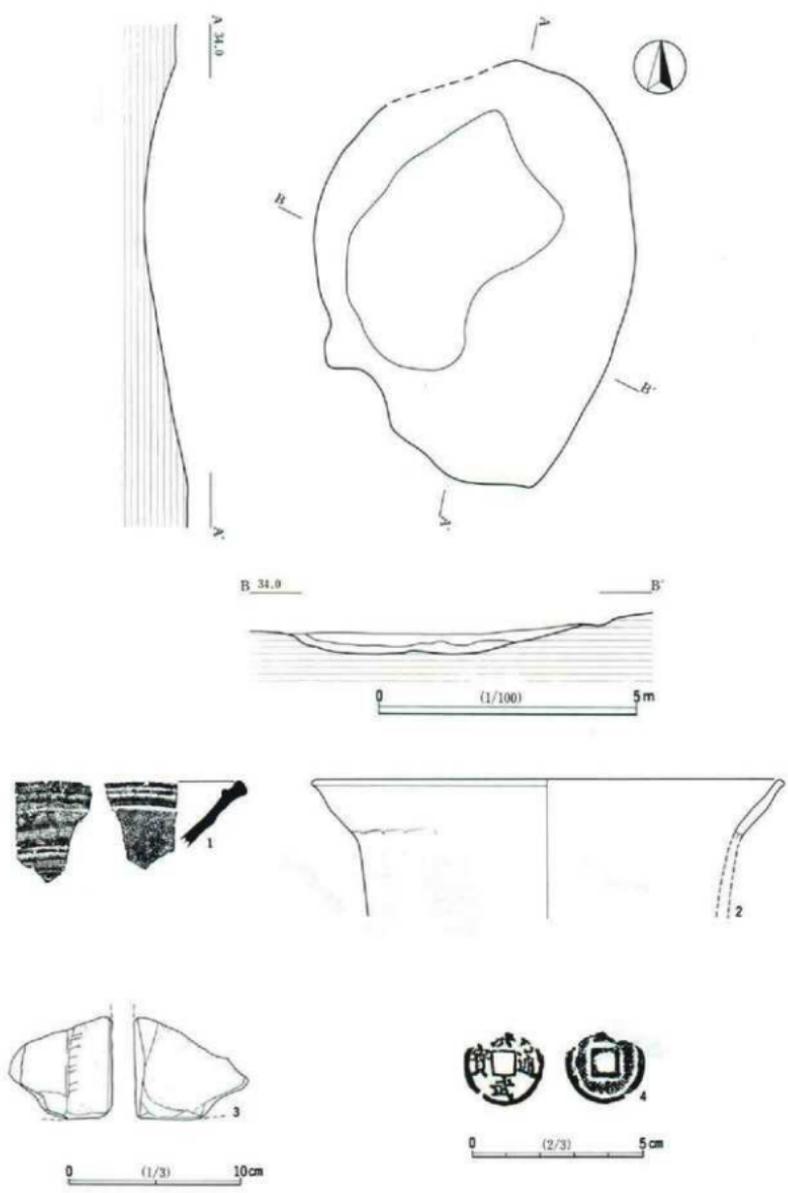
SE-001(遺構：第99図 図版25)

3E-68・69・78・79・3F-60・70を主に位置している。7.5m×6.7mの規模の略円形の平面形を示し、中央部に向かって緩やかに下降していく。検出面からの深さは0.4m～0.8mである。底部までの途中に段状の施設は存在せず、ピットが1か所認められ、粘土層の中に底面が設定されている。

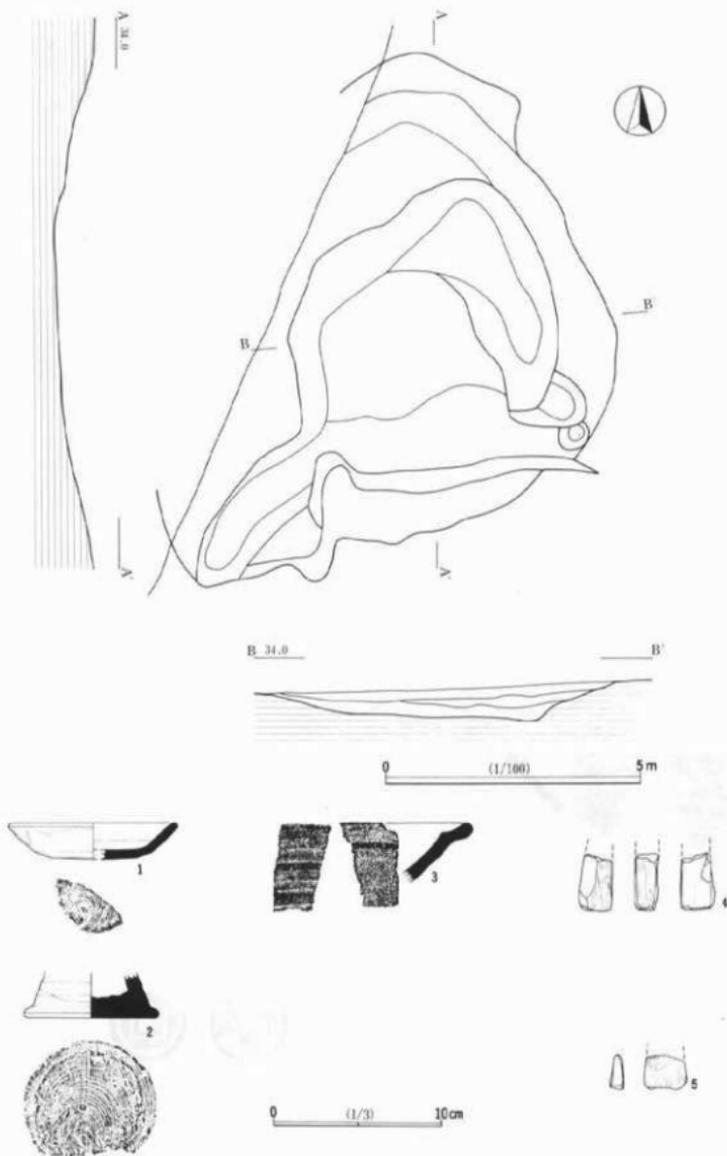
覆土は粘土を含む黒色土で、ロームブロックも認められる。



第99図 SE-001



第100図 SE-002と出土遺物



第101図 SE-003と出土遺物

人工遺物は土師質土器片1点と陶器の細片が3点出土したにとどまる。また、西側の傾斜部底面の2か所から、馬歯が出土している。

SE-002 (遺構：第100図 図版26 遺物：第100図 図版46)

SE-001の南西側の、3E-87・88・97・98を主に位置している。形態は楕円形で、長径8.0m、短径6.5mの規模をもつ。周囲から緩やかに傾斜して底部に至るが、途中に階段状のテラスが形成される箇所も存在する。検出面から底面までの深さは0.5m～0.9mである。

覆土は粘質土や山砂を含む暗褐色土である。

規模を有する割に遺物量は少ない。種類と点数の内訳は、土師質土器片9点(内鍋の破片5点)、陶器破片4点、青磁細片1点、砥石1点、銭貨1点、礫19点と、ほかにスラグがある。第100図1は瀬戸産と考えられる播鉢の口縁部である。体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部の内側に突起が巡っている。2は在地産の土師質土器で鍋になるだろう。内外面に煤が付着して表面は黒色を呈する。3は砥石の欠損品である。表裏2面に使用痕跡が残る。本来は大型の砥石であったと思われる。4の銭貨は欠損部が存在するが、銭種は「洪武通寶」である。

SE-003 (遺構：第101図 遺物：第101図 図版40・42・44)

SE-002の南西側に所在する。4E-44・45・54・55を主に位置し、調査区外に含まれる部分もある。したがって、形態について明確にはならないが、検出範囲から直径10m以上の規模であることが推測される。南北方向及び西側からは緩やかに傾斜して底面に至るが、それに比して東側は急傾斜で底面に下降している。深さは0.7mである。

覆土は山砂を含む暗褐色土で、底面の直上に堆積する土はやや粘質で、炭化物が少量含まれている。

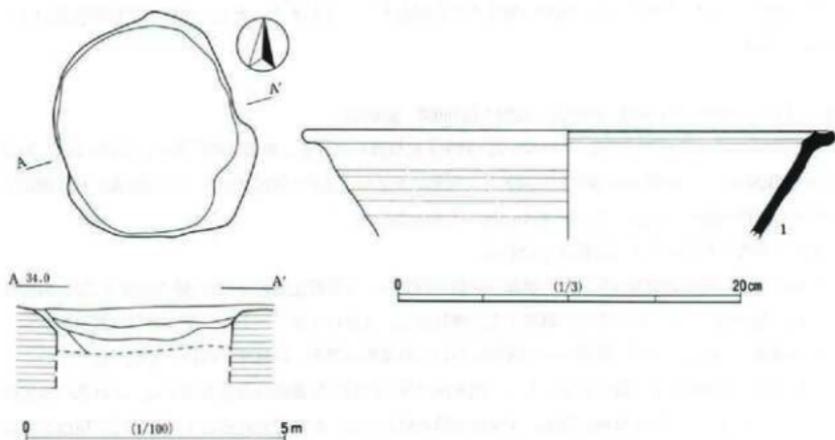
出土遺物は、土師質土器破片4点、陶器破片9点、砥石2点、礫2点と弥生土器の破片2点等が出土している。第101図1は4分の1の破片から復元した瀬戸縁軸小皿である。底面に回転糸切りで生じた凸部が残り、体部が短く開きながら立ち上がる。内面体部の中位から外面の口縁部にかけて、薄緑色に発色している灰軸が施されている。2は瀬戸産の花瓶の脚部である。安定した底部をつくり脚部に続いていく。一部に灰軸を施した様子が認められる。底径は外郭で8.0cmを測る。3は瀬戸産と思われる播鉢の口縁部破片で、内外面に鉄軸が施されている。4・5は砥石の欠損品である。

SE-004 (遺構：第102図 遺物：第102図 図版42)

SE-003の南西側の4E-83・84・93・94を主に位置している。平面形は楕円形を呈し、長径4.1m、短径3.5mの規模を有する。調査開始段階では、播鉢状遺構と考えられたので、遺構の先頭記号にSEを用いた。しかし、掘り込みが垂直に近く、深さも1m以上あり、しかも調査中に水がわき出したため、底面の確認も不可能になってしまった。結果的には井戸状遺構に類似する遺構になってしまったが、遺構番号の変更を行っていないので、ここで取り上げておくことにした。

発掘可能であった範囲での覆土は、ロームブロックが多く認められ、粘土も含まれる黒褐色である。

出土遺物の内訳は土師器片2点、土師質土器片11点、陶器片7点、礫1点である。図示可能な遺物は1点である。第102図1は瀬戸折縁深皿である。体部は直線的に開き、口縁部の上面に小突起が巡る。内外面



第102図 SE-004と出土遺物

にくすんだ黄緑色の釉が施されている。

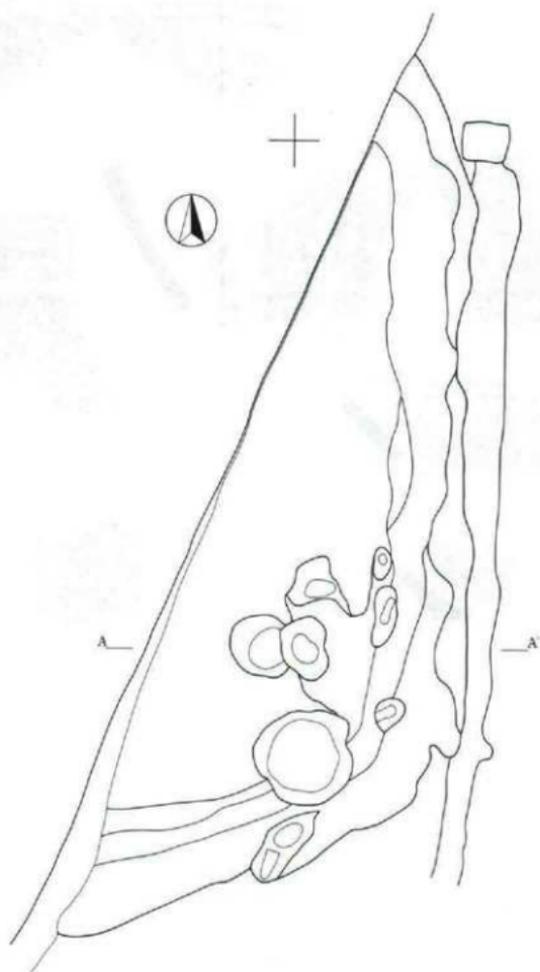
SE-005 (遺構：103図 遺物：第104図 図版41・44)

5D・5E区に検出されている。西側が調査区外に含まれ、全体を発掘した訳ではないが、今回掘鉢状遺構とした中で、最も規模を有することは明らかである。検出した範囲で南北方向に18m、東西方向に9mを測る。周囲から途中で段を設けながら下降して底面に至る。底面の南東側に土坑が集中して存在するが、他は比較的平坦に設定されている。検出面から平坦な底面までは1.2mを測る。断面はできないが、西側に大きく続くようであれば、台地整形を行って区画をつくっている可能性も高い。

覆土はローム粒やロームブロックを多く含む黒褐色土・暗褐色土で、下層には砂が多く含まれている。

遺物は覆土中から数多く出土した。その内訳は、縄文土器片4点、土師器片15点、土師質土器片29点、陶器片43点、青磁破片2点、羽口片15点、スラグ、砥石4点、縄文時代石斧1点、礫25点である。縄文時代等の遺物が混ざるが、主体は陶器になっている。また、かなりの細片になって出土した羽口やスラグが、中世の所産になる可能性もあるが、断定的な状況ではない。

第104図1は土師質土器である。4分の1が遺存し復元口径10.4cm、器高2.4cm、底径6.8cmになる。内面に油煙の付着が認められることから、灯明皿として使用されていたことが推測される。2は瀬戸掘鉢である。体部は直線的に開き、口縁部を短く内側に折り返している。3は備前掘鉢である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は面取り状に整形され、内側をつまみ上げるように終わらせている。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好で締まった感じを受ける。なお、備前製品はこの1点のみの出土である。4・5は灰色で、一見須恵器のように見えるが、それほど硬さがない質感を呈する瓦質の掘鉢である。在地産の可能性が高いが、産地の比定については保留したい。6は口縁部を大きく折り返している常滑甕で、縁帯の幅は3.5cmである。色調は褐色である。7は復元底径13cmになる常滑甕の底部である。8は土師質土器の鍋である。口縁部の一部と胴部の4分の1が遺存する。復元口径は29.0cmになる。器高は推定で17cm前後で

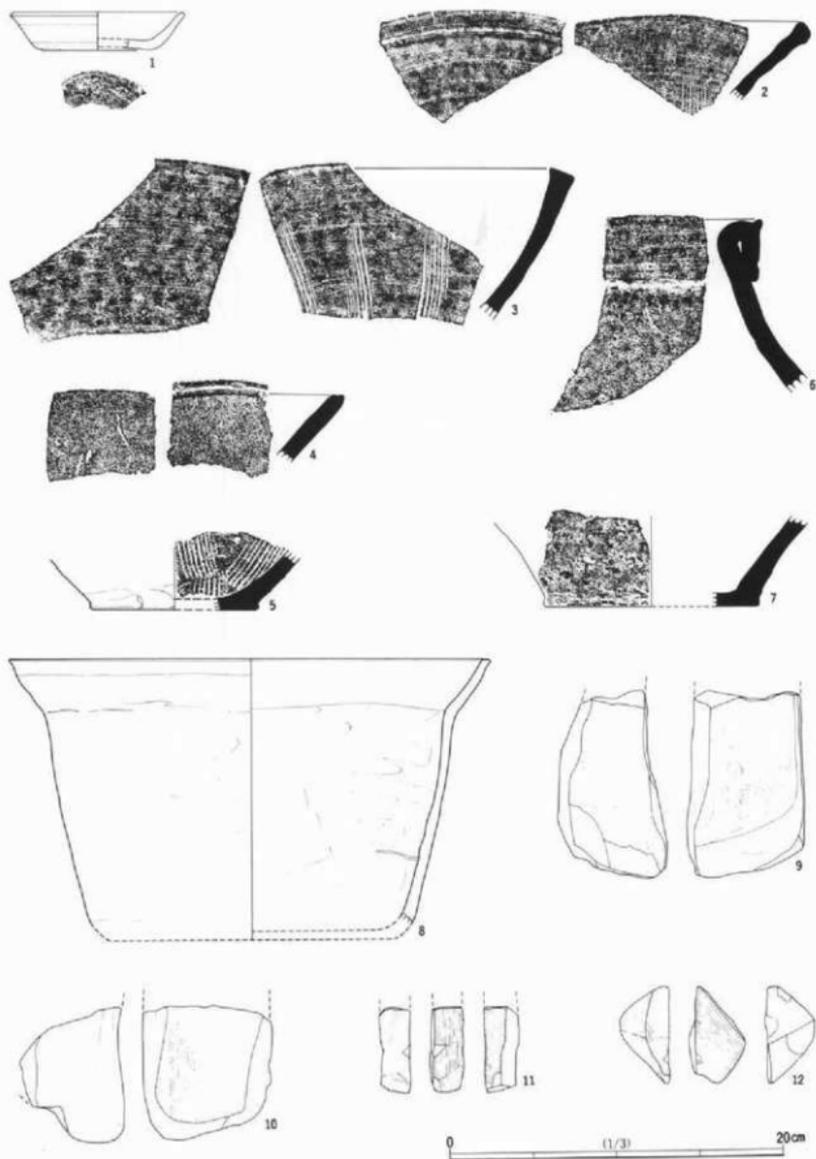


A 35.0 _____ A'



0 (1/100) 5m

第103図 SE-005



第104図 SE-005と出土遺物

ある。胴部はわずかに開きながら立ち上がり、上位で口縁部に移行する。胎土に石英粒が認められ、煤が付着しているため、色調は黒色を呈する。焼成は普通である。

9～12は砥石である。9～11は欠損品で、12はかなり使い込んだものと思われる。

SE-0006 (遺構：第105図 遺物：第105図 図版43・44)

SE-0005の南側に隣接し、7.5m×4.0mの規模をもち、深さは0.4mを測る。東側からはやや傾斜がきつく、そして西側からは緩やかに傾斜して底面に至る。底面に施設は認められず、比較的平坦な状況になっている。

遺物は細片となったものが覆土中から出土した。内訳は以下のとおりである。土師器片17点、土師質土器片15点(内鍋の破片5点)、陶器片23点、青磁破片1点、瓦片1点、砥石1点、不明石製品1点、礫19点、スラグ等で、近世に比定できる陶磁器も出土している。

第105図1は4分の1が遺存する生産地不明の皿である。おそらく近世以降に位置付けられよう。復元口径12.4cm、器高2.5cm、底径7.3cmである。2は在地産土師質土器の鍋の口縁部である。3は瀬戸播鉢の口縁部で、端部を内側に折り返して終わらせている。4はスタンプ状の石製品で、表面に浮き彫りが施され、裏面に縦方向2条とその直交方向に3条の刻みが認められる。5は砥石の欠損品である。

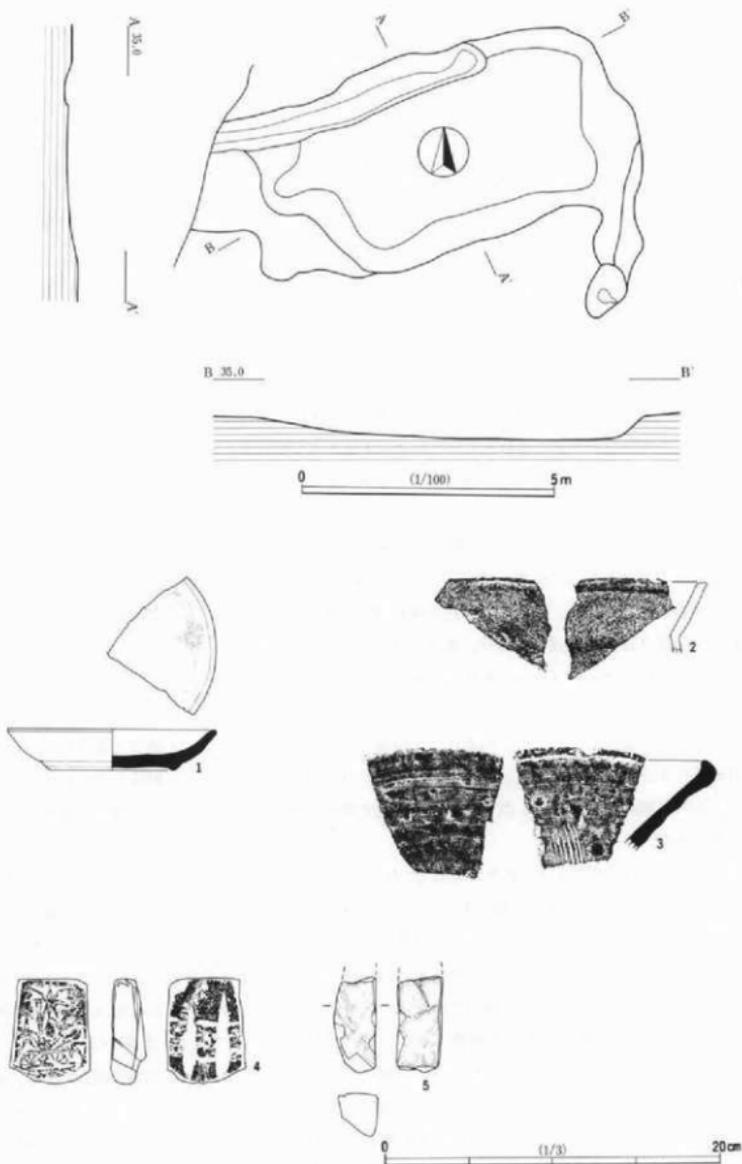
SE-0007 (遺構：第106図 図版26 遺物：第106図 図版42・47)

6Dから6E区にかかって位置している。直径8.5m内外の円形の平面形をもち、周囲から傾斜して底面に至る。傾斜面の途中には、小土坑の存在や傾斜角度の変化が認められ、中央部が最も深くなっている。検出面からの深さは1m～1.8mを測り、底面にはビット等の施設は認められない。

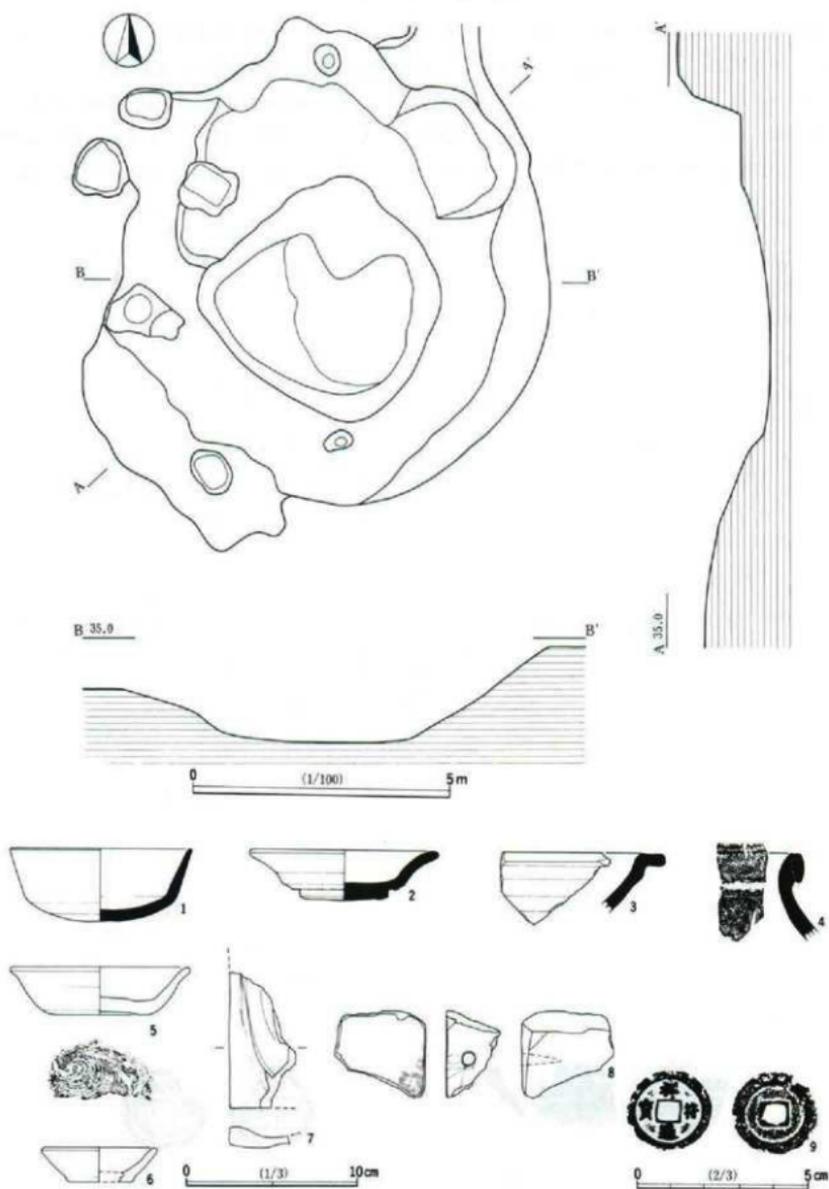
覆土はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土が主で、それらの間に粘土が主体になる層が認められる。

出土遺物は多時期にわたる。その内訳は、土師器片21点、須恵器片5点、土師質土器片13点、陶器片44点、青磁破片4点、白磁破片1点、不明土製品破片6点、銭貨1点、スラグ、剥片2点、石皿片1点、碗片3点、不明石製品1点、砥石1点と礫がある。縄文時代の遺物から中世(近世)の遺物が混在するが、主体は中世である。

第106図1は須恵器の杯である。底部は丸底で、体部は開きながらやや長く立ち上がる。復元口径10.7cm、器高4.2cm。底部は回転ヘラ削りが施されている。7世紀後半以降の所産と考えられる。2は瀬戸腰折皿である。体部下位に鋭い稜が巡り、体部から口縁部にかけて外反する。高台は削り出してつくられ、その周辺部を除き、くすんだ黄緑色を呈する灰釉が施されている。3分の1が遺存し、復元値で口径11.2cm、器高2.9cm、高台径5.2cmを測る。3は瀬戸折縁深皿の口縁部である。内外面に2と同質の灰釉が施されている。4は折り返された口縁部をもつ常滑壺である。5は土師質土器の杯である。体部下位に丸味をもたせ、口縁部はわずかに外反する。2分の1が遺存し、復元口径10.6cm、器高2.8cm、底径5.4cmになる。焼成は普通で色調は黄褐色である。6は復元口径6.4cm、器高2.0cm、底径3.8cmである。7は碗の破片である。平面形は長方形であったと考えられる。8は不明石製品の欠損品である。良好に研磨が施された面が一面残存し、また8mmの穿孔途中の孔が存在する。9は「祥符通寶」である。銭文は鮮明であるが、外縁部に欠損が認められ、全体の状態は脆く感じられる。



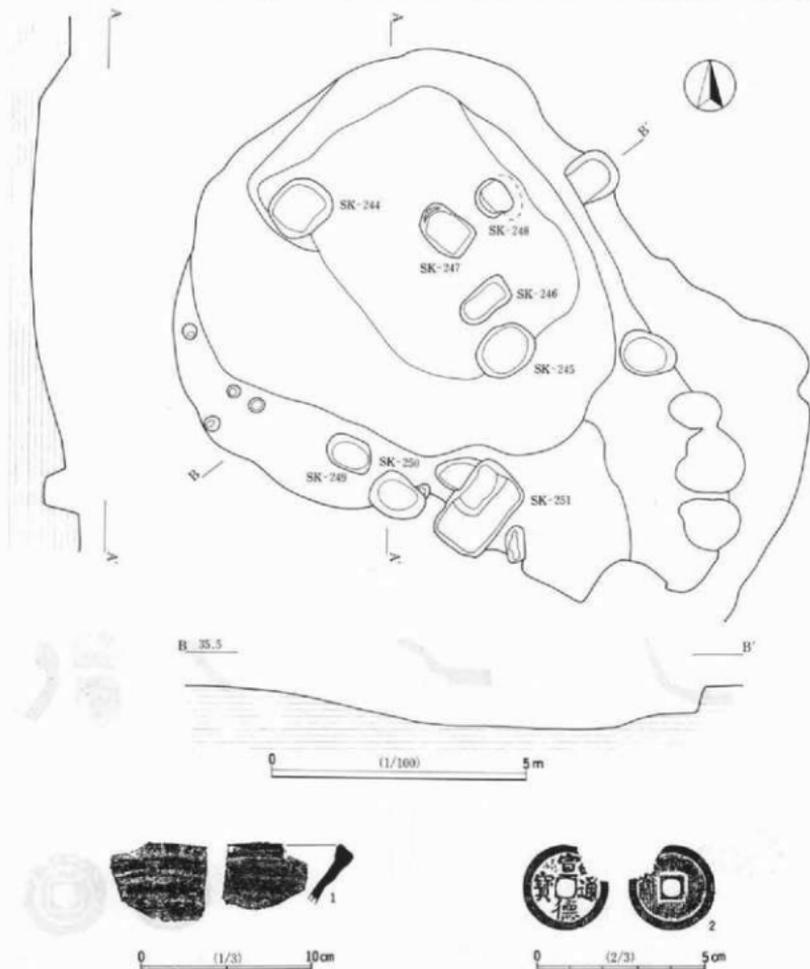
第105図 SE-006と出土遺物



第106圖 SE-007と出土遺物

SE-008 (遺構：第107図 図版26 遺物：第107図 図版47)

SE-007の南東側に接近して所在する。北東-南西方向に9m、北西-南東方向に12m内外の規模をもつ。南東側は地下式土坑のSK-240を初めとする土坑が存在し、遺構の限界の確定が難しい。その他の周辺からは、緩やかに底部に下降していく。検出面からの深さは0.5m~1.0mである。底面と認識できる範囲は5.5m×4.0mの規模を有し、5か所に土坑が存在する。この土坑にはSK-244~248の遺構番号をつけたが、SE-008に関連する土坑とみられる。このうちのSK-248は、底面から50cmの深さ



第107図 SE-008と出土遺物

があり、さらに横に掘り込んで、小規模な室状の空間をつくっている。他の4基はいずれも平面形が楕円形を呈し、長径が1.1m前後になる。

覆土は3層に分けられる。いずれもローム粒やロームブロックを含む暗褐色土で、下層にいくにしたがい、その含有が多くなっている。

遺物の量は少なく、保存状態の良いものも認められず、すべて破片資料である。内訳を示すと、土師器1点、土師質土器片5点、陶器片17点、青磁片1点、白磁片1点、銭貨1点、硯1点、磁石1点、礫5点となる。第107図1は播鉢の口縁部である。端部は内側に折られて終わっている。表面は銀色と黒色が混ざり合った様な色調を呈する。2は一部に欠損がある「宣徳通寶」である

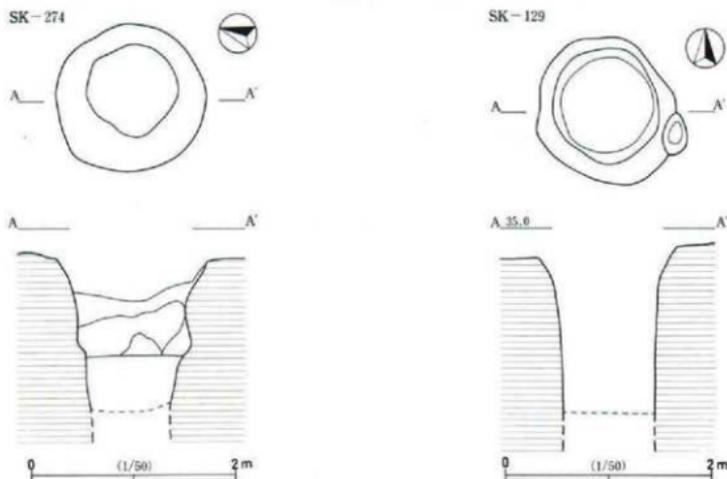
SK-274 (遺構：第108図 図版27)

井戸状遺構として扱った遺構2基のうちの1基で、北調査区で検出された。位置は斜面部のI b-54で、溝状遺構SD-028と重複する。平面形は略円形で、直径は1.5mを測る。検出面から1.2mの下位で一度膨らんで、その直下から直径が1.1mに狭まっている。1.6mまで掘り下げた時点で、底面の探索をボーリング棒を用いて行った。その結果、さらに1m以上深くなることが明らかになった。そこからの掘り下げは実施していない。

発掘した範囲では、井戸枠など井戸に付帯すると考えられる施設は存在しない。また、遺物も実測可能なものは出土していない。

SK-129 (遺構：第108図)

南調査区で検出した井戸状遺構である。位置はSE-007とSE-008の間である6E-42・52であ



第108図 井戸状遺構

る。検出面では平面形は1.3m×1.5mの楕円形であるが、0.5m下位からは直径0.9mの円筒形で、真っ直ぐに下降していく。1.7mまで掘り下げ、そこでボーリング棒による底部の探索を実施した。その結果さらに1m以上は深くなることが判明した。したがって、深さについては2.7m以上であることは確実となり、調査はそこまでとした。発掘を行った範囲では、井戸に伴うような井戸枠などの施設は発見されなかった。

遺物は陶器片5点と土師質土器片1点が出土したが、いずれも小破片である。

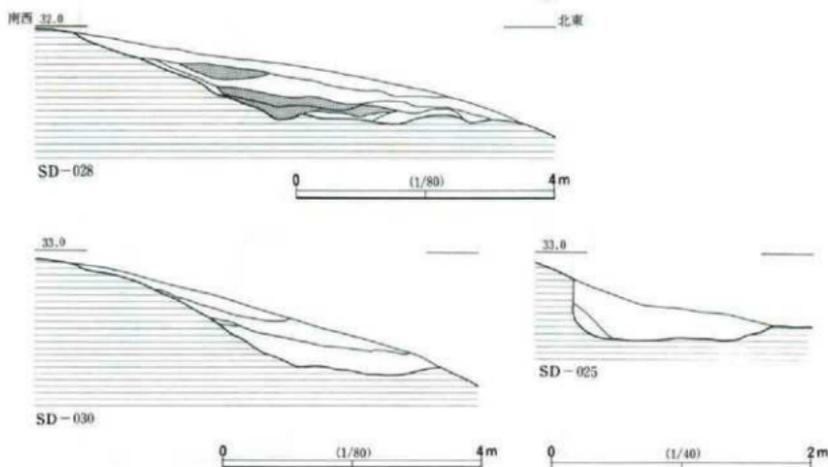
6 溝状遺構

北調査区の溝状遺構(遺構：第109・110図 図版27・28)

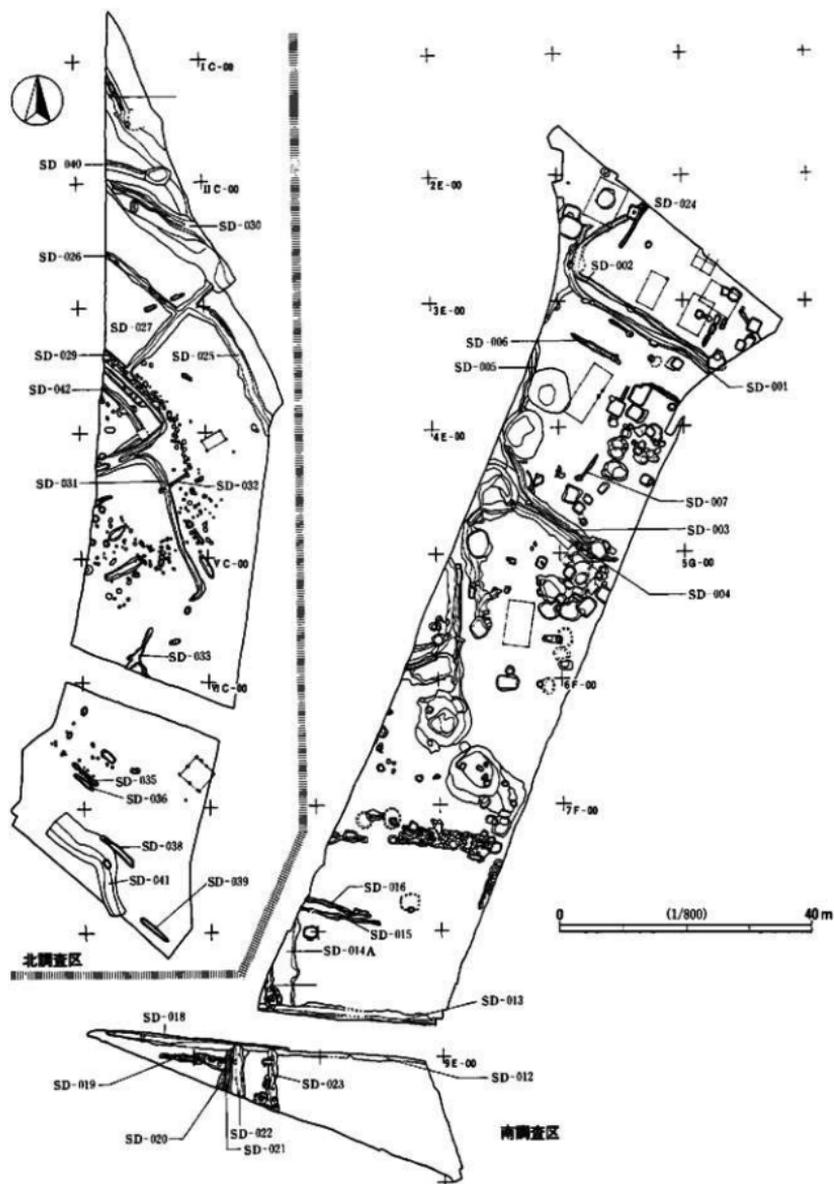
北調査区で検出したSD-028・040・030・025・026は、等高線に沿うような方向で伸びている。方向は、北西-南東で、並行して存在する。これらの溝状遺構が所在するのは傾斜面の途中であり、谷側の上端が不明瞭になっている。また、底面が平坦になっている部分が多く認められることから、道として使用されていた可能性が高い。SD-028は、土層断面の観察に基づくと、硬質になる面が4面認められる(第109図)。まず底面が硬質で、その上の堆積土中に硬質層が3枚確認できる。この硬質な層の形成は、踏み固めによると考えられ、少なくとも4回の構築が実施されたものと推測される。SD-030も底面の幅が2.2m~2.5mと広く、比較的平坦なことから、道として機能していたことがうかがわれる。SD-025は、台地側を急角度で掘り込んで、幅1.2mの底面を平坦に構築しているので、機能は上述の遺構と同様と思われる。

SD-029は、途中まで上記の遺構と並行して、直角に近い角度で方向を南西に変化させている。この溝状遺構の北西に沿ってピットが並行して検出されている(図版27)。これは柵列の痕跡とも考えられるピットで、何らかの施設が存在していたことが推測される。

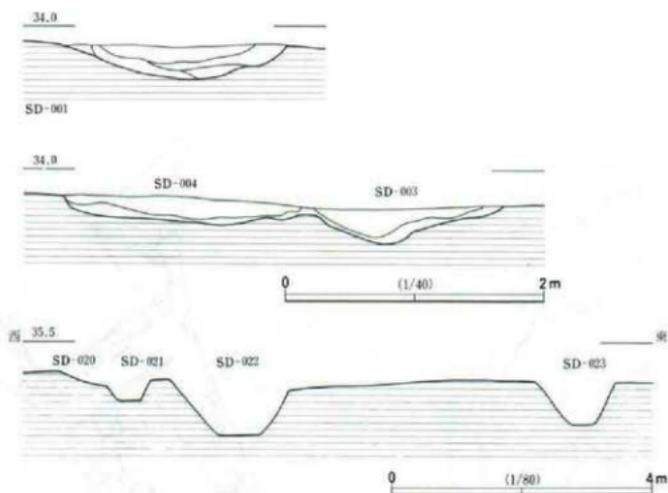
SD-041は、上端の幅が2.4m~4.8mと広く、断面形はUの字形を呈し、0.8m~1.0mの深さがある。



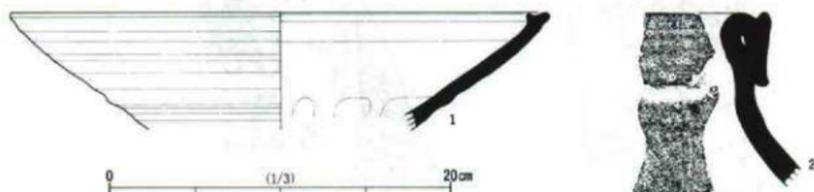
第109図 北調査区の溝状遺構断面図



第110図 溝状遺構分布図



第111図 南調査区の溝状遺構断面図



第112図 溝状遺構出土遺物

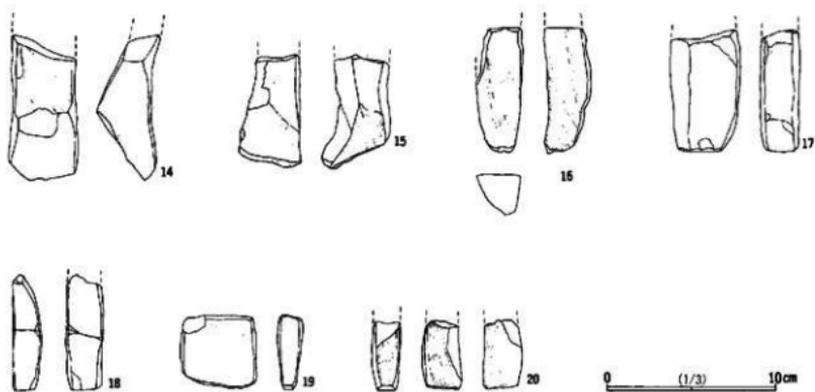
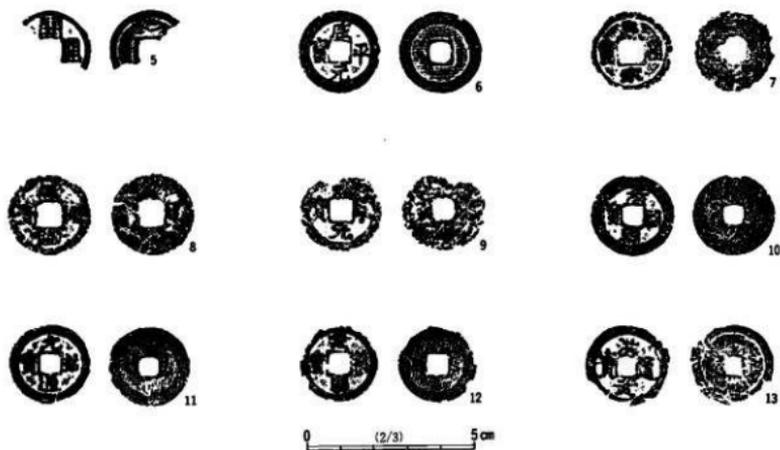
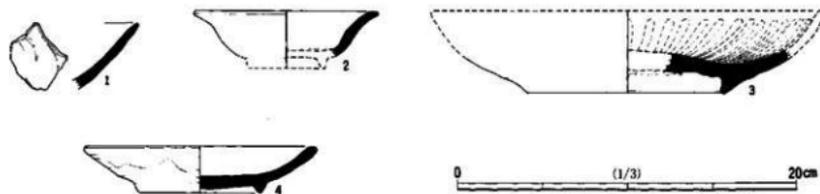
全掘は行っていないが、今回の調査区で検出した溝の中で、最も規模を有している。検出した範囲では蛇行する状況が認められるが、南調査区側では検出されていない。溝の覆土の堆積状態から中世以前の溝の可能性も高いが、具体的な時期は明らかにならない(図版28)。

南調査区の溝状遺構(遺構：第110・111図 図版28)

南調査区においても全体が明らかになった溝状遺構は存在しない。いずれも調査区外に続く状況が認められる。SD-001・002は、南東方向から北西方向に走り、途中から弧を描くように北東方向に向きを変化させていく。深さは25cm前後で断面形はUの字形である。この溝と主要地方道千葉鴨川線の中間地域に、掘立柱建物跡が多く分布する(図版28)。

SD-006も深さ10cmの浅い溝であるが、SD-007と一体となって掘立柱建物跡のSB-010を囲んでいるかのような状況が看取される。

SD-003・004の2条も、主要地方道千葉鴨川線と並行し、SD-001・002・006と同様な方向で伸びている。深さはSD-003が30cm、004は20cmで、断面形は前者がUの字形、後者は底面がやや平坦になる部分が存在する。



第113図 遺構外出土遺物

土坑の説明の際に触れたが、7区の20台を東西に走る溝状遺構と小ピット列は、何らかの境界設定を目的に存在していた可能性がある。土坑を初めとする中世の遺構の分布は、この溝・ピット列の北側で濃密であり、対して南側は閑散とした状況となり、特に土坑の在り方に顕著な違いを認めることができる。小ピット列は柵列の痕跡であろう。

SD-022・023は並行して、ほぼ南北に走る溝状遺構である。022は幅が1.85m前後、深さが0.8m、023は幅が1.3m、深さ0.6mで、掘り方がしっかりしており、断面形態は逆台形を呈している。両者の間隔は3.8mを測る。なお、荒久(1)の調査において、この溝の続きと考えられる遺構が検出されている²⁾。

出土遺物(第112図 図版42・43)

溝状遺構から出土している遺物は、縄文時代から中世にわたるが、主体は中世の土器類である。しかし、小破片が大多数を占め、図示可能なものは少ない。

第112図1はSD-002から出土した瀬戸折縁深皿である。体部は直線的に開き、口縁部は折り返されて内側に小突起がつくられる。体部外面の下部に回転ヘラ削りが認められ、内外面の上部に黄緑色の釉が施されている。復元口径は32cm内外になる。2は口縁部が大きく折り返されている常清甕である。口縁部は4.2cm折り返されて終わっている。

7 遺構に伴わない遺物

第113図に遺構外から出土した遺物の一部を示した。1～3は青磁である。1は竜泉窯系蓮弁文碗である。胎土は灰白色を呈し、ややくすんだ緑色の釉が施されている。釉層は0.8mm前後である。2は口縁部がゆるやかに外反している杯である。透明感のある青緑色の釉が施されており、上質な製品であったと思われる。釉層は0.9mm前後である。3は内面に蓮弁文を配した盤である。釉はくすんだ青緑色で、釉層は1.0mm前後になる部分が多い。

4は瀬戸製品と考えられる小皿である。底部には高台が付き、体部はわずかに内彎しながら開き、口唇部を丸く終わらせている。2分の1が遺存し、口径13.8cm、器高2.8cm、高台径7.1cmを測る。内面全部と外面の体部上半にくすんだ黄緑色の釉が施されている。

5～13は銭貨である。5は3分の1の遺存にとどまるが「開元通寶」である。6は「咸平元寶」である。7・8は「皇宋通寶」である。7の腐食はかなり進んでおり、表面の状態が不良になっている。9の保存状態も悪く、銭文が明確に判読できなくなっているが、「熙寧元寶」であろう。10・11は「元祐通寶」である。10は外縁部の一部が欠損する。書体は10が篆書で、11が行書である。12は鋳化が進行して、外縁部に欠損が生じているなど、状態が不良で銭文も不明瞭になっているが、篆書の「元符通寶」であろう。13は外縁部に欠けている部分があるものの、銭文の判読が可能な状態を保っている。初鋳年が1368年になる「洪武通寶」である。

14～20は磁石である。欠損か、あるいは小型になるまで使い込んで、それ以上の使用が困難となって廃棄されたものと考えられる。いずれも使用面は2面以上に認められる。

第2節 古代の遺構と遺物

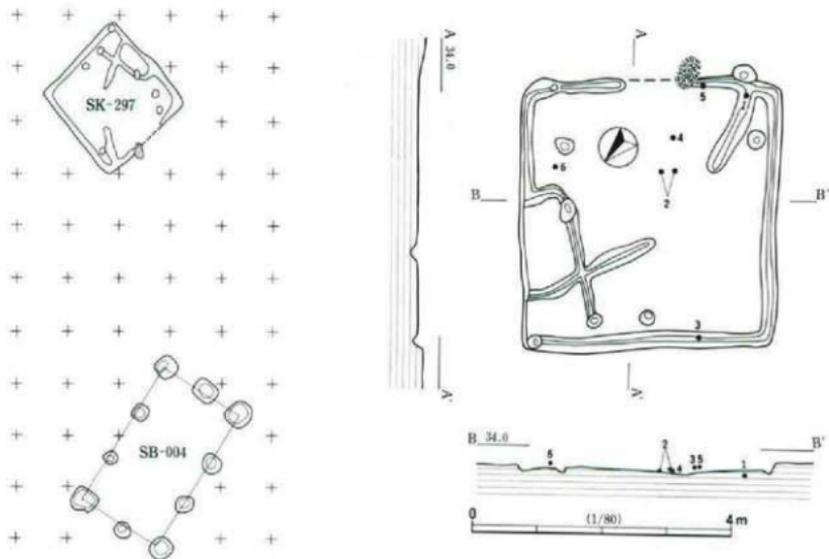
今回の調査区内で発見した古代の遺構は、竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡1棟である。その両者は北調査区の4B・5B区に比較的近接して位置している(第114図)。

南調査区に隣接する荒久(1)遺跡では、奈良・平安時代に比定できる竪穴住居が2軒検出されている²⁾。そこから考えると、当調査の南調査区においても、かつて奈良・平安時代の竪穴住居跡や、掘立柱建物跡が存在していた可能性も否定はできない。しかし、該期に比定できる遺物が見当たらないことから、周辺に大規模な集落の存在を想定することは、現状からは難しいように思われる。なお、南調査区での経験から、方形の土坑であることも考えられたので、遺構番号の先頭記号は土坑のそれを用いた。

SK-297(遺構:第114図 図版29 遺物:第115図 図版40)

北調査区の4B区に位置し、検出面の標高は33.7m前後である。平面形はほぼ正方形で、北西-南東方向が4.1m、その直交方向に4.0mの規模を有する。遺構の保存状態が不良な上に、竈の構築材を確認し得ないため、その構造の詳細は明確でない。竈は、南東壁の中央から、やや南に寄った位置に焼土が検出されており、これを火床部と判断した。その火床部は、壁から外方に向かって拡がっている状況を見せているので、煙道部を長くつくる構造のものと推測される。

遺構の保存状態が不良とするところは、検出面から床面までの深さであり、2cm~18cm程度を残すにすぎない点である。その壁の下には溝が伴うが、現状では一部が途切れて検出され、全体に巡らされていない。また壁溝から住居の内側に向かって、3条の細い溝が不規則に伸びている。これは、壁から直交方向に延びる、いわゆる間仕切溝とは異なる種類のものと考えられるが、用途は明らかではない。床面の構築

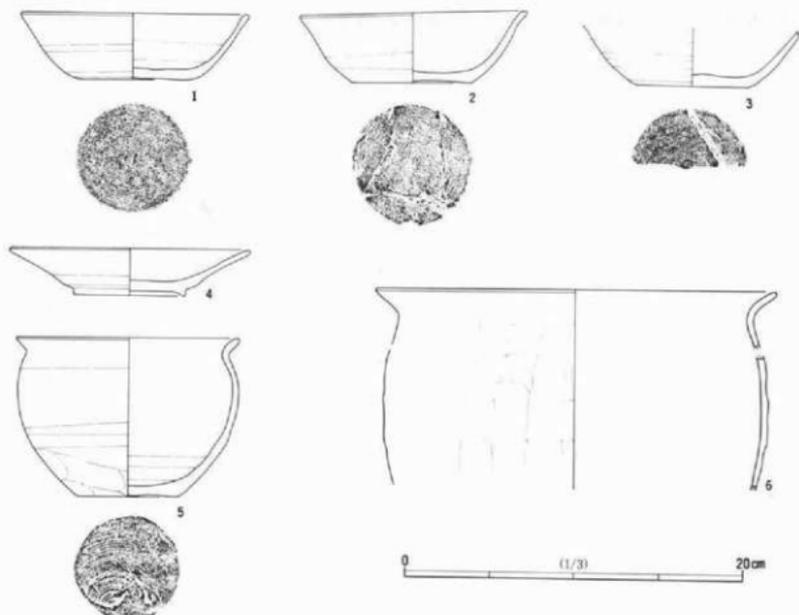


第114図 SK-297

状況は比較的平坦であるものの、踏み固められて硬化した範囲と、そうでない範囲が明瞭にならない。ピットは内部に5か所と、壁に接した2か所に存在する。配置から考えて、支柱穴と断定可能なピットは存在しない。各ピットの性格は確定し難いが、竈が設置されていた壁の対向方向になる、北西壁側中央の内側に存在する小ピットは梯子穴と考えられる。

出土遺物は土師器の破片70点、須恵器の破片4点、礫3点である。そのうちの図示した6点は保存状態良好な個体で、床面付近から出土している。いずれも土師器で、本住居に伴うと考えられる。

第115図1は完形の杯で、口径13.5cm、器高4.0cm、底径6.5cmである。胎土にスコリアが認められ、焼成はやや不良で、現状では橙褐色を示す。底部及び体部下端は回転ヘラ削りである。2は口径13.6cm、器高4.2cm、底径7.2cmである。胎土はやや砂質で焼成も不良である。色調は明るい褐色を呈する。底部と体部下端の調整は1と同様である。3は口縁部を欠損する杯である。底径は6.5cm、胎土、焼成、色調、及び調整は2と同様である。4の皿は体部の一部と底部が完存する。底部には貼り付けの低い高台が付き、復元口径14.2cm、器高2.8cm、高台部での底径6.6cmである。胎土にはスコリアが含まれ、焼成は幾分甘く、色調は明褐色を呈する。5はロクロを用いた調整が施された小型壺である。胴部中位以下は遺存良好で、口縁部は3分の1が残る。復元口径13.2cm、現存器高9.5cm、底径6.0cmである。安定した底部をつくり、胴部に丸みを帯びる張りをもたせ、短く口縁部を外方へ広げて納めている。胴部に微弱なロクロ目があり、下部には横から斜方向の、手持ちヘラ削りが加えられている。底部は回転糸切り無調整である。6は復元



第115図 SK-297出土遺物

口径が24cm内外になる土師器の甕である。器厚が薄く保存状態は不良である。胴部には縦方向のヘラ削りが認められる。

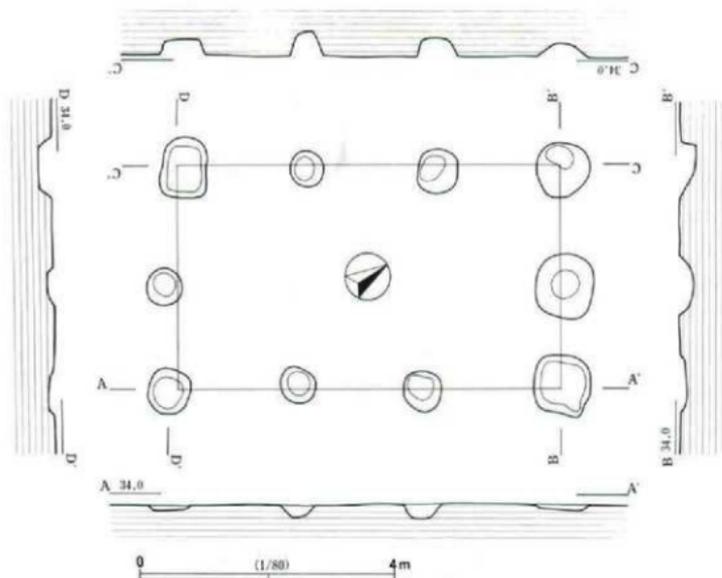
以上のように、土師器の杯が主体であり、皿を伴うことなどから考えれば、本住居は9世紀の中葉に比定できるであろう。

SB-004 (遺構：第116図 図版29)

第114図の位置関係のとおり、本掘立柱建物跡は北調査区の5B区に位置している。北西に所在するSK-297とは7mの間隔を置いて存在している。周辺に多数の小ピットが検出されたが、建物を構成する配置には至らない。

建物の規模は3間(6.0m)×2間(3.4m)で、桁行方向をN-31'-Eにとる側柱建物である。桁行の柱間隔は、北西側及び南東側ともほぼ2.0mの等間隔で、梁行方向の柱間隔は1.8m-1.6mとなっている。検出面の標高は33.8m前後であり、掘り方は直径50cm~95cmの円形か隅丸方形を呈し、深さ20~35cmを測る。柱穴の覆土は、黒褐色の粘質の土で、柱痕跡は認められない。

柱穴内から遺物は出土していない。しかし、中世の建物とは掘り方や柱穴配置が異なることや、周辺遺跡に見られる奈良・平安時代の建物跡と共通する特徴、北側に所在する竪穴住居跡と隣接する位置関係などから考えて、SK-297と密接な関係にある遺構と推定することができよう。一応、竪穴住居跡と同年代を考慮しておきたい。



第116図 SB-004

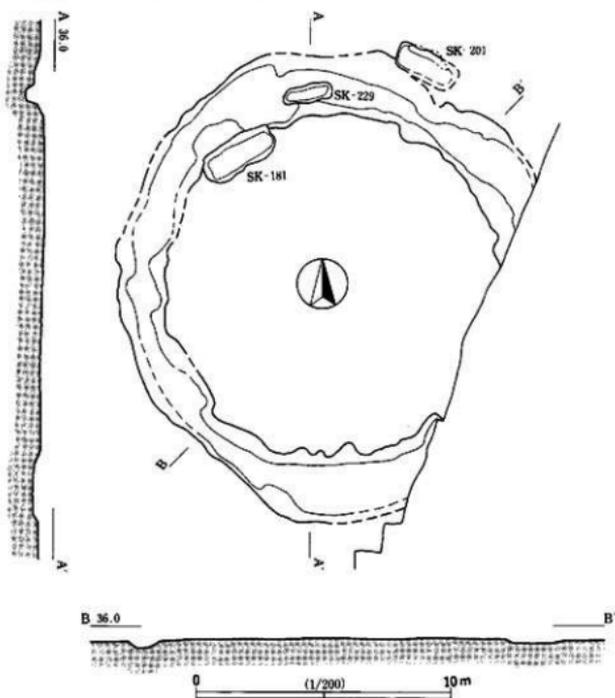
第3節 古墳時代の遺構と遺物

南調査区の7・8区において、円墳の周溝と、円墳に伴うと考えられる埋葬施設3か所を検出した。調査時点、周溝をSX-001と呼び、埋葬施設はSK-181、SK-229、SK-201とそれぞれ番号を付け、その遺構番号で遺物を取り上げた。また、後世の遺構の覆土から、わずかであるが古墳時代の遺物が出土している。

SX-001 (第117図 図版30)

南調査区の7区から8区にかけて位置し、東側の一部が調査区域外に続く。発掘開始前ここに盛土の痕跡は全く認められず、表土を除去して初めて、その存在が明らかになった。地下式土坑SK-231が周溝と重複していることから、中世に盛土が削平された可能性が大きい。また、最近の植木の移植に伴い各所に攪乱が見られ、周溝自体の保存状態は不良である。

検出面での墳丘の規模は、周溝の内径で13m内外である。周溝の幅は1.2m～3.0mと一定せず、深さも最大で80cm程度である。この様な状況は、攪乱を随所に被ったための結果と考えられる。周溝の覆土は次のような2層に分けられる。1層はソフトロームを多く含む黒色土で、2層はロームブロック・ソフトロームを多く含む黒褐色土である(第119図参照)。

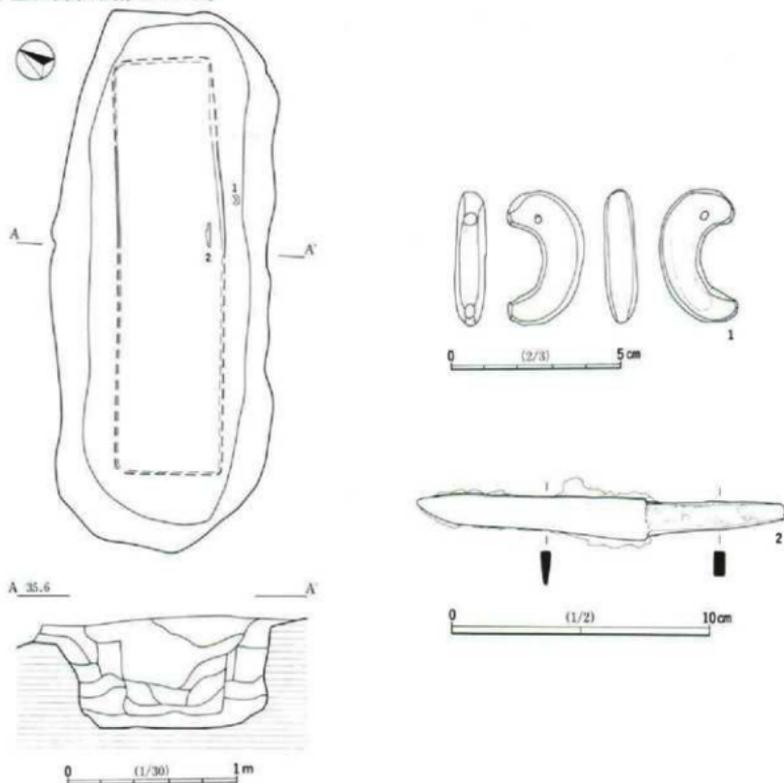


第117図 SX-001

SK-181 (遺構：第118図 図版30・31 遺物：第118図 図版47)

SX-001に伴う埋葬施設と考えられる。位置的には墳丘の北西側に当たり、裾部端部で周溝からわずかに内側である。木棺直葬の施設で、掘り方は3.08m×1.30mの長方形を呈し、長軸の方向はN-55°-Eを示す。掘り方の中央部に2.38m×0.62mの木棺痕跡が検出され、土層断面でもそれを確認することができた。掘り方の底面の上には粘性のある土が置かれ、木棺の周囲はソフトロームや、ロームブロックを含む黒褐色土や明褐色土が交互に充填されている。木棺の内部はローム粒を多く含む暗褐色土や黒褐色土が堆積する。

遺物は木棺の底面と同レベルから、勾玉1点と刀子1本が出土した。出土位置は、刀子が木棺痕跡の内側で、勾玉がやや外側である。1は滑石製の勾玉である。長さ38.0mm、腹部は幅12.3mm、厚さ9.2mmの楕円形に整えられる。頭部の厚さは9.0mmで穿孔は両側から行われている。成形・調整とも比較的丁寧であるが、石材の特質から光沢は発しない。2は鉄製の刀子でほぼ完存する。全体長143mm、刃部長88mmの両関の刀子で、茎に木質が残存している。



第118図 SK-181と出土遺物

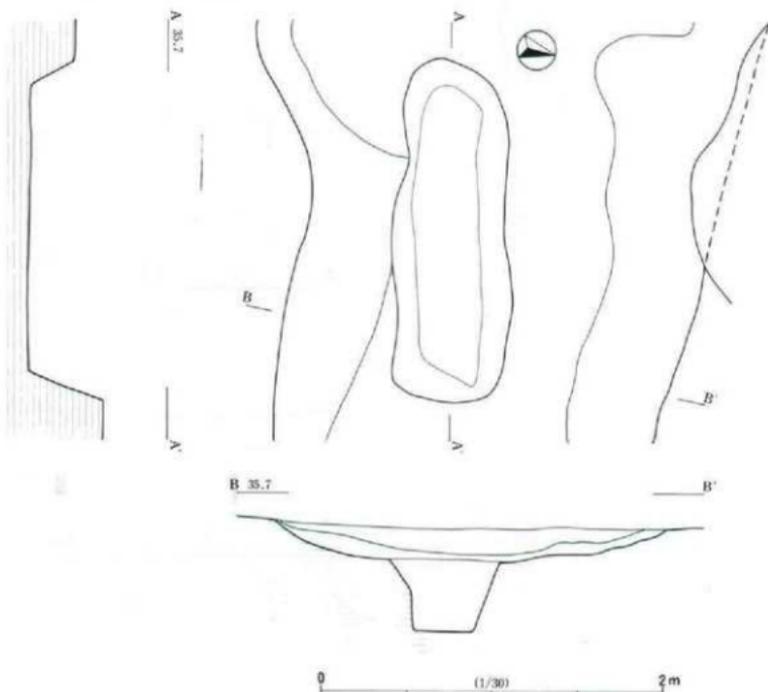
SK-229 (遺構：第119図)

墳丘中央から北北西方向の周溝内に発見された土壇で、SK-181とは1.2mの間隔を置いている。周溝内での位置は底面の中央部からやや墳丘側に寄った所である。掘り方の規模は1.95m×0.68m、深さは0.45m内外になり、長軸の方向は周溝の方向に合せている。平面及び土層断面等の観察からも、木棺の痕跡は明らかにならない。所在位置や規模から考えれば、古墳に伴う埋葬施設の一つと思われる。

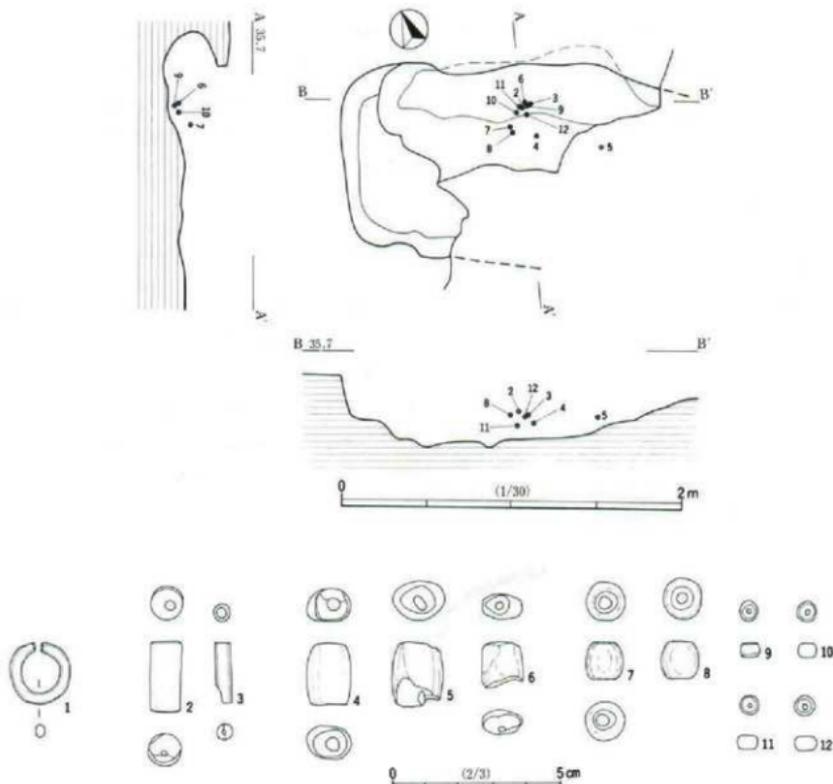
遺物は出土していない。

SK-201 (遺構：第120図 図版31 遺物：第120図 図版47)

SK-229から北東に2.7mの位置で、周溝外縁部に接して検出された。この周辺では後世の攪乱が随所に認められ、遺構の保存状態が不良となっている。本土壇の形態は、周溝外縁側にテラス状の平坦部をつくり、周溝の外方に向けて地下室を設ける、いわゆる有天井土壇である。遺構の状態が良好でないため、規模については明らかにならないが、上面の平面形は長方形になると考えられ、長軸の方向は周溝の方向に合っている。したがって、円墳SX-001の埋葬施設の内の一つになると判断してよいであろう。周溝外縁側の平坦部と地下室部との比高は20cm内外で、地下室部の奥部は丸く掘られている。天井部の残りは悪く、庇状に一部が残存するのみである。



第119図 SK-229



第120図 SK-201と出土遺物

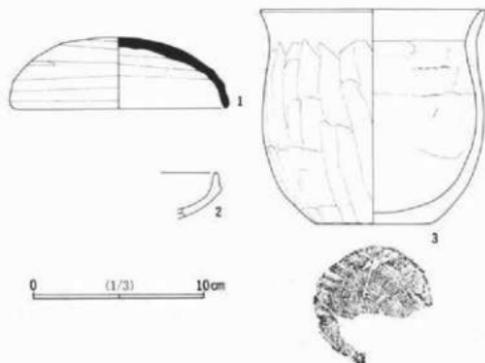
遺物は耳環1点と玉類11点が出土している。これらは平坦部から地下室部への移行部に、平面的にもレベル的にも、小範囲にまとまっており、本土壤に伴うと判断して差し支えない出土状況を呈している。

1の耳環は、腐食のためか黄色を帯びた灰白色を呈し、現状では地の材質、表面の素材とも判然としない。外径は19mmである。2・3はグリーンタフ製の管玉で、濃緑色を呈し光沢を放つ。2は片側穿孔で貫通側に製作後に生じた欠損が見られる。長さ19.6mm、径8.3mm×8.8mm、重さ2.68gである。3は2と同様の石材を用いているが細くつくられる。開始側と貫通側の孔径が異なり、中心を貫く片側穿孔であることが容易に理解できる成品である。製作後の欠損が貫通側に認められる。長さ17.0mm、径4.7mm、重さ0.6gである。4～6の3点は琥珀製の玉である。素材の特性のため、5の保存状態は不良である。4は胴部を楕円形に仕上げ、上下面を平坦に調整し、片側から穿孔を行っている。表面に光沢はなく、色調は淡黄褐色や明褐色である。長さ16.8mm、中央部の径12.5mm×10.1mm、重さ1.42gである。5は取り上げた後、一部が欠損して砕片となり、その部分の復元が困難な状態になった。割れ口の新鮮な面ではいわゆる濃いめの琥珀色の発色が見られる。表面は褐色の中に黄褐色が縞状に入る。現状で長さ17mm、中央部の径14.5mm×10.4mm、重さ1.54gである。6は赤みを帯びた琥珀色で現状でも光沢を放つ。一部に欠損が認められるが、

他は調整が施された状況を残すので、現存の形状が、使用時の最終段階の状態に近いと考えられる。しかし、本来がこの形であったのではなく、再生による結果の可能性が大きい。長さ13.0mm、径13.0mm×6.0mm、重さ0.51gである。7・8は上下に平坦面を作るが、丸玉に近い形態の石製の玉である。穿孔方向は判然としないが、おそらく片側からであろう。表面の色調はいずれも明黄褐色である。7は厚さ10.0mm、径10.6mm、重さ1.18gである。8は厚さ10.0mm、径11.1mm、重さ1.32gである。9～12は白玉である。いずれも上下面が平坦に整えられ、胴部に張りのあるものである。

周溝内出土遺物(第121図 図版40)

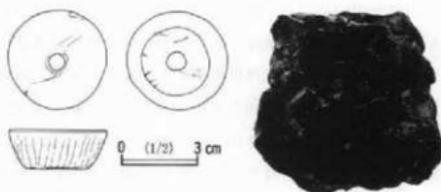
周溝内から出土した古墳時代の遺物を第121図に示した。1は須恵器の杯蓋である。口縁部の一部を欠損するのみでほぼ完形に近く、口径12.5cm、器高4.3cmである。胎土に石英粒が多く認められ、灰色を呈する。天井部の半分以上に回転ヘラ削りが施され、弱い稜から口縁部に移行する。2は土師器の杯の口縁部破片である。須恵器杯身模倣で、丸底から稜部を境に口縁部が立ち上がる。内外面とも横方向のなでである。3は土師器の小型壺である。底部の保存状態は良いものの、胴部から口縁部は3分の1が残存するにとどまる。安定した底部から弱い張りをもった胴部をつくり、わずかに外反して口縁部が立ち上がる器形となる。胴部は縦方向のヘラ削りで、内面はヘラなでが施される。



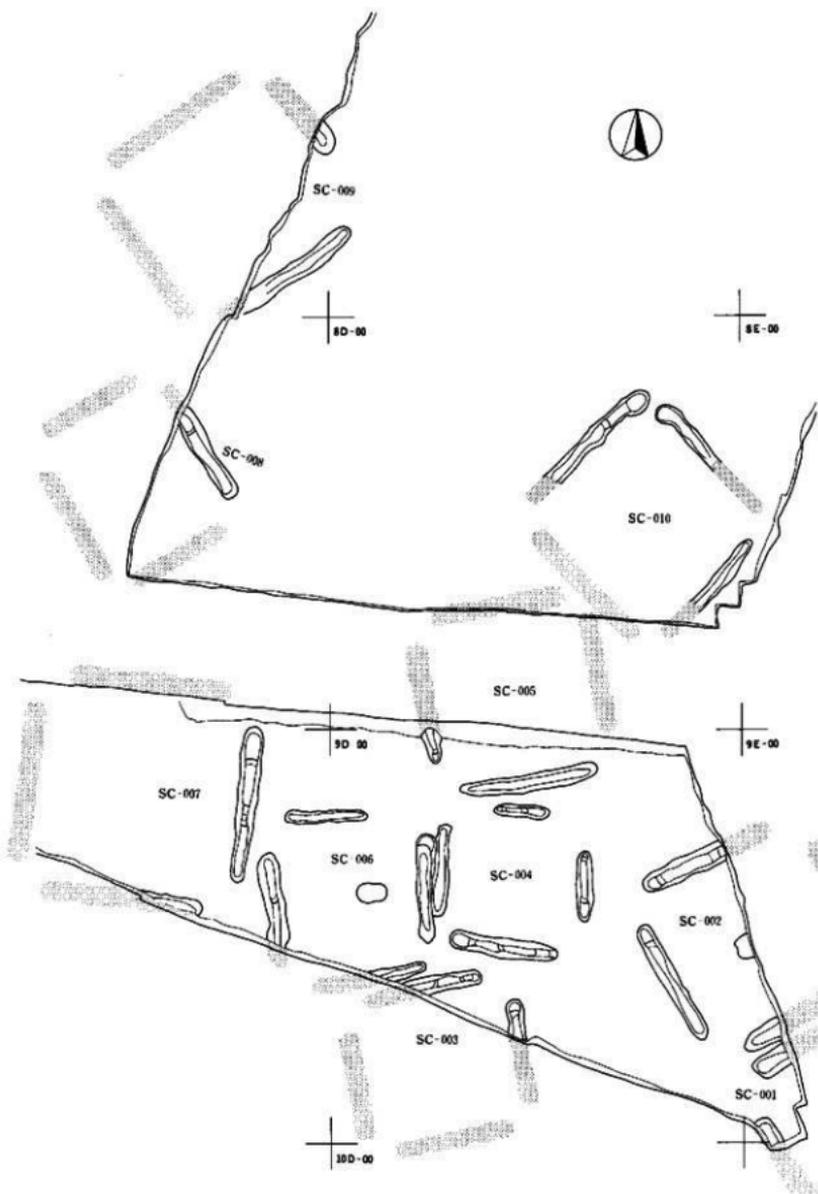
第121図 SX-001周溝内出土遺物

その他の遺物(第122図)

遺構に伴わない状況で出土した遺物で、古墳時代に属すると考えられる遺物を掲載しておく。1は滑石製の紡錘車である。上面径39mm、下面径27mm、厚さ16mmである。2は母岩状の滑石である。金属器で小片を削り取ったような痕跡をほぼ全面に認めることができる。石製模造品の素材を取った可能性が高いと考えられる。



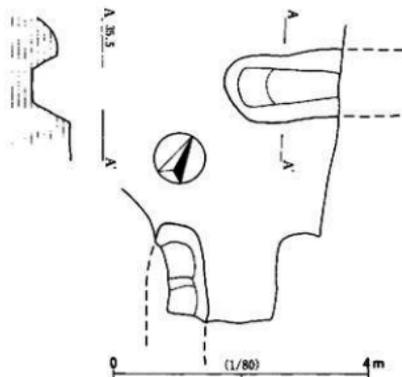
第122図 遺構外出土遺物



第123图 方形周溝基分布图

第4節 弥生時代の遺構と遺物

南調査区の7区以南で、方形周溝墓10基を検出した。この10基が弥生時代に比定可能な遺構のすべてである。調査区の制約も考慮しなければならないが、7区が分布の北限と推定されるに対し、南側については、荒久(1)遺跡においても12基の方形周溝墓が発見されている。そのような状況から推測すると、本地域においてかなりの規模で墓域が形成されていたことが考えられる。調査区内の方形周溝墓は、すべて四隅の溝が切れる形態と判断される。

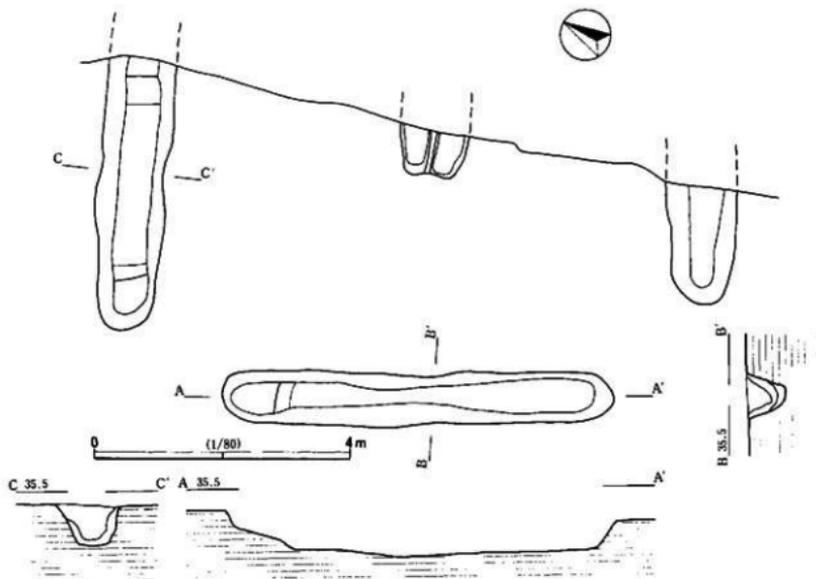


SC-001 (遺構：第124図 図版32)

9 E区・10 E区に位置する。北溝の西側一部と、西溝の北側が調査区内で、大部分が調査区外に含まれる。検出部の溝上端の幅は1.1m、下端は0.5mである。断面形は逆台形を呈し、覆土は3層に分層できる。1・2層は黒色土、3層は黒褐色土で下層になるにしたがい、ローム粒が多く含まれる。

遺物は出土していない。

第124図 SC-001



第125図 SC-002

SC-002 (遺構：第125図 図版32・33)

9D・9E区に位置する。N-30°-Wの方向を示す西溝のみは全掘することが可能であったが、北と南溝の大半と、東溝が調査区の範囲外に含まれるため、全体については不明である。西溝の検出面での規模は、全長が6.15m、幅は0.85mになる。溝の横断面は略逆台形を呈し、覆土は3層に分層できる。長軸方向では北側に段が生じて底部に至り、中央部は平坦になっている。また、北溝の溝底は両側に段を設け、2段に掘られる。北溝と南溝の外郭での間隔は10mである。おそらく中央部になるであろう位置に、埋葬施設と考えられる落ち込みが発見されている。長軸方向を東西にとることは推定できるが、調査区外に含まれる部分が多いため具体的にはならない。掘り方の底面の中央に若干の高まりが観察できるが、その性格は明らかでない。

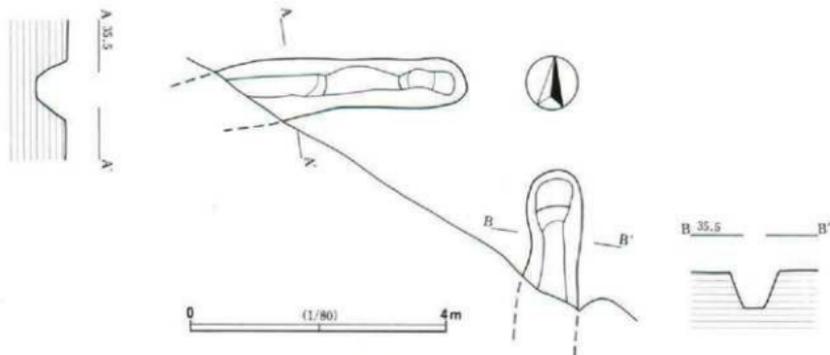
溝の中及び埋葬施設からの出土遺物は認められない。

SC-003 (遺構：第126図)

9D区に位置する。後述するSC-007の南溝と平行する北溝と、東溝の一部を検出したのみで、大部分が調査区外に展開している。北溝は東側の4mが明らかになった。幅は0.9mで、検出面から0.45mの深さを有し、断面形態は逆台形を呈する。溝底は東端に窪みがあるほか、中央部が一段深く掘られている。東溝は北から2mの範囲を検出している。

断面形態は北溝と同様に逆台形で、0.5mの深さがある。また、溝底は2段に形成されていることがうかがわれる。覆土は3層に分けられる。1層は黒色土である。2層はロームを少量含んでいる黒褐色土である。3層はロームを多く含む褐色土である。

溝中から実測可能な遺物は出土していない。



第126図 SC-003

SC-004 (遺構：第127図 図版33)

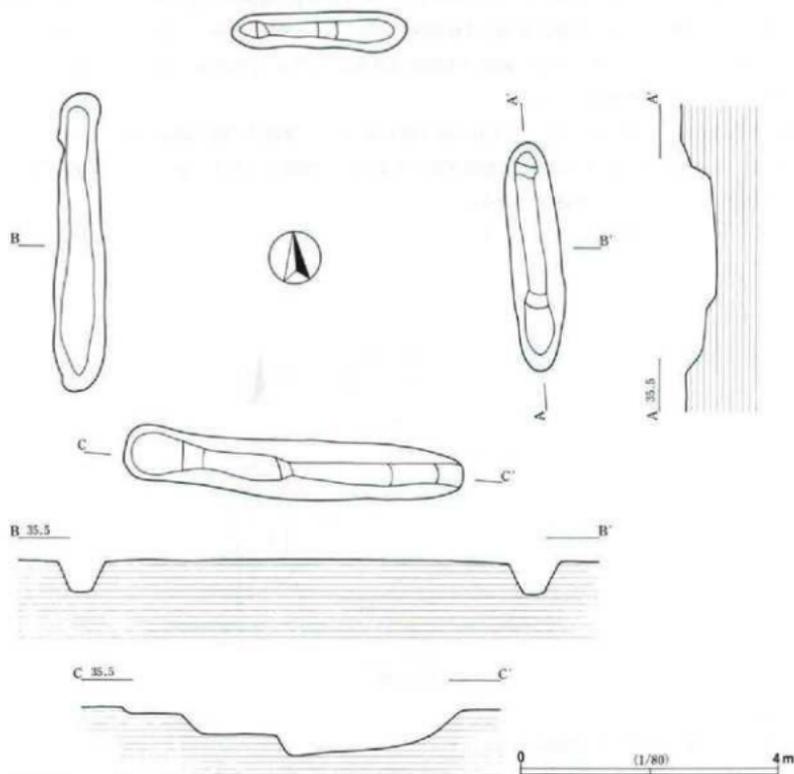
9D区に位置し、西溝の一部がSC-006の東溝と接している。今回の調査で存在を確認した10基中、唯一四隅が切れる全体の形態が明らかになった遺構で、東と西の溝の長軸方向は、ほぼ北-南を示す。各方

向の溝の長軸方向の長さは、東溝が3.45m、以下南溝5.25m、西溝4.45m、北溝2.75mである。以上のよ
うに溝には一定さが認められないが、特に北溝が他の3方向と比較し小規模である。溝の上端内側での
間隔は、東西方向で6.25m、南北方向で5.95mである。

溝の掘り方は、西溝のみが溝の底が平坦になるが、他は1・2段のテラスを設けて掘り下げている。北
溝と東溝は中央部が1段低く掘られ、南溝は西側から見て、3段階に掘り下げられている。横断面形態は
いずれの溝も逆台形を呈する。覆土は2層から3層に分けられる。下層にいくにしたがい、ロームの含有
が増加している。なお、SC-006との接近部で土層断面を観察したが、両者の新旧関係は、明確にはとら
えられなかった。ただ、まったく同時に構築されたと判断するよりも、多少前後する新旧関係があったも
のと推測される。

東溝中の1段掘り込まれた場所、あるいは南溝中の最も深くなる部分は、埋葬施設の可能性も考えられ
るが、溝で囲まれた台状部に埋葬施設の痕跡は発見されなかった。

4方向いずれの溝からも実測可能となる遺物の出土はない。

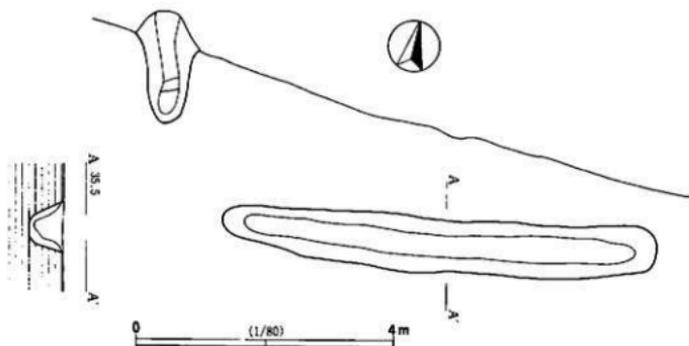


第127図 SC-004

SC-005 (遺構：第128図 図版33)

9D区の北側区域に検出された。明らかになったのは、南溝の全体と西溝の南側の一部であり、他は調査区外の8D区に含まれる。完掘可能であった南溝の長軸方向の長さは6.75mで、中央部の幅は0.8mを測る。溝底に特に掘り込みは存在せず、検出面からの深さは0.5mである。断面形態は逆台形を示す所もあるが、全体として船底状を呈する。西溝はテラスを設けて段状の掘り込みを行っているようだが、一部のため詳細はつかめない。また、埋葬施設も調査範囲内では存在しない。

実測可能な遺物は出土していない。



第128図 SC-005

SC-006 (遺構：第129図 図版34)

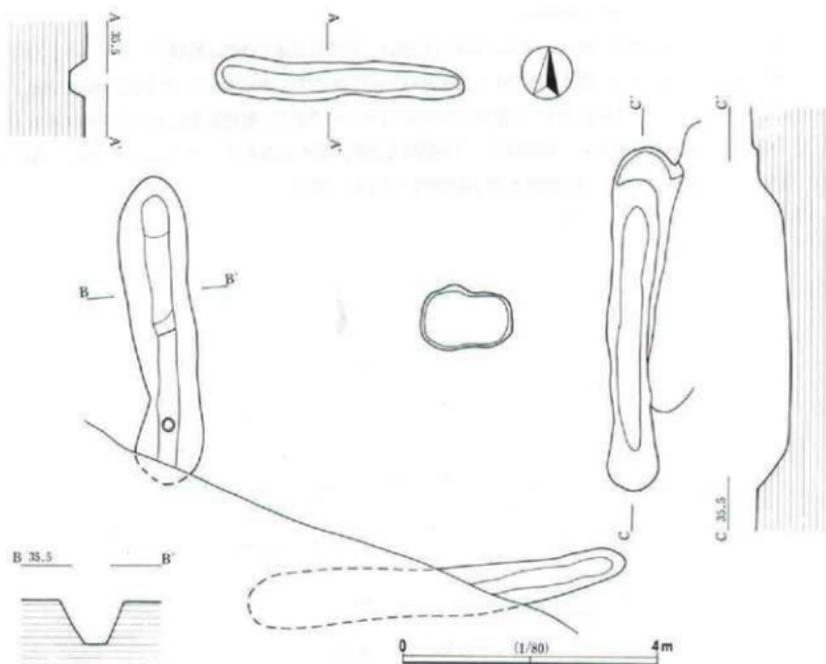
8D区と9D区にかけて位置する。先に説明したSC-004の西溝と接する東溝と、他の方形周溝墓と重複しない北溝については、その全体を検出することができた。しかし、南溝の約半分と西溝の一部は、調査区外に続いているため、完掘することが不可能であった。溝の内側上端での台部の規模は、南北方向が現状で7.10m、東西方向が6.60mである。北溝は長さ3.9m、幅0.6m、深さ0.25mで、西側に寄っているため、東溝との間が大きく開いて見える。東溝は長さ5.2mであるが、幅はSC-004と重複して明確ではない。北端の底面にはテラスを設け、そこからさらに1段の掘り込みが認められる。南側には段は設けておらず、北からわずかに傾斜して深さを増している。また、西溝にも段がつき、1段深くなる北側で、検出面から0.65mを測り、また、南側には小ピットが存在する。

台状部の中心からやや東に寄った位置で浅い落ち込みを検出した。平面形は中央が括れて瓢箪形に近い楕円形を呈し、長径1.45m×短径0.95mの規模を有する。検出面からの深さは10cmである。位置的に判断して埋葬施設に比定できよう。

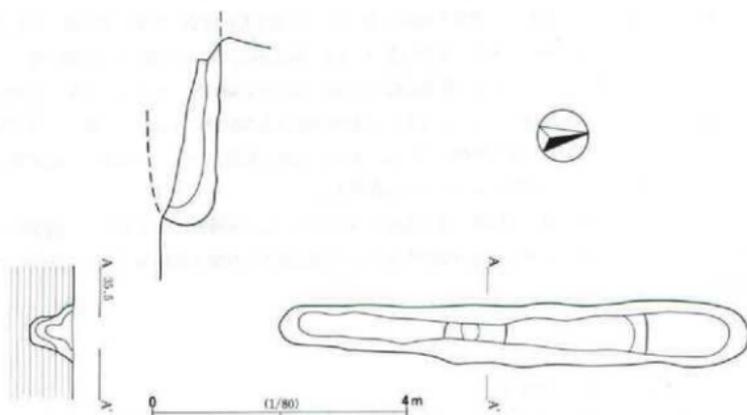
実測可能な遺物の出土はない。

SC-007 (遺構：第130図 図版34)

9C区に位置する。東溝のみが完掘でき、他は南溝の一部の調査にとどまる。状況から判断して、北溝と南溝は調査区外に検出されると見込まれ、西溝は後世の構築物(溝状遺構)によって破壊されたと考えら



第129圖 SC-006



第130圖 SC-007

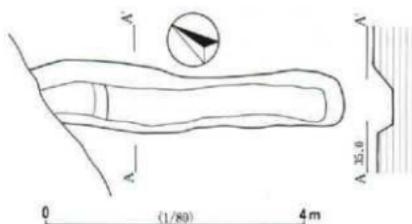
れる。東溝の長さは7.4m、幅は0.75m～1.0mである。溝の底面は平坦ではなく、北側に段が1段つき、中央からやや南の所がピット状にさらに深くなる。横断面は逆台形を呈し、覆土は3層に分けられる。1層は黒色土、2層は黒褐色土、3層は暗褐色土で、2層から3層にかけてロームの含有が目立つようになる。南溝は一部分の検出のため詳細はつかめない。

実測可能な遺物は出土していない。

SC-008 (遺構：第131図)

8C区に位置する。4方向の溝の中で1方向の溝のみを明らかにした。本遺構の所在する周辺は後世に溝や土壌が掘られ、それにより調査区内に存在していたと推測される溝も破壊されている。検出した溝は長軸方向を北西-南東方向に向け、調査区内の長さは4.9mである。幅は0.75m～1.0m、横断面は逆台形になる。溝の底面には弱い段が存在するので全くの平坦ではない。

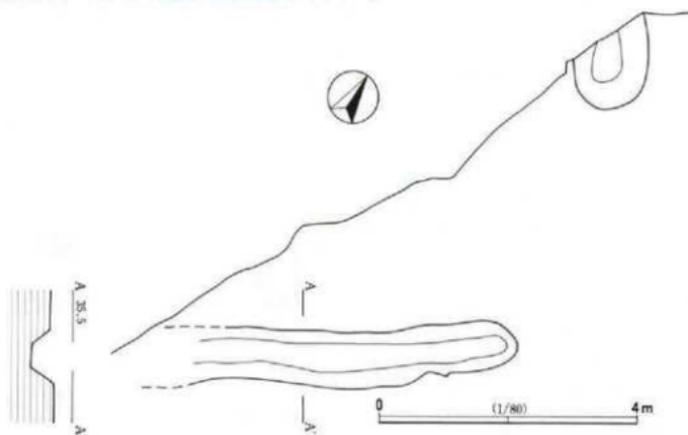
実測可能な遺物は出土していない。



第131図 SC-008

SC-009 (遺構：第132図)

7C区を中心に7D区の一部にかかって所在する。4方向の溝の中で、2方向の一部をとらえることが可能であった。検出範囲においても、弥生時代以降の遺構による破壊が認められ、大部分が調査区外に含まれる。北西-南東に長軸を向ける溝は、南東側の一部であり、北西方向は調査区外につながる。それと北東-南西方向の溝との間隔は3mである。南側の溝は5mについて検出し、途中からは後世に溝が掘られた際に削られている。溝の底面に凹凸は認められない。



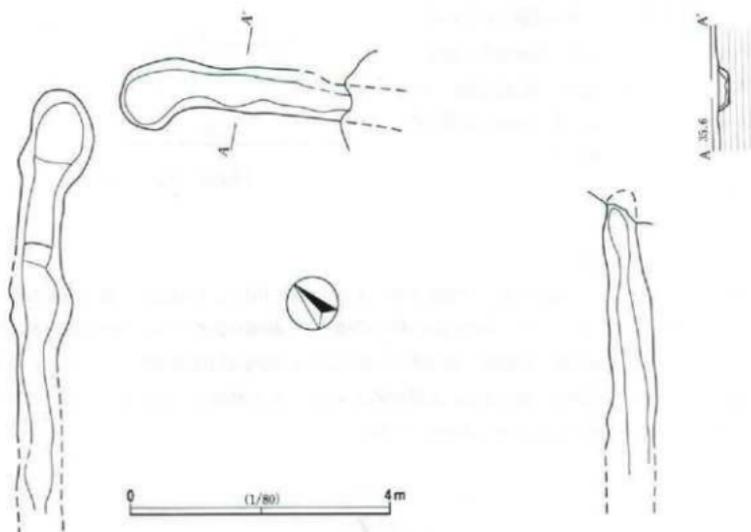
第132図 SC-009

実測可能な遺物は出土していない。

SC-010 (遺構：第133図)

8 D区を中心に一部が8 E区にかかって位置する。円墳と重複する部分や、溝等に切られる範囲が多いものの、「コ」の字に3方向の溝を確認することができた。溝の内側での台状部の規模は、北西-南東方向で8.3m内外になる。しかし、検出した溝の保存状態は全体的に不良で、詳細の把握を困難にしている。台状部の中央から見て北西に位置する溝の底面には段が存在し、他の2本の溝底面は平坦である。埋葬施設と考えられる遺構は、検出面においては存在しない。

実測可能な遺物は出土していない。

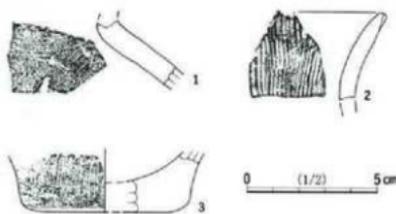


第133図 SC-010

遺構外の遺物 (第134図)

弥生時代に比定できる遺物はきわめて少ない。方形周溝墓からの出土は皆無に近く、それ以外に出土した弥生時代の遺物も、土器がわずかに認められるにすぎない。

第134図1は壺の肩部である。細い沈線による装飾が施されている。2は甕の口縁部である。口唇部に押捺が加えられ、胴部にはハケ目調整が行われている。3は甕の底部である。胴部にかけてハケ目がつくものと考えられる。



第134図 弥生時代の遺物

第5節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代と考えられる遺構は、土坑5基である。その分布は北調査区に1基と、南調査区に4基である。南調査区で検出した土坑4基は、いわゆる陥穴である(第135図参照)。遺物は土器と石器であり、いずれも点数は少量である。その中で、土器の一部は北調査区のVII b区で、ややまとまりが認められたが、大部分は他時期の遺構の覆土から散発的に出土している。

SK-284 (遺構：第136図)

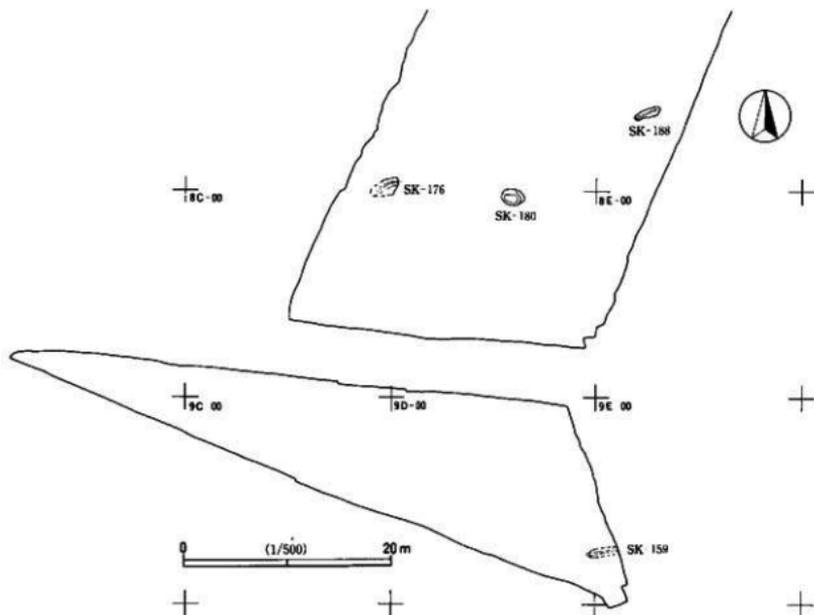
北調査区のVII b-41に位置する130cm×85cmの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは30cmで、底面はほぼ平坦である。

覆土は2層に分けられる。上層は炭化物を少量含む暗褐色土で粘性をもつ。下層は白色の粘土粒を少量含む暗褐色土である。

遺構内から出土した遺物は存在しないが、周辺から縄文時代早期の条痕文系土器が出土している。

SK-188 (遺構：第136図 図版35)

南調査区の7E-62で検出した陥穴である。長楕円形の平面形で、開口部の規模は、長軸長265cm、短軸長80cmである。長軸の方向はN-66°-Eである。深さは北東側で100cmで、南西側に向かって浅くなっている。



第135図 縄文時代の陥穴分布図

き、南西部では65cmになる。底面では幅は10cmと狭まり、横断面の形態はVの字形を示す。覆土は4層に分けられ、上からソフトロームを含む黒褐色土、ソフトロームを多く含む暗褐色土、ソフトロームを主に小ロームブロックを多く含む暗褐色土、最下層が黒色土にロームが混ざる暗褐色土となっている。

検出面で中世の遺物が検出されたが、覆土中からは遺物は出土していない。

SK-176 (遺構：第136図)

8C-09に位置する陥穴である。地下式土坑SK-175によって半分以上が保存されていない。開口部の平面形は長楕円形と考えられるが、規模については明らかにならない。長軸の方向はN-80°-Eである。検出範囲で長軸長150cm以上、短軸長160cmを測る。断面形はVの字形を呈し、開口部でやや広がりを見せる。検出部での深さは120cmである。

遺物は出土していない。

SK-180 (遺構：第136図 図版35)

8D-05に検出された陥穴である。開口部は楕円形を呈し、長軸長230cm、短軸長170cmを測る。長軸の方向はN-71°-Wである。深さは140cmで、底面は平坦になっていて小ピット等は認められない。覆土は6層に分けられる。5層に黒色土が多く含まれ、他はロームや小ロームブロックが多く認められる。1層は重複する古墳の周溝の覆土であろう。

遺物は出土していない。

SK-159 (遺構：第136図)

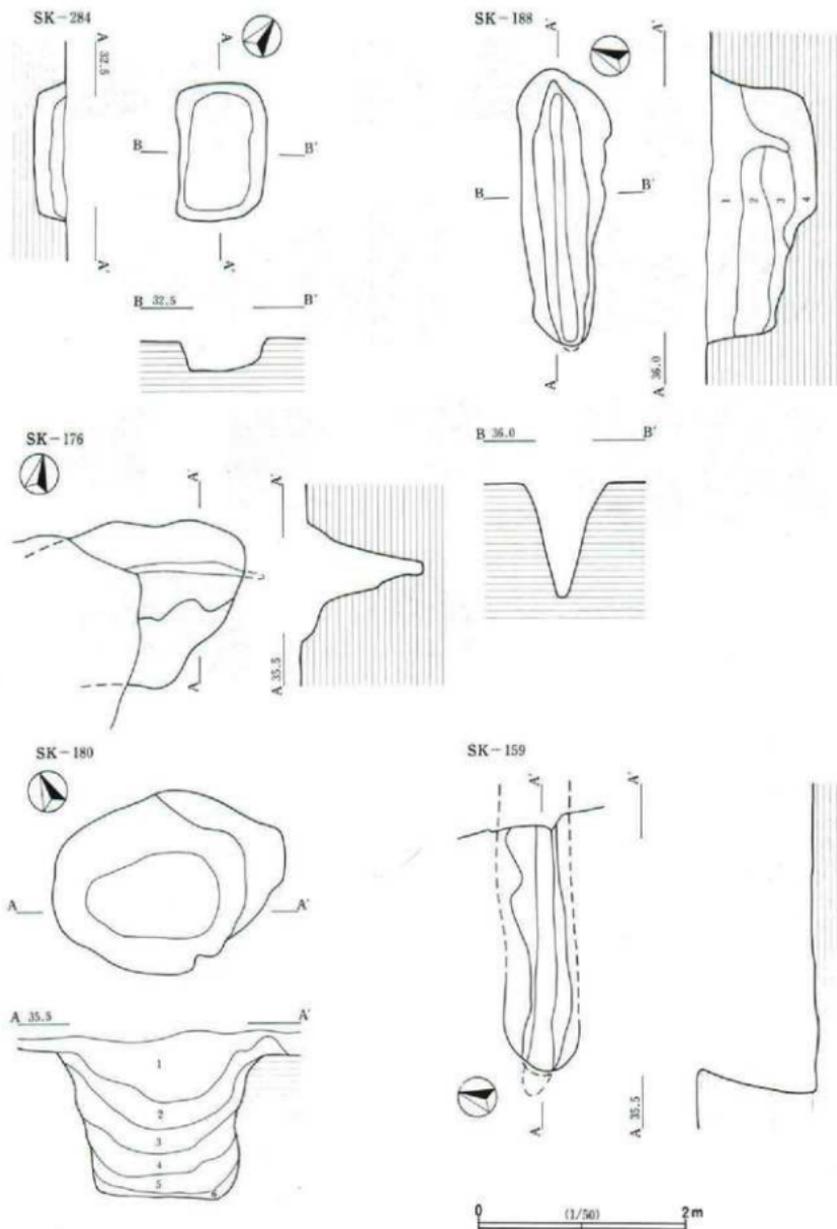
9E-70に位置する陥穴である。長楕円形を呈するが、一部が調査区に含まれるため、明確な規模はつかめない。調査した範囲で、長軸長230cm以上、短軸長70cmを測る。長軸の方向はN-78°-Eである。深さは115cmを測り、底面は幅20cm前後で平坦にされ、長軸方向の西端でオーバーハングしている。長軸に対しての横断面はVの字形を呈し、縦断面は袋形になる。

遺物は出土していない。

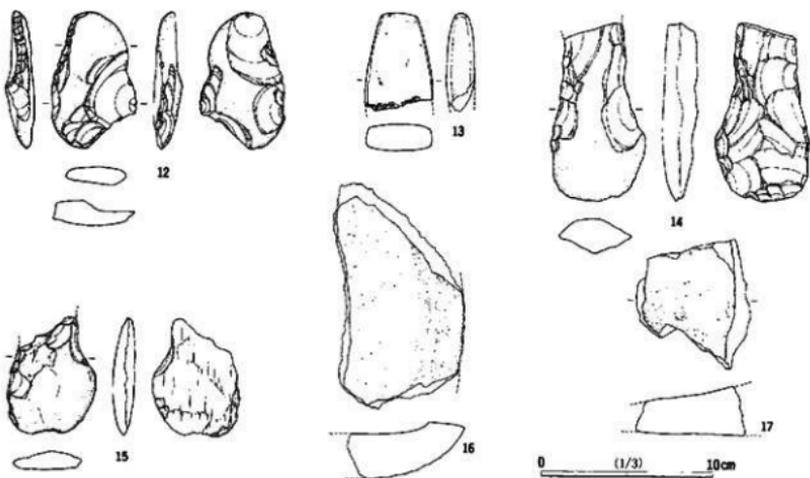
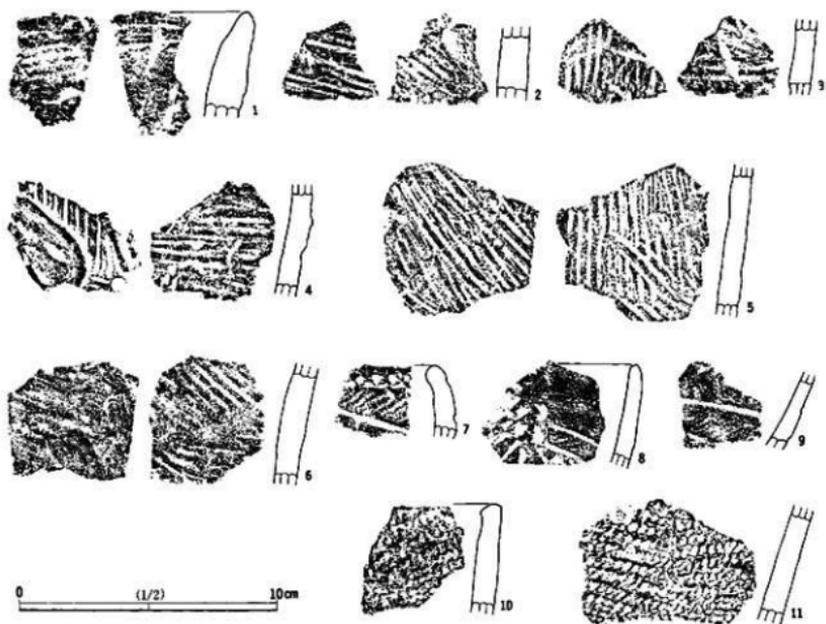
縄文時代の遺物(第137図 図版48)

縄文時代の遺物は土器と石器がある。第137図1～6は条痕文系の土器である。胴部の破片が主で、口縁部の資料は乏しい。1は口唇部を尖り気味に終わらせて、内外面に横方向の条痕が施されている。4の外表面には微隆起線文が認められる。口縁部直下の文様を構成する一部になろう。他は内外面に条痕のみが認められる胴部の破片である。7～11は後期の加曾利B式である。8・9は鉢の、そして10・11は粗製深鉢のそれぞれ同一個体である。

12は扁平で自然面を残す頁岩に調整を施して削器状の石器にしている。刃部は左淵縁の半分に作出され、他は大きな剝離が加えられたままである。長さ81mm、最大幅50mm、厚さ17mm、重さ69.8gである。13は磨製石斧の基部である。14・15は打製石斧であるが、欠損品のため形態は明らかでない。14は残存長106mm、幅56mm、厚さ21mm、重さ136.2gである。16・17は石皿の一部である。



第136図 縄文時代の土坑・陥穴



第137図 縄文時代の遺物

第6節 旧石器時代

旧石器時代の調査は、2m×2mのグリッドを設定し実施した確認調査の結果、北調査区の南端部の第Ⅲ層から第Ⅳ層中より石器類が検出されたため、この地点において200㎡の本調査を実施し、石器集中地点1か所を検出した。この石器集中地点以外においても、上層遺構の調査実施時に旧石器時代の石器類が検出されており、第Ⅲ層～第Ⅳ層中の旧石器時代の石器集中地点が他にも存在していたことが窺える。

1 基準層序 (第138図)

本遺跡の立川ローム層の特徴としては、上部層においてソフト化による浸食が顕著で、Ⅳ・Ⅴ層は完全にソフト化されⅥ層の上部まで及んでいる。武蔵野ローム相当層以下の層 (第Ⅺ層～) においては水浸の影響が見られ粘土化している。基準層序は以下のとおりである。

第Ⅲ～Ⅳ層 黄褐色土層 立川ロームの安定した堆積の状況では、ソフトローム層 (第Ⅲ層) とハードローム層 (第Ⅳ層) に明確に分層できるが、本遺跡においてはソフト化が著しいため、分層は困難な状況である。

第Ⅴ層 暗黄褐色土層 第1黒色帯に相当する。ソフト化が顕著である。

第Ⅵ層 暗黄褐色土層 始良丹沢火山灰 (AT) を包含する。赤色スコリアを少量包含する。本層の上部はソフト化が及んでいる。

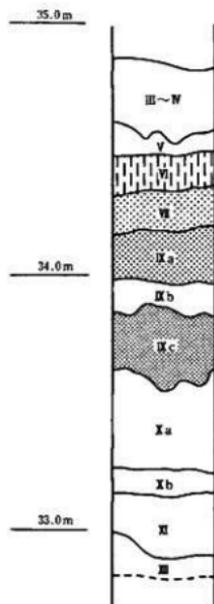
第Ⅶ層 暗黄褐色土層 第2黒色帯上部層である。赤色スコリアを少量包含する。

第Ⅸ層 暗灰黄褐色土層 第2黒色帯下部層である。やや明るい色調の層 (Ⅸb層) により分層される。

第Ⅹ層 灰褐色土層 立川ローム層最下層である。この層の下部の層の影響により色調により分層できる。

第Ⅺ層 暗灰褐色土層 ローム層ではなく黒色土と赤褐色土が交互に堆積した砂層である。

第Ⅻ層 白色粘土層



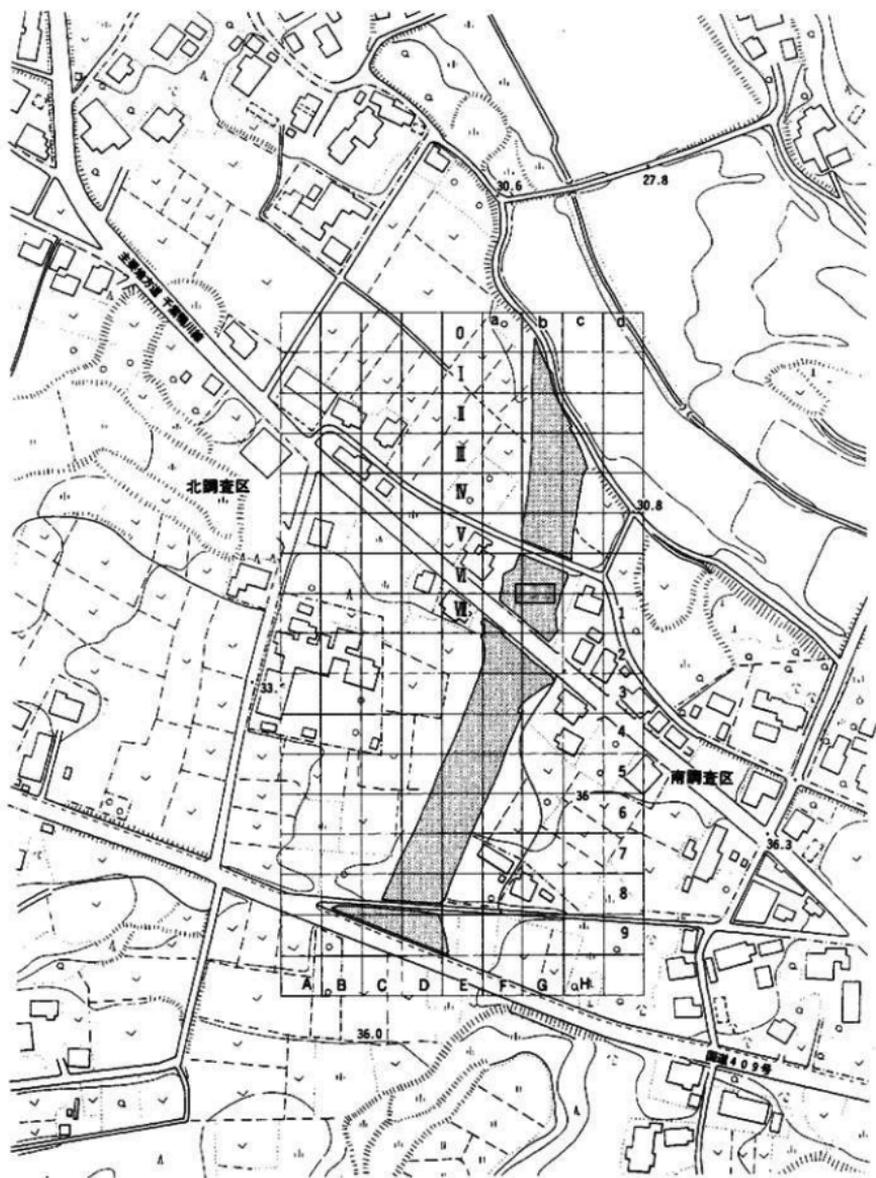
第138図 基準層序

2 石器集中地点と出土遺物 (第140・141・142図)

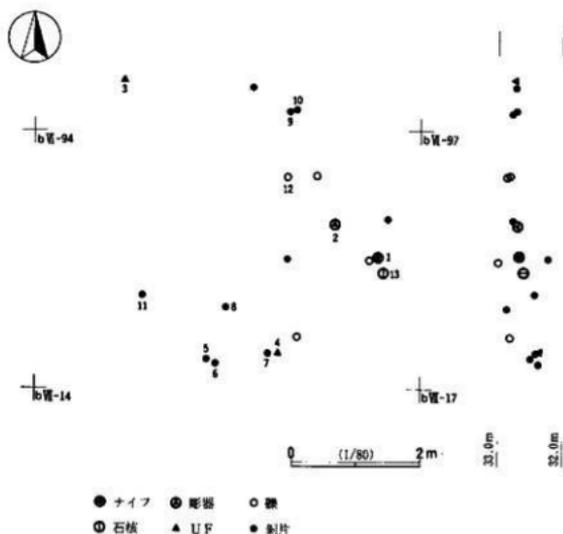
調査地が北から南へ緩く傾斜をもち、また、浸食によるソフト化が著しいため遺物の本来の位置であることに疑問がもたれる。平面分布は南北4.5m、東西4.0mの範囲に広がり集中部は見られない。垂直分布は調査区の北から南へ緩く傾斜をもった分布で、遺物の最大分布幅は0.7mを測る。

出土遺物点数は19点で、器種別ではナイフ形石器1点、彫刻刀形石器1点、使用痕のある剥片2点、剥片10点、礫・礫片4点である。石材には偏在性が見られ、頁岩が70%近くを占める。頁岩は自然面が黄土色で剝離面が緑色のものであり、同一系統のものと思われるが、母岩別分類は困難である。接合資料は1例も見られない。

1は珪質頁岩を素材としたナイフ形石器である。背面の3分の2程自然



第139圖 旧石器時代調査区



第140図 石器出土分布図

面を残す。調整は基部と先端部の一側縁の一部に微細な調整を施したのみで、素材の形状をそのまま利用している。打面部においても調整は施されていない。

2は彫刻刀形石器である。粗い剥離と微細な調整剥離により打面を作り、彫刻刀面を作り出している。

3～11は剥片である。3、4には微細な使用痕が観察できる。

13は単設打面の石核である。凝灰岩製の拳大の楕円礫を素材としている。打面は礫を分割するような粗い剥離と細かな調整剥離により作り出されているが、側面には一切の調整剥離は施されておらず自然面のままである。剥片剥離作業は一定方向に連続して行われている。そして、底部から側面にかけて剥片剥離時の衝撃による剥離痕も見られ、底面には多数の敲打痕が多く見られることから、打面を何度か作り換えながら同様の剥片剥離作業を繰り返していたものと思われる。

3 石器集中部外出土の遺物（第142図 図版50）

上層の遺構調査時に遺構内及びグリッドから何点かの遺物が出土している。

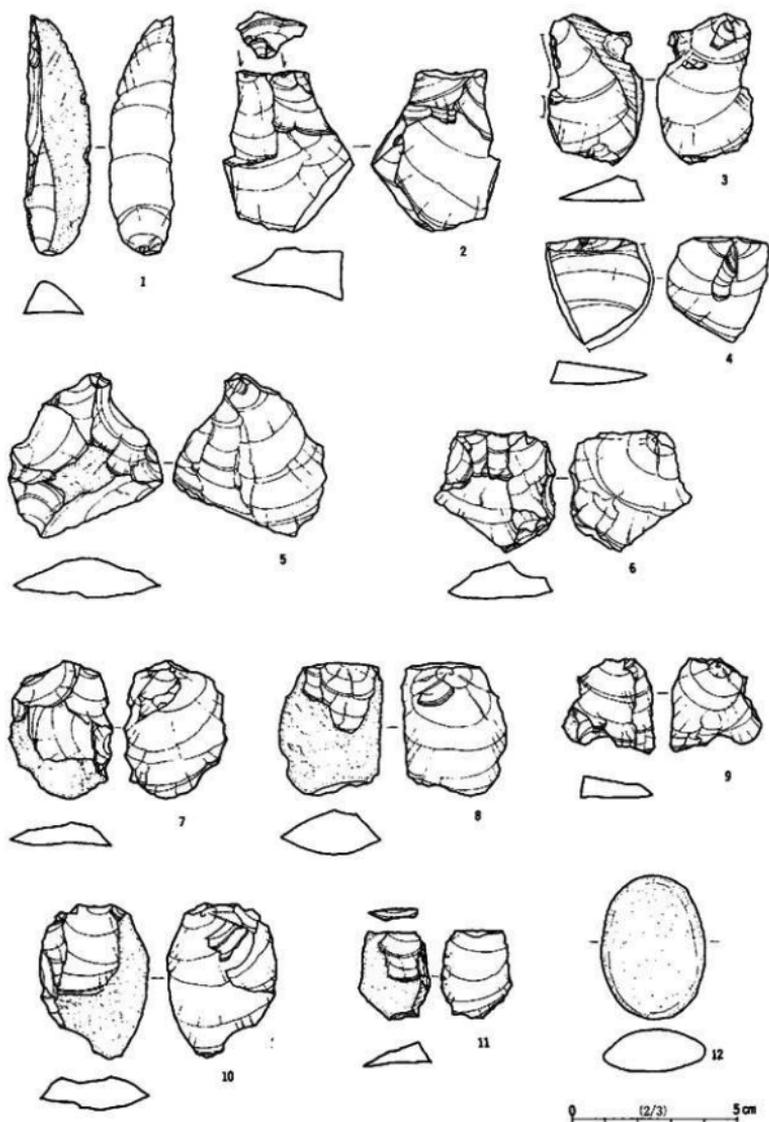
14はチャート製の横長剥片を素材とした台形礫石器である。基部に微細な調整剥離が施されている。一側縁と先端部に使用痕が認められる。

15はチャート製の小型の礫を素材とした片刃礫器である。扁平礫の一側縁に一方からの調整剥離を施し刃部を作り出している。

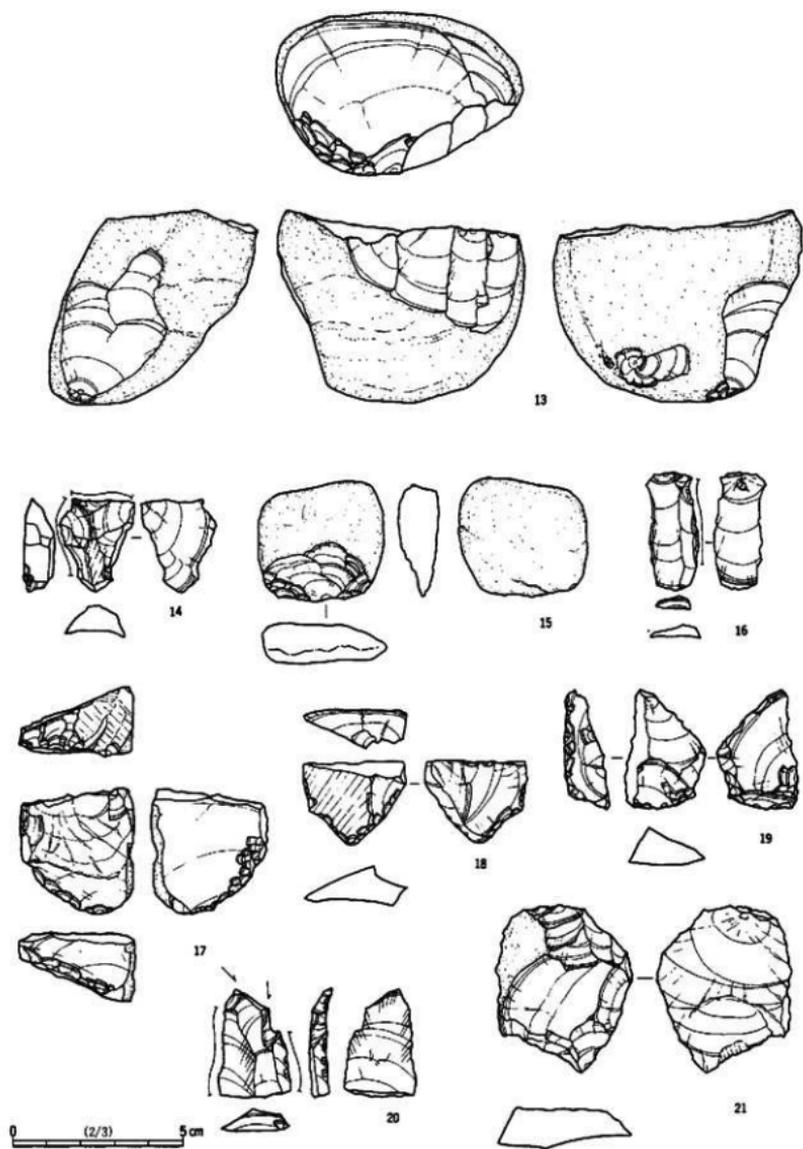
16は頁岩製の縦長剥片の一側縁に微細な調整剥離を施した、いわゆる調整痕のある剥片である。

17～19はスクレイパーである。いずれも厚手の剥片を素材とし、17、18はチャート製、19は頁岩製である。

20は黒曜石製の彫刻刀形石器である。石刃状の剥片の先端部に2条の彫刻刀面を作り出している。剥片



第141图 石器类测图 (1)



第142图 石器实测图(2)

の両側片には使用痕が見られる。

- 注1 加藤正信 笹生 衛 1993 「荒久遺跡の概要」 『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター
 2 (財)千葉県文化財センター 1989 「国道410号①荒久遺跡」 『千葉県文化財センター年報No14』

第1表 石器集中地点石器組成表

器種	ナイフ	彫刻刀	U・剥片	石核	剥片	礫	点数合計	%
石材								
頁岩		1	2		9	1	13	69
珪質頁岩	1						1	5
チャート						1	1	5
凝灰岩				1			1	5
流紋岩					1	1	2	11
砂岩						1	1	5
点数合計	1	1	2	1	10	4	19	
%	5	5	11	5	53	21		100

第2表 石器観察表

押印番号	遺物番号	器種	長さ[mm]	幅[mm]	厚さ[mm]	重量[g]	打面種類	打角[°]	石材	備考
1	下本2-7	ナイフ形石器	72.3	18.7	9.6	12.86	平	110	珪質頁岩	
2	下本2-5	彫刻刀形石器	48.4	39.7	12.0	24.93			頁岩	
3	下本2-16	使用痕のある剥片	47.2	30.1	7.8	10.18	節	98	頁岩	
4	下本2-10	使用痕のある剥片	32.2	29.8	7.4	8.46	平	116	頁岩	
5	下本2-13	剥片	51.1	42.7	11.6	19.28	複	117	頁岩	
6	下本2-12	剥片	38.3	38.4	10.8	11.96	平	110	頁岩	
7	下本2-11	剥片	38.1	30.5	7.8	10.91	平	111	頁岩	
8	下本-1	剥片	40.4	30.5	12.5	16.97	平	89	流紋岩	
9	下本2-1	剥片	27.9	27.0	5.8	4.90	複	98	頁岩	
10	下本2-2	剥片	46.0	32.8	9.4	14.47	平	104	頁岩	
11	下本2-14	剥片	27.3	20.4	5.2	3.31			頁岩	
12	下本2-3	礫	42.8	30.2	12.4	23.29			流紋岩	
13	下本2-9	石核	70.4	73.6	44.7	276.67			凝灰岩	
14	C区-24	台形礫石器	27.1	18.8	7.6	4.00			チャート	グリッド単独出土
15	SD40-1	片刃礫器	33.4	37.5	11.9	23.88			チャート	遺構内出土
16	SD41-14	調整痕のある剥片	34.0	14.8	3.5	2.26	自	114	頁岩	遺構内出土
17	SK63-3	スクレイパー	36.6	34.2	17.8	29.22			チャート	遺構内出土
18	SE7-23	スクレイパー	23.7	29.9	10.3	6.36			チャート	遺構内出土
19	SD28-括	スクレイパー	35.4	21.6	10.6	8.26			頁岩	遺構内出土
20	SD41-9	彫刻刀形石器	31.6	20.9	4.9	3.13			黒曜石	遺構内出土
21	C区-12	剥片	49.7	38.9	12.8	24.58	複	112	頁岩	グリッド単独出土

※打面種類 平-平組打面 複-複組打面 節-節理面 自-自然面

第3章 ま と め

第1節 中世の遺構について

前節で説明したように、荒久(2)遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。これは発掘調査によって初めて明らかになったことであり、とりわけ中世については、数多くの遺構や遺物が検出された。はじめに中世の遺構の分布状況等を概観し、次に遺物を取り上げ、遺跡のもつ性格の解明に一步でも近づきたいと思う。

まず建物としては、9棟の掘立柱建物跡の存在が挙げられる。ただ本文中にも記載したように、現場段階では建物の規模を正確に捉えることが難しく、図面の検討により柱筋をおさえることになった。このことは再度ここに明記しておきたい。そしてその分布状況は、北調査区で2棟、南調査区で7棟ということになる。さらに詳細に見ると、北調査区の建物間の間隔は約40mであり、両者は独立した関係で存在していると判断でき、対して南調査区の掘立柱建物跡7棟中5棟は、SD-001の北側から現在の主要地方道千葉鴨川線までの範囲に集中している。ここには、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる小ピットが多数検出されているので、実際存在していた建物の棟数は、柱筋を想定し得た建物数より、数棟多いものと推定される。それはSB-008が他の建物と重複することからも、この地域で何回かの建て替えや、新規の構築が行われていたと推測することができる(以下掘立柱建物跡の先頭記号のSB省略)。また、この地域に検出された建物は、全棟とも現在の千葉鴨川線と直交する柱筋の方向性が存在する。さらに3間×2間が4棟と、3間×1間が1棟で、規模の面でも近似しているという傾向が認められる。

SD-001以南には2棟の掘立柱建物跡が存在する。そのうちの1棟である010は、SD-006とSD-007の鉤の手状の溝状遺構と、SE-001・002の中間に位置する。SD-006・007の東側には方形や円形の土坑が分布し、建物周辺の遺構の状況とは明らかな違いが認められる。ここでも溝状遺構は、場の仕切的な位置を占めていることがわかる。そして建物の桁行方向は、SD-001以北の建物群と同様に、千葉鴨川線の直交方向を向いている。

最も南で検出された建物は011である。周辺には地下式土坑や小ピットが存在し、南調査区の他の建物とは桁行方向をやや違えている。溝状遺構との関連も薄いように思われることから、他の建物とは異なる性格を有していたのかもしれない。

次に地下式土坑についてであるが、調査区内に検出した地下式土坑は24基を数え、すべて南調査区で検出されており、北調査区では全く発見されていない。南調査区での分布状況には、単独で分布するということより、2基から5基程度が近接している様子を認めることができる。2区のSK-068とSK-070(以下先頭記号のSK省略)、3区の013と031、4区の012と071、7区の135と143、そして240と158が2基近接の状況で存在する。また、4区から5区には12基が集中しており、041・043の2基と、056・058・061の3基には一部の重複がある。他の遺構との関係では、溝状遺構と5か所に重複が認められる。分布上からは以上のような特徴があるが、例えば、台地整形の縁辺部に構築されるというような、立地的な規制は明瞭には捉えられない。それは竪坑と地下室の位置関係から見た主軸方向が様々であることからも、その規制が薄いことをうかがうことができる。

地下式土坑の基本的な構造は、地下室に通じる竪坑と地下室からなるが、細部の構造には違いが存在す

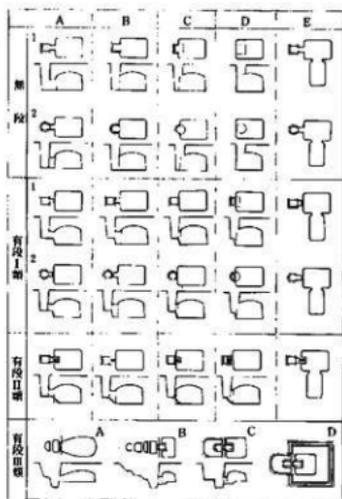
る。それは塹坑が直に地下室まで降下したり、途中に階段を設けたりする違いであったり、あるいは塹坑と地下室の位置的状況が異なることなどに現れている。半田堅三氏は、地下室土坑を多角的に研究することを目的に、これまで発見されている様々な形態と、さらに予想される形態を加えて分類案を提出している¹⁾。本遺跡で検出した24基の地下式土坑を、この分類案に則して分類しても、特別な障害は生じないので、これに基づいて分類を行っておくことにする。なお、分類の詳細は半田論文を参照されたいが、呈示された模式図を第143図に挙げておく。

24基の地下式土坑については、第4表にまとめたとおりである。形態は有段Ⅰ類が13基で最も多く、次に無段のものが8基存在する。残り3基は有段Ⅱ類になる。有段Ⅰ類はバラエティがあり、B1類1基、B2類2基、C1類1基、C2類4基、D1類3基、D2類2基に細分される。無段も4類型の存在を確認することができる。その内訳はA2類1基、C1類2基、C2類3基、D2類2基である。有段Ⅱ類はB2類、C1類、C2類が各1基ずつである。

地下室の規模は1.05m×0.65mの097が最も狭く、広い方は070が3.35m×2.85mの規模を有している。地下室床面の形態は、はっきりした長方形や正方形に構築された例は少なく、多くは隅に丸みがあったり、不整形である。床面自体は平坦であるが、056と240には床面に土坑が存在し、090の壁下には溝が掘られている。

地下式土坑の用途については諸説があり、未だ決着をみていないというのが現状であろう。本遺跡の場合においても、明確な用途を断定しえる材料は乏しい。ただ、今後この種の遺構の性格を考える際に、遺物の出土状況の検討は、その手掛かりのひとつとなってくると思われる。今回は、検出した24基の地下式土坑のうち、17基から図示可能な遺物が出土しており、中には興味深い出土状況も認められる。特に158と231の2基からは、人工遺物のほかに床面から人骨が出土している点が注目される。158(第44図)は、人骨片が地下室の壁際の床面上から検出され、塹坑直下で底部に小孔が穿たれた香炉が出土している。香炉は埋葬に伴い副葬されたものと判断できる。また、231(第45図)の場合では、人骨と共に8枚の銅皿、1枚の白磁小皿が床面から出土している。この例では、地下室の天井部は崩落せずに遺存しており、床面から50cmまでの土の堆積からは、人為的な埋戻しが行われたような状況が観察できる。9枚の皿は埋葬に伴い地下室に納められた可能性が高い。以上の2基については、地下式土坑が最終的に墓として使われたことを示す事例である。

068(第21図)や013(第24図)での遺物出土状況も興味深いものがある。どちらも土師質土器の皿・杯が合わせ口の埋納状態で出土していることから、何らかの目的なり意味があったことがうかがえる。しかし、両者とも出土レベルが床面の上ではないので、地下式土坑の二次的な利用例ということになろう。



第143図 地下式土坑の分類(半田1979年から)

第3表 中世の掘立柱建物跡一覧

No	遺構番号	位置	形態	規模	特徴・重複遺構等	遺物
1	SB-001	北調査区 IVc区	1間×1間	5.52 m ²	掘立柱建物	
2	-003	北調査区 VIb区	2間×2間	15.96 m ²	掘立柱建物	
3	-005	南調査区 2F区	3間×2間	32.50 m ²	掘立柱建物 内側にSK-068所在 庇がつく可能性有り	
4	-006	南調査区 2G区	(3間)×2間	(16.32) m ²	(掘立柱建物)一部調査区外	
5	-007	南調査区 2F区	3間×2間	16.80 m ²	掘立柱建物	白磁皿
6	-008	南調査区2G・3G区	3間×1間	22.80 m ²	掘立柱建物	
7	-009	南調査区2G・3G区	3間×2間	22.04 m ²	掘立柱建物・一部SB-008と重複	
8	-010	南調査区 3F区	5間×1間	32.40 m ²	掘立柱建物 東側に庇がつく可能性有り	瀬戸磁鉢
9	-011	南調査区 5E区	3間×2間	30.24 m ²	掘立柱建物	

第4表 地下式土坑一覧

No	遺構番号	位置	形態	地下室の規模	構造上の特徴	出土遺物
1	SK-068	2F-13・14・23・24	無段-D2類	2.20m×2.10m	壱坑の形態不明	かわらけ 瀬戸青伊・蓋・鉢
2	-070a	2F-30・31・40・41	有段I-D1	3.35×2.85	地下室平面隅丸長方形	瀬戸小皿
3	-031	3F-46・47	有段I-D2	1.75×1.60	地下室平面隅丸五角形	白磁皿 瀬戸磁鉢
4	-013	3G-42・52	無段-C1	2.75×1.80	地下室平面隅丸長方形	土師質土器 瀬戸蓋 常滑鉢 磁石
5	-012	4F-23・24・33・34	無段-C2	2.30×2.00	地下室平面楕円形	瀬戸小皿 常滑鉢 磁鉢 内耳鍋 磁石
6	-071	4F-46・47	無段-C1	1.35×1.20	地下室平面形長方形	瀬戸華瓶
7	-097	4F-71	有段I-C2	1.05×0.65	地下室平面形隅丸長方形	なし
8	-041	4F-81・91	有段I-D1	2.10×1.80	地下室平面形不整形	土師質土器 瀬戸小皿・深皿・四耳壺 鉄貨
9	-043	4F-92・93	有段I-C2	2.60×1.90	地下室平面形隅丸長方形	青磁碗 瀬戸小皿・飯子 常滑鉢 磁石
10	-061	5E-48・49	無段-A2	2.75×1.90	地下室平面形長方形	鉄貨
11	-058	5E-48・49	有段I-B1	2.80×2.20	地下室平面形不整形楕円形	なし
12	-056	5F-41・42	有段I-B2	2.60×1.80	地下室床面に小土坑存在	鉄貨
13	-113	5F-11・21	有段I-D2	2.00×1.40	地下室平面形楕円形	なし
14	-117	5F-52・53・63	有段I-C1	2.50×1.95	地下室平面形長方形	瀬戸小皿
15	-122	5E-61・5F-60	無段-C2	2.60×1.60	地下室平面形隅丸長方形	鉄貨
16	-088	5F-80・90	有段I-C2	2.10×1.30	地下室平面形楕円形	なし
17	-089	5E-95・6E-04・05	有段I-B2	3.00×1.80	地下室入口に段が存在	なし
18	-090	6E-06・09	有段I-C2	2.10×1.60	地下室周囲に溝が存在	なし
19	-135	7D-04	無段-C2	2.50×2.10	壱坑に足掛け状施設存在	瀬戸天目茶碗
20	-143	7D-05・06・15・16	有段II-C2	3.20×2.00	地下室平面形楕円形	なし
21	-240	7E-03・04・13・14	有段II-B2	2.80×1.70	地下室床面に土坑存在	土師質土器 鉄貨
22	-158	7E-33・34	有段II-C1	1.65×1.35	地下室平面形台形	人骨 瀬戸青伊
23	-231	8C-09	無段-D2	2.85×2.10	地下室平面形長方形	人骨 白磁皿 瀬戸飯皿 磁石
24	-175	7C-99	有段I-D1	1.90×1.40	地下室平面形長方形	磁鉢

続いて先頭記号にSKつけた土坑と、SKと区別する基準値を設けていない先頭記号Pの小土坑について見ていこう。遺構の中ではこの土坑として扱ったものが最も多く、形態にしても方形や円形、そして不整形と様々である。分布状況を見ると、北調査区には土坑が集中する区域は存在しない。円形や楕円形の土坑が検出されているものの、散在した分布状況を呈している。一方、南調査区では多数の土坑が検出され、北調査区とは対照的な在り方で展開している。北側の2区から概観すると以下のようなになる。

2区及び3区には前述したように掘立柱建物跡が検出されている。その機能としては住まいや作業場、あるいは倉庫等の貯蔵施設が考えられ、この区域が居住の場であったことがわかる。地鎮との関連が考えられるP-268(第53図)がその一角で検出されていることもその証左になろう。掘立柱建物跡との関連が強いかかえる土坑に壱穴状の方形の土坑の存在がある。SB-005の東側には方形土坑SK-271が存在し、SB-008・009の東側にはSK-015・016、SK-066・085・086・087の

土坑の存在が確認できる。また、SB-010の東側にはSK-009・010・092等が並ぶような状態で検出されている。しかもこれらの方形土坑の主軸方向が、掘立柱建物跡の方向と並行していることは、建物を意識して構築された施設であることを裏づけている。屋外の収納用施設か、作業小屋を考えることが妥当であろう。

4区から7区にかけては、地下式土坑や小型の方形・円形土坑、掘鉢状遺構が密集した状態で分布する。数の上では小土坑が圧倒的に多く分布し、それらに配置上の規則性はつかめない。この地区の土坑の特徴としては、土器類の出土が少なく、銭貨を伴う例が多いことと、人骨を出土した土坑が4基存在することを挙げることができる。特に、5FにはSK-044・047・052の人骨が出土した土坑3基が集中して検出され、その周辺に地下式土坑もまとまっている。もう1基は7E区のSK-241である。ここでは人骨と共にいわゆる六道銭が出土しており、土坑が墓であることを示している。検出した人骨は、いずれも保存状態が不良で、出土したのは歯や骨の一部にすぎない。そのことから考えると、埋葬に伴い掘られた土坑はほかにも存在する可能性が高い。

小土坑の分布域には掘鉢状遺構と呼んだ遺構も認められる。同種の遺構は、埼玉県堂山下遺跡の報告では、遺構の構築は土壁の壁土の採集をも兼ねた可能性があるという指摘しつつも、性格不明遺構として取り扱われている²⁾。当遺跡の例でも性格を明らかにするような材料は見当たらず、今後の調査に期待したいと思う。ただ、SE-004は井戸状遺構の可能性が高いし、また、005については底面が平坦に構築されていて「掘鉢状」を呈していないので、すべての構築目的が同様ではなかったと考えることができる。

個別の遺構の最後に溝状遺構にふれることにする。溝状遺構は調査区全域に検出されている。しかし、北調査区と南調査区では明らかな性格上の違いが認められる。北調査区で検出した溝状遺構の多数には、現在の千葉鴨川線、あるいは鎌倉街道に推定されている久留里西往還と並行する状況が看取される。SD-028・030・025の底面は平坦につくられ、028には4面の硬質面が検出されている。これから推測すると、溝状遺構と呼んでも、実際は道として機能していたのである。それに対して南調査区の溝状遺構は、千葉鴨川線と並行する状況が、SD-004以北に認めることができるものの、道として機能していた痕跡を認めることはできない。それでは溝状遺構の位置的な傾向はどうであろうか。その点に注目すると、掘立柱建物が多く分布する区域と、小土坑が中心になる区域とを画する位置に認められるという特徴があることがわかる。このことから推測すると、南調査区に発見された溝状遺構は、区域の境界の役割を果たしていた遺構、ということができる。

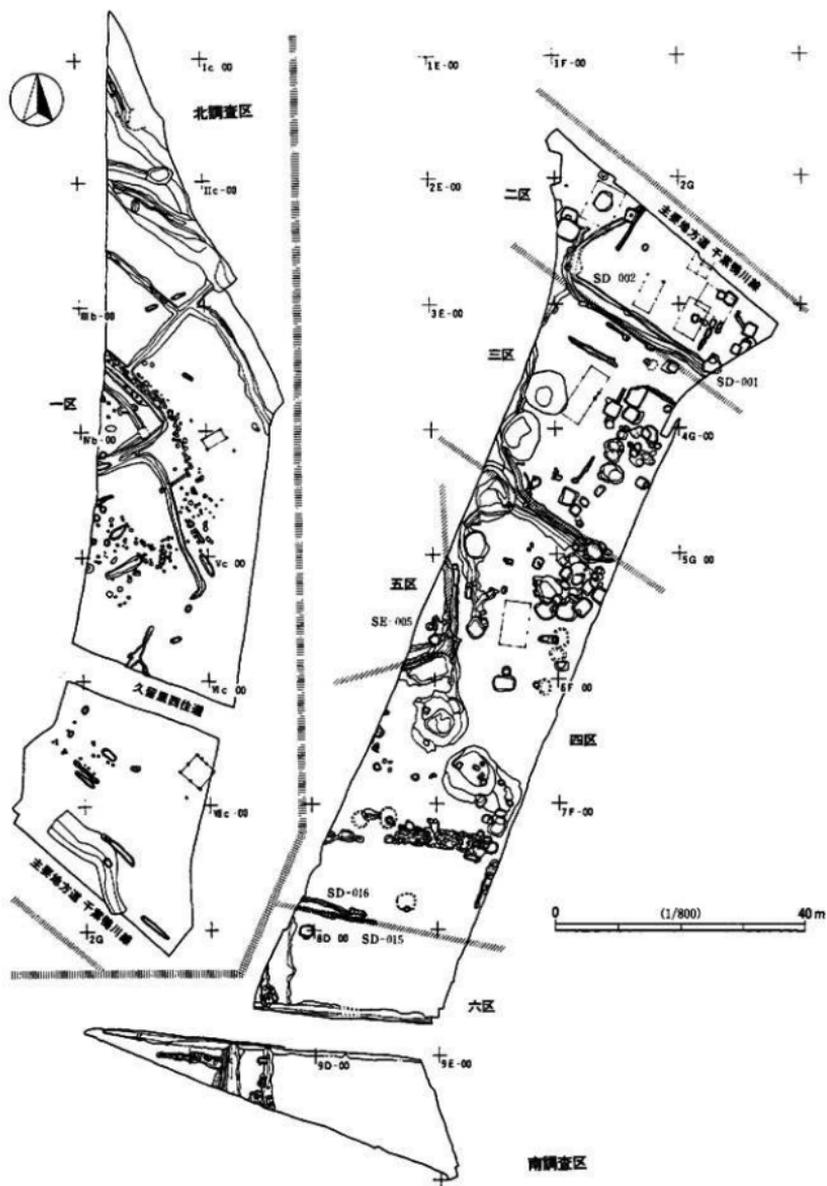
以上取り上げた個別の遺構から総合的に考えると、調査区内を6ブロックに分けることが可能となってくる。その6ブロックとは第144図に示したとおりである。

まず、北調査区全域を一区と考えたい。この区域は小規模な掘立柱建物跡2棟のほかは、生活に密着した遺構が希薄である。畑などの耕作地として利用されていた区域と想定したい。

二区は千葉鴨川線からSD-001の間である。ここでは掘立柱建物跡の集中が認められ、それらに伴う方形の土坑や、その北西部地域からは地鎮関連の遺構が発見されている。居住の区域と考えられる。

三区はSD-001からSD-003の地域である。この間には5間×1間の長屋的な掘立柱建物跡1棟、貯蔵用や作業場であった方形土坑が存在する。また、SE-002からスラグが出土していることなどから、作業場と貯蔵の区域と想定したい。

四区はSD-004からSD-015の間でSE-005を除いた区域である。この区域には地下式土坑、



第144図 中世の遺構配置

播鉢状遺構、小土坑が検出されており、4基の土坑と2基の地下式土坑から人骨が検出され、また、遺物として銭貨の出土が目立つ。墓域となっていた区域である。

五区はSE-005を考慮しておきたい。この遺構は播鉢状遺構として扱っているが、掘り込みが明瞭であり、底面が平坦で調査区外に広がっているため、台地整形的な区域になる可能性が高い。四区の一部かもしれないが、一応別区域としておく。

六区はSD-015以南である。ここでは地下式土坑1基と溝状遺構が検出されたのみで、遺構の空白地帯の観を呈している。一区と同様な機能が考えられる。

第2節 中世の遺物について

調査によって出土した中世の遺物には、在地系の土師質土器、瀬戸・(美濃)製品、常滑製品、備前製品、貿易陶磁器の土器・陶磁器類と、銭貨、スラグ、土製品、石製品等がある。

在地系に比定した土器類は、全体の43.4%を占めている。在地系とした土器類には、土師質土器、瓦質土器を含み、器種別では土師質の皿・杯の類が最も多く、次いで播鉢等の鉢類、以下内耳鍋、焙烙、罌蓋等となる。ただ、在地系の土器は焼成が甘く、使用中に破損して細片となり、器種の識別が困難になってしまうものが多く、それは「その他」として集計した。皿や杯はいわゆる「かわらけ」と呼んでいる部類で、「その他」の中にもこの種が多く含まれていると考えられるので、数量で他器種を圧倒的に上回ることが明らかである。

かわらけを形態によって分類すると2形態が存在する。ひとつは、口径の2分の1弱の径をもつ底部から体部が直線的に外傾して開くタイプである。もうひとつは、口径に比して底部も大きくつくられ、体部が短く立ち上がるものである。また、前者は口径によって、7.7cm、11.0cm、16.5cm内外になる3グループが確認できる。数量では口径7.7cm内外のものが多く、SK-068とP-268から出土した梵字が記された皿もこの大きさのものである。

播鉢の類は、いわゆる瓦質土器が主体である。特徴として、色調が灰色でやや軟質な質感であることが挙げられる。生産地については明らかでない。

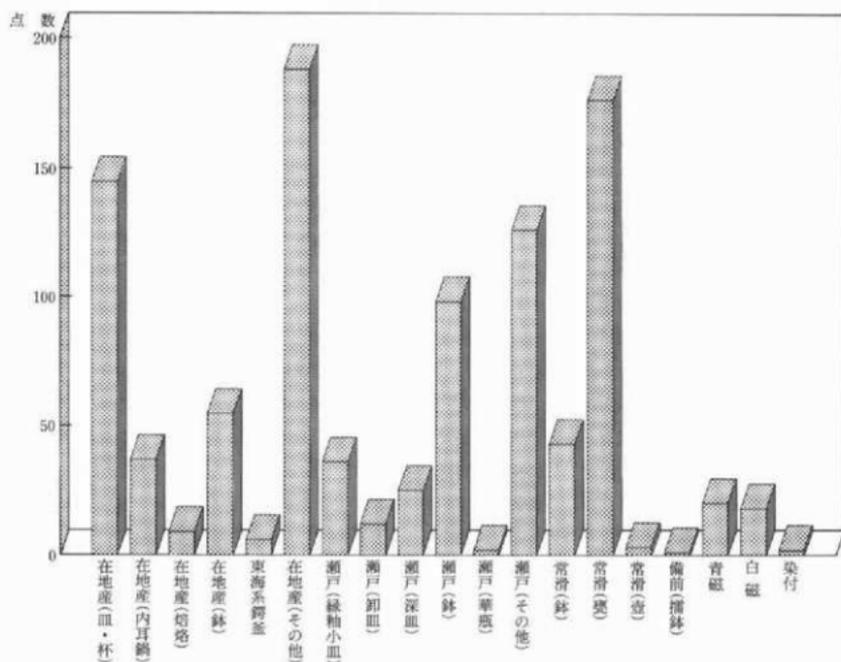
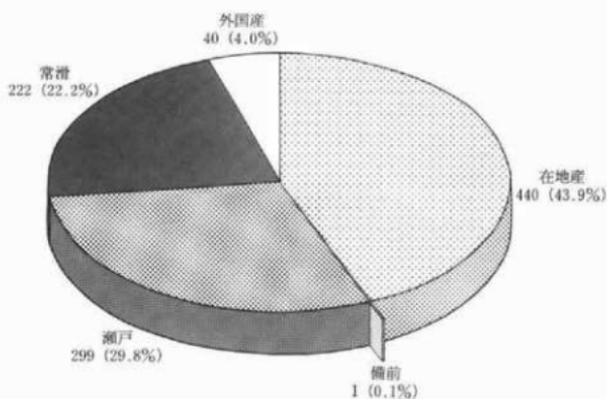
内耳鍋や焙烙は土師質が多く、わずかに瓦質のものが認められる。保存状態は不良で、SK-012から出土した内耳鍋が最も良い状態であった。破片資料の外表面にはいずれも煤の付着が認められ、使用頻度の高さをうかがうことができる。

SK-240等から東海系の罌蓋が出土しているが、総点数は6点にすぎない。また、胎土は緻密で、焼成も良好であるものの、器厚が薄く保存状態は不良である。年代は15世紀前半と考えられる。

在地系の「その他」の中には、瓦質土器の香炉や器種不明の資料も含んでいるが、それらの数量は多いものではない。

次に、比定遺物点数299点を数える瀬戸製品についてふれてみたい。瀬戸製品の占める割合は29.8%であり、陶磁器に限定した割合では52%を占めている。器種では鉢類、小皿、卸皿、深皿(盤)、華瓶が認められ、比定困難な破片と、瓶子、祖母懐茶壺、香炉、蓋、碗、天目茶碗等を「その他」として集計したので、多様な器種が使用されていたことがわかる。

これら瀬戸製品を藤澤良祐氏の古瀬戸編年⁹⁾に照らすと、古瀬戸前期の資料は見当たらない。SK-043出土の印花文瓶子などが、古瀬戸中期様式に比定されると考えられるが、量的には少ない。大部分の瀬



第145図 中世の土器組成

戸製品が古瀬戸後期様式と考えられる。器種別に見ていくと、縁袖小皿はSK-012・041出土例など、後期様式IV期に比定されるものが多く、III期の製品も若干認められる。鉦皿はSK-004出土がIII期、SK-231出土の8点は、IV期(新)~大窯期の生産である。折縁深皿はIII期(SK-013)、IV期(SD-002)が存在する。華瓶(SK-071)や香炉(SK-158)はIII期になるであろう。瀬戸製品の中で最も多くを占める鉢類は、III期からIV期のもので、後者が多い。SK-135から出土している天目茶碗は、全体の中でも新しく位置付けられるもので、大窯の初期段階であると考えられるが、同時期の遺物は少量である。したがって、瀬戸製品は15世紀中葉が主体である。

常滑製品は全体の22.2%に相当する222点が出土している。器種では甕の破片数が圧倒的に多く、他に鉢類と、わずかな壺が認められる。甕は口縁部の縁帯の幅が広くつくられ、断面がN字状を呈する部類である。鉢は口縁部の端部を内側斜め上方と、外側を斜め下方に張り出させて終わらす形態である。中野晴久氏の常滑編年案にしたがうと、9型式近辺の製品とみなすことができ、年代的には15世紀中葉と考えられる⁹⁾。

備前製品は1点が確認されたにとどまる。その1点はSE-005から出土している摺鉢である。硬く焼き締まった質感を呈し、つくりが丁寧である。真壁忠彦氏の編年案を参考にすると、III期に比定され、14世紀前半ころの年代が与えられる⁹⁾。

貿易陶磁器は全体の4%にすぎない。点数では40点で、内訳は青磁20点、白磁18点、染付2点である。はじめにそれらの特徴である、保存状態の良否について、気が付いた点を述べておく。青磁は点数では20点を数えるが、遺存度の低い破片が主体で、器形全体を復元するには難しい状態となっている。それに対して白磁は、遺構から出土し、保存状態が良好なものが含まれている。この遺跡での傾向ということで記しておくたい。

青磁は竜泉窯系連弁文碗、口縁がゆるく外反する小碗(いずれも遺構外)や、見込に牡丹文が施される碗(SK-043)等が存在する。それらを含め、14世紀から15世紀前半の製品が主体となる⁹⁾。この年代は、前述した日本国内の瀬戸製品や常滑製品の年代に先行しており、伝世されていた可能性が高い。

白磁の小皿には、高台に挟りが加えられたものも存在する(SK-031・041等)。森田勉氏の分類によるD群に相当し、15世紀前半と考えられる⁹⁾。

その他で目に付く遺物は銭貨である。銭貨は単独で出土した以外に、六道銭(SK-241)や祭祀に用いられていた状況で出土している(SK-068・P-268)。出土総点数は49点で、詳細は第4表のとおりである。内容は、唐銭2点(開元通寶)、北宋銭37点(太平通寶、咸平元寶、至道元寶、景德元寶、祥符元寶、天禧通寶、天聖元寶、景祐元寶、皇祐通寶、嘉祐元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、聖宗元寶、政和通寶)、明銭7点(洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶)、不明3点となっており、主体は北宋銭である。

石製品では砥石の出土が目立つ。金属製品の実態が明らかでないため、使用対象の特定が困難である。ただ、スラグが出土していることなどから、遺跡内あるいは近隣で製鉄や鍛冶関係の作業が行われていた可能性は高い。少量の石製品の中では、硯やSE-006出土の竹と車輪が彫り込まれたスタンプ状品が目される。

土製品は羽口の破片の出土が認められる。スラグと共に、製鉄に関連する遺構の存在を推測させる遺物である。

第5表 出土錢貨一覽

No.	標記番号	遺物	錢名	鑄造地	初铸年	西曆	外縁外径	外縁内径	外縁厚	文字間距	孔 徑	量目
1		SK-068	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	3.79g
2	第30回-6	SK-041	景祐元寶	北宋	景祐元	1004	24.80×24.80	21.00×20.25	1.20~1.35	0.65~0.80	6.20×6.00	(1.98)
3	#-7	#	景祐元寶	北宋	景祐元	1034	-×25.10	-×20.70	1.03~1.20	0.80~0.90	-×7.20	(0.93)
4	#-8	#	順寧元寶	北宋	順寧元	1068	24.40×24.70	20.00×19.50	1.05~1.25	0.70~0.80	6.40×6.60	2.38
5	#-9	#	政和通寶	北宋	政和元	1111	23.40×24.00	21.80×21.40	1.45~1.60	0.80~1.00	5.20×5.45	2.37
6	第33回-1	SK-061	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	4.80×4.80
7	第34回-1	SK-056	聖宋元寶	北宋	建中靖國元	1101	23.70×23.30	18.50×18.90	1.10~1.25	0.73~0.90	7.00×6.60	(2.13)
8	#-2	#	永樂通寶	明	永樂6	1408	—	—	1.38~1.40	0.65~0.73	5.50×—	(1.52)
9	第37回-1	SK-122	元符通寶	北宋	元符元	1098	23.90×23.60	19.00×18.50	1.25~1.33	—	6.10×6.20	3.22
10	第43回-1	SK-240	至道元寶	北宋	至道元	995	24.70×24.00	18.70×18.70	1.00~1.10	0.50~0.68	6.10×6.10	2.39
11		P-268	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	第58回-1	P-091	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	24.00×24.00	19.70×19.70	1.10~1.45	0.70~0.86	6.90×6.90	2.06
13	第59回-1	SK-086	皇宋通寶	北宋	寶元元	1038	24.00×24.00	19.70×19.70	1.05~1.15	0.75~0.95	6.90×7.40	2.21
14	第64回-3	SK-094	天聖元寶	北宋	天聖元	1023	25.50×26.10	21.40×20.80	1.30~1.40	0.85~1.05	6.00×6.00	2.57
15	#-4	#	順寧元寶	北宋	順寧元	1068	25.00×—	21.00×21.10	1.25~1.65	0.95~1.10	6.80×6.80	2.05
16	#-5	#	元豐通寶	北宋	元豐元	1078	25.00×24.20	19.00×18.90	1.00~1.30	0.60~0.83	6.80×6.80	1.26
17	第73回-1	P-364	元豐通寶	北宋	元豐元	1078	23.30×23.60	19.50×19.20	0.90~1.00	0.45~0.70	6.50×6.45	1.65
18	#-2	P-392	至道元寶	北宋	至道元	995	24.80×25.00	19.10×19.10	1.20~1.50	—	5.80×5.80	2.69
19	#-3	P-372	洪武通寶	明	洪武元	1368	23.30×22.80	19.30×19.30	—	—	5.30×5.30	3.12
20	第75回-1	SK-103	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元	1056	23.60×23.60	18.60×17.70	1.20~1.25	0.82~0.85	6.00×5.90	3.00
21	#-2	#	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	23.90×23.70	17.80×17.40	1.15~1.30	0.90~1.05	5.80×5.60	2.03
22	第83回-2	SK-055	順寧元寶	北宋	順寧元	1068	—	—	1.00~1.10	0.75	—	(0.74)
23	第85回-2	SK-063	祥符元寶	北宋	大中祥符元	1009	24.50×24.50	17.80×17.80	1.10~1.30	0.65~0.80	5.60×6.40	2.47
24	第89回-1	SK-220	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	23.90×23.30	19.00×19.00	1.20~1.26	0.96~1.02	6.50×6.50	2.73
25	#-中	SK-146	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	23.60×23.90	18.60×18.30	1.25~1.35	0.80~1.00	6.20×6.00	3.42
26	#-下	SK-125	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元	1056	-×23.95	-×19.55	1.00~1.10	0.95~1.00	-×7.18	(1.56)
27	第90回-1	SK-211	天禧通寶	北宋	天禧元	1017	25.20×25.30	19.60×20.10	1.10~1.15	0.65~0.70	6.20×6.10	2.86
28	#-2	#	祥符元寶	北宋	大中祥符元	1009	24.70×24.70	17.60×18.00	0.90~1.05	0.55~0.68	5.80×6.10	2.62
29	#-3	SK-132	永樂通寶	明	永樂6	1408	24.10×24.20	20.20×20.00	1.00~1.10	0.52~0.64	5.60×5.60	2.35
30	第93回-2	SK-241	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	25.00×—	19.20×—	1.04~1.10	0.60~0.75	6.40×—	(1.71)
31	#-3	#	洪武通寶	明	洪武元	1368	23.00×22.80	17.10×16.50	1.35~1.50	0.70~0.95	5.40×5.60	3.63
32	#-4	#	元豐通寶	北宋	元豐元	1078	23.60×23.60	18.60×18.60	1.00~1.10	0.85~0.95	6.70×6.70	2.78
33	#-5	#	元符通寶	北宋	元符元	1098	24.00×23.60	18.40×18.20	1.18~1.20	0.65~0.75	6.80×6.50	3.18
34	#-6	#	太平通寶	北宋	太平興國元	976	22.80×23.30	18.80×19.10	0.80~0.95	0.40~0.55	6.30×6.40	2.12
35	#-7	#	皇宋通寶	北宋	寶元元	1038	23.70×23.90	18.70×18.50	0.90~1.00	0.65~0.75	7.50×7.00	2.66
36	#-8	#	政和通寶	北宋	政和元	1111	24.20×24.20	20.10×20.00	1.20~1.30	0.75~0.95	6.00×6.00	3.19
37	第94回-1	SK-191	開元通寶	唐	武德4	621	24.90×24.90	20.60×21.60	1.30~1.40	0.70~0.80	7.10×7.50	(2.73)
38	第100回-4	SE-002	洪武通寶	明	洪武元	1368	-×23.50	-×20.20	1.40~1.50	0.60~0.65	5.70×5.60	(1.49)
39	第106回-9	SE-007	祥符通寶	北宋	大中祥符元	1009	24.50×24.60	19.30×19.00	1.30~1.40	0.60~0.70	6.50×6.40	2.48
40	第107回-2	SE-008	宣統通寶	明	宣統8	1433	25.10×25.30	20.35×20.25	1.30	0.60~0.80	5.15×5.10	(2.75)
41	第113回-5	SE-005	開元通寶	唐	武德4	621	—	—	1.00	0.55~0.65	5.75×5.75	(0.91)
42	#-6	#	咸平元寶	北宋	咸平元	998	24.50×24.50	17.90×17.90	1.05~1.10	0.60~0.65	6.20×6.30	2.90
43	#-7	#	皇宋通寶	北宋	寶元元	1038	23.10×23.80	20.10×20.50	1.05~1.20	0.80~1.00	6.80×6.90	2.15
44	#-8	#	皇宋通寶	北宋	寶元元	1038	24.30×24.30	20.40×20.60	1.30~1.45	0.95~1.25	7.20×6.80	2.33
45	#-9	#	順寧元寶	北宋	順寧元	1068	24.00×—	18.60×—	1.30~1.50	0.85~1.35	6.30×6.30	(2.38)
46	#-10	#	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	24.60×24.50	17.30×16.90	1.05~1.20	0.72~0.85	5.50×6.20	2.19
47	#-11	#	元祐通寶	北宋	元祐元	1086	23.90×24.00	18.40×19.20	1.30~1.50	1.05~1.10	5.70×5.80	2.37
48	#-12	#	元符通寶	北宋	元符元	1098	23.00×23.20	18.05×18.50	0.90~1.00	0.55~0.68	6.40×6.50	1.98
49	#-13	#	洪武通寶	明	洪武元	1368	24.60×—	19.20×18.70	1.15~1.25	0.60~0.83	5.20×5.60	(1.72)

第3節 結 語

荒久(2)遺跡における中世の景観を遺構配置の特徴から推定すると、推定鎌倉街道の南に面して掘立柱建物が並び、その背部に作業施設、貯蔵施設があり、さらにその南側に墓域が形成されていた、という状況が復元できてくる。出土遺物からは、15世紀の前半から中葉にかけて盛行し、15世紀の後半に急速に衰退した遺跡であることが明らかになった。また、土師質土器小皿の内面に記された「カーンマーン」の墨書の内容を、正応元年(1288)に醍醐寺の僧・祐胤が中興したと伝えられる、遺跡に隣接する真言密教寺院・延命寺と結びつけると、「門前に開けた宿」という性格も想定される⁹⁾。そうすると鎌倉街道に面した「市」と考えられている、袖ヶ浦市山谷遺跡¹⁰⁾等と同様に、中世交通網の整備と盛衰の歴史の中で、遺跡の性格を考える視点が重要となつてこよう。

中世における建物や土坑の構築は、それ以前に構築された遺構の多くを破壊することになったが、それでも旧石器時代から平安時代における生活の痕跡を認めることができた。旧石器時代では、立川ローム層第Ⅲ～Ⅳ層に石器集中地点1か所の存在をとらえ、調査例の乏しい本地域に新たな資料が提供できたと思う。

縄文時代では遺構として陥穴が検出されたほか、早期の条痕文系及び後期の土器をはじめ、石器の出土があった。また、弥生時代の方形周溝基10基の検出は、隣接する荒久(1)遺跡で発見した方形周溝基群の北限を決定できることで重要である。古墳時代においても、盛土が失われた円墳1基の存在が明らかになった。平安時代も竪穴住居跡1軒と、掘立柱建物跡1棟を明らかにすることができた。今後の周辺地域の調査に際し、この成果が活用されることを期待したい。

以上で簡単ではあるが、報告書のまとめとしたい。

注1 半田堅三 1979 「本邦地下式土墳の類型学的研究」 『伊知波良』2 伊知波良刊行会

2 宮瀬交二 1991 「堂山下遺跡」 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

3 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」 『研究紀要X』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1995 「古瀬戸」 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編集 真陽社発行

4 中野晴久 1995 「常滑・瀬美」 『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編集 真陽社発行

5 真壁忠彦 1977 「備前」 『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館発行

6 小野正敏氏、柴田龍司氏、笹生衛氏の御教示による。また土器類全般にわたり三氏から御教示を頂戴した。

7 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」 『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

8 銭貨の同定に当たっては、兵庫埋蔵銭調査会が1996年に発行した『日本出土銭総覧 1996年版』を参考にしている。

9 加藤正信 笹生 衛 1993 「荒久遺跡の概要」 『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター

笹生 衛 1997 「考古学から見た中世社寺—中世寺院遺跡の分類と変遷を中心に—」 『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集 帝京大学山梨文化財研究所

10 柴田龍司 1994 「鎌倉街道と市」 『研究連絡誌』第41号 (財)千葉県文化財センター

写 真 图 版





調査前の遺跡近景（南調査区）

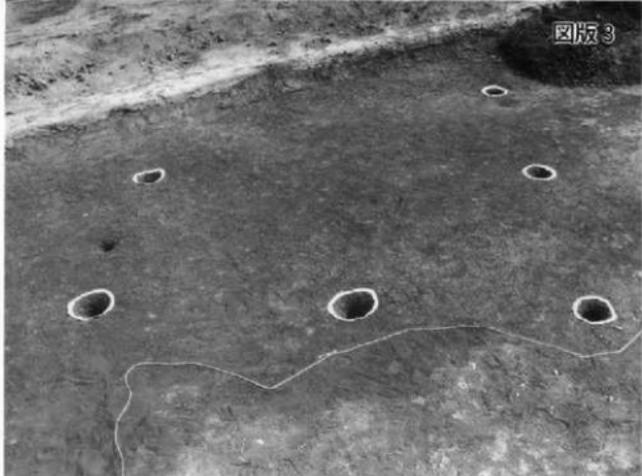


遺跡全景



平成3年度調査区全景

SB-003全景
(北西から)



2F・2G区の柱穴群
(北東から)



SB-010とSE-001
(北東から)





SK-068と周辺の遺構
(北から)



SK-068土層断面



SK-068遺物出土状況

SK-031 全景



SK-013 全景



SK-013 遺物出土状況





SK-071 全景



SK-097 整坑



SK-097 全景

SK-041 全景



SK-043 全景



SK-061 全景

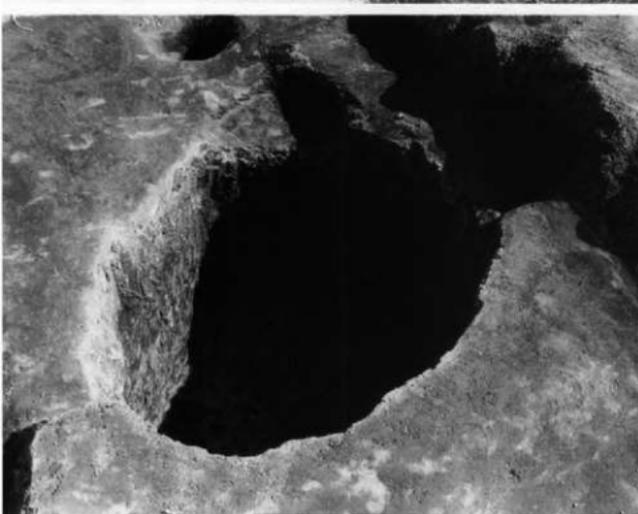




SK-058 全景



SK-056 全景



SK-113 全景

SK-117 全景



SK-117 全景



SK-088 全景





SK-090 竖坑



SK-090 全景



SK-135 竖坑



SK-135 土层断面



SK-135 全景



SK-135 全景



SK-143 竖坑检出状况

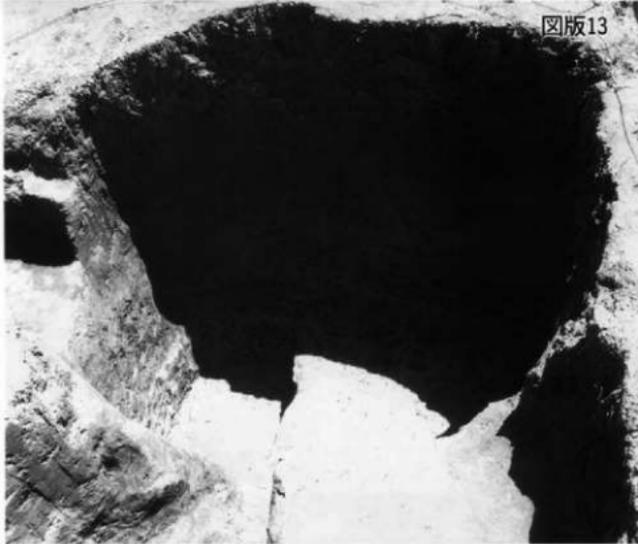


SK-143 全景



SK-143 全景

SK-240 全景



SK-240 地下室内土坑



SK-240 土层断面





SK-158 全景



SK-158 遺物出土状況



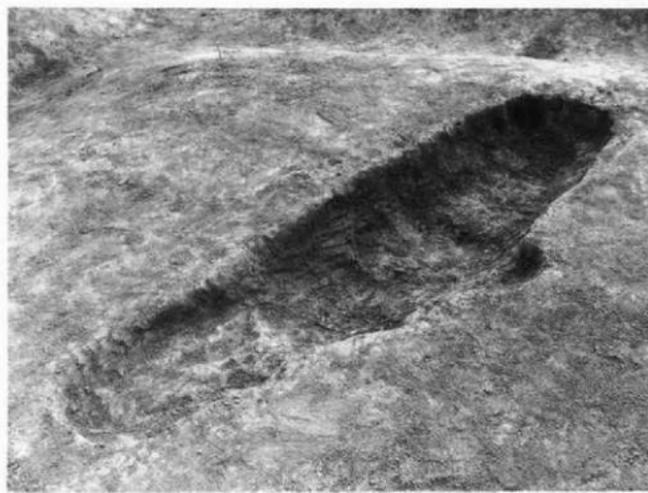
SK-231 全景



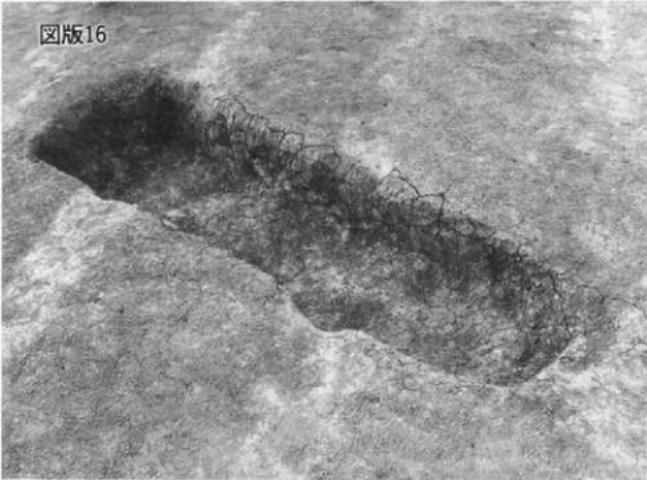
SK-231 遺物出土状況



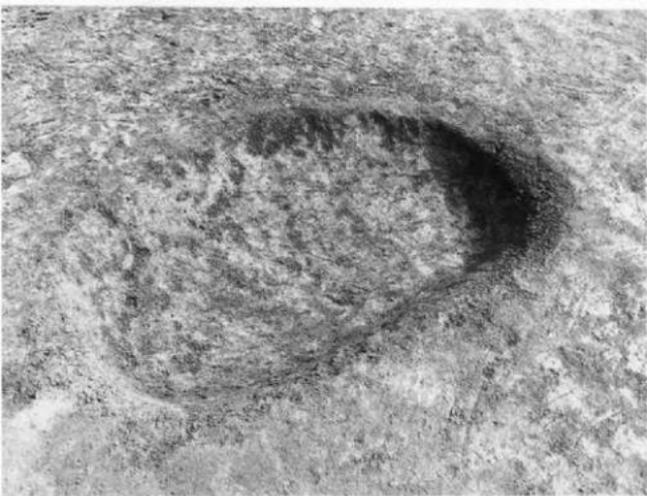
SK-175 全景



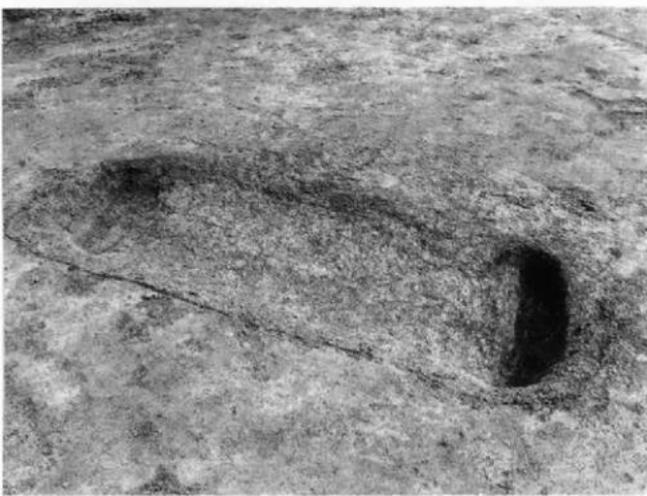
SK-280 全景



SK-279 全景



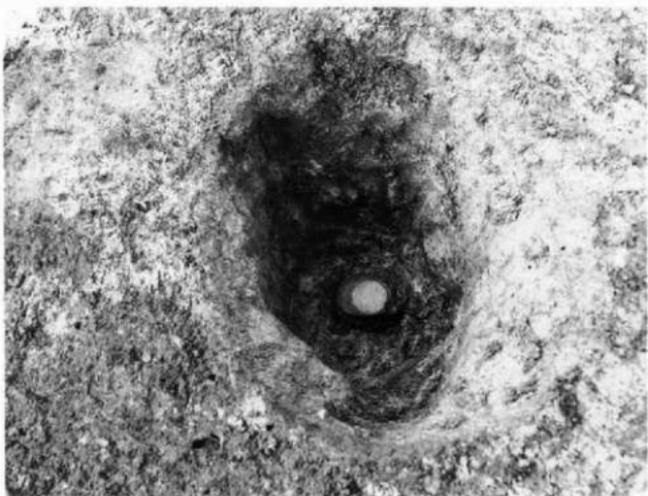
SK-275 全景



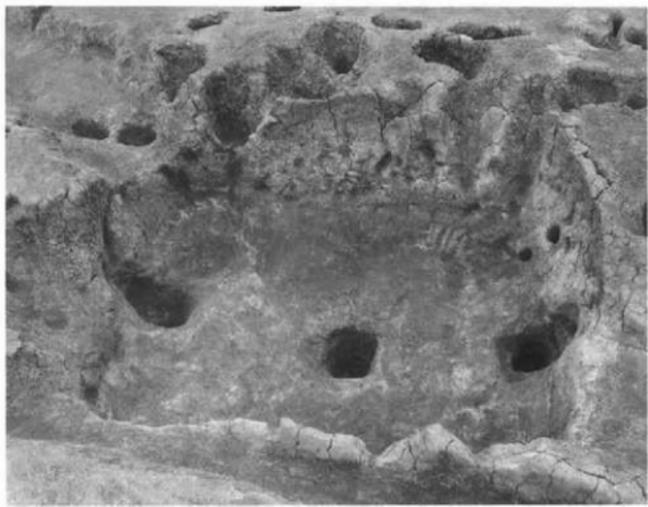
SK-276 全景



SK-287 全景



P-268 全景



SK-271 全景



SK-017·018全景



SK-016全景



SK-015全景



SK-092 全景



SK-093 全景



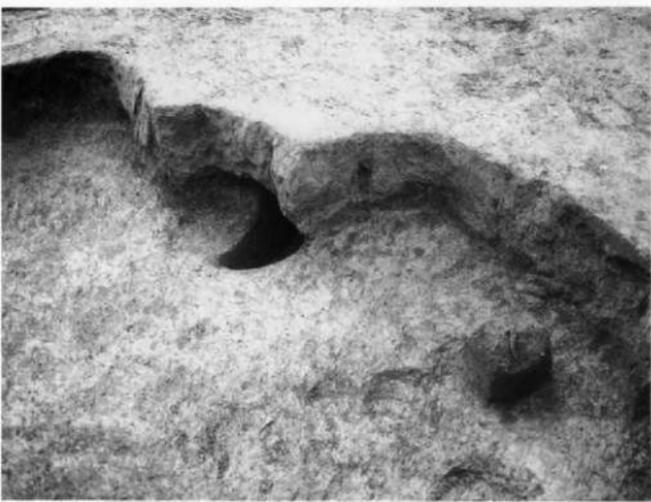
SK-075·076·077 全景



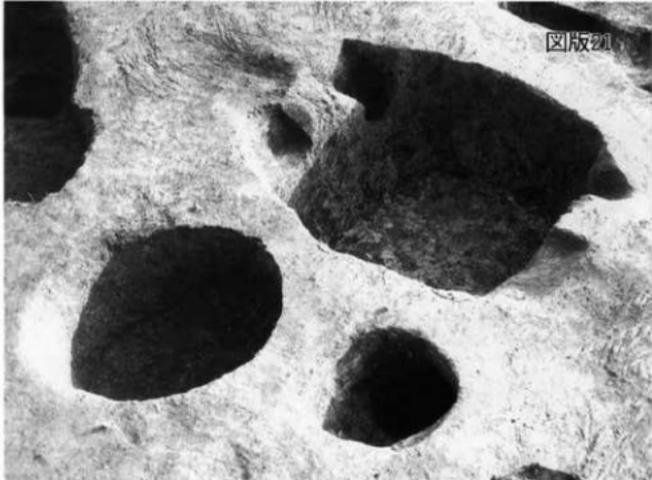
SK-006 全景



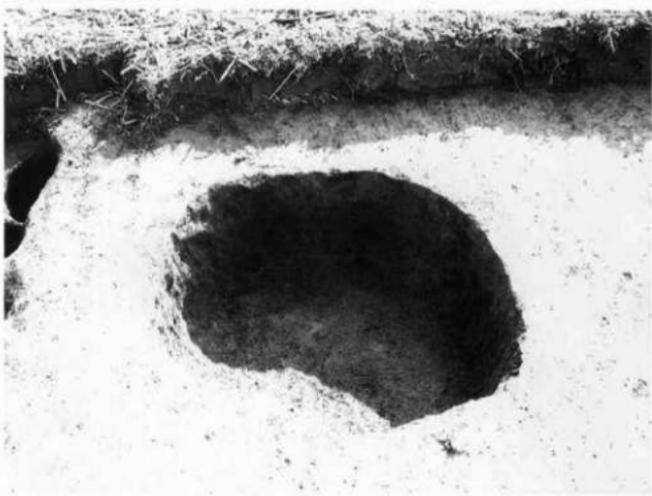
SK-009 全景



SK-009



SK-014 全景



SK-001 全景



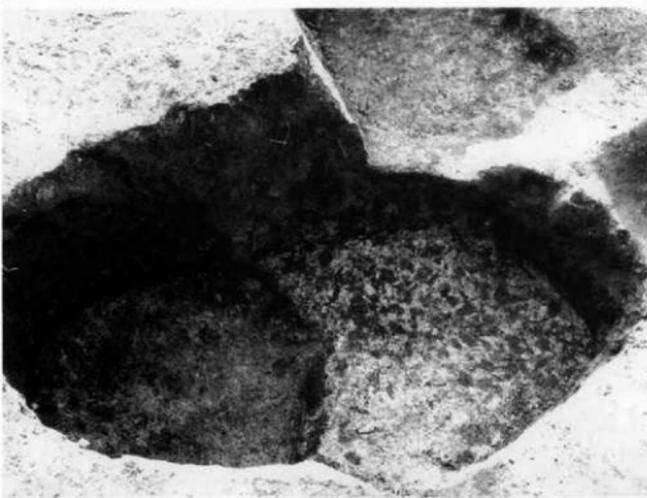
SK-002A·B·C 全景



SK-039A·B全景



SK-007·008全景



SK-004全景

SK-003·004·007·008全景



SK-098全景

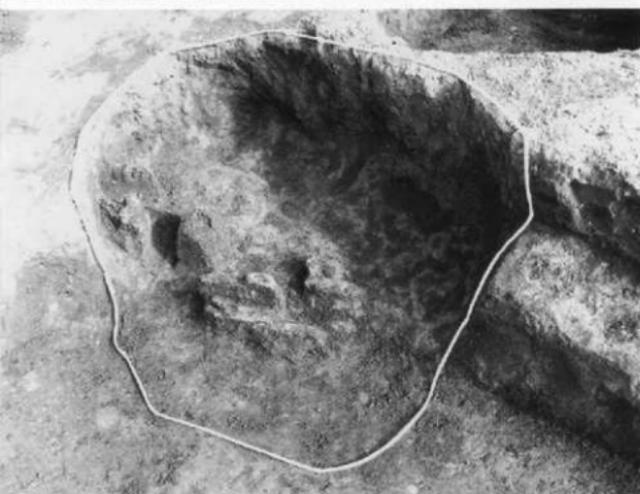


SK-099全景





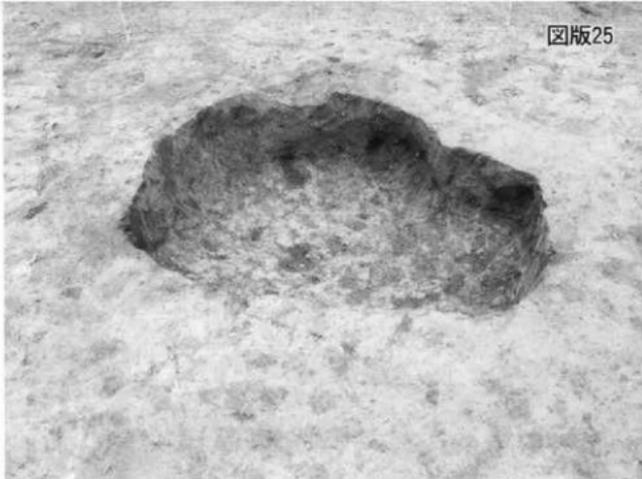
SK-019・020 全景



SK-044 人骨出土状况



SK-241 人骨出土状况



SK-167 全景



SE-001と周辺遺構



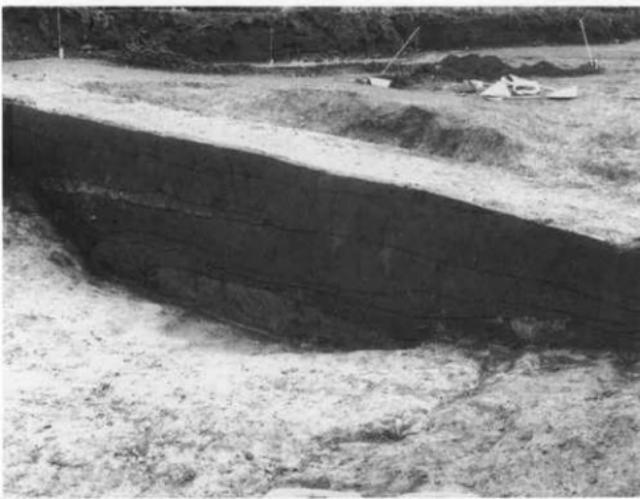
SE-001 全景



SE-002 全景



SE-007・008 全景



SE-007 土層断面



SK-274 全景



北調査区の調査状況



SD-029



北調査区の溝状遺構 SD-041



ピット群と溝状遺構 SD-001・002

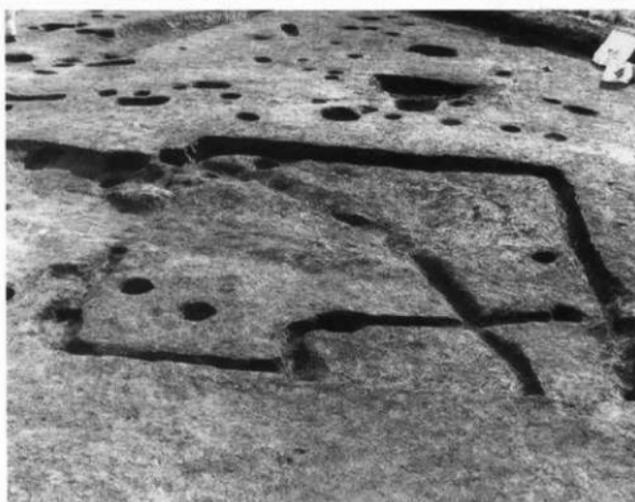


南調査区溝状遺構 SD-021・022・023

古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡



SK-297 全景



SB-004 全景





SX-001周溝



SK-181全景



SK-181土層断面

SK-181 刀子出土状況



SK-201 全景



SK-201 玉類出土状況





方形周溝墓検出状況



SC-001土層断面



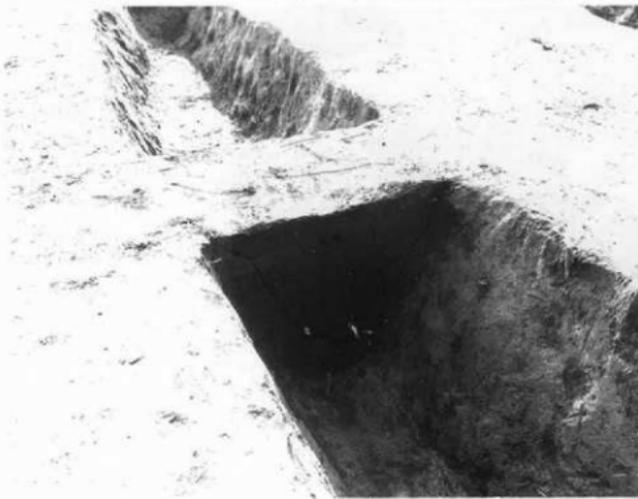
SC-002埋葬施設



SC-002 土层断面



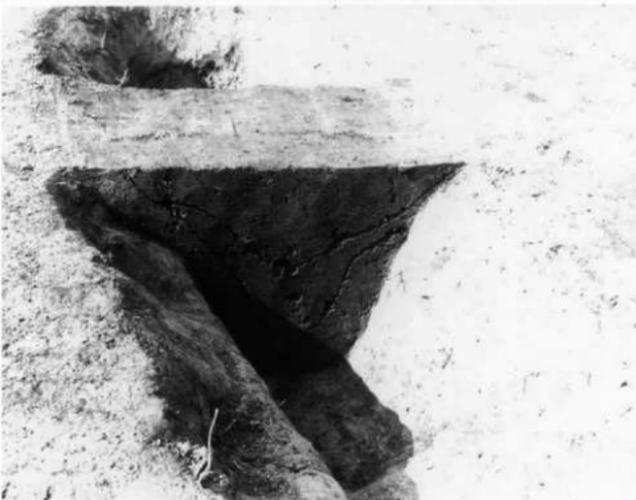
SC-004 土层断面



SC-005 土层断面



SC-006 埋葬施設



SC-006 土層断面



SC-007 土層断面



SK-188 全景



SK-180 全景



SK-180 土层断面



旧石器時代遺物出土状況(1)



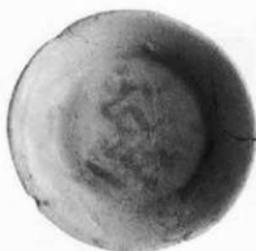
旧石器時代遺物出土状況(2)



土層断面



P-173-1



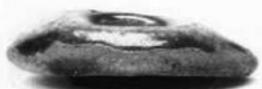
P309-1



SK-068-1



SK-068-2



SK-068-3



SK-068-4



SK-068-5



SK-031-1



SK-013-1



SK-013-2



SK-013-3



SK-013-4



SK-013-5



SK-013-6



SK-013-7



SK-012-1



SK-012-2



SK-012-4



SK-071-1



SK-041-3



SK-043-1



SK-043-2



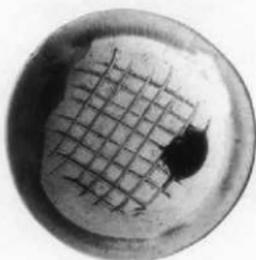
SK-117-1



SK-135-1



SK-158-1

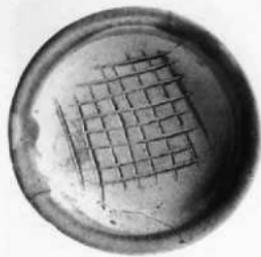


SK-231-1

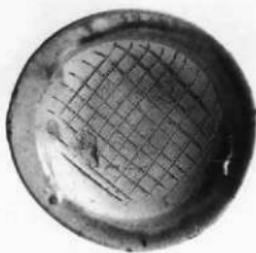


SK-231-2

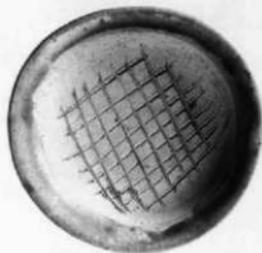




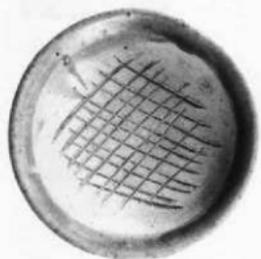
SK-231-3



SK-231-4



SK-231-5



SK-231-6



SK-231-7



P-268-1



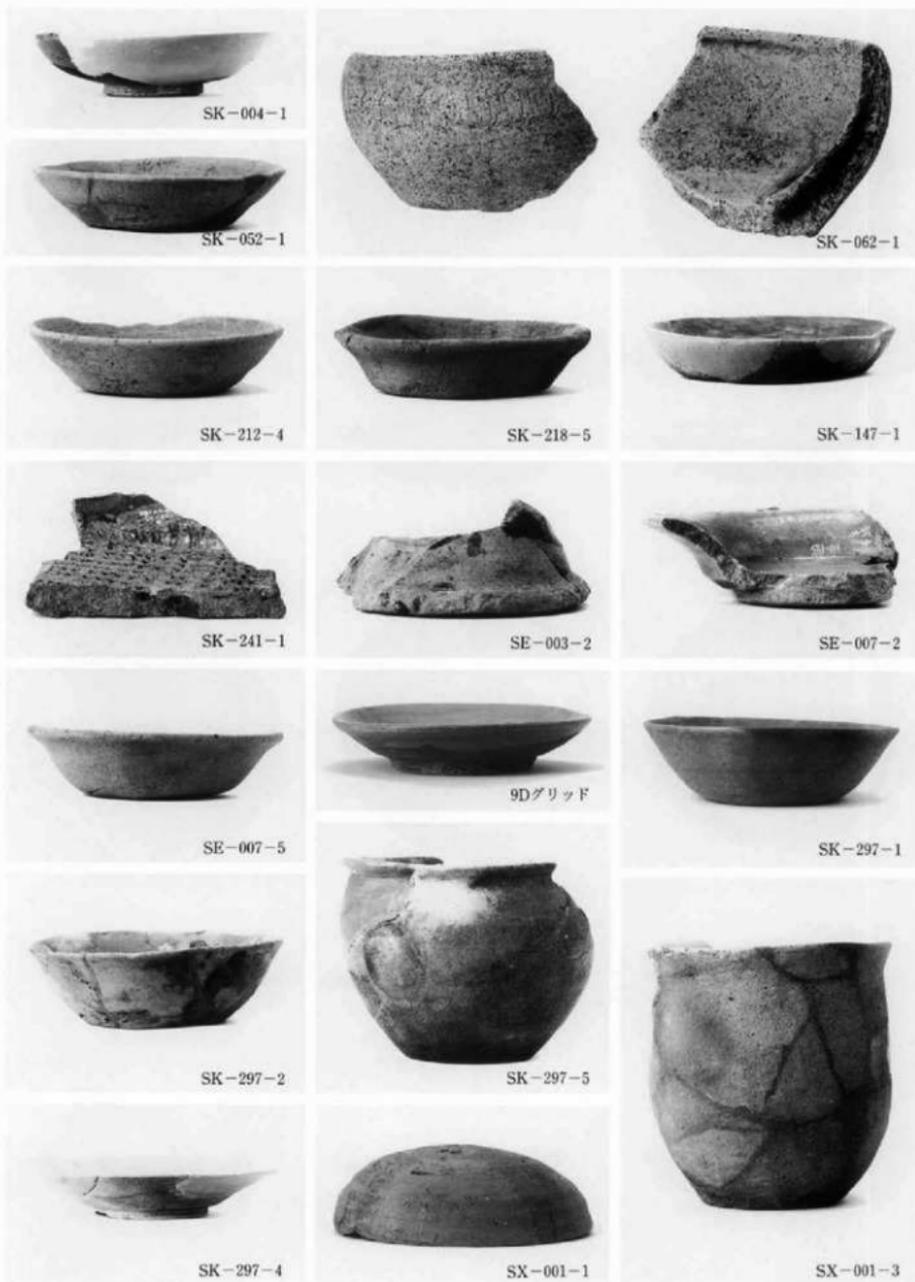
SK-231-8



P-080-1



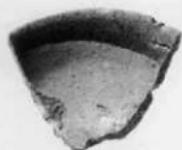
P-268-2



出土土器 (4)



出土土器 (5) SE-005 出土土器



SK-070-1



SK-016-1



SK-004-2



SK-209-1



SE-003-1



SE-004-1



SD-002



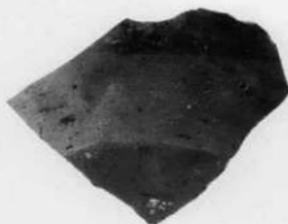
SE-007-3



SK-043-6



SK-041-4



SK-041-5



SK-031-2



SK-043-3



SK-012-3



SE-006-3



SK-175-1



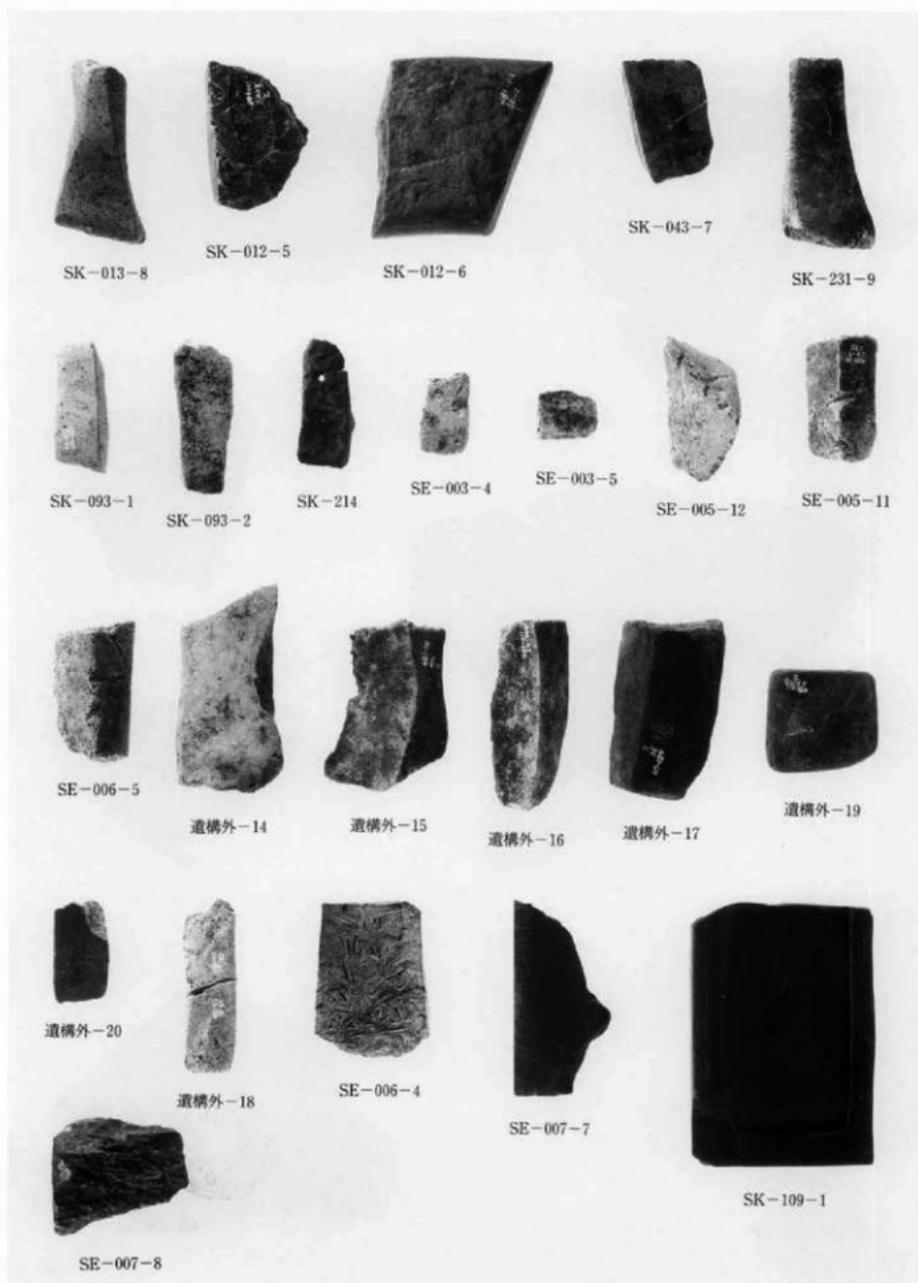
溝状遺構



SE-007-4



SK-043-1





SK-041-6



SK-041-7



SK-041-8



SK-041-9



SK-061-1



SK-056-1



SK-056-2



SK-122-1



SK-240-2



P-091-1



SK-086-1



SK-094-3



SK-094-4



SK-094-5



P-364-1



P-392-2



P-372-3



SK-103-1



SK-103-2



SK-055-2



SK-063-2



SK-220-1



SK-146-2



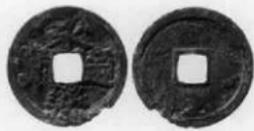
SK-125-3



SK-211-1



SK-211-2



SK-132-3



SK-191-1



SK-241-2



SK-241-3



SK-241-4



SK-241-5



SK-241-6



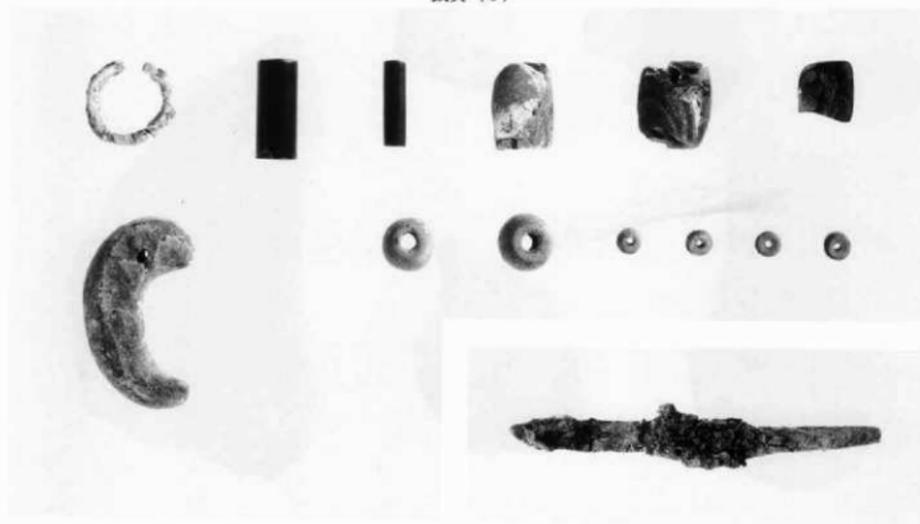
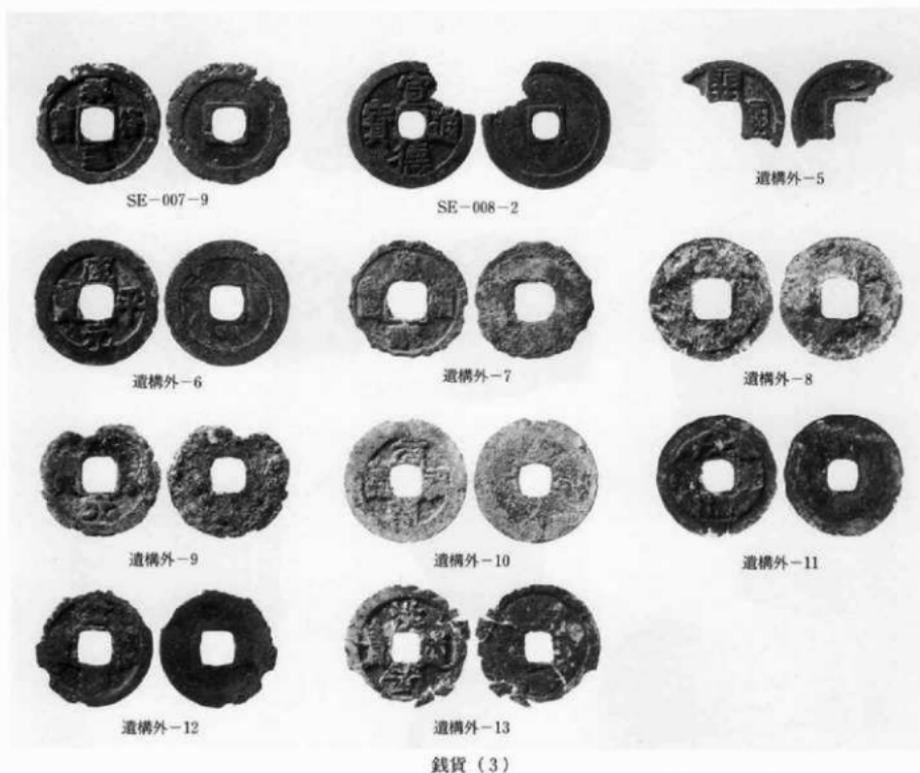
SK-241-7



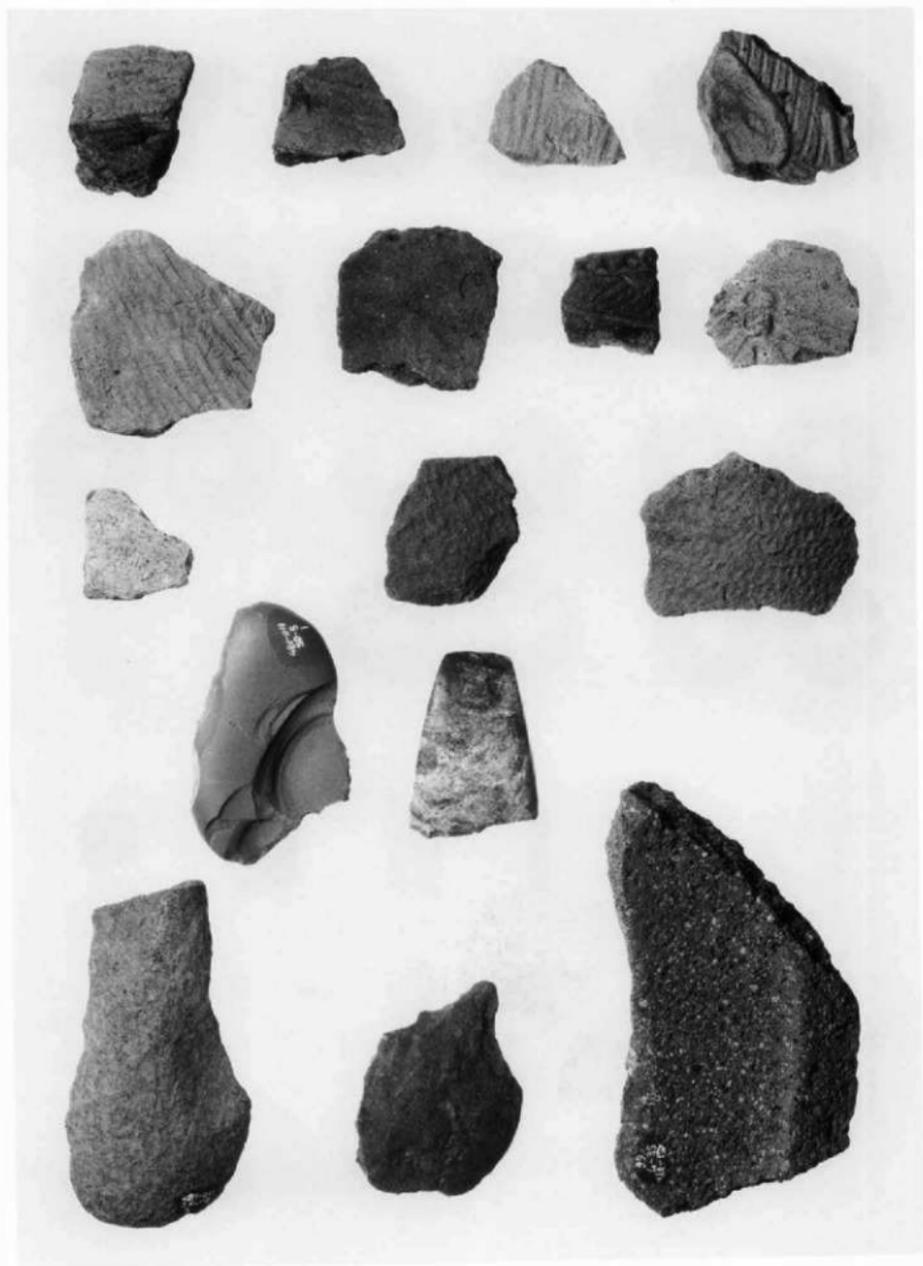
SK-241-8



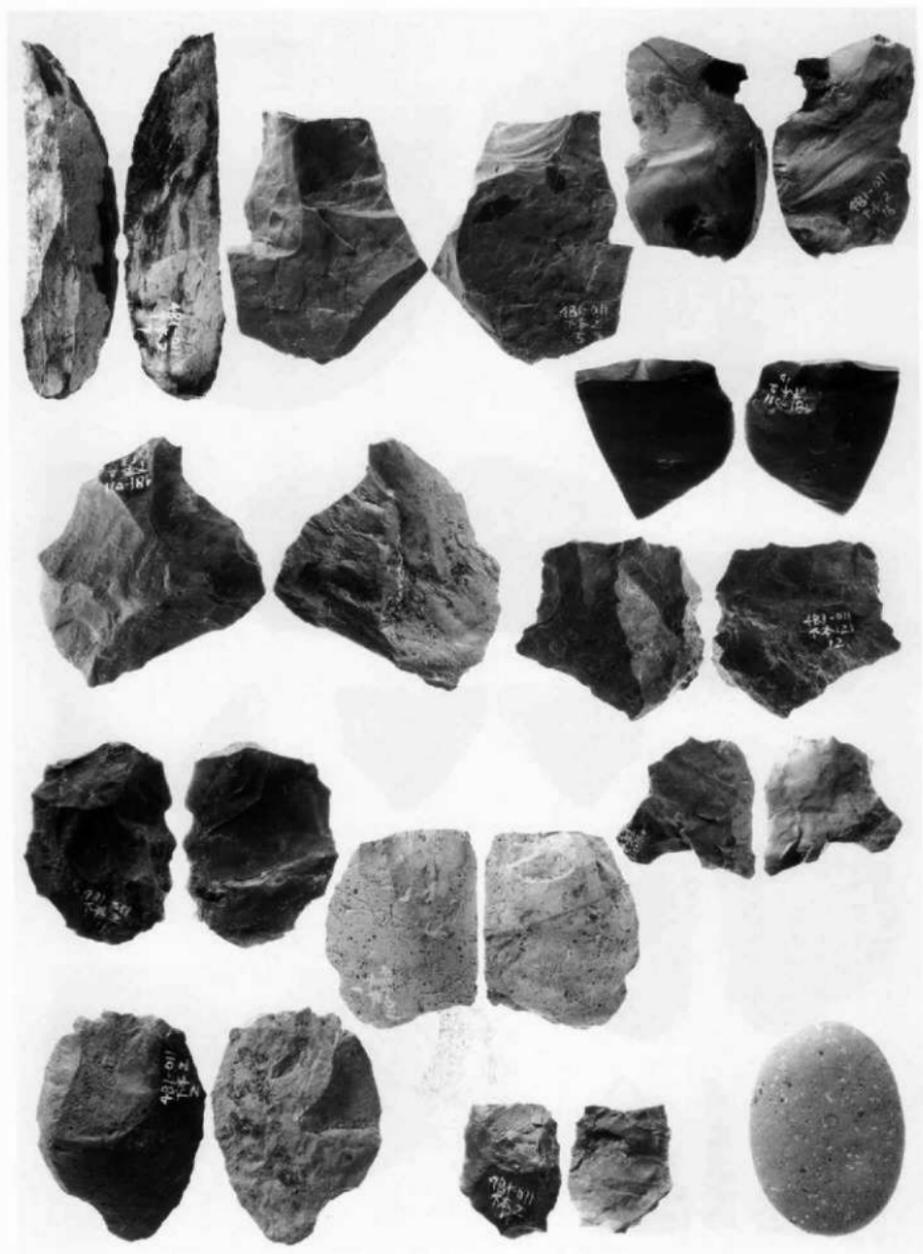
SE-002-4



SX-001埋葬施設出土遺物



縄文時代の遺物



旧石器時代の遺物 (1)

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしあらく2いせき						
書名	袖ヶ浦市荒久(2)遺跡						
副書名	主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書						
巻次	2						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第323集						
編著者名	小林清隆						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2番地 TEL 043-422-8811						
発行年	西暦1998年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村:遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
荒久(2)	千葉県袖ヶ浦市 高谷1,346ほか	12229 011	35° 23' 07"	140° 03' 42"	19911001~ 19920331 19920401~ 19920831 19931201~ 19940331	7,840㎡	道路建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
荒久(2)		旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	石器集中地点 1地点 土坑 1基 陥穴 4基 方形周溝墓 10基 円墳 1基 埋葬施設 3基 竪穴住居跡 1軒 掘立柱建物跡 1棟 掘立柱建物跡 9棟 地下式土坑 24基 掘跡状遺構 8基 井戸状遺構 2基 その他方形・円形の土坑小ピット、溝状遺構、欄列状遺構など	ナイフ形石器、微細剥離痕のある剥片、剥片、礫 縄文土器(早期、後期)、石斧 弥生土器(中期、後期) 須恵器杯蓋、刀子、勾玉、管玉、琥珀玉 土師器杯、甕 貿易陶磁、瀬戸・常滑・備前陶器、土師質土器、墨書土器、銭貨、硯、磁石人骨	円墳の周溝と埋葬施設を検出 15世紀代の遺構と遺物が出土。 地鎮に関連する遺構を検出。		

千葉県文化財センター調査報告第323集

袖ヶ浦市荒久(2)遺跡

主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書 2

平成10年3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千 葉	県 土 木 部
			千葉市中央区市場町1-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿被809-2
印	刷	株式会社	太陽堂印刷所
			千葉市中央区末広1-4-27
